

【完結】産屋敷邸の池に
豆腐を落とせば、鬼舞
辻無惨を津波が襲う

【豆腐の角】

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

炭治郎

「竈門家の皆が無事なものも、錆兎と真菰が無事に最終選別を突破してるのも、煉獄さんに有一郎くん、カナエさんが生きてるのも、ほかにも巡り巡って色々なことが良い方向に向かっているのも全部、黒死牟さんが居たからじゃないか……!」

耀哉「(ニコニコ)」

無惨「……なん……だと……?」

神仏「m9(ﾟДﾟ)プギャー」

※ジャンプ派以外の方はネタバレが含まれているので注意してください。

※わずかながら、他作品のネタが含まれています。

※設定はガバガバなので深く考えないこと。

※2020.02.19【読み切り】から【連載】になりました。

※2020.06.06【完結】しました。

お付き合いいただき、ありがとうございました！

目次

そもそもの原因

斯（か）くして豆腐は落とされた

1

読んで楽しい設定資料集&シナリオ

（戦国時代編）

42

原作時間軸の話

広がる波紋は小波に変わる（竈門家編）

63

広がる波紋は小波に変わる（狭霧山編）

104

141 広がる波紋は小波に変わる（浅草編）

小波はやがて波へと育つ（柱合会議編）

181

小波はやがて波へと育つ（蝶屋敷編）

231

小波はやがて波へと育つ（下弦会議編）

289

育った波はうねり打つ（無限列車編）

334

育った波はうねり打つ（吉原編）

371

育った波はうねり打つ（刀鍛冶の里編）

422

＋ α
うねった波は迫り来る（柱稽古編）

485

うねった波は迫り来る（無限城編）

529

産屋敷邸の池に豆腐を落とせば、鬼舞

辻無惨を津波が襲う

568

そもそもの原因

斯（か）くして豆腐は落とされた

『私には何の天罰も下っていない。何百何千という人間を殺しても私は許されている。この千年、神も仏も見なかったことがない』



とある昼下がりの話である。

雲ひとつなく晴れ渡った空の下、縁側で日向ぼつこに興じていた産屋敷耀哉うぶやしきががやは唐突にある事を思いついた。

（そうだ。屋敷の庭にある池に豆腐を落とそう）

いや、待てや。なんでそうなる？

そう思った読者あなは悪くない。

普通なら突っ込む。間違いなくツツコミを入れる。

だが、彼は産屋敷だ。

平安時代から始まって以来、予知能力とも言えるほどの直感力で様々な苦難を乗り越えてきた一族の人間である。

自身の経験を含めた過去の実績があるため、彼が自分の直感を疑うことはない。そしてまた、それが外れることもなかった。

「あまね。豆腐を持つてきてくれないかな」

「豆腐、ですか？」

耀哉の言葉に、彼女——産屋敷あまねは困惑した。

彼女と耀哉は数日前に結婚したばかりの夫婦である。

産屋敷の家系は古来よりある理由があつて短命なため、少しでも長生きするために神職の家系から嫁をもらうという習わしがあつた。

そういつた事情もあつて、二人の出会いはお見合いの席が初見である。

それ故に仕方のない話ではあるが、二人の付き合いも短く、まだ数日というものだった。

とは言え、あまねも『産屋敷家の血筋は直感力に優れている』という話は聞いている。だが、それがどの程度のものかを彼女は理解しきれていなかった。

しかし、他ならぬ夫の頼みである。

あまねは首をかしげながらも豆腐を用意した。



『神仏を見たことがない、だと？ 天国と地獄がある世の中にいながら、千年生きた程度

で神仏を否定するか』

『挙げ句の果てに、許されている……だと? そんなことがあるものか、馬鹿めがつ!』
『そう言うのであれば是非もなし。貴様が見くびつてくれた神仏のチカラを見せてやろう』



耀哉は豆腐の乗った平皿を手に歩を進め、あまねもそれに追従して事の成り行きを見守る。

「さあ、どうなるのかな?」

勘に従って行動を起こした耀哉としても、この先に何が起こるのかはわからない。何しろ、〃こうすれば、きっと良いことが起こる〃と勘が囁ささいているだけなのだ。

そしてついに、耀哉は豆腐を池へと落とそうと皿を傾けた。

池に異変が起きたのは、その直後のことである。

なんと、池のなかに、いや、水面みなもに少年の姿が映ったのだ。

幼さの残る顔立ちからして、少年の年齢は十歳にも満たないだろう。

しかも、向こうからも耀哉たちの姿が見えているようで、目を見開いて驚いている。

当然の話だが、産屋敷夫妻と水面に映る少年が驚いている間にも時間の歩みは止まらない。

故に、皿から離れた豆腐が水面に落ちるのも当然の事象だった。

豆腐が水面に落ちれば、その衝撃で波紋が生まれる。

当然、少年の姿が映る水面は荒れてしまい、正確な像を結ばなくなった。

少年の姿は波に揺られて消えてしまったが、消えたのはそれだけではない。

池に落ちたはずの豆腐も一緒に消えてしまったのである。

余談ではあるが、水面に落ちた位置は少年の額ひたい辺りだった。

豆腐が少年の額に当たって砕けていたように見えたのは、たぶん、気のせいだろう。

◆◆

『空から豆腐!?　なんで豆腐?』

『言うてる場合か!　若に直撃したぞ!』

『若あ!　大丈夫ですか!?!　若あ!!』

◆◆

水面を凝視していた耀哉とあまねの間に、なんとも言えない雰囲気漂う。

あまりにも予想外すぎる展開に、お互いに言葉が出ないのだ。

「今のは、誰なのですか?」

あまねはぼつりと呟いた。

もちろん、夫からの答えを期待してのものではない。

と言うよりも、答えなどわかるはずもないのだが、それでも口にせずにはいられなかった。

先程も言ったが、あまねは神職に従事する家系の出である。

だからと言うわけではないが、彼女は一般の人と比較すれば信心深い人間だった。

その彼女の前で起きた不可思議な現象は、神仏の干渉を想像させるのに十分なものだったと言えるだろう。

少し間を置いて、耀哉は口を開いた。

「誰、だろうね？ それは私にもわからない。何しろ、勘に従って豆腐を落としただけだからね」

そう言つて、耀哉は苦笑する。

わかりきった答えではあったが、あまねも元々から答えを期待しての問いではない。

これ以上は考えても無駄だろう。

そう思っていたのだが、彼の言葉には続きがあった。

「でも、近いうちにわかる気がするよ」

そう言つて、耀哉は柔和な笑みを浮かべた。

その言葉が正しかったことを知るのは、わずか数日後のことである。



『家を出るのか?』

『……はい』

『そうか。……ならば、寺には行かず、自由に生きろ』

『自由に……?』

『寺に行けば、父上が連れ戻しに来るだろう?』

『確かに……』

『それに、な』

『それに……?』

『お前ほどの才を持つ者が長男に生まれなかったのは、何かしらの使命があるからなのではないか? と、考えているのだ。……だから、自由に生きろ。お前に果たすべき使命があるのなら、おそらくは使命あちらからやってくるだろう』

『わかりました』

『……達者でな』

『兄上も……お元気で』



産屋敷耀哉は鬼を狩る集団、鬼殺隊を率いる当主である。

鬼殺隊の目的はただひとつ、鬼の首魁しゅがいである鬼舞辻無惨きぶつじむざんとそれに連なる鬼を滅するこ

とだ。

しかし、千年もの永きに渡って鬼を殺し続けてきたが、未だに元凶たる無惨を滅することはできていない。

とは言え、ひたすら鬼を殺し続けていれば無惨の怒りを買うのも当然の話である。

故に、産屋敷の一族は無惨や他の鬼に見つからぬように、定期的に屋敷の移動を繰り返していた。

だが、ここで問題になってくるのが産屋敷の一族を蝕む病である。

その病のために産屋敷の一族は短命であり、年を重ねるごとに身体の自由が奪われていくのだ。

病が進行すれば歩くことさえも困難になり、具合が悪ければ身体を動かすだけで命すら危ういこともある。

だからこそ、動けるうちに転居を済ませておく必要があった。

そして、現・当主である耀哉も結婚を機に転居することにした。

通常、屋敷を引き払うのは昼間である。

鬼の弱点は太陽の光であるため、昼間は活動が制限されるからだ。

さらに、移動に使われる道筋にも様々な配慮がなされている。

まずは、ある程度は均されていて、凹凸の少ない道を選ぶこと。

これは耀哉の体調を考慮してのことだ。
次に、山間部は避けること。

山間部は道が悪いだけでなく、日陰が多くて、太陽が沈むのも早いからだ。
そして、雨や曇り、雪の降る日は移動を避けること。

これは太陽の光が厚い雲に遮られてしまい、鬼の活動できる状態になってしまうからだ。

そして今回、耀哉の願いのもと、前代未聞の曇天での転居が決行されたのである。



『あんれえ？ ○○でねえか。そんな立派な身形みなりしてどうしただ？』

『ご老人、○○を知っているのか？ ○○は私の弟なのだ。弟は元気か？』

『あんれまあ、兄弟でしただか。○○なら元気だべ。今は嫁さもらって……そうだ。もうすぐ子供が生まれそうだとか言ってただな』

『……そうか。それはめでたいな』

（息災なのはいいが、あやつに天命を感じたのは気のせいだったか？ ……いや、そもそも○○は優しい男だ。自らの才をひけらかすような真似はすまい。そんな奴が自ら才

を振るうとするならば……それなりの理由が要るはずだ）

『……ご老人。急ぎ、弟の家に案内してはくれぬか？』

『そりやええが……急ぎなら倅せがれに案内させるだよ』

『助かる。……どうにも胸騒ぎがするのだ。これが杞憂であればよいのだが……』



曇天での転居について、周囲は猛反対した。

夜間の移動に比べれば可能性は低いとは言え、鬼が活動できる状況で転居を行うなど言語道断である。

そのうえ、柱——鬼殺隊の最上位剣士の総称——による護衛までも断つたのだ。

周囲が半狂乱になって取り止めるように嘆願しに来るのも無理はないだろう。

しかし、いくら言い募つつても耀哉は首を縦には振らなかつた。

良い出会いが待っているはずだからと、頑として譲らなかつたのである。

直感に従っていると言われてしまえば、周囲に出来ることはない。

彼らも産屋敷の一族が持つ直感力を知っているために、強く引き止めることができなかったのだ。

彼らに出来ることは、ただ鬼に出会でくわいさぬようにと祈ることのみである。

ただ、彼らは失念していた。

耀哉が己の直感に従うままに、本来ならば通るはずの道から外れて進んでしまう可能性があることを、彼らはすっかりと忘れていたのである。



『お久しぶりです、兄上』

『ああ、私の隊が鬼に襲われた時以来だな。……〇〇殿は息災か？』

『はい。妻も娘も元気に過ごしています』

『そうか。それは良かった』

『……して、兄上。今回は何用で？』

『うむ。私も鬼狩りになろうと思つてな。……私だけではないぞ？ あの時の一件に関

わつた者たちや、その一族全員だ』

『それは……』

『もちろん、殿にも許可も頂いてきた。美濃との小競り合いが続くなかで、足元に不安の種を残したくはないとのことだ。……それと、私が殿の領内を優先的に見回ることが前提ではあるが、鬼狩りへの支援もしてくれと仰おつしやつていたぞ』

『それはまた……なんとも……』

『〇〇。これから、よろしく頼む』



鬼殺隊には鬼を狩る実動部隊のほかに、後方支援を主な目的とした部隊がある。

その名を隠かくしと言う。

彼らは情報収集だけでなく、鬼との戦いが大事になった際の避難誘導や後始末、被害者に対する支援などが主な任務となる。

だが、ごく稀にそれらを上回る最重要任務を受け渡されることがあった。

それが、鬼殺隊の当主一家が転居する際の手伝いである。

それが荷物を運ぶだけならばいい。

基本的に家具などの荷物は当主一家とは違う道を辿つて新たな屋敷に運ばれるからだ。

誰に見つかろうが、鬼に見つかろうが問題はない。

しかし、当主一家は違う。

鬼に見つかからないのはもちろんのこと、鬼に協力するような者に見つかるわけにはいかない。

だからこそ、隠蔽に隠蔽を重ねて一般人や物に紛れるのだ。

この際、普段は顔を見せないようにしている隠たちも覆面を外す。

そして馬車や牛車の御者、はたまた人力車の俵夫しやふに成りすますのだ。

そんな最重要任務に、隠に成り立ての少年が大抜擢された。

彼の名は後藤。

幸か不幸か、のちに耀哉から親友と呼ばれるようになる伝説の隠。

その若りし頃の姿である。



『……おい、○○』

『なんですか、兄上』

『なぜ鬼狩りはこうも……どんぶり勘定なのだ？ 組織の運営をなんだと思っている？』

『そ、そう言われましても……』

『……お館様に会って、話をつけてくる』

『兄上!?!』

『こんな運営をしているから台所事情が切迫しているのだ。その上、収入源がお館様の直感任せだと？ 金脈を掘り当てたのは凄いのだろうが、その先が雑すぎるわ！ ええい！ 帳簿を持ってこい!!』

『……ちようぼ?』

『……まさか貴殿ら、帳簿もつけてなかったとか言うまいな?』



(俺、なんで人力車の俵夫をしてるんだろう)

後藤は今日、何度目かわからないくらいに繰り返した疑問を頭のなかに浮かべた。

彼は至つて普通の隠である。

鬼殺隊に入ろうとしたきつかけは家族を殺されたからというありふれた理由だったし、剣術の才能がなくて鬼を倒せないが、何かしらの役に立ちたいと後方支援部隊である隠に志願したという、鬼殺隊ではよく聞く手合いの人間だ。

間違つても鬼殺隊当主の転居を、さらにはお館様ご本人の乗る人力車を牽いていいよ
うな人間ではない。

そういうのもつと別の、それこそ勤続年数の長い者に任せるべき案件である。
少なくとも、後藤はそう思っていた。

その勤続年数の長い隠に話を振つても『恐れ多いわ!』と言われるのがオチだろうが。
もうひとつ追加で言えば、彼は転居する際の移動の一部のみを手伝うものだとばかり
思っていた。

本来ならば、その通りである。

鬼殺隊当主の屋敷がある場所は巧妙に隠蔽されて当然であるし、実際、屋敷を訪れる
時には複数の隠たちが櫓たすきを繋ぐようにして屋敷に招くという回りくどい方法を採用し
ていた。

だが、後藤は屋敷を出てからずっと同行している。

山の奥にあった古い屋敷から出るときは、人力車の俵夫として牽引していた。

もちろん、この時は任務に違和感など感じなかった。

任務が始まったばかりなのだから当然である。

山の麓まで降りてきてからは、牛車の御者として同行していた。

この時も特に違和感を感じなかった。

一緒にいた仲間が代わったときは、交互に代わっていくのかな？　と思つた程度だった。

道の整えられた町に程近い場所まで来たら、馬車の御者として同乗していた。

この時は違和感を感じてもよかつたのだが、彼は都会的な街並みや道を走る鉄道馬車、そして遠目に見える列車の姿に目が行きがちで違和感に気づく余裕がなかった。

町を離れて馬車が通りにくい場所まで来たら、再び牛車の御者として同行していた。

さすがにこの時には違和感を感じていた。

違和感を感じすぎてか、道を行く竹刀袋を持った親子らしき人々——顔をすつぽりと覆う編笠あみがさ（虚無僧笠）や、服の下までしつかりと巻かれた包帯が気になったというものがあるが——からの視線も気になり、気が気でなかった。

そして現在、牛車でも通りにくい場所でもまたまた人力車の俵夫をしている自分がある。

ちなみに、人力車にしても牛車にしても、馬車にしても、彼以外にもう一人くらいは

仲間がついていた。

だが、彼(または彼女)らは一区間だけで交代していき、結局、最初から今まで代わらなかつたのは後藤だけである。

(……あれ? これって俺に対して秘密を守ってなくね?)

どこかの山に住む天狗のお面をした元・柱が聞けば『判断が遅い!』と叱しかられるくらいには遅いが、まさにその通りである。

後藤は困惑した。

まだ隠になって少ししか経っていない自分が、何故こうも信用(?)されているのか。それがまるでわからない。

「あの……お館様? なんで俺だけずっと一緒に行動させてもらってるんすか?」

敬語の出来ないお年頃の後藤は、ありったけの勇気を振り絞って尋ねた。

人力車の後ろで補佐をしていていた同僚は、お前なに話しかけてんの!? とばかりに焦りを露にしている。

正直、すまないとは思いますが、こればかりは譲れない。

このまま放置しておくこととてつもなく凄いいことになりそうな予感がするのだ。

例えば、耀哉専属の隠とか、苦勞しかしそうにない役職を言い渡されそうな嫌な予感である。

すると、耀哉はさらりと言った。

「ああ、それはね。後藤くんとはとても仲良くなれそうな気がするからだよ。……勘だけどね」

「勘かよ!!」

後藤は反射的にツッコんだ。

その直後、後藤は人力車の後ろにいる同僚から奇妙な視線を向けられる。

それは、お館様に名前を覚えてもらってる後藤って凄いなあ、とでも言うような視線だった。

「いやいやいや! 後ろのあんたも何で俺にそんな視線を向けてんだよ! 俺はまだ十四で、あんたのほうが明らかに年上だつっうの!」

「そう、私と後藤くんは同じ年おなじとしなんだよ。親しい友達になれると思うんだ。……勘だけど」

「勘で友達を選ぶなよ! せめて少しは様子を見ろつての!!」

「え? 屋敷からここまでの道程みちのりで見てきたけど?」

「短いわ! 鬼に味方する悪人だったらどうすんだ!」

「それは大丈夫さ。私の直サイドエフェクト 感がそう言ってる」

「ちよい待て。今、何て言った?」

やいのやいのと騒ぐ後藤と耀哉。

耀哉の隣に座るあまねは夫が初めて見せる年相応な姿を前にして呆氣にとられ、隠の同僚は当主と対等以上に話す後藤に対して尊敬の眼差しを強くした。

馬鹿騒ぎをしながらも、一行は新しい屋敷への道程を進む。

ここまでは、当初から予定されていた通りの道程である。

問題が起こったのは、ここからであった。



『兄上にも、私と同じような痣あざが出たと聞きました』

『ああ、出たぞ。あれ以来、身体の調子が良くてな』

『そうですか。……ならば、それを皆に教えることは出来ませんか？ 私の痣は生まれ

つきでしたから、どう伝えたものかと悩んでおりました』

『そう言えばそうだったな。……ううむ、そうだな。……痣が出た時、身体中にグアアアアッと来てな。腹にグツとチカラを入れると、カツと身体が熱くなり、心臓がバクバクしてキンキンと耳鳴りもしていた。全身の筋肉がメキメキつとなって……』

『……あに、うえ？』

『○○？ ……皆もどうした？』

『……もしかして、痣あざが浮き出た代わりに語彙ごいりよく力が死んだ？』

『……お勞いたわしや、兄上……』

『なぜ泣く○○?!』



「あ、後藤くん。すまないが、ここから左に曲がつてくれないか？」

耀哉が道を指示し出したのは、町から外れて人ひと気の減ひとけった農村地帯に入つてからのことだった。

「左に曲がつたほうがいいんすか？」

「ああ。私の勘だけど、ね」

「はいはい、勘ね。また勘ね。勘でしか行動してねえのかよ。お館様の一族は！」

「後藤くん。産屋敷家は勘で苦難を乗り越えてきた一族だよ？」

「そおでござんしたね！ 知つてましたとも！ さつきまで説明されて聞いてましたからね!!」

後藤は半ばヤケクソ気味に喚わめいた。

この時点で、彼にはすでに苦勞人になる兆候が出ている。

だが、彼が本当に苦勞するのはまだまだ先で、今はほんの小手調べの時期である。

そんな苦勞と災難に彩られた人生が待っているとは露知らず、後藤は指示されるまま道を進んでいった。

だが、彼はすぐに気付いた。

（……あれ？　なんか、山の深いほうに進んでねえか？）

進む道に違和感を覚えたのは、竹林の雑木林が眼前に広がってからだ。

その先には小高い山がそびえ立っていて、明らかに「なにか出ますよ」といった重苦しい雰囲気を放っている。

「……この道を進むんスか？」

「うん。よろしく頼むよ、後藤くん」

「あつさり肯定しやがった!？」

耀哉からのお願いに軽い眩暈めまいさえ感じてきた後藤は、改めて進行方向にある道に目を向けた。

山に近いせいもあってか、辺りあたりに人通りはない。

人通りが少なければ道が均ならされることはないため、先程よりも荒れていて凹凸が多くなっている。

移動するには不向きで、それほど速度は出せないだろう。

「……マジか。マジで進むのか」

後藤は小声でぼやいた。

しかし、上司からの依頼である。

気が進まなくても、行かねばならない。



『あざもの瘡者は早死にするらしいな。どうだ？ 貴様も鬼にならないか？』

（こちらは満身創痍で救援は期待できない。しかし、こやつは神出鬼没。二度と遭うことはないかも知れん。ならば、この機会を逃すわけにはいかん）

『ありがたく……頂戴致します』

『○○殿!』

『はははっ！ 一人くらいは呼吸の使える剣士を鬼にしてみたかったのだ。さあ、貴様は与えられた血の量に耐えられるかな？』

『ぐうううう!!』

『……ぬっ?! 貴様っ!』

『鬼舞辻無惨! その頸……もらった!!』



鬱蒼とした雑木林をゆつくりと進む。

時間としては昼間だが、周囲はとても薄暗い。

頭上まで覆い尽くす木々の葉が、ただでさえ少ない日の光を遮っているからだ。

まず間違いなく、この場所は鬼が活動できる空間である。

「……いかにも鬼が出そうな感じだよなあ」

「うん。出ると思うよ?」

後藤がゲンナリとした様子で呟くと、耀哉はあっさりと言定した。

「出るんかいっ!!」

後藤は激しくツッコんだ。

「お館様の『出ると思うよ』は『必ず出ます』と同じ意味だろおが!! どうすんだよ! 一般人に扮装してたから護衛なんていねえぞ!」

そう叫んだ直後だった。

竹藪が音をたてて大きく揺れたかと思うと、その奥から大きな岩が現れたのだ。

いや、正しくは岩ではない。

岩のような皮膚をもった、異形の鬼である。

体長は七尺、いや、約3メートル八尺はあるだろうか。

胴体だけでなく、四肢が丸太のように太い。

そして、そのすべてを岩のような灰色の皮膚が覆っているのだ。

姿形を見ただけでも、一般隊士では歯が立たない相手だと理解できた。

鬼の弱点である頸くびも太い。

おそらく、鬼に致命傷を与えられる刀——日輪刀にちりんとうでも一太刀では斬りきれないだろ

う。



『……兄上が……鬼に……?』

『……ああ。無惨の隙を突くためだったが、血を飲んで鬼になった。そして奴の頸を斬りはしたのだが……』

『……死ななかつたのでしょうか?』

『……知っていたのか?』

『先日、なにやら激昂した様子で襲いかかってきたので……返り討ちにしたのですが……逃げられました』

『そうだったのか。……すまない。○○殿から頸を斬っても死なないことを伝えろと言われていたのに……』

『……いえ。それで……兄上は?』

『太陽の光を浴びて自決を……』

『そんなつ! ……兄上つ!!』

『……しようとしたので、手足を切り落として達磨だるまにしておいた。とりあえず、もって帰ってはきているぞ』

『落ち着け○○! 確かに今の言い方だと○○殿が死んだように聞こえたが!』

『そうだ、落ち着け！ こいつの言い回しが悪いのは昔からだろう!! ころら！ 呼吸を
使うな!!』



目の前に鬼が現れた。

だが、この場に戦える者はいない。

後藤は剣術の才能がなくて隠になった者だ。

普通の鬼を相手にしても勝てる可能性が少ないのに、異形の鬼が相手では勝ち目はな
い。

耀哉とあまねは論外だ。

二人とも戦う者ではないし、そもそも戦いの場にいるのがおかしい人々である。

残るは隠の同僚であるが、後方支援の部隊にいる以上、おそらく後藤と同じように戦
いには向いていないだろう。

しかし、万一ということもある。

後藤は同僚に訊ねた。

「……俺、剣術の才能がなくて隠になったクチですけど、そっちはどうっすか？」

「俺は……呼吸が使えるし、最終選別も……突破してる」

「え!？」

後藤は驚いた。

鬼殺隊の最終選別と言えば、藤襲山ふじかさねやまという山に閉じ込められた鬼たちと戦い、七日間生き残れば合格という過酷な試練である。

それを突破してるということは、実動部隊にいてもおかしくない、相応の実力を備えた人材だ。

つまり、生きる希望が見えてきた、と思ったのだが、

「……ただ、鬼の前に立つと腰が抜けるようになってな。……実は今、腰が抜けて動けなかったりする」

「駄目じゃねえかつ!!」

後藤のツツコミが炸裂した。



『目覚めるのに……五年もの歳月を……無駄にしてしまいました……申し訳ありません』

『いいえ、○○殿。貴方は目覚めてくれたうえに、鬼になってもなお、鬼殺のために働いてくれると申し出てくれている。これ以上なく、心強い味方です』

『鬼になった今……○○の名を名乗る気は……ありませんね』

『……では、なんと呼べば?』

『○○○と……妻が……つけてくれた名です』

『わかりました。……では○○○殿、以後もよろしく願います』

『……御意』

（……あれ、もしかしくなくても気づいてないよな?）

（ああ。奥方様と花柱、そんで○○殿が連れてきた鬼の医者が使ってた隠語、だろ?）

（酷使とか奉仕とか、意識がないからって盛さかって色々やってたのは……?）

（知るわけないだろ）

（……武士の情けだ。墓の下まで持つてってやるか）

（……だなあ）



異形の鬼が一步踏み出した。

「今日の俺は運が良い。目の前に餌かまが転まがり込んできやがった」

ジュルリ、と鬼は口から垂たれれた涎よだれを拭ぬう。

かなり腹を減へらしているらしく、興奮きんして息は荒あいうえに、目は血走ちまっている。

後藤はチラリと人力車へと視線しせんを向むけた。

偶然ぐうぜんではあるが、人力車の屋根やまが衝立ついでの代わりになって、異形の鬼からは耀哉よしかたちの

姿は見えない。

現時点では、鬼の首魁である鬼舞辻無惨に耀哉たちのことが伝わっていないだろう。予断を許さないが、不幸中の幸いである。

あとは、この場をどうやって切り抜けるかだ。

ただ、逃げるにしても腰が抜けた同僚が道を塞いでいるため後ろには下がれない。

前に進むにも、そちら側に鬼がいる。

そのうえ、山道自体が人力車一台分の幅しかないのだ。

通り抜けられるはずがない。

(あ、これ詰んだわ)

後藤は死を覚悟した。

「今日の餌は質が悪そうだが量があるなあ。大人と子供を合わせて六人とはな。場所もいいからゆつくりと食事が出来る。今日は本当にツイてるぜえ」

「……ん？ ろく、にん？」

後藤は鬼の言葉に疑問を抱いた。

自分と動けない同僚で二人。

屋根で顔は見えないとは言え、人力車に二人。

この場にいるのは、それだけのはずだ。

あと二人はどこを数えて言ったのか？

そんな疑問が後藤の脳裏を過る。

すると、人力車でじっとしていた耀哉が口を開く。

「……ああ、助けが来たようだね」

その言葉が合図だったかのように、一人の男が人力車の横をすり抜けて現れた。音もなく現れたために驚いたが、男の姿に見覚えがあった後藤は声をかける。

「その編笠。あんた確か……」

「少し……さがっている」

そう言つて、男は鬼の前に立つた。

手には竹刀袋が握られていて、今は口紐がほどかかっている。

後藤は慌てて止めようとしたが、耀哉たちのこともあつてすぐには行動できず、オロオロしながら後ろを振り返った。

すると、そこには編笠を被った子供に引きずられながら後ろに下がる、腰の抜けた同僚の姿があつた。

なんとも反応に困る絵面である。

「いやいやいや！ 呆けてる場合じゃねえし！ そもそも、鬼は日輪刀で頸を斬らないと死なねえし！」

「気遣い痛み入る……だが……無用な心配だ」

そう言つて男が竹刀袋から取り出したのは、大正時代では銃刀法違反で持つことすら許されない刀だった。

「いや、何で刀を持つてんだよ一般人」

「この見えても……鬼殺隊の隊士……だったからな」

そう言つて男が刀を鞘から引き抜く。

それは間違いなく日輪刀であつた。

しかし、その刀身は半ばから折れている。

一太刀では斬れそうにないほどに太い鬼の頸を、折れた刀身で斬れるとは思えない。

後藤は男を止めようとしたが、それよりも先に鬼が襲いかかつてきた。

「ごちやごちやとうるせえんだよ、餌どもが！ おとなしく喰われろや！」

八尺もの巨軀きよくに相応の筋肉を搭載しておきながら、鬼の動きは想像以上に機敏だ。

だが、鬼の前に立つ男に焦りは見えない。

——月の呼吸 壺の型 闇月やみづき・宵よいの宮みや

次の瞬間、鬼の頸が宙を舞つた。



『家を……ふたつに割ろうかと……考えている』

『なぜです？』

『私の……せいでもあるが……鬼舞辻に……目をつけられたからだ』

『なるほど』

『奇しくも……我が子も双子……家を割るには……都合が良い』

『家を割るならば、新しい家名を考えなければなりませんね』

『兄の〇〇は……殿が養子縁組を……薦めてくだされた……弟の〇〇にはトキトウと

……名乗らせるつもりだ』

『トキトウ?』

『“時”の“遠く”まで続くように……とも考えたが……縁も遠くなりそうでな……代わり……“透明な世界”が見えるようにと……願をかけて……“透”の字をあてた

……故に……“時透”だ』



「……は?」

それは後藤の声だったか、それとも頸を斬られた鬼の声だったのか。

ともかくにも、鬼の頸はいとも簡単に断ち斬られ、八尺ほどもあった巨軀はポロポロと崩れ落ちた。

後藤は目を擦こすった。

先程までは死を覚悟していたはずなのに、気がつけば危機は去っている。

これは夢か何かかと思つても仕方がないだろう。

「いや、おかしいだろ！ 明らかに一太刀で斬れるような首の太さじゃなかつただろ!？」

それを一太刀？ 折れた刀で一太刀とか物理的にあり得なくねえか!？」

「あ、そつちなんだ。気にするの」

後藤の叫び声に編笠を被つた子供がツツコむ。

しかし、騒ぐ後藤には聞こえていないようだ。

鬼を斬つた男は刀を鞘に納めると、そのまま無言で立ち去ろうとした。

「待つてくれないかな」

そこに待つたをかけたのは耀哉だ。

しかし、男は足を止めるような素振りもなく、そのまま立ち去ろうとしている。

耀哉はさらに言葉を重ねた。

「待つてくれないかな、月柱」

ピタリ、と男の足が止まる。

「…………お館様、月柱つきはしらなんて…………今の柱に居ましたっけ?」

「お館様…………だど?」

自分の知っている情報にない柱の名に、後藤は疑問の声をこぼした。

その声に反応したのは耀哉ではなく、立ち去ろうとしていた男のほうだ。

「はじめまして。私が今の鬼殺隊当主、産屋敷耀哉だ」

耀哉が人力車のなかから自己紹介すると、男は慌てた様子で平伏する。

「お館様と……知らなかったとは言え……とんだ御無礼を」

「いいや、それは仕方のない話だよ。まさか、鬼殺隊の当主がこんな迂闊な真似をすることは思わないだろうからね。……でも、こんな形でなければ貴方に遭うことは出来なかったと思うよ」

そう言つて耀哉は肩を竦^{すく}める。

耀哉自身、ここに至るまで様々な無理を押し通してきた自覚があつた。

曇天での転居に始まり、護衛の不在、さらには予定していた道筋からの逸脱。

極めつけは鬼がいるとわかつていながら道を突き進むという愚挙である。

しかし、そのすべては目の前にいる男に遭うためだった。



『ここにいたか……○○』

『兄上』

『そろそろ、か？』

『はい。もう……長くはありませぬ』

『そうか』

『私は成すべき時に、成すべきことを成せませんでした。……口惜しゅうございます』
 『そう……自分を卑下することは……ない……お前は……後世に遺せるものを……遺したのだから』

『しかし!』

『それにまだ……私がいる』

『——っ!』

『お前が……成せなかったことは……私が引き継ごう……だから……安らかに……逝く
 といい』

『忝かたじけのうございます……あに、う、え』



「それで、後藤くんの質問に答えるとだね。彼は今の柱じゃないんだよ。大まかに言う
 と、三百年くらい前の時代に存在した柱になるね」

「はあ? 三百年前?」

後藤は困惑した。

当たり前の話だが、人間は三百年も生きられない。

百年以上も生きているとなれば、それはもう人間ではない。

「……人間じゃない?」

奇しくも、後藤は正解を言い当てた。

ギギギツと、錆びた鉢ぶりきのように後藤は平伏し続ける男に顔を向ける。すると、ちょうど男が編笠を脱ぐ所だった。

編笠の下から出てきたのは——六つの目を持つ異貌いぼうだった。

（めっちゃ鬼やんけ）

後藤は内心でツッコんだ。



『そこの小僧……少し待て』

『なんだ、お前は。俺に何か用か？』

『その手に持っている……瓢箪ひょうたんの中身は……なんだ？』

『こ、これか？ これは……さ、酒だ。隣の道場に住む住人が近々祝言ちかじかを挙げると聞いてな！ 酒を差し入れてやろうと思ったのだ！』

『そうか……酒か』

『そうだ、酒だ』

『ならば……飲んでみる』

『へあ!?!』

『貴様が……それを酒だと言うのならば……今……ここで飲んでみる』



鬼を斬った男が編笠を脱いだとき、あまねはハッと息を飲んだ。

男が鬼だったからではない。

その顔に見覚え、いや、見たことのある人物の面影を見たからだ。

——あの時の豆腐の子。

声に出さなかったただけマシだろうが、不名誉な覚えられ方である。



『これは……そなたが殺ったのか?』

『そう、です。僕が、父さんと、母さんを……っ!』

『そう、か』

『僕は、何てことを……っ!! お願いしますっ! 僕を、殺して、ください……僕は……

僕はっ!』

『鬼が死ぬ手段は……いくつかある……日光を浴びるか……日輪刀で頸を斬られるか

……そして……餓死するかだ』

『僕は、取り返しの、つかないことを、しました。だから……苦しんで、死にたい……っ

!』



耀哉は目の前にいる男の姿を見て、当時の彼が支えていた産屋敷家の当主が遺した手記を思い出していた。

当時、産屋敷家の当主は六歳の子供だった。

そんな年齢の子供に組織の運営などできるわけがない。

そのうえ、当主になったということは父親を亡くしたばかりであるということ。

その心境がいかなるものであったかは想像することしか出来ないが、不安と恐怖が渦巻いていたことは間違いない。

頼るべき大人だが、鬼殺隊の場合はそのほとんどが復讐鬼である。

頼りにするどころか、むしろ暴走しないように手綱を握る必要さえあった。

そんななか、幼い当主に手を貸してくれた存在がいた。

それが彼、つぎくにみちかつ継国巖勝である。

元々、巖勝は武家の当主であつた。

組織を運営するための知識もあり、責任感も強く、そして鬼殺隊に入った理由も鬼への復讐心からではない。

そういった要素が重なった結果、巖勝は幼い当主が頼ることが出来る、数少ない大人だったのである。

当主の手記に『口にはしないが、第二の父だと思つている』と記されていることから

も、どれだけ信頼していたかを察することができた。

手記の後半で、彼の実弟の娘を例外的に妻に迎えたため、伯父と呼べるようになったとの一文があつたのは余談である。

「貴方がずっと戦い続けていてくれたことを、私は嬉しく思うよ。後藤くん。これを彼に渡してくれないかな」

そう言つて耀哉が持ち出したのは、一振りの日輪刀だった。

耀哉が僅かに刀を抜くと、色の変わつていない普通の刀身が姿を現す。

「少し前に、鬼殺隊の皆と一緒に戦いたくて、無理を言つて刀を振つたことがあるんだ。……恥ずかしながら、十回も振れなかつたけどね。これは、その時に振つた刀だよ。折れた刀の代わりに使つてくれないかな？」

「それは……」

「折れた刀と新しい刀、その僅かな差で誰かを助けることが出来る。……そんな日が来る気がしているんだ」

そう言われてしまえば、受け取らないわけにはいかない。

耀哉から後藤を経て、巖勝へと刀が受け渡される。

刀を受け取つた巖勝は数歩さがると、再び平伏した。

「ありがたく……頂戴致します」



『ああっ！　　〇っ！　　〇っ！』

『父さん！　母さん！　僕が、僕が悪かったよう』

『〇、いいんだ。いいんだよ』

『父さん、母さん。僕は地獄に行くよね？　父さんたちがいる天国には行けないよね？』

『そう、だな。〇は天国には行けない。……〇はまだ生きているからね』

『……え？』

『〇、よく聞きなさい。〇は出会いに恵まれたんだ』

『父さん？　何を言ってるの？』

『この川岸にしか咲かない青い花は、花札のような耳飾りをした方が護ってくれているの。だから、あなたを鬼にした男が、あの花を手に入れることは絶対ないわ』

『母さん？　青い、花？』

『坊っちゃんはまだやり直せますよ。だから、あの男を倒す手助けをしてください。そうすれば、きっと坊っちゃんもご両親が待つ天国に行けるようになりますから。……私のごことはお気になさらず。死に方が前世と同じような感じでしたから、私が前世でやらかしたことへの報いを受けただけですよ』

『お医者のおじさま？　前世って……なんのこと？』



その後、後藤たちは本来進むはずだった道へと戻り、新しい屋敷を目指した。

別れ際に一悶着ひとしもんぢやくあったのだが、それらを含めて後藤には箝口令かんこうれいが出されているので他言することはできなくなっている。

まあ、話したところで信じてもらえないような内容でもないのだが、念のためということだろう。

(三百年前の柱が鬼になってまだ生きてて今は「黒死牟こくしぼう」って名乗つてるとか一緒にいた累とかいう子供も実は鬼だったとか人を食べなくても寝てれば大丈夫とか鎧かすがいも連からすれて行かせたからいつでも連絡できるようになったとか今度から直接的なやり取りが必要な時は俺が専属で動くとかそんないきなり色々言われて納得できるかってえの!!)

後藤は内心で『耀哉の阿呆お!!』と連呼する。

内心とは言え、上司を名前呼びしていることに気づいているかは知らないが、この適応力があるからこそ友達に選ばれたのかもしれない。

ちなみに、後藤にのみ口止めがなされたのには理由があった。

現場にいた同僚は、異形の鬼が襲いかかった時に緊張が頂点に達したのか、あつさりと気を失ってしまったのだ。

結果として、継国巖勝こと黒死牟の素顔と存在をハッキリと見たのは、産屋敷夫妻を除けば後藤だけだったのである。

「……さて、後藤くん。今日、最後のお願いをしてもいいかな」

「あ、はい」

後藤は反射的に返事をした。

それを後悔するまであと十秒ほどである。

「たぶんね、このあとね、柱の皆に怒られると思うんだ。だから……一緒に怒られてくれないかな」

「なに言ってるんだオメエ」

両手をモジモジさせながら頼み込む耀哉の姿に、後藤は素の表情で返した。

そんな二人の姿を見ながら、あまねは笑いを噛み殺している。

この後、怒る柱の姿や威圧感を体と心に刻みつけられた後藤は、柱に会うと体が震えだすようになったという。



『川岸に咲く……青い花……やはり……そこにあつたか』

『……知ってたの？』

『そうではないかと……思つてはいた……やつが……鬼になった時のこと平安時代を……考えれ

ば……陰陽師が……関わっていても……不思議ではない』

『陰陽師?』

『生きた人の身のまま……三途の川まで行けるのは……陰陽師くらいだ』

『……そうなんだ』

『陰陽師が……関わっている以上……処方された薬とやらは……呪いの類いだ……おそらくは……産屋敷一族の命を対価に……チカラを得ているのだろう』

『……じゃあ、お館様の一族が途絶えたら?』

『呪いの基点は……あの男だ……奴に近い血筋が途絶えれば……次は奴の近くに居た者が……対価を支払うことになるだろう』

『うわあ……呪いと呪いが同じ文字な理由がわかった気がするよ』

『故に……斬らねばならん……絶対に……生かすことは……できん』

◆◆

『カカツ! これはなかなか愉快な形に歪んだのう!』

『然り、然り!』

『さてさて、神仏を虚仮にした罰当たりよ。己が傲慢の報いを受けるといい!!』

◆◆

これは本来、悲劇が綴る物語である。

しかし、未来で余計な一言を言ったがために、あるべき流れは歪んでしまった。故に、これは喜劇の物語である。

この物語の結末が如何なるものになるのかは、まだ誰も知らない。

読んで楽しい設定資料集&シナリオ（戦国時代編）

登場人物紹介（1）

つぎくにみちかつ

こくしほう

継国巖勝（黒死牟）

誰が呼んだか鬼おにいちちゃん。

原作だと心の救済が成されていない（？）珍しい部類に入る人。

無一郎と玄弥が死ぬ原因を作ったことに関しては、本作では目をつぶって欲しい。

詳しくは原作を読もう。

本作では神仏の干渉により、豆腐の角に頭をぶつけて死ん……ではないが、性格が改変された。

原作通りの在り方に加えて、豆腐の柔軟性を獲得している。

え？ 豆腐は崩れやすいだろうって？

何を言ってるんだ。

絹ごし豆腐を叩いて鍛えれば金剛石よりも硬くなるんだぞ？（某ジャンプ漫画よ

り）

☆改変された鬼いちちゃんの軌跡（戦国時代編）

・手作りの笛

特に変更なし。

原作通り、父親に『忌み子の弟（縁壺よりのち）と関わるな』とぶん殴られた翌日に笛を渡す。大切にします兄上。

・母親の病

原作では具体的な病の名前は判明していない。

左半身が麻痺し始めていた模様。

そのうえで、病にかかっていると他人が見てわかる状態になるまで放置されていた可能性、もしくは、わかっていて放置されていた疑惑（その理由は母親の欄にて説明）がある。

とりあえず、原作の巖勝と縁壺の父親、有罪ギルテイ。

母親に駆け寄り寄る縁壺を見て『縁壺は甘えん坊だなあ』とほのぼのと呟つぶやいていたら、ふるると首を振って『いえ、母上は身体が悪いのです』と説明された。

当時の縁壺は耳も聞こえず口もきけないと周囲に思われていたため、『耳も聞こえてるし、話せるんかい！』というツツコミがあつたとかなかつたとか。

母親と縁壺の立場上、勝手に医者を呼べないことを察した巖勝は、すぐさま父親に直

談判する。

少々ゴタゴタ（後述する父親の欄にて説明する）したが、無事に医者を呼ぶことができた。

早期の治療が叶った結果、母親は病死を免れた。

さすが兄上。

・日の本で二番目の侍

本来なら縁壺が初めて喋る話だったが、前述の『母親の病』で会話が発生しているため、原作のように巖勝が縁壺のことを気味悪く思うことがない。

この出来事を巖勝はきっちり覚えていて、人生の目標として『縁壺が日の本で二番目になれるように、自分が日の本一の侍になること』を掲げている。

さすが兄上。

・透明な世界

人間が透けて見える『透明な世界』について語る話。

原作だと巖勝が縁壺に『何言ってるんだお前』的な視線を向けた。

本作の巖勝は『服だけ透かして見えないか？』と問い返したため、縁壺が『何言ってるんだ兄上』的な視線を向けることになる。

その会話のあと、縁壺は通りすがりの女中をふとした拍子に服だけ透かして見てしま

い、耳まで真っ赤にしてうつむいてしまう。

それを見ていた巖勝に『この助平すけへ。これからはエロ壺と名乗るといい』と誂からかわれた。ひどいや兄上。

そのあと、滅茶苦茶追いかけっこした。

縁壺としては結果的に巖勝と遊べて楽しかったらしい。

さすが兄上。

なお、時代背景に合わせようとすると、それに連なる単語や表現が存在しないため
“エロ壺”とは呼べないジレンマが発生する。

・縁壺の才能

原作では縁壺が剣術の師範を叩きのめしてしまいう話。

本作では『母親の病』の際に起きたゴタゴタや、『透明な世界』での追いかけっこを通して縁壺の才能に気付いていた巖勝が『出家するつもりがあるのなら、隠しておかないと面倒事が起こるぞ』と先に釘を刺していたので話自体が発生しない。

事前に問題点を潰しておくとは、さすが兄上。

・縁壺の出家

原作では母親が病死した直後、縁壺が予定よりも早い時期に出家することを決意し、巖勝に別れを告げにくる話。

本来ならほぼ一方的に縁壺が話をして家を出ていくが、本作では兄弟間の会話が成立している。

巖勝は持論として『縁壺の才能は何かしらの使命があるために、天より与えられたものだと考えている。お前が長男として生まれなかったのは、家の事に縛られず、自由に動けるようにするためではないか?』と説明した。

縁壺は納得した。

さすが兄上。

ちなみに、原作では縁壺の才能が明らかになった影響で兄弟間の立場が逆転しかけたりしている。

本作では縁壺の才能は明らかになっていないが、前述した『透明な世界』での追いかけてくことを見ていた家臣たちが『縁壺のほうに才能があるのでは?』と疑惑の目を向け始めた結果、家中の雰囲気が一変したものになったので原作通りの時期に家を出ることになった。

なお、縁壺の才能が重視された背景であるが、おそらくは当時が戦国時代ということもあり『武家の男は戦場にて敵将を討ち取ってこそ』という価値観だったと思われる。

・縁壺とうた

縁壺の妻・うたが鬼に殺される話。

前述した『縁壺の出家』から十年の歳月が過ぎている。

原作では産婆を呼びに行つた縁壺が色々あつて帰るのが遅くなり、家に帰りついた時にはすべてが終わつていた。

本作では戦帰りの巖勝が、たまたま通りかかった村で縁壺に見間違えられ、村人との会話の最中に胸騒ぎを覚えたために縁壺の自宅へと急行。

間一髪で間に合った。

しかし、巖勝たちでは鬼を殺しきることは出来ないため、苦戦を強いられる。

そんななか、ついに縁壺が帰宅。

巖勝と縁壺（と巖勝の部下）が協力して鬼を攻撃、日の出まで交代で戦い続けることで最終的には日光で消滅させることができた。

その結果、うたは死なず、お腹の子も無事に出産することができた。

ありがとうございます兄上。

この話の最後に巖勝は『もしも近日中に、この家に鬼狩りが立ち寄るようなことがあれば、それがお前の天命やもしれん』と言い残して去つていった。

それから十日後に鬼狩り（当時の煉獄家に連なる人）が来た。

さすが兄上。

・鬼の襲撃

原作だと巖勝の率いる部隊が鬼に襲われて全滅し、その際に見た縁壹の剣技に嫉妬して鬼狩りになる話。

本作では一度『縁壹とうた』にて鬼と一戦交えているので予備知識があり、対策も考えていたため部隊は全滅していない。

ついでに縁壹の剣技に嫉妬もしない。

この一件を仕えていた主家に報告し、認可を得て鬼狩りになった。

その際、条件付きとはいえ鬼狩りへの支援を約束にさせている。

さすが兄上。

・鬼殺隊と呼吸法、そして柱制度

原作ではほぼ説明のない部分。

わかっているのは縁壹が呼吸法を教え、それぞれの剣術の型に合わせた呼吸法が生まれたことと、柱制度と柱の所有する刀に『悪鬼滅殺』と刻む慣例も同じ頃に始まったことくらい。

なので、そこら辺の制度や組織的に曖昧だった部分を巖勝が明確に整備したことにした。

以下が捏造設定。

まずは鬼狩りと呼ばれていた武装集団を『鬼殺隊』として明確に組織化し、呼吸法に

よって強化された剣士たちを実力順に階級をわけて全体の戦力を把握しやすくした。

次に、戦いに向いていない者でも役に立てるように、支援部隊である『隠』かくしを設立し、鬼の被害者への支援も行うようにした。

そして、呼吸法を使える剣士を未来においても育てるべく、『育手』そだての制度を立ち上げた。

ちなみに最終選別の試験内容と、その試験会場になる藤襲山ふじかさねやまの管理運営に関しても、巖勝が発案者である。

というか、呼吸法のない時代でもあれが最終選別の内容だったとは思いたくない。

そして、持ち前の責任感と先々に起こるであろう問題を想定できる巖勝なら、藤襲山にいる対象（鬼）の選定と排除を怠ることはないという信頼もある。

さらに、かすがいがらす 鏝 鴉も後述する理由で巖勝が発案者ということにした。

以上が捏造設定。

結論、さすが兄上。

・痣者あざ

原作でも取り扱われていないに等しい部分。

内容を作るなら完全に捏造しかない。

なので、痣の出し方を説明する役の巖勝には擬音でしか説明できない炭治郎と同類に

なってもらった。

説明を聞いた縁壹は泣いた。

お勞しや兄上。

・巖勝、鬼になる

原作では痣が出た者は寿命が縮み、25歳くらいで死んでしまうことに絶望した巖勝が無惨の誘いに乗って鬼になる話。

本作では普通に無惨の頸を狙っている。

現在の実力では勝てないことを悟った巖勝は、無惨の油断を誘うための演技として鬼になることに同意して跪ひざまずき、両手を器のように重ねて差し出した。

良くわからない人は雷の呼吸を使う劍士の兄弟子を参考にしよう。

それを見た無惨は気を良くし、誘導されたことに気付かず自ら近付いて巖勝の手に血を注いだ。

それでも無意識に警戒していることを感じ取った巖勝は、血を飲むことで無惨の警戒心を解かせる。

そして、鬼へと変化する肉体の痛みに耐えながら、巖勝は渾身こんしんのチカラを込めて無惨の頸くびを斬り飛ばした。

しかし、この時点で無惨は頸の弱点を克服しており、巖勝の行動は無意味なものとな

る。

なお、巖勝が身命を賭して無惨の頸を狙った理由は下記の通り。

- 1, 無惨との遭遇率の低さ。
- 2, 当時六歳だった産屋敷家^{うぶやしき}当主の心労。
- 3, 鬼とは言え、他人を傷付けることを嫌っていた縁壺がもう戦わなくてもいいように、という兄心。

上記の理由に痣による寿命の短縮が重なり、某ジャンプ漫画の主人公の如く『もう、ここで終わってもいい』という精神状態になる。

もちろん、某主人公とは終わってもいい理由と方向性が違うが、今という瞬間に死力を尽くして取り組むのは同じ。

ただし、あちらと違って結果がついて来なかった。

兄上えええ!!

・縁壺と無惨

無惨のトラウマが製造される話。

原作では完全な遭遇戦。

本作では前述の『巖勝、鬼になる』にて騙し討ちを受けて腹を立てていたら、巖勝に良く似た男が居たので血縁だと当たりをつけて憂さ晴らしと復讐を兼ねて自ら襲いに

いった。

ただし、襲いかかった相手が相手である。

結果はお察しの通り、原作同様にトラウマを刻まれて逃げ出した。

逃げるな無惨。

・巖勝 改め 黒死牟こくしぼう

前述の話で鬼になった巖勝が目覚める話。

無惨を仕留め損なったあと、巖勝は日光に当たって自決しようとしたのだが、それを見ていた当時の水柱に妨害される。

その後、手足を斬り落とした達磨状態だるまにされてから鬼殺隊の拠点に持ち帰られたのだが、どうみても瀕死なうえに、斬られた当時は完全に鬼化していたわけでもないのに、何時いつ死んでもおかしくなかった。

死んでないのは本当に運が良かったのだろう。

ちなみに、目覚めるまでに五年もの歳月が流れている。

本来なら目覚めるのにかかる時間は禰豆子ねずこと同じく二年間（と鬼化と回復の期間を足した時間）程度のはずだった。

しかし、昏睡している巖勝の日輪刀にちりんとう（意味深）を使って奥方様と、巖勝に密かな思いを寄せていた当時の花柱（奥方様公認）がニヤンニヤンしてた結果、起きるのが遅れた。

ナニやってるんですか義姉上!?

なお、基本的に無惨以外は鬼を作ったり増やすことが出来ないため、普通の鬼は勃たたない（勃たつ必要がない）のだが、そこは縁壺に連れてこられた鬼の女医、珠世が頑張った。

縁壺はそういうつもりで連れてきたわけではないのだが、奥方様的には『よくやった！』と褒めていたらしい。

珠世がニヤンニヤンに参加していたかは謎。

なお、後年の話になるが、珠世が巖勝を見る目がたまに怪しい時がある。

・かすがいがらす
鏝 鴉

無惨が頸を斬っても死なないことを伝えるのが遅れたことを憂いた巖勝が、情報伝達を速やかに行えるようにと考えて育成を始めた。

なお、『縁壺と無惨』の話で縁壺が巖勝の鬼化と自決の話を知っていたら間違いなく無惨は詰んでいた。

ただでさえヤベー奴が明確な殺意を抱いてきたら、間違いなく死ぬ。

無惨は運が良かった。

おのれ無惨。

・時透家

無惨に目をつけられたことを憂いた巖勝が、自身の子供が双子だったこともあつて家をふたつに割る話。

要は原作キャラの時透兄弟のご先祖様。

時透の姓についての意味や願掛けは本作の独自設定。

・縁壺の死

縁壺が天寿を全うする話。

原作では黒死牟との戦いの最中に寿命が来た。

本作では普通に会話して団欒の最中に命が尽きる。

その際に、縁壺がやり残してしまったことを巖勝が引き継ぐことを伝えた。

忝のうごぎいます兄上……。



登場人物紹介（2）

継国縁壺

原作に登場する最強の剣士。

本来なら悲しみの多い人生を歩む人。

本作では神仏の介入によって得をした人。

兄上大好き具合は相変わらず。

そこに妻と娘が入って原作よりも幸せな人生を送る。

やり残してしまったことも巖勝が引き継ぐと言ってくれたので、心置きなく天寿を全うした。

しかし、あの世に逝ったら三途の川の辺りほとで『青い彼岸花』を見つけてしまう。

誰かが採取しに来てても悪いので、採られないように番人として三途の川にて残業が確定。

話を聞いた家族は苦笑してた。

なお、原作（2020/02/08時点）では青い彼岸花がどこにあるのかは明言されてない。

うた（縁壺の妻）

基本的に原作通り。

詳しくは原作を読もう。

本来ならお腹の子供もろとも死ぬ運命にあつたが、夫・縁壺の兄である巖勝に命を救われる。

無事に出産した子供は娘で、その子はなんやかんやあつて産屋敷家に輿入れすること

になった。

その娘が産んだ産屋敷家の子供らは、過去の例に比べて平均寿命が5年は延びていたらしい。

縁壺の血筋つてスゲエ。

巖勝と縁壺の父親

当時の継国家当主。

戦国時代の武家らしい武人肌な人。

しかし、妄想力は現代人並みで前述した『母親の病』で起きたゴタゴタでそれを發揮した。

その内容は以下の通り。

「父上。母上の身体の具合が悪いようです。医者を呼んで頂けませんか？」

「なに？ 医者だと？」

——父上妄想中——

「ああ！ いけませんお医者様！ 私には夫と息子が……!!」

「ぐふふ、ワシは医者だぞお？ 言うことを聞かない患者は……こうだ！」

「あーれー」

——父上妄想終了——

「うぬぬっ！ おのれヤブ医者あ！ それは俺の妻だぞお！！」

「ええ……」（引き気味）

「……ハツ!? な、ならんならんならん！ 医者と呼ぶことはならあん！！」

「な、ならば女医はどうです？ 女の医者ならば……」

「なあにい？ 女の医者だとお？」

——父上妄想中——

「ふふつ、可愛い人。……さ、私にすべてを任せて」

「あつ！ い、いけません！ このようなこと……」

「大丈夫よ。心配はいらないわ。……さ、すべて曝^{さら}け出してしまいなさいな」

「あつ！ あつあああ……あーれー」

——父上妄想終了——

「けつ……けけけ怪^けしからんっ！ 怪しからんぞお！ むしろワシが二人まとめて面倒

みてやるわあああ！！」

「ええ……」（ドン引き）

「……兄上」（外で待ってた）

「縁壺、木刀を持って。父上を叩きのめして意識を刈り取ってから医者と呼ぶ」（イライラ）

「え？　ですが……」（オロオロ）

「母上のためだ」（キリツ）

「母上の……わかりました」（覚悟完了）

「父上覚悟お!!」

「青二才が。下克上など十年早いわ!」

（縁壺。私が正面から気を引く。だから、お前は背後から……）

（わかりました、兄上）

結果、原作で剣術の師範に食らわすはずだった連撃が父親の後頭部を襲うことになった。

さらに、この一件で縁壺は人を攻撃した際の感触を嫌うようになる。

ちなみに父親の記憶は一部飛んでいて、縁壺の剣才が知られることはなかった。

巖勝に家督を譲って隠居した後は、ただの助平爺すけべじいになった。

後に巖勝と縁壺に弟妹ていまいが増えたとかなんとか。

巖勝と縁壺の母親

原作では縁壺の耳飾りを与えた信心深い人。

しかし、戦国時代において忌み子として生まれ、殺される運命にあった縁壺を、家の

意向に叛いて守り抜いた女傑じょけつでもある。

まあ、その結果が屋敷の一角に半ば隔離されているような、日陰者扱いだったのだから。

同時に、病だとわかっていても医者が呼ばれなかった可能性がある、と思われる理由でもある。

本来なら早くに病死するが、本作では医者に見せるのが早かったために死を免れたまぬが。のちに巖勝と縁壺、それぞれの子供（つまりは孫）を抱くことができた。

巖勝の妻

文字通り、巖勝の妻。

こくしぼう（意味深）の元凶。

とある良家のお嬢様で、ゆるふわとか天然とか、そんな感じの人。ちよつと靈感がある、とかなんとか。

産んだ子供は双子の男子だったが、理解ある夫のおかげで要らぬ心労を免れたまぬが。

夫への愛情は深いが、独占するより共感してくれる者、自分と一緒に愛でってくれる仲間を欲している。

初代・花柱は犠牲になったのだ。

原作では名前どころか姿すらあやふやなのだが、本作では名前までは決定している。ただし、後々に響いてくるのでまだ秘密。

初代・花柱

そもそも原作に出ない人。

戦国時代に活躍した女性は一定数いるから鬼殺隊に居ても大丈夫だろう、とか思いながら女性にした。

まあ、男が『花の呼吸』を使うと想像すると違和感しかないし、原作で『花の呼吸』の使い手が女性しか見受けられないから、そのせいでもある。

元々は水柱の継子つぐこをしていたが、色々あつて柱に就任した。

なお、『始まりの呼吸の剣士』には数えられない。

巖勝に思いを寄せていたが、彼が妻と子をもつ身であることを理由に胸にしまっていた。

しかし、巖勝の妻にあつさりと見抜かれた挙げ句、言葉巧みな誘いに乗ってしまい、昏睡状態の巖勝に跨またがってニヤンニヤンしてしまう。

2つの意味でハマった。(意味深)

巖勝の妻と同様に名前までは決まっている。

もちろん、後々に響いてくるのでまだ秘密。

珠世（戦国時代）

戦国時代では無惨の側近（？）らしき立ち位置にいた。

無惨の呪いは原作同様に解除される結果となる。

ただ、そのあとに縁壺から巖勝の容態を見て欲しいとお願いされて屋敷に上がった所を奥方様に狙われた。

巖勝の日輪刀（意味深）を立ち上がれるようにしたあと、ご褒美に……と勧められたらしいが、どうなったかは不明。

その一件以来、巖勝が近くにいと落ち着かなくなつた。

鬼舞辻無惨（戦国時代） きぶつじむざん

鬼の始祖にして倒すべき悪の親玉。

原作と同様に、この時期にトラウマを抱えることになった。

だが、そのトラウマを抱えるまでの流れは原作よりも情けないことになっている。

原作では遭遇戦だったので仕方ない面はあるが、本作では自ら進んで襲いかかり、あつけなく返り討ちにあつた。

やはり、無惨は無惨である。

原作時間軸の話

広がる波紋は小波に変わる（竈門家編）

『縁壺……お前の使う呼吸法に……後継者は出来たのか……』

『後継者、と言える者は相変わらず居りません。なかなか……難しいようなので』

『まあ……そうであろうな……○の呼吸は……強力なものだが……その分……使い手を
選び過ぎる……鬼殺隊のなかでも……使える者は居らぬだろう……』

『はい。以前より兄上が危惧していた事態が……使い手どころか伝えることすら危うい
状態になりつつあります』

『やはりか……なにかしら……対策は打ったのか……』

『一応は。鬼殺隊のなかだけでなく、人知れず後世に遺せるように、少し工夫をしてみま
した。幸いにも、それを伝えてくれると約束してくれた人物にも恵まれましたから』

『ほう……私が眠っている間に……良い出会いに……恵まれたのか……』

『ええ。彼らに会えた。ただ、それだけでも私は果報者だと思えます』

『そうか……それは……いつの日にか会ってみたいものだな……』

『お会いになりますか？』

『いや……下手に動けば……その者たちのことが……無惨むざんに気づかれる可能性も……ある……奴は……お前や私を怖れながらも……目の敵にしている……せつかく出来た協力者を……危険には晒せん……』

『それもそうですね』

『いつの日にか……偶然に出会うことがあるやも……しれんがな……』



「おおい、炭治郎。家うちにも炭を売ってくれ」

「炭治郎ちゃん、家にも炭を売っておくれよ」

宿屋の二階から雪化粧された町中を眺ながめていると、そんな声が聞こえてきた。

どうやら、炭焼き屋が商品を売りに山を下りてきたらしい。

チラチラと雪が降るほどに寒いこの時期だ。

暖をとるための炭は必需品である。

そのうえ、(旧)正月が近づいてきている時期も重なって、炭を売る側としても稼いでおきたいのだろう。

(この雪のなか、苦く勞らうなことだ)

そんなことを思いながら、累るいは道を行き交う町民たちの声を聞きいていた。

「女将さん、炭はどうだい？」

売り子の声が累の耳に届く。

若々しい声からして、売り子は子供らしい。

子供が荷物を持って雪山を下ってきたのか、と驚いて視線を向けてみると、そこには籠かごを背負った少年の姿があった。

身長は累よりも少し大きいようだが、まだ成長期前だろう。

ならば、年頃としては十二か十三歳くらいだろうか？

会話を聞いていても、口調は確しっかりとしていて大人びて見える。

こんな雪のなかでも働くのだから、間違いなく働き者だと言えるだろう。

両親は助かっているだろうな、と考えて、ふと自分の両親を思い出し、そして頭かぶりを振った。

（あれから何年経ったと思ってる……）

そう考えて、未だに親離れ出来ないでいる自分を鼻で笑う。

彼の境遇を知る者からすれば、そうなくても仕方がないと言うかもしれない。

だが、累は強くありたいのだ。

心と身体の両方で。

もう、二度と大切なものを失うことがないように。

物思いにふける累の頭を、誰かが優しく撫なでた。

包帯だらけの大きな手で、累を氣遣うように優しく撫でる。

累はその手の主に目をやった。

「子供扱いしないでよ、義父さん」

累はむくれた様子で悪態を吐いた。

しかし、義父と呼ばれた手の主は累の頭を撫でるのをやめようとはしない。

それどころか、累の様子を見て微笑ましげな表情すら浮かべている。

「無理に……強がる必要はない……」

「強がつてなんかない」

労るいたわるように声をかけてくる義父に、累はつんとそっぽを向いて返した。

隣にいるのは六つ目の鬼、黒死こくしぼう牟だ。

彼のことを義父と呼び始めたのは、鬼になった累が餓死することを選び、死に損ぞこなつ

てから暫しばくしてのことだ。

当時の累は両親が恋しくて堪たまず、思い出せば泣いてばかりいた。

そんな累を見かねてか、不器用ながらも優しく慰めてくれたのが黒死牟である。

基本的に、黒死牟は寡黙な男だ。

気のきいた言葉など思いつかず、ただ累のそばにいて、頭を撫でたり抱き締めたりし

ていただけだった。

しかし、下手な言葉をかけられるよりはマシである。

少なくとも、当時の累にはどんな言葉をかけても無駄だっただろう。

そばにいて、ただひたすら聞き役に徹し、時には痲癩かんしゃくを受け止める。

それを繰り返した結果が義父という呼び名で、累が新しく手に入れた大切な絆きずなの形だった。

「何年……一緒にいると思ってる……顔を見れば……何を考えていたのか……そのくらいはわかる……」

「だから、大丈夫だって。さすがに僕だって親離れしてるよ」

「そうか……」

「そうだよ」

あくまでも認めようとしないう累の言葉に、黒死牟はふむ、と考え込む仕草しくさをする。

そして、言葉の爆弾を投げ込んできた。

「ならば以前……私の布団に潜り込んできたのは……なんだったのか……」

「ぐふっ!!」

累は噎むせた。

確かに昔、累は両親を恋しく思うあまりに、眠る黒死牟の布団ふとこや懐こころに潜り込んだことがあった。

だが、自ら進んで潜り込んだのは、もう何年も前の話である。

しかし、ここ最近、別の要因があって布団に潜り込む頻度が上がっていた。

「あ、あれは僕のせいじゃない！ あれは義母さんが久しぶりに川の字で寝たいからつて言つて誘つてきたんだ!!」

「そうだったか……？」

「そうだよ」

累は無然とする。

だが、義父はさらなる爆弾を投げ込んできた。

「そう言う割りには……嬉々ききとして……布団に潜り込んできたように見えたが……」

「ぶふう!？」

反射的に『起きてたのか』と言いそうになったが、その寸前で堪こらえることには成功する。

しかし、累が言いたいことがわかったのか、義父は事も無げに言った。

「一流の剣士が……熟睡することは稀まれだ……」

つまり、義母に誘われた累が布団に潜り込む様子は、しっかりと見られていたわけである。

恥ずかしくなった累は頭を抱えた。

鬼は生理的現象が起きない生き物だが、血流の変化はある。

そのため、累の耳は真つ赤に染まっていた。

「ぐあああ……見られた、見られてた……！ 滅茶苦茶恥ずかしい……！！」

「案ずるな……お前くらいの子供なら……添い寝を強請^{ねだ}つても……不思議なことではない……」

義父はそう言つて宥^{なだ}めたが、累は納得しなかった。

何故なら、鬼の外見は基本的に変わらないからである。

意図して一時的に変えることはできるが、基本となる『本来あるべき自分の姿』は変わらないのだ。

つまり、今の累は『見た目は子供、頭脳は大人』なのである。

その状態だとなのような苦勞が付いて回るかは、某子供探偵を視聴すると理解しやす
いだろう。

「ああ、もう！ 恥ずかしいと思ったらありやしない！！ それもこれも全部、あの炭売りの子
供が悪い！！」

恥ずかしさのあまり、累は非のない無関係の子供にまで八つ当たりを始めた。

その様子を義父が呆れたような目差しで見ている。

「おとなげ……」

「子供ですう！ 義父さんが子供扱いするから子供ですう!!」

「先程の……子供扱いするなどの言は……なんだったのか……」

累が本格的にへそを曲げ始めると、義父は苦笑しながら再び頭を撫で回した。



冬の時期であることも関係あるが、基本的に山間部の日暮れは平野部のそれと比べて

早い。

諺にも使われる 釣瓶落とし のように、あつという間に日が暮れる。

さらに、今日は雪雲が広がる曇天だ。

いつもより早く、辺りは暗くなってしまった。

「そろそろ……見回りに行くか……」

そう言つて黒死牟は腰をあげると、他人に見られても大丈夫なようにと顔に巻きつけ

ていた包帯を巻き直した。

壁に立て掛けてあつた耀哉かがやから贈られた日輪刀にちりんとうを腰帯に挿し、長年愛用してきた編笠

を手取る。

部屋から出ると、ちょうど宿屋の女将が通りかかった。

黒死牟が女将に見回りに出ることを告げると、僅かながら事情を知る女将——この宿

は『藤の花の家紋』を持たないが、昔から口伝くでんで鬼と鬼狩りの話は知っているようだ——

——は鷹揚おうようにうなずいて宿の玄関へと先導する。

「無事にお戻りになることを願っております」

そう言つて、宿屋の女将は切り火を切つた。

黒死牟と累は、それぞれ女将に礼を言うと敷居まを跨いで外へ出る。

宿の外に出た黒死牟は、厚い雪雲に覆われた空を見上げた。

雪は降つていないようだが、それは今だけかもしれない。

そんなことを思いながら、黒死牟は人気ひとけの減つた道を歩いていく。

「今日は僕と義父さん、どつちが町を回るの？」

黒死牟の隣りを歩いてきた累が問いかけてきた。

ここ数年、二人が見回りをするときには町中と町の回りをふたて二手に別れて行つていく。

累も日輪刀——以前、黒死牟が使つていた折れた日輪刀——を持つているため、単独

で鬼を倒すことが出来るからだ。

そのうえ、累は拘束力に長けた血鬼術けつきじゆつに目覚めており、町中で戦いが始まっても被害

を抑えることが容易だった。

「いつも通り……私が山中を……累は……町中を頼む……」

「わかつた。……じゃあ、気をつけてね」

「うむ……」

いつものように軽く別れの言葉を交わし、黒死牟と累は二手に別れる。

黒死牟は離れていく累の背中を見送り、姿が見えなくなつたところで山へと足を向けた。



山に近づくにつれて民家の数が減っていけば、当然、人工的な光も少なくなる。

代わりに、風の音や木の葉が擦れる音が大きく聞こえるようになり、景色も人によつては心細さを感じるようなものになつていく。

そろそろ町と山の境目と思われる場所に着いた時、黒死牟の耳に人の声が聞こえてきた。

「こら、炭治郎！ お前、山に帰るつもりか!？」

声が聞こえてくる方向に目を向けると、山道沿いに建てられた一軒家から、一人の老人が顔を覗かせている。

老人の視線が向かう先には、籠を背負つた少年の姿があつた。

「危ねえからやめろ」

「俺は鼻が利くから平気だよ」

引き止める声に対して少年は大丈夫だと返すが、老人は譲らなかつた。

「うちに泊めてやる。来い」

「でも……」

「いいから来い!!」

渋る少年に対し、老人は行かせまいと強固に引き止める。

引き止められた少年は、老人がそこまでして引き止める理由がわからないようだ。

「鬼が出るぞ」

ほう、と話を聞いていた黒死牟は感心する。

宿屋の女将もそうだったが、やはり、伝え聞くなどして鬼のことを知る、もしくは信

じている者は少なからず居るらしい。

鬼舞辻無惨きぶつしむざんが拠点としていた京都や、鬼の被害が相次いだ地域ならば口伝でもしっか

りと話が残っている。

地域によっては、鬼が苦手とする「藤の花の香」を每晚しっかりと焚たく所もあるほど

だ。

しかし、この奥多摩は京都からは遠く、都会と言えるような大きな町からも離れてい

るために鬼の被害が少なかった。

そのため、鬼の存在など眉唾まゆつばどころか、その話を聞いたこともない世代すらある。

あの老人は、誰かから伝え聞くなどして鬼のことを知っているのだろうか。

引き止められた少年が、老人の家へと降りていく。

その姿を横目に見ながら、黒死牟は再び山へと足を向けた。

その時、一陣の風が吹き抜ける。

「縁^{よりい}壺……う？」

なぜ、そう思ったのかは自分でもわからない。

ただ、風が吹いた。

それだけである。

それだけのはずだ。

だが、黒死牟は今の風に、死んだ弟の存在を感じていた。

気のせいかな？

そう思つて、辺りを見回す。

そして、再び老人宅へと視線を向けた。

「なん……だと……」

老人の家に入る少年の姿が、室内の照明によつて僅かながら照らされる。

その横顔に見覚えはない。

しかし、少年が耳につけていた飾りには見覚えがあつた。

（あれは縁壺が身につけていた耳飾り。……まさか、ここなのか……？）

昔、弟と交わした会話を思いだしながら、黒死牟は目を見張つた。

こんな山奥の片田舎に、弟が遺したものがあ

そう思うと、不思議と胸が高鳴った。

このまま老人の家に押し掛けたい衝動に駆られるが、頭の冷静な部分がそれに待ったをかける。

そもそも、相手は年端もいかない少年だ。

弟が遺したものについて知らない可能性が高い。

それよりも、少年の両親や祖父母に話を聞いたほうがいいだろう。

（少年が帰ろうとしていた方向は……あちらか……）

黒死牟は、先程まで少年が登ろうとしていた山道に視線を向ける。

その道を行けば、少年の自宅にたどり着くことができるはずだ。

自宅に行けば、少年の家族がいるはずである。

そこでなら、弟が遺したものの話が聞けるだろう。

もしかしたら、弟が遺したものを~~使える~~者に会えるかもしれない。

知らず、黒死牟は笑みを浮かべていた。



通常、夜間に山道を歩くのは危険である。

月や星の明かりがないとなれば尚更だ。

石や木の根に足を引っ搔けて転倒する危険はもちろん、場所が悪ければ崖下へ転落することさえあり得る。

しかし、鬼は違う。

活動する時間帯が夜間なだけあって夜目が効き、昼間と同じくらいに周囲の景色が見えるため、多少の雨や雪でも気にならない。

そのため、黒死牟は黙々と山道を登っていた。

(それにしても……遠いな……)

黒死牟は半ば呆れていた。

鬼がいないか見回るといふ建前のもと、少年の自宅を探して山を登り始めたのはいいが、民家どころか民家から漏れる光すら見当たらない。

黒死牟が鬼だからさくさくと足を進めているが、普通の人間だったらこうはいかないだろう。

鬼が出る出ないに関わらず、少年を引き止めた老人の判断は正しかったのだ。むしろ、この気温と足場の悪い状況で家に帰ろうとした少年の気が知れない。遭難したり、怪我をして動けなくなったらどうするつもりだったのか。

「む……明かりか……」

僅かに見える人工的な光。

それを目にした黒死牟は、逸る^{はや}気持ちを抑えきれずに足を速めた。
見えてきたのは木造^{かおく}家屋。

おそらく、あれが少年の自宅だろう。

黒死牟は建物内に人の気配を感じ取り——駆け出した。

「……!!」

間違いない。

間違えるはずがない。

この三百年余りの間、ずっと探し続けていたのだ。

かつては、力が及ば^{ちから}ず騙し討^{およ}ちに賭けるしかなかった怨敵^{おんてき}。

平安の頃より生きる、鬼の首魁^{しゅかい}。

木製の雨戸を走る勢いそのままに突き破る。

そして見えたのは、子供の首を掴^{つか}んで宙吊りにする男の姿。

「見つけたぞ！ 鬼舞辻無惨!!」

「——っ!? また貴様か!!」

黒死牟の派手^{ダイナミック}で大胆な登場に無惨は目を見開いた。

だが、その後の判断は速い。

「鳴女^{なみめ}っ！」

無慘が誰かの名を呼ぶと、何処からか琵琶の弦を弾く音がした。

その直後、無慘の背後に襖ふすまが現れ、左右に開く。

開いた襖の向こう側は、この家とは似ても似つかぬ別空間だった。

そこに向かって無慘が飛ぶ。

無論、背を向けるような真似はせず、怒りと恨みの混ざりあつた視線を黒死牟に向け
たままだ。

しかも、その手は未だに子供の首を掴んでいる。

黒死牟に対する盾の代わりか？

それとも、このまま連れ去るつもりだろうか？

何にしても、『子供を助けない』という選択肢は黒死牟の中にはなかった。

——月の……

技を放とうとして、黒死牟は気づいた。

無慘の周りに母親と思われる女性と、数人の子供がいる。

首を掴まれて宙吊りにされている子供を助けようとしていたのだろう。

このまま技を放てば、首を掴まれている子供は助けられるが、周りにいる者たちを巻き込むことになる。

それでは本末転倒だ。

黒死牟は技を放つことを諦め、雨戸を突き破った勢いを殺さずに一步踏み込んで加速する。

そうして無惨との距離を詰めると、黒死牟は赤く染まった刀を一閃した。

その直後、子供を掴んでいた無惨の腕が、肘の辺りからずり落ちる。

「おのれ、赫刀か!!」

無惨が忌々しげに舌打ちするが、黒死牟の知ったことではない。

無惨から開放された子供は襖の仕切り辺りに落ちたが、すぐさま家族の手によって襖の外——自宅内へと引き戻された。

それを見た黒死牟は、さらに一步踏み込み、襖の仕切りを越えようとして——、

「その子供にはすでに私の血を与えてある!」

足を止めざるをえなかった。

無惨を追うことは出来る。

だが、その場合はここににいる者たちが、鬼になった子供の手によって皆殺しにされることだろう。

累を連れてこなかったことが悔やまれるが、その場合は黒死牟がこの場に来ることが遅れていたはずだ。

そうなれば、無惨か鬼になった子供の手によって皆殺しにされていた可能性が高い。

一応、無惨が逃げるための口実として嘘をついている可能性もあったが、それは『透明な世界』で子供の姿を見た瞬間に消し飛んだ。

黒死牟は、逃げる無惨に視線を向ける。

「次は……逃がさんぞ……」

顔に青筋が立っているのが自分でも良くわかった。

それほどの激情が、黒死牟の胸の内を暴れまわっている。

血鬼術で作られた襖が閉じきる寸前――、

「この、異常者め……」

無惨の捨て台詞とともに、襖は完全に閉じて虚空に消えた。



未だ日の登らぬ明け方の町に、からす鴉の鳴き声が響き渡る。

それを耳にした累は、何事かと空を見上げた。

鳴き声の主はかすがいがらす鏖鴉。

鬼殺隊が誇る最速の伝令である。

「何事？」

累は、自分の腕に降り立った鏖鴉に問いかけた。

「緊急連絡です。雲取山にくもとりやま住む炭焼き小屋の住人が、鬼舞辻無惨によって鬼にされまし

た。黒死牟殿が、累殿に急ぎ来てほしいと」

「雲取山？ ちよつと離れすぎてない？ それに、炭焼き小屋って……」

累は疑問に思ったが、ふと前日の昼間にあった出来事を思い出す。

「もしかして、昼間に見かけた炭を売ってた子供の……？」

あの働きの者の子供か、その家族が鬼にされた。

そう当たりをつけた累は、苦い顔になる。

また、だれかの人生が無惨によって狂わされたのだ。

なにも感じないはずがない。

累は鎧鴉に道案内を頼むと、それを追って駆け出した。

常人ではあり得ない速度で町中を駆け抜け、あつという間に町の外れに到達する。

その時だった。

山道沿いに建てられた一軒家から、炭を売りに来ていた少年が出てきたのだ。

少年がいることに驚いて足を止めると、それに気づいた鎧鴉も累の肩へと降りてきた。

「君……もしかして、この先の炭焼き小屋に住んでる子？」

「え？ そうだけど……」

突然の問いかけに目を白黒させながら、少年は頷いた。

ああ、やつぱり。

累は、己の予想が正しかったことを嘆いた。

少年の家族に不幸があつたことをどう伝えるか。

それを悩んでいると、少年の後ろに続いて一人の老人が家から出てきた。

老人は累の身形みなりを見て、腰帯に挿した刀を見つけて目を見開く。

「まさか、あんたは鬼狩り様か？ ……もしか、炭治郎の家族に何かあつたのか!?」

「え!?!」

老人の言葉に少年——炭治郎が驚いた。

炭治郎の顔からは血の気が引き、青ざめている。

「まあ、そういうことなんだけど……死者はいるのかい?」

「死者はいません。一人、鬼にされてしまいましたか……」

「鴉が喋った!?!」

炭治郎と老人は人語を話す鴉に驚くが、その語られた内容に愕然がくとした。

「今、家族の誰かが鬼にされたって……」

「炭治郎!」

老人が、呆然とする炭治郎の両肩を掴んで揺さぶる。

「しつかりしろ! ……ここで呆けてる場合か!!」

「三郎爺さん……」

「そうだね。彼は僕が自宅まで連れてくよ。……家族の最後に立ち会うことになるかも知れないけど……」

累の言葉に、炭治郎は息を飲んだ。



無惨が去り、鏖鴉に累への伝令を頼んだあと、黒死牟は耀哉から与えられた日輪刀を眺^{なが}めていた。

その刀身は新品同様に何も付着していない。

だが、黒死牟は刀身のどの辺りが無惨の腕を切り落としたかをはつきりと覚えてい^いる。

（お館様から戴いた刀でなければ、無惨の腕に刀身が届いていなかった）

かつて、耀哉が黒死牟に新しい刀を渡すときに言った『折れた刀と新しい刀。その僅かな差で誰かを救うことが出来るかもしれない』という言葉。

その話をされてから、すでに数年の時が流れている。

しかし、今日という日まで、それらしき出来事は起きなかったのだ。

もしかしたら、今回の件で助けた子供が、耀哉の話にあった『助けられる誰か』なのかも知れない。

（お館様の直感が助けるべきと判断した子供。ならば、鬼殺隊にとつても重要な存在となるやもしれん）

ふと、黒死牟は助けた炭焼き小屋の一家に目を向けた。

鬼にされた子供は、家にあつた縄で軽く拘束してある。

だが、意識の戻らない今は布団に寝かせられていた。

その周りを囲むように、鬼にされた子供の家族が座っている。

黒死牟は『透明な世界』で鬼にされた子供を見て、身体の変化がどの程度進んだのかを確認した。

結果を言えば、まだまだ変化の途中であり、意識が戻るのもまだ先だろう。

「あの……禰豆子は……娘はどうなるのでしょうか？」

恐る恐る、母親が話しかけてきた。

先程まで無惨の脅威に曝さらされていたためか、未だに血の気は戻らず、体も僅かに震えている。

それでも気丈に振る舞っているのは、これ以上、子供を不安にさせないためだろう。

母親の名は竈門葵枝かまどきえと言った。

鬼にされた子供は竈門家の長女で、名を禰豆子というらしい。

無事だった子供は四人いて、上から順に、

次男の竹雄。

次女の花子。

三男の茂。

四男の六太。

竈門家の父親はすでに他界しているそうで、あとは前の日に町へと炭を売りに行つて、まだ帰つてきていない長男がいるそうだ。

葵枝からの問いかけに、黒死牟はどう答えたものかと悩む。

やることは変わらないのだが、それをどう伝えれば衝撃を少なくできるかと悩んだのだ。

黒死牟が腕を組んで言葉を選んでいると、どこからか人の叫び声が聞こえてきた。

その声は段々と近づいてきていて、室内にいた子供たちもそれに気づいたのか、眠る禰豆子を守るようにして身を寄せあっている。

聞こえてくる叫び声の主はもう近くまで来ているようで、一応、黒死牟は警戒のために刀に手を伸ばした。

その直後、庭先に何かが舞い降りる。

それと同時に『ぐへっ!』と何かが潰れたような声が聞こえたが、気のせいだろう。

「義父さん、来たよ」

舞い降りたモノの正体は、鏝鴉に呼びに行かせた累だった。

ただ、その背には見知らぬ子供が背負われている。

どうやら、先程まで聞こえていた叫び声の主は、背負われていた子供のようだ。

累は急いでこちらに来るために、木の枝を足場にして次々と飛び移って来たらしい。

「炭治郎！」

背負われた子供の姿を見て声を上げたのは、黒死牟の隣りに座っていた葵枝だった。

累が背負っている子供こそが、町に行っていた長男らしい。

「——はっ!? 母ちゃん！」

半ば茫然自失としていた子供——炭治郎は、母親の声に反応して正気に戻った。

そして直ぐ様、累の背を降りて礼を言うと、慌てた様子で母親に抱きつく。

「兄ちゃん！」

「炭治郎お兄ちゃん！」

母親の声を聞いて長男の帰宅に気づいたのか、次々と弟妹ていまいたちが家から出てきた。

炭治郎は弟妹たちの名を呼び、無事を確かめるように抱き締め返す。

そして気づいた。

一人、足りない。

「彌豆子は? 彌豆子は、どうした?」

炭治郎に問われ、次女の瞳から涙が溢れた。

それを見て、炭治郎は察したようだ。

いや、気づきたくなかった、と言ってもいい。

「鬼になったのは……禰豆子、なのか……」

炭治郎のつぶやく声に、弟妹たちは泣き出した。



累は鬼にされた子供——禰豆子を、自身の血鬼術で生み出した糸で拘束しながら、竈門一家の様子を盗み見る。

皆一様に涙を浮かべ、黒死牟からこれから行うことの説明を聞いていた。

「鬼は……人を食うことで……飢えを満たす……そして……食べた人間の数だけ……より強くなる……」

「禰豆子も……人を襲うようになるのですか？」

「そうだ……」

黒死牟に肯定され、家族全員の顔から血の気が引いた。

次いで、母・葵枝の視線が禰豆子へと注がれる。

そこにあつたのは、化け物になってしまった娘の未来に対する不安と心配だけだった。

(ああ。やっぱり、この家族は『良い家族』だ。ちゃんと家族の絆きずなで繋がっている) 竈門一家の様子を見て、累は安心する。

鬼殺隊の真似事を続けていけば、鬼になった家族を庇う者たちに出会うことは少なくない。

だが、なかには鬼になってしまった家族を早々に見限り『さつさと斬ってくれ』と頼む者もまた、一定数はいたのだ。

そのことに対して累は怒りを覚えたが、黒死牟から『本心ではないこともある』と宥なだめられることもあった。

「本来なら……この娘が目覚める前に……頸くびを落としてやるのが……最善ではある……鬼となり……豹変した娘の姿を見るのは……辛かろう……」

黒死牟がそう言うのと、それを拒絶するかのように炭治郎と竹雄、茂が禰豆子を庇うため、跳ねるようにして移動する。

そんな家族の姿が、累の胸を熱くした。

「心配せずとも……その娘の頸は……斬らん……」

「どういう、ことでしょうか……?」

葵枝は訝いしげに尋ねる。

「その娘は……鬼にされたばかり……当然……人を食ったことはない……ならば……ひ

とつだけ……試せることがある……」

「試せること？」

「餓死……そして……餓死を越えた……その先だ……」

黒死牟の言葉に、葵枝は首をかしげた。

餓死はわかる。

飢えて死ぬことだ。

だが、その先とは何なのか？

それがわからない。

「最初に……言っておくが……可能性の低い話だ……餓死するまで追い込まれた鬼は

……稀に……それを乗り越えることがある……」

「つまり、人を食べなくても生きていけるようになる、と？」

「そうだ……代わりに……睡眠を必要とするが……それは……たいした問題ではない

……」

黒死牟の説明に補足すると、この餓死を乗り越えることが出来るのは、人間を食べたことのない鬼だけだ。

家族に庇われた鬼に試したことは幾度となくあるが、大抵は人を食ったことがあり、それらの者は餓死を乗り越えることは出来なかつた。

「問題は、禰豆子が餓死を越えることが出来るかどうか、なのですわね？」
「その通りだ……」

葵枝は、禰豆子へと視線を向ける。

このまま綺麗な姿で死なせてやるのか。

はたまた、苦しんで餓死する可能性もあるが、それを乗り越えるのを願って待つべきか。

それを悩んでいるのだろう。

ややあつて、葵枝は黒死牟に向き直る。

その瞳にはひとつの覚悟が、『最後まで見届ける覚悟』が宿っていた。

「禰豆子は、必ずや乗り越えます。決して、人食い鬼にはなりません」

葵枝の力強い言葉に、黒死牟は眩しいものを見るように目を細める。

その直後、獣が吠えた。

いや、正しくは獣ではない。

「禰豆子!?!」

「禰豆子姉ちゃん!?!」

吠えたのは、先程まで意識が戻らなかつた禰豆子だ。

それはつまり、人間から鬼への変化が終わったということの意味していた。

禰豆子は体を激しく揺らして暴れるが、累の血鬼術で首から足の先までをみのむし蓑虫のよう
に拘束されているため、布団の上からは動けないでいる。

「禰豆子！ しつかりしろ！ 人食い鬼なんかになるんじゃない!!」

最も近くにいた炭治郎が、禰豆子の肩を押さえながら呼びかけた。

それを皮切りにして、禰豆子の弟妹たちが次々と呼びかける。

だが、禰豆子は変わらず身をよ振るようにして暴れ回っていた。

それでも、家族は禰豆子に呼びかけ続ける。

「禰豆子！」

「姉ちゃん！」

「お姉ちゃん！」

「禰豆子姉ちゃん！」

「ねーちゃ！ ねーちゃ！」

どれだけの時間を呼びかけ続けただろうか。

駄目なのか。

やはり、無理なのか。

そんな思いが炭治郎と弟妹たちによ過る。

それは累にも伝搬し、知らず知らずのうちに拳を握りしめていた。

諦めにも似た、暗い雰囲気ただよが室内に漂う。

その時、母親葵枝が動いた。

「禰豆子……しつかりしなさい!!」

凄まじい勢いで、禰豆子の額に葵枝の頭突きが炸裂する。

「——へ？」

突然のことに、累は目が点になった。

さすがに黒死牟も驚いたらしく、石のように硬直している。

「うわあ、禰豆子お姉ちゃん痛そう……」

「母ちゃんのお仕置き頭突き。滅茶苦茶、痛いんだよなあ……」

「確か昔、あれで猪を撃退したことがあるって言ってたよな」

花子に茂、竹雄がそれぞれ自分の額を押しえながら解説した。

なお、葵枝が頭突きで猪を撃退した話は公式設定である。

母親からの愛ある頭突きを受けた禰豆子は、しばらく硬直していた。

その額から血が垂れてきているのを見ると、凄まじい威力だったことが窺うかがえる。

やがて、禰豆子の両目から涙が溢れ出した。

その瞳には、僅かながら理性の光が見える。

それを見た累は息を飲んだ。

「絆だあ……………本物の……………本物の絆だあ……………!!」

感極まって、累の瞳からも大粒の涙が流れる。

母親の愛が鬼と化した娘に届き、失っていた理性を取り戻した。

なんて、なんて尊とうとい絆だろう。

「頭突きで猪を……………なるほど……………葵枝殿もまた……………女傑じよけであつたか……………」

腕を組ながら、黒死牟は何やら違うことに納得していた。



僅かながら理性を取り戻した禰豆子は、その後、眠りについた。

その眠りは一時的なもので、さらに言えば、まだ飢餓状態を乗り越えたわけではない。

むしろ、これからが大変なのだと言明する。

「このまま人を食わず……………自我を完全に取り戻すか……………血鬼術を……………扱えるようになれ

ば……………その頃には……………無惨の掛けた血の呪いも……………外れていることだろう……………」

「わかりました。……………娘を助けて頂き、ありがとうございます……………!!」

葵枝は三つ指をついて、深々と頭を下げた。

それに続いて、子供たちも思い思いにお礼の言葉を連ねる。

黒死牟はそれを手で制すると、話を続けた。

「今回の一件は……………無惨にとつて……………都合の悪い話が……………多すぎる……………間違いない……………」

証拠の隠滅に……走るはずだ……」

「証拠の隠滅？」

「竈門一家は……無惨の顔を見ている……人相書きでも作られれば……その顔は二度と使えまい……」

殺人事件の犯人が、目撃者を消して回るようなものである。

黒死牟の説明に、葵枝たちは納得した。

まあ、相手が無惨なので、擬態を含めて使える顔が減るのが腹立たしいという理由が追加されるかもしれないが。

「何にせよ……この地にはもう……留まることは出来ない……どこか遠くに……身を寄せることが出来る……そんな場所に……心当たりはないか……」

「そう言われましても……」

葵枝は困った。

竈門家は代々この場所で炭焼きをしてきた一族だ。

近くの町ならともかく、それ以上の遠方に身内や知り合いはいない。

葵枝の実家にしても似たようなものだった。

葵枝が答えに窮きゆうしていると、何かに気づいたのか、黒死牟が庭先へと顔を向ける。

累や葵枝らも釣つられて庭先へと視線を向けると、ややあつて、一人の男が姿を現した。

「鬼殺隊か……」

黒死牟が確信しながらも問う。

男は顔をしかめると、黒死牟に問い返した。

「そう言う貴様たちは……鬼か」

「いかにも……」

黒死牟の返答に鬼殺隊の男だけでなく、葵枝や炭治郎たちも驚く。

それと同時に、竈門一家は『道理で色々と詳しいはずだ』と納得した。

「ふむ……最早……もはや隠す意味はないか……」

黒死牟はそう言うのと、被っていた編笠を外し、顔に巻き付けていた包帯を解く。

あつわ露になった黒死牟の素顔を見て、皆それぞれ驚いた。

「目が六つもある！」

「すげえ！」

「格好いい……！」

竹雄と茂、花子はわりと好意的な声をあげる。

花子に関しては、六つ目のことより顔の造形に対しての感想らしい。

葵枝は口に手をやり、目を丸くしていた。

驚いてはいるが、恐怖は感じていないらしい。

末っ子の六太は泣いていた。

おそらく、見た目が怖かったのだろう。

獅子舞いの獅子や鬼おにに扮した大人に怖がるようなものだと思えば、年相応の反応と言える。

そして、炭治郎はと言うと――、

（目が六つもあるなんて、どんなふうに見えてるんだろう？ 目が回ったりしないのかな？ 点眼（目薬）とか大変そうだし。眼鏡が必要になると特注品になるよな……）

ちよつとズレたことを考えていた。

なお、黒死牟は炭治郎からの憐憫れんぴんにも似た視線に困惑している。

「六つ目の鬼……まさか」

鬼殺隊の男が目を見開き、何かを口にしようとした。

しかし、それより先に、男と黒死牟の間に鎧鴉が割って入る。

間に割って入ったのは、黒死牟と累に専属でついている鎧鴉だった。

「水柱、富岡義勇殿ですね？」

「そうだ」

鬼殺隊の男——義勇と鎧鴉の会話に、黒死牟はほう、と感嘆の声を漏らす。

義勇の外見から推測するに、年頃は二十歳はたち前くらいか。

その若さで、鬼殺隊で最上級の剣士にだけ与えられる称号である『柱』を名乗ることが許されている。

それはとんでもないことなのだ。

「こちらにいるのは黒死牟殿。上層部でも一握りしか存在を知らない月柱です」「知っている。世話になったことがあるからな」

黒死牟は首をかしげた。

次いで、累に視線を向ける。

累も首をかしげ、黒死牟に対して首を横に振った。

累にも覚えがないらしい。

もしかしたら、知らずに手助けをしていたかもしれないが、少なくとも二人の記憶にはなかった。

「それなら話が早いですね。現状、黒死牟殿の存在は秘匿されております。鬼殺隊の隊員たちは、大半が鬼の被害者。不用意に刺激するものではありません。ですので、水柱様も他言無用に願います」

「わかった」

義勇はあつさり領くと、踵を返して歩き出す。

そこに待ったをかけた者がいた。

黒死牟である。

「竈門家の者たちは……無惨の顔を見ている……どこか……かくま匿える場所はあるか……」
無惨の顔を見ている。

そのことに義勇は目を見開くと、目を閉じて思考の海に沈んだ。

ややあつて、義勇はひとつの候補を挙げる。

「蝶屋敷ちちやうならば」

「そう……か……わかった……」

候補地の名を聞き、黒死牟は齒切れ悪くも頷いた。

黒死牟の後ろで累こらが笑いを堪えているが、その理由は義勇にも竈門一家にもわからない。
い。

鎗鴉しだいに事の次第を伝えたあと、黒死牟は葵枝に向き直った。

あらかた粗方の話は終わったが、一部は竈門一家の了承を得ずに決めたものもある。

それらを含めて、これからどうなるのかを話す必要があった。

「そなたらは……蝶屋敷に向かえ……近くの町に……『かくし隠』の者たちが……迎えに来る……」

「はい。何から何まで……ありがとうございます」

葵枝は今日、何度目かわからない三つ指で頭を下げる。

実際、葵枝だけでは今後の予定も立てられず、路頭に迷っていただろう。

「構わぬ……鬼にされた……彌豆子だが……そなたらと共には……行けぬ……無惨の……血の呪いで……居場所が割れるからだ……」

そう言われ、葵枝は彌豆子に視線を向けた。

未だ眠ったままの娘の頭を、そつと撫でる。

離れたくはない。

しかし、葵枝たちは無惨に狙われている。

一緒に行くわけにはいかなかった。

「だったら！ 俺が彌豆子と一緒にいきます！」

そう言つて立ち上がったのは炭治郎だ。

「俺は無惨？ とかいう奴と遭つてはいいないし、何より！ 家族を一人にはしておけな

い！！」

炭治郎の宣言を聞いて、黒死牟は然もあらんと納得する。

三百年以上前の話だが、黒死牟とて長男であつたのだ。

炭治郎の言に、何かしら感じるものがあるのは当然だつた。

「炭治郎……」

「大丈夫だよ、母ちゃん。彌豆子を一人にはしない」

炭治郎の言葉に葵枝は涙ぐむ。

「彌豆子を、お願いね」

「うん」

炭治郎は力強く頷くと、黒死牟へと頭を下げる。

しかし、黒死牟は難色を示した。

鬼となった彌豆子はともかく、炭治郎というお荷物を守りながら、無惨や強力な鬼と戦えるとは考えていないからである。

「ついてくるのは……いいでしょう……だが……自衛の手段は……必要だ……それに……」

黒死牟は少し言い淀むと、未だこの場に留まっていた義勇へと問いかけた。

「この少年に……呼吸法を学ばせたい……この近くに……育手は居るか……」

「狭霧山の麓に、鱗滝左近次という老人が住んでいる。富岡義勇に言われてきたと、そう言えばいい」

義勇はそう言うと、今度こそ用件は終わったとばかりに踵を返す。

去り行く義勇に、炭治郎は慌てて頭を下げた。

「僕たちも狭霧山に行くの？」

一応の確認として、累は黒死牟に尋ねる。

「私は……竈門一家が……この地を離れるまで……護衛を続ける……累は……炭治郎と共に……狭霧山へ向かえ……」

「彌豆子は？」

「一緒に……連れていくといい……万が一にも……蝶屋敷への道を……知られるわけにはいかん……」

黒死牟の言葉に、累は同意するように頷いた。

◆◇

斯^かくして、竈門家を襲った出来事は一応の決着を見た。

この事件をきっかけに、豆腐の起こした波紋は小波へと成長する。

そして、やがては鬼舞辻無惨の身に、津波となつて襲いかかるのだった。

◆◇

大正こそこそ噂話

黒死牟さんは無惨を見つけたことで、自分が竈門家に何をしに来たか忘れています。

思い出したのは竈門一家と別れたあとで、狭霧山に行つた炭治郎に聞けばいいかと聞き直りました。

大正こそこそオマケ話

後藤

「んじやまあ、鬼舞辻無惨の人相書きを作りますんで、どんな顔だったかを思い出してください」

竈門家子供一同

「はあい！」

後藤

「なんか特徴とかありました？」

六太

「ワカメ」

後藤

「は？」

茂

「ああ！ 若布わかめだ若布！」

後藤

「ええ？」

竹雄

「確かに若布っぽかったなあ……」

後藤

「いやいやいや……」

花子

「あとね！ お目々が梅干しっぽかったの!!」

後藤

「（無言で天を仰ぐ）」

葵枝

「（笑いを堪えている）」

後藤

「葵枝さあん……（まともな意見を求める目）」

葵枝

「ふふふつ、若布と梅干しでしたね」

後藤

「アンタもかい!!（裏手ツツコミ）」

広がる波紋は小波に変わる（狭霧山編）

故郷である雲取山をあとにした炭治郎は、鬼狩りをする鬼、累とともに狭霧山を目指していた。

狭霧山まではかなり遠く、子供の足ということもあつて、なかなか先へは進めない。鬼になった禰豆子が太陽の下を歩けないことも、それに拍車をかけていた。

その対策として、日の出ている間は隙間なく編み込んだ特製の籠へと禰豆子に入つてもらい、それを炭治郎が背負つて移動するという形をとっている。

余談ではあるが、目覚めた禰豆子は自我が薄いのか、はたまた、精神が退行しているような状態であり、その行動からして正しく幼児のようだった。

さらに、籠に入つた際の姿は、母親である葵枝の母性本能を大いに刺激し、妹である花子からも『お姉ちゃん可愛い！』と言わせるほどのものである。

閑話休題

そうしているうちに辿り着いたのは、山の中にある古びたお堂だった。

山越えの際に、休憩所としても使われているのだろう。

破れた障子や板の継ぎ目から光が漏れていることから、どうやら先客がいるらしい。

この辺りで纏まとまった休息も必要だと感じた炭治郎たちは、このお堂に立ち寄ることを決めた。

そこで炭治郎は、累と禰豆子、黒死牟以外の鬼を初めて目の当たりにする。



「なんだ、おい。ここは俺の縄張りだぞ」

お堂のなかで、女性の死体を食い漁る男の鬼。

その奥にも、男性二人の亡骸なきがらがあつた。

腕に食いついていたからか、鬼の口元から首にかけて血が滴したたっている。

鬼は自分の手についた血を舐めとると、炭治郎たちに向き直つた。

「俺の餌場えさばを荒らしたら許さねえぞ」

鬼が炭治郎を睨にらみ付ける。

初めて見る人食い鬼の姿に、炭治郎は気圧けおされた。

もしも、炭治郎が一人でお堂に来ていたなら、彼の命はここで尽きていたかもしれない。

だが、この場には鬼退治なりわいを生業なりわいにする者がいた。

「つるやん」

そう言つて、累は鬼の顎あごを勢いよく蹴りあげる。

その威力は凄まじく、蹴られた勢いのまま、鬼はお堂の天井へと突き刺さった。
「……………えつと……………」

炭治郎は何かしらの言葉を紡ごうとするが、うまく出てこない。
そんな炭治郎の様子を後目に、累は散乱した亡骸に目を向けた。

「……………可哀想に……………」

累はほつりと眩くと、亡骸を綺麗に整え始める。

その背中から、炭治郎は濃い怒りの匂いを感じ取った。

炭治郎に背を向けたまま、累は手を止めずに話を始める。

「今、炭治郎が見た鬼が、人食い鬼の基本的な姿さ。義父さんも言っていただろう？
夜
な夜な人を襲って食らい、力をつけるって」

そう言われ、炭治郎は天井に突き刺さった鬼を見た。

鬼は天井から体を引き抜こうと、手足を振り回して藻掻いている。

あれが、人食い鬼。

もしかしたら、禰豆子がなったかもしれない姿。

いや、まだ禰豆子は飢えを克服したわけではない。

だから、なるかもしれない可能性のある姿だ。

血の気が引いた顔で、炭治郎は傍らにいる禰豆子を見た。

すると、禰豆子は竹で作った口枷くちかせの隙間から、滝のように涎よだれを垂らしている。

おそらく、お堂のなかに充満した血の匂いに刺激されたのだろう。

「ね、禰豆子っ!? 見ちゃいけません! 嗅かいじやいけません!!」

炭治郎は慌てて禰豆子をお堂の外へと連れ出すと、手拭てぬぐいを取り出して垂れた涎を拭う。

その様子を見ていた累は、呆れからくる溜め息を吐ついた。

次いで、お堂の天井に突き刺さる鬼の足を掴つかみ、勢いよく引き抜いてから外へと向かって投げ飛ばす。

「あべしっ!」

炭治郎たちがいる位置よりも、さらにお堂から離れた場所に落ちる人食い鬼。

炭治郎は目を丸くして鬼を見つめ、累へと視線を向けた。

「あれ、死んだんじゃないか?」

「いくら雑魚鬼でも、あれくらいじゃ死なないよ」

累にそう言われ、炭治郎は鬼へと視線を向ける。

鬼は四肢を痙攣けいれんさせているが、ただそれだけだ。

それどころか、よろよろと立ち上がって首の調子を確かめてすらいる。

「ああ、クソっ! 妙な気配させやがって……お前ら人間か? それとも鬼か?」

鬼が再び睨み付けてくる。

先程よりも青筋が目立つところを見ると、かなり苛いらだ立っているようだ。

だが、累はその怒気をどこ吹く風かと受け流すと、炭治郎にあることを提案する。

「ちようどいいから、あいつを使って鬼の身体について解説してあげるよ」

「解説って……」

鬼とは言えど、さらりと他人を実験台にすると宣言する累に、炭治郎はちよつとだけ引いた。

それに気づいているかはわからないが、累は血鬼術で生み出した糸で鬼の頸くびを一閃する。

「ぎゃっ!？」

糸に切断されて、ころりと落ちた鬼の頸くび。

一気に血の気が引いた炭治郎は、あっさりとう鬼を倒した累に視線を向ける。

だが、累はさらに糸を生み出すと、頸のない鬼の身体を拘束しだした。

「勘違いしてそうだから言つとくけど、この程度じゃ鬼は死なないからね?」

累の言う通りだ。

鬼は、まだ死んでいない。

その証拠に、頸のない体は糸の拘束を解こうと動き出し、地面に転がった頭は喚わめきだ

した。

「てめえらあ！ やっぱり一人は鬼かよ！ なんで鬼と人間がつるんでるんだ!？」
 「く、首がもげてるのに喋しゃべってる!？」

「うん、まあ、喋るよね。死んでないからさ」

炭治郎は、気持ち悪いとばかりに身を震わせる。

累は見慣れた光景なためか、眉ひとつ動かさずに話を続けた。

「基本的に、鬼は外傷で死ぬことはないよ。こんなふうに、すぐに傷が癒いえてしまうからね」

累は、糸で拘束した鬼の腕を刀で浅く斬りつける。

すると、その傷はすぐに塞ふさがり消えてしまった。

「それに、ほら」

そう言つて、累が指を差す。

そこには、糸に拘束されて藻も搔かく鬼の頭があつた。

驚くことに、いつの間にやら頭から腕が生はえている。

「ええ……」

炭治郎は鬼の奇妙な生態に引いた。

「あんな感じで環境や状況に対応しようとするから、気を抜かないように」

そう言われ、炭治郎は累を見て、それから禰豆子を見た。

もしかして、累や禰豆子も頭から腕が生えたりするののか？

そんな疑問が脳裏を過る。

そして、想像した。

想像、してしまった。

「駄目だ、禰豆子！ 絶対に頭に腕なんて生やすんじゃないぞ！」

誰が生やすか。

そんなツツコミを入れてくれる者は、生憎あいにく、この場にはいない。

「何の心配をしてるのさ？ —— まあ、いいや。とにかく、鬼はしぶとい。普通の武器で

は殺せない。だから、鬼狩りは特殊な刀を使う」

累はそう言うのと、持っていた刀を指差した。

半ばから折れていたが、切れ味に変わりはない。

刀身が万全であったなら、名刀と呼んでも差し支えなかつただろう。

「これは日輪刀にちりんとう。詳しい原理は僕も知らないけど、この刀で頸を斬ることで鬼は倒せる」

そう言って、累は頸のない鬼の体を、右側の頸の付け根から左の脇下にかけて斬り裂いた。

その直後、鬼の体は灰のようになって崩れて消える。

それを見ていた鬼の頭は血を吐いたが、そちらは気を失っただけで、体のようには消えなかった。

「まあ、こんな感じ」

累は冷静に解説を続ける。

あくまでも淡淡々と物事を進める累の姿に、炭治郎は乾いた笑いしか出てこない。

「今のは頸だけを斬ったわけじゃないけど、頸に近い場所を通って斬ったから倒せたんだ。絶対に倒せるとは言えない方法だけど、覚えておくといいよ」

累はそう言うのと、頭だけになった鬼に目を向けた。

体は消えたが頭は健在なところを見ると、頸を切り離れた時点で別の個体になったのだろうか。

摩訶不思議な状態であるが、累としては解説が続けられるので都合がよかった。

折れた刀で無理矢理に鬼の頭を串刺しにし、そのまま近くの樹木に磔はりつけにする。

そうしてから、累は炭治郎に言った。

「見ての通り、日輪刀で頭を突き刺さしても死なない。あくまでも鬼の弱点は頸で、そこ以外を日輪刀で斬っても再生しちゃうんだ」

「そうなんだ……」

炭治郎は何とか相槌あいづちを打つ。

かなり酷い扱いをされている鬼に同情心が湧いていることもあるが、あまりにも平然とし過ぎていて累に戸惑いを隠せないのだ。

「それと、鬼が最も苦手とする日光を浴びるとどうなるのか。それも見ておくといいよ」
そう言うと、累はお堂へと足を向けた。

炭治郎も禰豆子と手を繋ぎ、その背を追う。

「日の出までは時間があるし、今のうちにご遺体を埋葬しよう。……そこで見てる人も手伝ってくれないかな」

累が雑木林に向かって声を張りあげる。

ややあつて、人が一人、姿を現した。

炭治郎は、現れた人物の姿を訝しげな視線を向ける。

なぜなら、その人物は顔に天狗のお面をつけ、素顔が見えなかったからだ。

匂いで物事を知ることが出来る炭治郎が、天狗のお面をつけた人物の存在に気づかなかったことには理由がある。

それは、お面をつけた人物が、常に自分が風下側に居るように立ち回っていたからだ。

そのため、炭治郎の鼻が利く範囲まで匂いが届かなかったのである。

だからこそ、炭治郎は累が声をあげるまで気がつかなかった。

「儂は鱗滝左近次だ。義勇からの紹介はお前で間違いないか」

「は、はい。竈門炭治郎と言います。こっちは禰豆子で……」

炭治郎はちらりと累を見た。

自己紹介を促されているのを察した累は、素っ気なく名前だけを答える。

そんな累の姿を見て、左近次は腕を組んで唸った。

「義勇からの手紙で話は聞いてはいた。だが、にわかには信じ難く、正直、疑っていたのだが……確かに、お前からは人食いをした鬼が放つ特有の匂いがしない」

「へえ、わかるんだ？」

「儂も鼻が利く。匂いを嗅げば、その鬼がどれだけ人を食ったのかがわかる」

そういうものか、と累はとりあえず納得した。

「ところで炭治郎」

左近次は急に炭治郎へと水を向ける。

「妹が人を食った時、お前は どうする」

「え……？」

炭治郎は答えられなかった。

急に話を振られたから、ということもある。

考えたくない可能性だったから、ということでもある。

そして、累や黒死牟という強者とともに居る、という実は保証のない安心感があった

から、炭治郎はそれについて考えてはこなかった、という理由もある。

だが、それではいけない。

それは鬼になった禰豆子とともにある以上、炭治郎が常に考えねばならないことだった。

炭治郎の頬を、左近次の平手が打つ。

「判断が遅い」

頬を打たれた痛みとともに、叱責された理由が理解でき、じんわりと心に染み渡る。「今の質問に間髪入れずに答えられなかったのは何故か？ お前の覚悟が甘いからだ」

左近次からの厳しい叱責を、炭治郎だけでなく、累も静かに聞いていた。

累か黒死牟が近くにいれば、禰豆子が人を襲う前に止めることは容易だ。

だが、何かしらの事情で近くにいないことがないとも言いきれない。

世の中に絶対はないのだ。

ならば、炭治郎は自衛とは別の意味で呼吸法を身につける必要があった。

おそらく、黒死牟はそのことに気がついていただろう。

だからこそ、雲取山で『自衛の手段は必要だ』と言ったあとに言い淀んだのだ。

「妹が人を食った時、やることは二つ。妹を殺す。お前は腹を切つて死ぬ。鬼になった妹を連れていくとは、そう言うことだ」

妹を殺す。

それも、兄である炭治郎の手で。

それが最低限のケジメだと言われた炭治郎の表情が歪む。

自分の手で家族を殺すなど、例えば想像だとしても考えたくはなかった。

だが、それほどの覚悟をもって、妹を見張らなければならぬのだ。

そうでなければ、あまりにも無責任すぎる。

炭治郎は、無意識のうちに樂觀視していたことを恥じ、気を引き締めた。

こうして、左近次からの厳しい訓戒くんかいは、しっかりと炭治郎の胸に刻まれることになる。



三人で手分けして鬼に殺された者たちを埋葬し、太陽の光で鬼が焼かれて消え去るのを見届けたあと、炭治郎一行の姿は、狭霧山さぎりやまの麓ふもとにある左近次の自宅にあった。

なお、炭治郎の姿は自宅内にはない。

鬼殺の剣士になるための試練として、狭霧山の山中に置いてこられたからである。

そのため、自宅内にいるのは家主である左近次と累、そして禰豆子の三人だけだった。

「なるほど。そのような方法で人を食わずともよくなるとは……」

左近次は、累からの話を聞いて唖る。

聞いていたのは、鬼が人を食べなくても生きていけるようになるための方法だ。

しかし、話を聞いているうちに察していたが、現実的な方法ではない。少なくとも、鬼殺隊で行うのは無理だと左近次は判断した。

基本的に、鬼殺隊が鬼を発見するのは一般人に被害が出てからだ。

なぜなら、鬼殺隊に入る情報の大半が、実際に起きた事件やそれに纏わる噂話だからである。

それらを元にして、支援部隊である隠が調査を行い、鬼の仕業だと判定したあとに戦闘部隊である剣士たちが動くのだ。

それ故に、鬼殺隊が対面する鬼は人を食った者ばかりだと確定している。

つまり、食人衝動を抑える第一段階に必要な『人を食べたことがない』という条件は、絶対に満たせないのだ。

そうでなくても、鬼殺隊は鬼の被害者が集まる場所である。

そのため、いくら人を襲わないからと聞かされていても、復讐心に駆られて斬りかかっていくのが目に見えていた。

それがわかっているために、鬼殺隊の当主である耀哉も、累や黒死牟という強力な戦力のことを表沙汰に出来ないでいる。

そういう意味では、弟子からの手紙と直接の対面だけで『害はない』と判断した左近次は珍しい部類と言えるだろう。

「まあ、僕たちが旅してきたなかでも、鬼に成り立てで人を食べたことがない鬼なんて、まず見ないからね。そういう意味では、僕や禰豆子は運が良かったんだと思うよ」

累の言葉に、左近次は同意するように頷いた。

「ふむ。それで、お前たち以外にも食人衝動を克服した鬼はいるのか？」

左近次の問いに、累は少し思い悩むような仕草をする。

それから横目で禰豆子を見た。

視線の先にいる禰豆子は、布団のなかで丸くなり眠っている。

それを確認した累は左近次に近づき、禰豆子に背を向けるようにして座り直した。

それから口元に人差し指を立てて、声を出すなど意思表示する。

禰豆子には、無惨むざんの与えた血の呪いがかかったままだ。

いつ、どの瞬間を無惨が見ているかわからない。

万が一にも、無惨側に情報を与えないための措置であった。

その意を汲くんだ左近次は、小さく頷うなずく。

それを確認した累は、禰豆子からは見えないように指を立てた。

その本数を左近次が見たのを確認したあと、累は声を出さずに口だけ動かして何事かを伝える。

その内容を理解した左近次は息を飲んだ。

ややあつて、ゆっくりと息を吐き出す。

そんな左近次の様子を後目に、累は元いた位置に座り直した。

その表情からは『他言無用だ』という意図が察せられる。

左近次は無言で頷いた。

左近次は、ふと窓の外へと目を向ける。

夜明けが近いからか、僅かに空が白んできたようだ。

すると、入り口の扉が音を立てながらゆっくりと開いた。

扉の向こうにいたのは、山中に置き去りにされたはずの炭治郎である。

全身が泥と血で汚れ、いたるところに大小様々な傷があつた。

無事な部分を探すほうが大変だと思えるほどの、酷い有り様である。

しかし、左近次の要求通り、炭治郎は夜明けまでに山を下りてきた。

それは、試練に合格したことを意味する。

「も……どり、ました」

炭治郎はそう言うのと、その場に座り込んでしまった。

精魂尽き果て、今にも意識を手放しそうである。

「……お前を認める。竈門炭治郎」

左近次は、試練の合格と労いねぎりを込めた言葉を贈る。

その言葉を聞いて安心したのか、炭治郎は入り口に座り込んだまま意識を手放した。



黒死牟が狹霧山へと辿り着き、累たちと合流したのは、炭治郎の修行が始まって三ヶ月ほど過ぎてからである。

竈門一家の護送は慎重に慎重を重ねて行われたため、前準備と移動にかなりの時間をかけたのだ。

その甲斐もあつて、竈門一家は無事に蝶屋敷へと辿り着くことが出来ていた。

「鬼の襲撃とかあつたの？」

「隠との……待ち合わせをした町で一度……護送中には……二度ほど……鬼と遭遇した……町での襲撃は……無惨によるものだろうが……あとの二度は……偶然だな……」

黒死牟はそう言うと、詳しい経緯を説明する。

初めに襲撃を受けた町では、数十という数の鬼が徒党を組んで襲ってきた。

数を頼みにして黒死牟を封殺しつつ、竈門一家を殺そうとしたのだろう。

この時点で、無惨の手引きだとわかる。

念のために言っておくが、作戦も何もない、物量頼みの無惨な襲撃だったからではない。

基本的に、鬼は群れを成せないように配置を操作されている。

食料の取り合いになるから、という意味もあるのかも知れないが、実態としては鬼が徒党を組んで無惨に反旗をひるがえ翻すのを防ぐためである。

そのため、意図的に集めないことには、鬼が一度に数十も集まるわけがないのだ。

まあ、その数十もの鬼たちは、黒死牟たった一人の手によつて瞬殺されて目的を果たすことは出来なかつた。

もう少し、用意した鬼の質を上げていれば話は変わつていただろうが、その辺りは無惨だからとしか言いようがない。

町での襲撃をあつさりとは片付けたあととは、なんとも静かなものだった。

さらに強力な鬼を送り込んでくるかも知れないと警戒していたが、それすらもない。

隠が迎えに来てからも護送に同行したが、二度ほど野良の雑魚鬼に遭遇しただけである。

なお、雑魚鬼は気付かれないように背後から斬り捨てたので、無惨に情報が渡つていくということはないだろう。

護送を終えたあとに追加の襲撃がなかつた理由を考えてみたが、はつきりとした結論は出ていない。

いたずらに鬼を向かわせても、無駄に浪費するだけだと考えたのかも知れないが、真実は闇のなかである。

「まあ、義父さんは十二鬼月じゅうにぎづきの上弦でも一人で倒せちゃうからね」

累の言葉に左近次が驚いていたが、これは事実だ。

ここ数年の内でも、黒死牟は上弦の鬼を撃退していた。

最終的には逃げられてしまったが、その戦闘は一方的なものだった、と累は語る。

その戦いを直に見ていた者としては、上弦が複数で襲ってきても勝てるのでは？ と

思ったほどの無双ぶりだったのだ。

なお、十二鬼月の詳しい内容については原作を読もう。

「た……ただいま戻り、ました」

話が一段落した直後、炭治郎が戻ってきた。

修行の成果が出てきたのか、その姿は初日のそれに比べて受けた傷が少なくなっている。

炭治郎からは疲労感が滲にじみ出ていたが、それは黒死牟の姿を見て消し飛んだ。

「お久し振りです、黒死牟さん！ 来てらしたんですね」

「うむ……お前の家族は……無事だ……葵枝殿より……手紙を預かっている……あとで

……読むといい……」

黒死牟は懐ふところから手紙を出した。

手紙は複数あるらしく、おそらくは弟妹ていまいたち一人一人が書いたのだろう。

「お前から……手紙を出すときは……錠鴉かすがいがらすに……預けるといい……蝶屋敷まで……運んでくれる……」

「はい！　ありがとうございます!!」

炭治郎は目を輝かせながら手紙を受け取ると、禰豆子の傍かたわらへと向かう。

禰豆子は今、布団のなかで長い眠りについていた。

この眠りについては、元々から予見されていたものである。

そのため、炭治郎らが焦ることはなかつたが、累からは『二年から五年は目覚めない』と聞かされていた。

それだけ長い間、意識が戻らないのであれば、起きた時には浦島太郎のように現在と昔の差を感じることもだろう。

だからこそ、炭治郎は禰豆子が寝ている間に起きたことを、日記に書いておくことにしていた。

「炭治郎……帰ってきたばかりで……悪いとは思うが……尋ねたいことがある……竈門家に……その耳飾りとともに……伝わっているものはあるか……」

黒死牟の問いに、炭治郎は手紙を開こうとしていた手を止める。

「家に？　……ヒノカミ神楽のことですか？」

炭治郎の言葉に、黒死牟は目を細めた。

「その神楽を……見せてもらえないか……」

「わかりました。いいですよ！」

炭治郎は二つ返事で了承すると、庭先へと足を運ぶ。

その後ろ姿を見ていた黒死牟が、『疲れがとれてからでもいいんだけどなあ』なんて考えていることには気づいてもない。

炭治郎が見せてくれた『ヒノカミ神楽』は、十二の型で構成された舞이었다。

その十二の型を日没から日の出まで繰り返し舞い続けることが、昔からの習わしらしい。

それを見た黒死牟は確信する。

「やはり……そうであったか……」

「なにが『やつぱり』なの？」

黒死牟の**つぶや**の**呟**きに、累が興味を引かれて食いついた。

「竈門家に伝わる……ヒノカミ神楽……その原型は……日の呼吸だ……」

「日の呼吸？」

累は首をかしげた。

元は鬼殺隊の隊士をしていた左近次も、なにかを思い出そうと虚空を見つめながら唸っている。

「そう言えば、儂が水柱だったところに、当時の炎柱が『炎の呼吸』を『ひの呼吸』と呼んではならないとかなんとか言っておったな……」

左近次の言葉に、黒死牟は頷いた。

「日の呼吸とは……私の弟……縁壺よけいが使っていた……呼吸の名だ……」

黒死牟はそう言うと、呼吸法が生まれた経緯を簡単に説明する。

今に伝わる呼吸法の原型を生み出したのは、黒死牟の弟である縁壺だということ。

現在、鬼殺隊で使われている呼吸法は、もともと鬼狩りの間で使われていた剣術の型や流派に、縁壺の伝えた呼吸法を組み合わせて生まれたものであること。

その呼吸法のなかでも原型である『日の呼吸』は、開祖である縁壺以外にまともに扱える者が居らず、鬼殺隊のなかでも伝えられる者がいなかったこと。

「日の呼吸に……関する書物を……当時の炎柱えんぼしらに……預けてあつたが……どうなったのか……」

黒死牟は思い出したように呟いたが、何せ三百年前の話である。

指南書は紙製の書物であるうえに、当時の鬼殺隊員たちは何とか身につけようと躍起になっていたため、貸し出しが頻繁に行われていた。

一応、指南書を求める者には写本してから渡すように伝えていたが、鬼狩りが組織化されて鬼殺隊となるまでは雑な管理体制だった集団である。

正直な話、書物がまともに読める状態で残っているとは思っていなかった。

「何にせよ……水の呼吸を学びつつ……日の呼吸……ヒノカミ神楽を舞うことを……日課にすべきだな……」

どこことなく遠い目をしながら、黒死牟は今後を見据えた計画を立てる。

左近次もそれに同意し、炭治郎の修行は当初の予定よりも厳しくなるのであった。



炭治郎の修行が始まってから、一年の時が過ぎた。

そのころには左近次が予定していた修行内容もすべて熟しこな終え、あとは最後の試練を達成できれば、最終選別に行ける。

そんな段階まで来ていた。

しかし、ここでひとつ、予想外の出来事が起きる。

鏝鴉が、かがや耀哉からの手紙を持ってきたのだ。

その内容を要約すると、以下の通りである。

『炭治郎と黒死牟殿たちは、別々に行動したほうがいいと思うんだ。……勘だけど。あ、彌豆子は連れていってね？ たぶん、そのほうがいいから。……勘だけど』

黒死牟と累、左近次は顔を見合わせた。

左近次もまた、つぶやしき産屋敷家の一族に備わる未来予知とも言える直感力を知っていたから

である。

当初の予定では、炭治郎に日輪刀を与えるために鬼殺隊の入隊試験である最終選別を突破させ、その後の任務に黒死牟らも同行するつもりだった。

だが、耀哉の勘では悪手だと感じたらしい。

しかも、最終選別に向かうよりも早い時期に手紙を出していることから、すぐにでも別行動をするべきだとも読み取れた。

「お館様の……勘が外れたことではない……ならば……すぐにでも……発つべきか……」
もちろん、不安がないわけではない。

とくに、炭治郎は禰豆子と離れることに不安を覚えていた。

とは言え、耀哉の直感力を知る以上、それを無視するわけにもいかない。

なので、黒死牟は炭治郎が最終選別を突破したら戻ってくることを約束し、狭霧山を離れることにした。

眠っている禰豆子には悪いとは思うが、新たに作成した大きめの箱に布団くもに包んだまま無理矢理に詰め込んだのは余談である。

後ろ髪を引かれる思いをしながら、黒死牟と累は狭霧山をあとにした。

そして、狭霧山に新たな来訪者が現れたのは、それから三日後のことである。



「お久し振りです。鱗滝さん」

そうやって頭を下げたのは、宍色の髪と口元から右頬にかけて大きな傷がある青年だ。

彼の名は錆兎。

左近次のもとで修行した剣士で、炭治郎の兄弟子に当たる人物である。

「錆兎も元氣そうで何よりだ。最近は顔も出さず、手紙も来ないから、何かあったかと心配したぞ」

左近次が少し咎めるように言うと、錆兎は慌てて弁解した。

「それはその、ちよつと色々あつて忙しかったというか……」

「最後に来たのは三年前だったか。それまでまめに顔を出していたのに、手紙すら疎らまばになって、ついには来なくなったから死んだのではないかと思つたぞ。まあ、幸いにも義勇と真菰まじもからの手紙で事情は知つていたが……」

錆兎はだらだらと汗をかきながら、聞きに徹している。

事情があるとはいえ、連絡を怠おこたつた自分が悪い。

それがわかつているからだ。

しかし、鼻が利く炭治郎は左近次の内心を察していた。

左近次からは怒りの匂いはせず、ただただ安堵と喜びの匂いがしている。

鑄兎に長々と説教をする左近次に、炭治郎は温かい視線を送っていた。

「まあ、説教はこれくらいにしておこう」

左近次がそう言うのと、鑄兎は密かにため息を吐いて脱力する。

久し振りに受けた説教は、なかなか堪えられない。

炭治郎が温めのお茶を出すと、鑄兎は礼を言ってから一息に飲み干した。

「それで鑄兎よ。お前が『水柱』の地位を返上してから三年経つが、どうなった」

左近次がそう言うのと、鑄兎は姿勢を正して真っ直ぐに視線を向ける。

「今日は、その事でお話があつて来ました」

鑄兎はそう言うのと、顔と手紙を出さなかつた分を取り戻すかのように、事情の説明か

ら語り始めた。



鑄兎が鬼殺隊の入隊試験である最終選別に参加したのは、十三歳の時である。

同い年の同門生である富岡義勇とともに藤襲山に赴き、敷地内にいた鬼をほぼ鑄兎一人で全滅させたのは、鬼殺隊始まって以来の快挙であり、異常事態だった。

雑魚鬼の捕獲と連行が大変だと、後始末に追われた隊士たちに羨望と恨みの混ざった言葉をかけられたのは、良い思い出である。

それから一年ほど経って、鑄兎は『水柱』に就任した。

錆兎が十四歳の時である。

入隊から一年で柱になるというのは、鬼殺隊の歴史を振り返っても稀にしかない事態であった。

ちなみに、柱に就任するための条件は二つ。

十二鬼月を討伐するか、鬼を五十体討伐するか、である。

錆兎は十二鬼月に遭うことはなかったものの、鬼を討伐するまでの流れが異常に速かった。

それだけ実力が突出していたとも言える。

そして、それだけの実力があれば、当時の水柱が『継子に欲しい』と錆兎を望むのも無理のない話だった。

そして、水柱が鬼との戦闘中に負傷し、柱としては活動できなくなったことで、水柱を受け継ぐことになったのである。

水柱に就任した錆兎は、義勇を継子に指名した。

義勇を継子としたのは、最終選別で鬼を倒せずに終わったために、自信をなくした親友の尻を叩くためである。

その甲斐あつてか、元々から才能に恵まれていた義勇は、その実力を伸ばしていった。そして、それは同時に錆兎の首を絞めることになっていく。

鏑兎が十六歳になった頃の話である。

なんと、義勇が水の呼吸の新たな型を作り出したのだ。

——水の呼吸・拾壺じゅういちノ型なまき 凧

素晴らしい技だった。

つい魅入つてしまうほどに、美しい技だった。

そして、それは同時に義勇が鏑兎を超えた瞬間でもあった。

ほかの水の呼吸の型でも、鏑兎と義勇の間に大きな差はない。

それほどまでに、義勇が成長していたのだ。

鏑兎は親友が強くなっていたことを喜ぶと同時に、負けていられないと奮起する。

義勇が新たな型を生み出してから、鏑兎もそれを習得しようと修行を重ねた。

だが、出来なかつたのである。

凧の真似事は出来るが、義勇のそれには遠く及ばない。

納得のいく出来映えではなかつたのだ。

柱よりも継子が強いという状態は、次代を担う若手が育つているという意味では良いかもしれない。

だが、鏑兎と義勇は同年代である。

その法則は適用されなかつた。

断っておくが、鏑兎は水柱という地位に固執しているわけではない。ただ、男として弱いままではいられず、胸を張って親友と肩を並べたいと願っているだけだ。

しかし、日を追うごとに、義勇の技の冴えは磨きがかかっていった。それに対して、鏑兎の実力は停滞している。

気がつけば、二人の間には大きな実力差が出来ていた。

鏑兎は、見えない壁が己の行く道を塞いでいるのを自覚する。

だが、歩みを止めることはなかった。

男ならば、進むしかない。

そう自分に言い聞かせて、日々の修行に打ち込む。

鏑兎は己の苦悩を口にはしない。

どんな苦難にも黙って耐える。

それが、鏑兎の考える男の姿だからだ。

そんなある日のことである。

鏑兎は、一人で担当地域の見回りをしていた。

そして、ある鬼と出会ったのである。



その鬼は強かった。

鬼殺隊の隊士から奪ったと思わしき、日輪刀を持った鬼だった。

その実力は凄まじく、錆兎の全力をぶつけたにも関わらず、掠り傷ひとつ与えることは出来なかったのだ。

錆兎は直感的に理解した。

この鬼は、今は十二鬼月の序列を与えられていないようだが、間違いなく、近いうちにその地位を与えられる実力をもった者である。

それも、十二鬼月の下弦では収まらない。

上弦になれる実力をもった鬼だ。

ここで仕留めなければ、どれだけの仲間が犠牲になるかわからない。

錆兎は、その鬼をこの場で倒すことを決めた。

例え、相打ちになったとしても倒さねばならないと、覚悟を決めたのだ。

鬼との戦いの最中、錆兎は利き腕を負傷した。

しかし、その程度で錆兎の闘志は衰えない。

すぐに無事だったほうの手に刀を握り直すと、鬼へと斬りかかっていった。

それから、どれだけ斬り結んだだろうか。

それまで無言を貫いてきた鬼が、こんなことを言い出したのである。

「ふむ……お前は……両方の腕で……刀を扱うことが……出来るようだな……ここまでは……左右の差を感じないのは……珍しい……」

それは、錆兎を評価する余裕のある言葉だった。

「ぬかせ！」

——水の呼吸・肆しノ型 打ち潮

錆兎が技を繰り出すと、鬼は刀で弾いて一步だけ退く。

それを見て、次の技へと繋いだ。

——水の呼吸・弐にノ型 水車みずぐるま

鬼は衝撃を受け流すように、刀を操った。

だが、錆兎は止まらない。

——水の呼吸・捌はちノ型 滝壺

水車の回転を利用して、通常よりも勢いのある技を放つ。

しかし、これも防がれた。

だが、錆兎は慌てない。

着地して腰を落とした体勢から、更なる技へと繋ぎ合わせる。

——水の呼吸・陸ろくノ型 ねじれ渦

勢いよく、その場で回転する。

技は防がれたが、その勢いに圧されたのか、鬼が再び退いた。

——水の呼吸・漆しちノ型 雫波紋しづくはもんづ突き

ねじれ渦の回転を利用した、普通に放つよりも加速した最速の突き。

だが、それすらも鬼は凌しのぎきつていた。

それに対して、後先を考えぬ五連撃を繰り出した反動で、錆兎の呼吸は大いに乱れている。

やれることはすべてやった。

だが、そのすべてが通用しなかった。

悔しさが錆兎の胸のなかに広がるが、まだ終わるわけにはいかない。

錆兎は気力を振り絞り、鬼を睨にらみ付けた。

「随分と……無茶をする……だが……ここまでだ……」

そう言うと、鬼は刀を納めて踵きびすを返す。

その行動に錆兎が呆気にとられていると、鬼は肩越しに振り返る。

「お前には……二刀流の……才能があるようだ……更なる強さを……求めるのなら……覚えておくといい……」

その言葉を最後に、刀を持った六つ目の鬼は、振り返ることなく夜の闇に消えた。



「そのあと、俺はすぐにお館様に連絡を取り、義勇を水柱に任命してもらおうように頼みました。柱の役目を熟しながら、難度の高い二刀流の修行をするわけにもいきませんか。もちろん、鬼の言うことに従うのは気に入りませんが、強くならなければ、あの鬼には……ん？　どうか、しましたか？」

長々と話していた錆兎は、師と弟弟子おとこの様子がおかしいことに気がついた。

とても気まずそうな、なんとも微妙な顔をしていたのである。

もちろん、左近次の顔は天狗のお面に隠されて見えないが、そこは長年の付き合いで理解できた。

「いや、まあ、うむ。……大変だったな、錆兎」

左近次は何とか労りの言葉を口にする、錆兎の頭を撫なでる。

錆兎は恥ずかしそうにしながらも、嫌ではないらしい。

そんな心暖まる光景を見ながら、炭治郎は思う。

（何やってるんですか、黒死牟さん）

今、どこにいるかわからない恩人の姿を思い浮かべながら、炭治郎は深々としたため息を吐いた。



狭霧山に錆兎が来てから数日が過ぎた。

初日に様々な話を聞いたが、鑄兎が左近次に会いに来たのは、二刀流を漸くよそやものに出たので、それに合わせた水の呼吸、もしくは派生した新たな呼吸を作り出すためらしい。

それを聞いた左近次は、まずは水の呼吸の基礎を再び固めるよう鑄兎に伝えた。その一環として、炭治郎との打ち込み稽古が行われるようになったのである。

しかし、炭治郎はまだ弱い。

呼吸法も身につけているわけではない。

そんな状態で鑄兎に得るものはあるのか？　とも思われたが、左近次の意見は違った。

「鑄兎よ。お前が手加減するのは当然として、それ以外にも課題を与えよう。一つ一つの動作を正しく、丁寧に炭治郎に見せるのだ」

そう言われ、鑄兎は首をかしげながらも了承する。

鑄兎は、簡単な課題だと思っていた。

それどころか、課題になるのか？　とすら思っていたのだ。

しかし、それは大きな間違いだった。

鑄兎の体には、実践のなかで洗練された動作のなかに、本来ならば不要な癖くせがついていたのである。

しかも、それは動作だけでなく、呼吸の仕方にもついていた。

左近次がこの課題を思いついたのは、偏ひとえにヒノカミ神楽のおかげである。

炭治郎から教わったヒノカミ神楽は、正しい呼吸ならば一晩中でも舞えるという実績があった。

それに対して、水の呼吸の型を一晩中使い続けられるか？ と聞かれれば、それは否である。

その答えを裏返せば、水の呼吸にはまだまだ改善の余地があるということだ。

「さすがに一晩中、水の呼吸の型を使い続けるわけにもいかんし、まずは正しい動きと呼吸の仕方を意識するところからだな」

左近次は、思ったように動いていない自分の体に悪戦苦闘する錆兎と、そんな状態の相手に手も足もでない炭治郎を見ながら、今日の夕餉ゆうげは何にしようかと悩むのであった。



この後、錆兎は二刀流で行う呼吸を満足できる領域まで磨きあげたあと、鏖鴉が次の任務を伝えるにきたこともあって山を下りていった。

しかし、炭治郎の修行を手伝うために、こまめに狭霧山に顔を出すようになる。

炭治郎に課せられた最後の試練は、例によって、大岩を刀で斬るといったものだった。

鑄兎の協力もあり、炭治郎は十ヶ月ほどで大岩を斬ることに成功する。

ただ、鬼殺隊の入隊試験である最終選別は定期的に行われていたため、炭治郎が最終選別に参加できたのは、大岩を斬ってから二ヶ月後のことだった。



大正こそこそ噂話

炭治郎の生家がある雲取山で、義勇は『知っている。世話になったことがある』と言っています。

ですが、いつもの如く言葉が足りていません。

足りない部分を補完した台詞は次のようになります。

「鑄兎が水柱を返上したあと、新たに任命された柱から『人を襲わない六つ目の鬼』の存在は聞かされていたので、黒死牟のことは知っている。それと、水柱を返上する前の鑄兎は何やら思い悩んで気落ちすることが多かったが、六つ目の鬼に遭ったと話を聞かされたあとは、昔のような活力を取り戻していた。あなたが覚えているかはわからないが、鑄兎が世話になったことがある』

つまり、義勇自身は世話になったことはありません。

黒死牟と累が知らないのも無理はないのです。

ついでに、鑄兎は黒死牟を無惨側の鬼だと思っっています。義勇はそうではないこと

を知っています。

錆兎に伝えることも出来たのですが、一応は秘匿されていることと、錆兎が二刀流の修行に打ち込むために連絡を絶っていた影響で話が伝わっていません。

大正こそこそオマケ話

黒死牟

「ふむ……そう言えば……そろそろ……最終選別の時期か……」

累

「あ。もしかして、藤襲山にいる鬼の選別をしに行くの？」

黒死牟

「そうだ……何時ぞやのように……異形の鬼に……成長した者が……いるかも知れん

……」

累

「さすがに早々にはいないとは思うけど、実際に異形の鬼にまで成長した奴がいたからねえ」

黒死牟

「あの鬼は……兄を求めて……彷徨^{さまよ}う者だったが……最後には……兄が……迎えに来た

らしい……やはり……兄とは……斯^かくあるべきだな……」

累

「僕は一人っ子だったけど、今ならわかるよ。義理の両親だけじゃなくて、妹みたいな子たちも増えたし」

黒死牟

「うむ……」

累

「何なら、叔母もいるし」

黒死牟

「累……」

累

「何？」

黒死牟

「あの子の前で……その呼び名は……禁句だ……」

広がる波紋は小波に変わる（浅草編）

藤襲山ふじかさねやまで行われた最終選別を、炭治郎が何事もなく突破してから約二十日。

炭治郎の姿は、東京の浅草にあった。

鬼殺隊の隊服に身を包んだ炭治郎の背中には、左近次が作ってくれた木箱が背負われている。

霧雲杉きりくもすぎという木で作られた、非常に軽い木箱だ。

左近次いわ曰く、岩漆いわうるしという特殊な漆で固めたため、強度も上がっているらしい。

それはそうと、炭治郎の腰に巻かれた皮帯ベルトには日輪刀にちりんとうが挿してあるのだが、隠しもしないで堂々としているため、警官に見つかるものなら追いかけることは間違いない。

なお、炭治郎が銃刀法違反そこのとに気づいているかどうかは不明である。

しかし、ここは都会だ。

あまりにも多い人の波が、炭治郎の姿を隠してしまっている。

夜の暗さも相俟あいまって、炭治郎の腰にある刀に気づく者は少ないだろう。

浅草の街並みを目の当たりにした炭治郎は、軽い過呼吸に陥っていた。

炭治郎は田舎育ちである。

これまで、二階建ての家屋以上の建物など見たことがなかった。

さらに、建物自体の形もそうだが、使われている建材も見知らぬものがある。

追い討ちをかけるように、浅草の夜は街灯や店舗から漏れ出る光でかなり明るかった。

そのため、遅い時間帯にも関わらず、外を出歩く人の波は途切れることを知らない。

発展した街の雰囲気や、夜らしからぬ独特な明るさ。

慣れない人混みの影響もあり、炭治郎は人酔いをしていた。

「あ、あつちにくいこう、禰豆子」

足をふらつかせながら、炭治郎は約一年振りに再会した妹の手を引いて、人の少ない路地へと歩いていく。

入り込んだ路地裏は、民家が近いためか表通りに比べれば閑散としていた。

しかし、その雰囲気は田舎のそれに近いものがあり、炭治郎の気分を落ち着かせるのにはちょうど良い。

(こんなところ、初めて来たなあ……人が多すぎる)

呼吸を整えた炭治郎は盛大なため息を吐くと、夜空に浮かぶ大きな月を見上げる。

思い出すのは、黒死牟と累のことだ。

本来の予定ならば、炭治郎と禰豆子の傍そばには黒死牟と累の姿があるはずだった。だが、この場に二人の姿はない。

何故なら、最終選別を終えた炭治郎が狭霧山で黒死牟たちと合流してすぐに、再び耀哉から手紙が届いたからである。



『炭治郎が初めての任務を終えるまでは、黒死牟殿たちは別行動をしたほうがいい気がするね。……勘だけど。あ、でも、今回は禰豆子と炭治郎は一緒にいても大丈夫そうだね。……勘だけど』

手紙を読んだ炭治郎は思った。

鬼殺隊の当主は勘だけで行動しているのだろうか？

思わず呟つぶやいてしまった言葉に、手紙を持つてきてくれた隠かくし——名を後藤と言うらしい

——が、死んだような目をして『やっぱり、そう思うよな？ その通りなんだよ』と相槌あいづちを打っていた。

まさか同意を得られるとは思ってもみなかったが、それ以上に衝撃を受けたのは、その匂においである。

後藤から感じた匂いは、物事を素直に表現する炭治郎をして、じつに例えにくいものだった。

「苦勞、なさつてるんですね……」

「わかるか……わかってくれるか！」

炭治郎が^{いたわ}勞りの言葉をかけた直後、後藤の涙腺が決壊する。

そこから始まる愚痴祭り。

耀哉が後藤に頼んだ無茶振りの数々が、出るわ出るわと大騒ぎした。

余程溜まっていたのだろう。

酒も入っていないのに、愚痴を^{こぼ}溢す後藤の姿は正しく酔っ払いのそれだ。

これを聞いていた左近次は遠い目をして意識を飛ばし、累は我関せずと言わんばかりに、数日前に目覚めた禰豆子と綾取りをして遊びだした。

対応できるのは、炭治郎と黒死牟のみである。

炭治郎は^{すが}継るように、黒死牟へと視線を向けた。

「耐えるのだ……これも……鬼殺の剣士が……果たすべき務め……」

そう言う黒死牟の目は死んでいる。

六つもある目、そのすべてが死んでいた。

「それ絶対に違いますよね！ 匂いを嗅ぐまでもなく嘘ですよね!」

炭治郎はツッコんだ。

あとで聞いた話だが、後藤と耀哉の関係は十年近く続いていて、ことあるごとに^{耀哉}上司

が部下後藤を振り回しているらしい。

そのたびに黒死牟が後藤の愚痴を聞く羽目になり、数年前からは相槌を打つだけの絡線からくり人形と化している、とは累の言である。

『お勞いたわしや、兄上……』

そんな空耳が、聞こえた気がした。



累は辟易へきえきとしていた。

眼下に見える、浅草の街並み。

すでに日は落ち、田舎ならば人気ひとけの減り行く時間である。

しかし、浅草の夜は違う。

発展いぢじる著しい街には街灯が立ち並び、店舗から漏れ出る光もあって、道は明るい。

その影響もあってか、夜だというのに人混みは途切れず、まるで川のように流れている。

累は鬼になってから一度だけ、浅草の街を一人で出歩いたことがあった。

その時は人の波に流されるばかりで、まともに進めやしなかつたのを覚えている。

挙げ句の果てに、思い出すのも忌々しい出来事が起こったのだ。

それも、二連続で。

何があつたかを端的に言つと、人拐さらいに出会い、警官に迷子だと誤解された。それだけである。

それだけで、ある。

別に『飴玉あげるから』と言われて知らないおじさんについていたり、『お父さんを探そうか』と言つた警官に肩車されて喜んだりなんかしていない。

していないのだ。

あの頃はまだ鬼に成り立てで幼かつたからとか、そう言うんじゃないのである。

義父にも黙つて出歩いたのがバレて、大目玉を食らつたとか、そんなんじゃないのだ。

とにかく、累は二度と一人で表通りを歩かないことを決めていた。

「累……」

街を見下ろす累に声をかけたのは、この場を離れていた義父の黒死牟だ。

二人は数日前から浅草に来ているのだが、その際に、黒死牟は見知つた気配を僅かなから感じ取つたらしい。

その知り合いも鬼だというのだが、黒死牟と同じように無惨の血の呪いを外し、一期は鬼殺隊に協力していたそうだ。

ただ、鬼殺隊の人員が代替わりすれば、鬼と共にあることを許せない者も次第に増えていく。

そのため、黒死牟と同じ時期に鬼殺隊から離れたという。

その知り合いを見回りのついでに探しているようのだが、義父の表情を見る限り、今日も空振りだったようだ。

「今日も見つからなかったの？」

「ああ……無惨にも見つからぬよう……上手く隠れているようだ……」

そう言つて、黒死牟は肩を竦めた。

だが、見つからなくて当たり前だと考えているようで、気落ちしているようには見えない。

どうやら、本当に隠れるのが上手い鬼のようだ。

一週間ほど前に累が倒した鬼——特定の年齢になった女性だけを狙う、地面に潜れる血鬼術けつきじゆつを使う鬼——とは雲泥の差である。

むしろ、数日の調査で見つかるようなら、無惨が先に見つけて始末していることだろう。

無惨は計画性や堪え性はないが、裏切りや反抗を許さない質だ。

勝つのが難しい相手黒死牟ならまだしも、そうでない相手に刺客を送らないはずがない。

そして、気配はするが姿が見つからない以上、無事であることは間違いなさそうである。

「街にも異常はないよ。物取りとか酔っ払いの喧嘩ならあったけどね」

累はそう言うのと、再び街へと目を向けた。

相も変わらず人が行き交い、なんとも息苦しく感じてしまう。

「それはそうと……炭治郎が……浅草に来たようだ……」

「炭治郎が？ あ、初任務が終わったから？」

累は僅かに驚き、納得した。

耀哉からの手紙もあつて狭霧山で再び別れた両者だが、あくまでも『初任務が終わるまでは』という内容だったために、任務を終えたら合流しようと話し合っていたのだ。

その炭治郎から、かすがいがらす 鎧 鴉を通して連絡があつたらしい。

「裏通りに……うどん屋の屋台が……来ているらしい……そこで……待っているそうだが……」

裏通りと聞いて、累はホッと息を吐いた。

それと同時に、待ち合わせ場所に納得もする。

やはり、炭治郎も都会の雰囲気に慣れず、裏通りに逃げ込んだのだろう。

「わかつた。待たせるのも悪いし、先に合流しようよ」

累はそう言うのと、鎧鴉に案内を任せて歩き始めた。

黒死牟も、累の背を追い、歩き始める。

しかし、鏝鴉に案内されて訪れたうどん屋に、禰豆子の姿はあっても、炭治郎の姿はなかった。

もしも、累と黒死牟の二人が移動を始めるのが僅かでも遅かったなら、結末は変わっていたことだろう。

だが、この時は誰も予想をしていなかった。

まさか、雲取山にある自宅に残っていた無惨の匂いを炭治郎が覚えていて、たった一人で接触しまうなど、誰にも予想できなかったのである。



（今日は厄日か……！）

鬼舞辻無惨は苛立いらだっていた。

よもや、こんな場所浅草であるの耳飾りに出でく会わすなど、思ってもみななかったからだ。

しかも、あの子供は自分が『鬼舞辻無惨』だと確信を持って追いかけて来ていた。

冗談ではない。

無惨の擬態は完璧だ。

二年程前にちよつとした失敗をしてからは、姿だけでなく、気配すらも変えていたのだ。

見ず知らずの人間に発覚するようなものではない。

だというのに、あの子供ときたら無惨の存在に気付いただけでは飽きたらず、人の行き交う大通りで叫んでまわったのだ。

もちろん、その場は素知らぬ振りをして立ち去ったが、今の無惨が使っている隠れ蓑高蒙の家族には不信感を与えたかもしれない。

元々いた旦那を殺し、遣された妻の再婚相手として入り込むという手間暇てまひまかけて作った隠れ蓑だ。

手間をかけた分だけ棄て難がたくはある。

だが、場合によっては棄てることも考慮しなくてはならないだろう。

考えれば考えるだけ忌々いまいましい。

自分の意思で移り変わるのならまだしも、今回はあの鬼狩りによって変わらざるを得ないことが、無惨をさらに苛立たせた。

足早に脇道へと入り込んだ無惨は、あの花札のような耳飾りをした子供を抹殺することを決め、パチリと指を鳴らす。

すると、間髪いれず、上から何かが降ってきた。

「何なりとお申しつけを」

降りてきたのは鬼だ。

それも、二人いる。

無惨は苛立ちを抑えながら、二人に指令を下した。

「耳に花札のような飾りをつけた鬼狩りの頸くびを持ってこい。いいな」

二人の鬼は『御意』とだけ答えると、その場から消えるように立ち去る。

無惨は忌々しい鬼狩りが死ぬ姿を夢想して、ほくそ笑んだ。

だが、その笑みは長くは続かなかつた。

無惨の歩く先に、酔っ払いが千鳥足で歩いているのが見えたからである。

無惨は小さく舌打ちすると、壁際へと避けた。

しかし、酔っ払いの振り回す腕が肩に当たり、その視線が無惨へと向けられる。

「なんだテメエ」

酔っ払いが無惨に絡からみだした。

やはり、今日は厄日らしい。

一応、擁護しておくが、悪いのは酔っ払いのほうである。

無惨は道を譲るといふ、常識的な行動(!?)をしてきたから尚更だ。

まあ、無惨のことなので、通り過ぎたあとに『不快な酔っ払いどもを消せ』と配下の鬼に命じていただろうが。

鬼狩りに続いて酔っ払いに絡まれたことで、無惨の堪忍袋は限界を迎えようとしていた。

(よし、殺そう)

無惨が腕を振り上げかけた、その直後のことである。

浅草の街に、警笛が鳴り響いた。

「なにやつとるか、貴様らあ！」

騒がしい足音と共に現れたのは、警官隊である。

見間違いでなければ、先程の鬼狩りとの一件で駆けつけた者たちのようだ。

無惨は脳が五つもあるので、記憶力には自信がある。

間違いはないだろう。

警官たちは無惨から酔っ払いを引き剥がすと、何事かを話して解放する。

酔っ払いたちはあっさり引き下がり、浅草の街へと消えていった。

「いやはや、災難でしたね」

警官の一人が無惨に話しかける。

「いえ、助かりましたよ」

無惨はにこやかに笑う。

不快な酔っ払いを追い払ったことで、無惨のなかで警官の株が上がっていたからだ。

自分の部下もこれくらい有能ならいいのだが、などとは考えてはいない。

考えてはいない、はずだ。

自らを頂点とした組織の二番手に思うところがない、とは言わないが、考えてはいないのである。

だが、今日の無惨は本格的に厄日らしい。

話しかけてきた警官とは別の警官が、無惨を指差して、こう言ったのである。

「ああ!? こいつ、雲取山の女兒誘拐未遂犯っ!!」

なんだ、それは。

無惨の思考が一瞬にして真つ白になる。

五つの脳が、一齐に仕事を放棄したのだ。

無理もない話である。

しかし、時の流れは平等にして無情だ。

無惨の思考が停止している間にも、警官たちの会話は進んでいる。

「女兒誘拐未遂犯? なんだそれは?」

「雲取山って、奥多摩方面にある山だったか?」

事情を知らない警官たちが、首をかしげながら同僚に問いかけた。

問われた同僚の警官は、制服の胸についた衣囊えのう——ポケットのこと——から一枚の紙

を取り出す。

「間違いないですよ! ほら、さつき騒さわぎを起おこした少年が落としていった紙! たぶ

ん、これは雲取山の地元警察が作った手配書ですよ！」

同僚の警官から手配書と思わしき紙を受けとると、警官隊のまとめ役と思われる警官が内容を読み上げ始める。

「なにないに？ 鬼舞辻無惨。雲取山で女兒誘拐未遂の現行犯として手配中。顔を変えて

いる可能性あり。特徴は若芽わかめのような黒髪。梅干しのような瞳？ ふざけてるのか、こ

れ？ ああ、でも、現物が目の前に居るし、特徴の内容は当たってるから正しいのか。余

罪は殺いつものこと人、殺魔門一家は失敗した人未遂に殺人を食えば強くなるよ人教唆、殺人を食わないと死んじゃうよ人強要、脅私の事は黙ってる、追

強盗、その他諸々……」

読み上げが進むたびに、警官たちが無惨に向ける視線が冷たいものに変わっていく。

だが、無惨の脳は仕事を放棄したままである。

そして、無惨にとつて都合の悪いことは更に続いていた。

居合わせた警官の一人が、あることに気付いたのだ。

「そう言えば、この男。見たことあると思つたら、貿易会社の月彦さんじゃないか。この間、富豪の娘と結婚したって聞いていたが……裏でこんなことしてたのか」

「ああ、その富豪の娘って麗さんのことだろう？ 前の旦那が若くして死んだから、再婚

するって話で……あれ？ 確か、前の旦那の死因は他殺で、まだ犯人は見つかってな

いって話だったような……」

警官たちの視線が、再び無惨に集中する。

女兒誘拐未遂犯は間違いないとして、余罪の殺人という項目。

前の旦那が死んだ直後に入り込んだ、現在の夫。

しかも、相手は富豪の娘で、自分は貿易会社を持っている。

怪しい。

とても怪しい。

警官としての勘が言っている。

限りなく、真つ黒な『黒』だと。

なかなか見事な推理力である。

警官たちの推測は、正確に的を射いていた。

じんわりと働きだした無惨の思考は、警官たちの株を下方修正する。

賢すぎる部下というのも、考えものだ。

ならば、例えば頭が悪かろうとも、言われたことを忠実にこなす部下のほうが扱いやすくていいのかも知れない。

無惨のなかで、とある上弦の兄妹——特に染まりやすい妹のほう——の株が人知れず上がった。

「ちよつと、署までご同行願おうか？ 月彦さん。いや、鬼舞辻 なにがし 某さんとお呼びしたほ

うがいいのかな？」

警官が無惨に手を伸ばす。

ここでようやく、無惨の脳が活動を再開した。

無惨は盛大に舌打ちすると、腕を振るって警官の頭を打ち据えようとする。

だが、警官は体を捻^{ひね}って無惨の腕を避けた。

素晴らしい反射神経である。

これに目を見開いたのは無惨だ。

まさか、避けるとは思ってもみなかつたからである。

警官は腰に挿していたサーベルを素早く引き抜くと、聞いたことのある呼吸音と共に

刺突を繰り出した。

「なん……だと……う？」

一瞬の出来事だった。

いや、普段の無惨であれば対処できた攻撃である。

しかし、一時的に思考が放棄され、それが回復した直後の出来事であったため、無惨の行動が遅れたのだ。

その結果、無惨の両腕と両太股がサーベルによって貫かれた。

「わははは！ 見たか！ これぞ我が月野家に伝わる月野式呼吸術がひとつ、突きの官

である！」

警官は誇らしげに語る。

戦国の世より語り継がれてきた、由緒正しき家伝の武術だと。

月野式呼吸術。

つきのしきこきゆうじゆつ。

つきのこきゆう。

月の呼吸!?!

「貴様、あの男の縁者か?!」

無惨は目眩めまいがした。

すべてが正しく伝わってはいないようだが、聞こえてきた呼吸音は同じものだ。

一応、継国の血縁つぎくにと思わしき者は潰したはずである。

少なくとも、同じ姓をもつ者たちは滅ぼしたはずだ。

戦国の世では、土地もそうだが家名も重要な意味をもつ。

特に、武家は家名を、家を残すために武勲を求めなのだ。

それを大切にするのは、武家の当主であつたあの男とて例外ではないはずである。

まさか、自ら家名みづかを捨てるような真似はしないだろう。

だから、同じ姓を持つ者を消し去つた今、あの男の血縁は残っていないはずだった。

(いや、待て。呼吸法だけが他家に伝わったという形か……う?)

血縁が残っていたという可能性を考えたくない無惨は、別の可能性を考える。

技術的なものだけ伝わったという可能性だ。

むしろ、そうあつて欲しい。

かつて無惨を死の縁^{ふち}まで追い詰めた、あの化け物の血が現代まで残っていたなど、考

えたくもなかった。

だから、都合のいい考えだとは理解しながらも、そうに違いないと無理矢理に自分を

納得させる。

とにかく、目の前にいる警官が刃を向けるのならば、無惨としては消すだけである。

そう考えたのだが、それは叶わなかった。

闇夜に響く、鴉の鳴き声。

以前にも同じものを聞いたことがある無惨は、それが何を意味するのかわかっていた。
た。

「ちいー」

無惨は踵^{かかと}を返して逃げて転じる。

一刻も早く、この場を離れる必要があつた。

「あ、おい、待て！ この女兒誘拐未遂犯っ!!」

不名誉極まりない呼び名に、無惨の額に青筋が走る。

やはり、ここで殺してやらないと気がすまない。

無惨は足を止めようとしたが、再び鴉が鳴いた。

それを聞いて、無惨は怒りを抑えるように奥歯を噛み締める。

奴の——黒死牟の到着まで、もう間がなかった。



「で？ 炭治郎はどこをほつつき歩いてたのさ。しかも、禰豆子を置いて」

累は怒っていた。

炭治郎が待ち合わせ場所に居なかったこともそうだが、それ以上に、禰豆子を一人にしていたことに怒っていた。

「ご、ごめんなさい」

炭治郎は素直に謝った。

累の怒りが尤もな^{もつと}ことだと、ちゃんと理解しているからだ。

「炭治郎。君がいけない時に禰豆子が人を襲ってたら、どうするつもりだったのさ。切腹する？ 切腹するの？」

正論である。

炭治郎からは、ぐうの音も出ない。

確かに禰豆子は人を襲わなかったが、それは結果論である。

まだ、禰豆子には確かな信頼性がない。

人の血肉に反応してしまう状態なのだから、禰豆子の身の回りには細心の注意が必要なのだ。

もしも、炭治郎がいない間にうどん屋の店主が指先を切ったりして出血した時、禰豆子がどう行動するのかわからないし、襲われないかもしれない。

店主を襲うかもしれないし、襲われないかもしれない。

狭霧山にいる間に左近次にかけていた暗示は、もしもの時に禰豆子が躊躇う保険にはなっても、絶対に人を襲わないという保証にはならないのだ。

だからこそ、最悪の場合を考えれば、炭治郎の行動はあまりにも不味かった。

なお、長々と説明した内容は、すべて建て前である。

累が気にしているのは、そこではなかった。

「炭治郎。ここは都会の裏道なんだよ？　人拐いだって普通に出てきちやう場所なんだよ。こんな時間に禰豆子みたいな可愛い娘が一人で歩いてたら、拐われたっておかしく

ないんだ」

経験者 累に指摘されて初めて気付いたのだろう。

炭治郎はハツとして禰豆子を見た。

彌豆子は町でも評判の美人だと言われていたのは炭治郎も知っている。

何しろ、密かな自慢だったのだから当然だ。

その彌豆子が誘拐される可能性があることを、炭治郎は考えもしなかった。

「すまない、彌豆子！ 兄ちゃんが悪かった!!」

謝る炭治郎の頭を彌豆子が撫でる。

許しているのかどうかは累にはわからないが、炭治郎の表情を見る限り、ちゃんと許してもらえたようだ。

「それで？ 何があつて彌豆子のそばを離れたのさ。ちゃんとした理由があるんだろう？」

一応のケジメがついた所で、累はため息を吐きながら話題を変える。

そんな累を見ながら、炭治郎はおずおずとわけを話し始めた。

だが、その話は最初で躓くつまずことになる。

「じつは、鬼舞辻無惨を見つけて……」

「——は？」

累は目を丸くした。

今、炭治郎は何と言ったのか？

「いや、だから、鬼舞辻無惨を見つけたんだよ」

「ええ……」

「俺の家に残っていた匂いと同じものがしたから、慌てて追いかけたんだ。そうしたら、人間の家族と一緒にいた無惨を見つけて……」

思わず、累は天を仰いだ。

様々な匂いが入り乱れる浅草の街で、無惨の匂いを正確に嗅ぎとつたことは凄いことだ。

それは間違いない。

しかし、街中で鬼舞辻無惨を刺激したことだけはいただけでない。

無惨が街中で暴れだしたらどうなっていたのか、考えたのだろうか？

「ああ、いや。それはないか」

累は黒死牟から聞いていた無惨の性格を思い出して、考えを改める。

鬼舞辻無惨は気位きぐらいが高いだけの臆病者。

その通りなら、人目を引き付けるような直接的な行動はしないだろう。

むしろ、自分の存在を隠すために、ほかに注目を集めるものを生み出すはずだ。

そう考えて、累は顔を顰しかめる。

「……ねえ、炭治郎。もしかして、新しく鬼が生み出されなかった？」

そう尋ねた瞬間、炭治郎の顔が固まった。

どうやら、凶星らしい。

累は炭治郎を叱りつけようとして、思い止まった。

もしも、炭治郎のように、街中で鬼舞辻無惨に出会った場合、累は怒りを抑えて擦れ違ふことが出来るのか？

そう考えると、自信がなかった。

おそらく、炭治郎と似たような行動をしていただろう。

たぶん、鬼殺隊にいる者たちは皆そうではないだろうか？

黒死牟ならば、自分を律することが出来るだろうか？

いや、黒死牟は三百年の間、無惨を探し続けてきた男だ。

無惨への思いが長期熟成され過ぎて、一番危ないかもしれない。

累は頭かぶりを振ると、気持ちを落ち着けた。

「……ごめん。さすがに僕でも突つ走らない自信がないや。——それで、新しく鬼にされた人は？ まだ、人を食べてない？」

累の問いかけに炭治郎が答えるよりも早く、

「——おい。いつまで待たせる」

知らない声が割り込んできた。



緊急性が高い時に使われる、通常時とは違う鎧鴉の特殊な鳴き声。

それを聞きつけた黒死牟が現場を訪れた時には、すべてが終わったあとだった。

警官が集まる路地裏には、少量だが血痕が残っている。

また、犠牲者が出たのか。

そう思った黒死牟は、拳を握りしめた。

「何人……犠牲になった……」

黒死牟は鎧鴉に問いかける。

だが、返ってきた答えは意外なものだった。

「死者どころか、怪我人すらいませんよ。警官が上手く立ち回りましたから」

黒死牟は驚きを露にする。

まさか、負傷者すらいはないとは思わなかったからだ。

「相対した警官のなかに、呼吸法を使える者がいましたね。……たぶん、あなたの縁者ですよ。家伝のつきのしき？ 呼吸術とか言っていましたから」

鎧鴉の言葉に、黒死牟はなんとも言えない微妙な顔をする。

たとえば名は途絶えようとも、己の細胞が増えて残っていたことは喜ばしいことだ。

だが、家伝で伝わる内容に関しては、もう少しきちんと伝わらなかったのか？ と、文

句を言いたくもなかった。

なんだよ、突きの宮つて。

なお、現世の政治に疎とくなっている黒死牟は知らないことであるが、この時期は士族の解体が進んでいるため、先祖は士族だ、武士の出だ、という話が増えていた。

そんな世のなかにあって、しつかりと継承されていたのが呼吸法である。

その理由が己の出自を証明するためか、はたまた、就職活動に有利だったのか。

そこについては詳しく言わないが、本家や分家に限らず、士族から平民になった者も含めて、それぞれが何かしら家伝の呼吸法や流派をしつかりと継承し、身につけていることが多かった。

もちろん、なかには呼吸法とは名ばかりのものもある。

だが、そんな雑多な家伝のなかにも正しく継承されているものは、確かにあるのだ。そのひとつが、くだん件の月野式呼吸術である。

ちなみに、三百年以上の時をかけて、本家と分家で別れたり、派生したりしているの
で、現存するすべての呼吸法の名前を網羅しようとすると大変な目に遭うのは間違いない。

さらなる余談だが、幕末の京都に雷のような速さで駆け抜ける抜刀齋がいたとか、とある三番隊の組長が突撃すると風で地面が削がれるとか、そんな連中が日夜暴れまわるから大工の仕事が減らないし、民間人もおちおち寝ていられないから、刀を持っている

者は誰であれ嫌われてた、という話があったとか、なかったとか。

なお、真偽のほどは定かではない。

閑話休題

「それで……出てきた鬼は……どうなった……」

顔の中央にある目の目頭めがしらを揉み解しながら、黒死牟は問いかける。

鬼は疲れることはないはずだが、とても疲れているように見えるのは気のせいだろうか。

「出てきたのは鬼ではありません。鬼舞辻無惨です」

「なん……だと……」

黒死牟は目を見開いて驚いた。

鎧鴉も同意するように頷いている。

「よもや……同じ街に居ようとは……」

「前回の遭遇からは二年。その前は……どのくらい昔になるのか、わかりませんね」

「それで……無惨は……どこへ消えた……」

「雲取山の時と同じです。襖ふすまの奥に逃げましたよ」

黒死牟はため息を吐いた。

襖を通しての移動は厄介すぎる。

改めて、そう実感したのだ。

「無惨を……斬る前に……襖を生み出す鬼を……斬らねばならんな……」

黒死牟はそう呟くと、空間移動が出来る血鬼術をもつ鬼を優先的に滅すべきだと記憶する。

ほかに見るべきものはなさそうだ。

そう判断した黒死牟は、現場を離れようと踵きびすを返した。

すると、ちょうどその時、空気が小さく震える。

空振とは珍しい。

何事だろうか、と辺りを見回してみると、街の外れにある建物付近から煙が舞っていた。

それも、一度や二度ではない。

明らかに戦闘が起こっている。

その派手さから言って、人間同士の戦いではなく、鬼との戦いだ。

戦っているのは累だろうか？

それとも、炭治郎だろうか？

はたまた、その両者か？

眼下で働く警官たちは、この戦闘には気付いていないようだ。

距離がありすぎることと、街の騒がしさが原因だろう。

だが、気付かれないほうが都合がいい。

事後に身を隠すのが楽だからだ。

黒死牟は、戦闘があっている建物に向かって跳躍する。

向かった先に、探していた尋ね人がいるなどとは思ってもいなかった。



それは偶然の出来事だった。

浅草の夜道を散策していて、たまたま遭遇した小さな騒ぎ。

普段ならば、人目につくのを避けて通り過ぎていたはずの出来事だった。

「鬼舞辻無惨!! 俺はお前を逃がさない!!」

その声を聞くまでは。

ドクンと、心臓が大きく跳ねたのがわかる。

声のした方向に視線を向ければ、男性に馬乗りになった少年が、人混みに紛れて去り行く男に怒りの視線を向けていた。

その男を見て、納得する。

(鬼舞辻……無惨っ!!)

まさか、こんな近くに、こんなすぐそばに、家族の仇がいるとは思わなかった。

脈が早まるばかりで安定しない。

今すぐにも飛びかかって、息の根を止めてやりたい衝動に駆られる。だが無理だ。

彼女——珠世は医者であっても剣士ではない。

どう足掻いても、無惨に勝てるはずもなかった。

怒りと悔しさが、珠世の胸のなかを暴れまわる。

しかし、それを表に出さないように、感情の手綱を握って宥めすかした。

気付かれてはいけない。

気付かれるわけにはいかない。

もし、気付かれれば、待っているのは無意味な死だ。

それはいけない。

鬼舞辻無惨に一矢報いるまでは、無意味な死だけは避けなければならない。

そう自分に言い聞かせて、その場は耐えていたのだ。

その後、珠世は騒ぎを起こした鬼殺隊の少年を診療所に招いた。

もちろん、診療所に連れてくるからには隠蔽工作をするようにしてある。

隠蔽をしてくれる助手の愈史郎は『完全に隠せるわけではない』と言っていたが、珠

世とて、それは理解していた。

愈史郎には苦勞をかけるが、それでも、珠世は鬼になった者を人間として扱ってくれた心優しい少年と誼よみを通じておきたかったのだ。

鬼にされた男性を地下牢に拘束し、男性の妻は肩を嘯なまれていたので手当てを施す。そうして待っていると、愈史郎が鬼殺隊の少年を連れて戻ってきた。

ただ、連れてきたのは少年一人だけではなく、鬼の少年少女を連れてだったが。

珠世は大いに困惑した。

何故、鬼殺隊の隊士が鬼を二人も連れてきているのだろうか？

だが、同時に納得もした。

この二人を知るからこそ、少年は憎しみだけで鬼を見ることがないのだろう、と。

思いもよらない出会いだが、珠世は心から安堵する。

本当に、この鬼狩りの少年とは上手く付き合っていけそうだ。

その安堵が、まったく予想もしていない方向から引っくり返されるとは、思いもよらなかった。



炭治郎を待っていたという鬼の青年に連れられて、累は町外れの診療所を訪れていた。

そこで待っていたのは女性の鬼で、名を珠世というらしい。

この診療所の主で、医者だという。

案内役をしていた青年の鬼は愈史郎という名前らしいが、珠世以外に対する態度が悪いので、あまり好きにはなれそうにないな、というのが累の感想だった。

話を聞いてみると、珠世は『鬼を人間に戻す薬』の研究をしているらしい。

炭治郎に接触したのは、鬼を人だと言える優しい人物ならば協力してもらえないのでは、と考えたからだという。

「鬼を人間に戻す薬を作るには、たくさんの鬼の血を調べる必要があります」

珠世はそう言うと、累と禰豆子の血も調べさせてほしいと頼んできた。

人を食べずとも活動できる累と禰豆子の状態は、極めて稀なものだという。

累は同意するように頷くと、そうなった経緯を口にした。

「まあ、僕らみたいに『人を食べたことがない鬼を、餓死するまで追い込む』なんて真似、早々できるものじゃないしね」

「え……？」

累の言葉を聞いた珠世は目を丸くする。

どういふことをかを累が説明すると、珠世は額に手を当てて深々とため息を吐いた。

まさか、医学方面ならまだしも、根性論や精神論で飢餓状態を克服してくると思わなかったらしい。

「まあ、偶然の産物だけだね。長いこと生きてる義父さんも、僕が餓死に失敗するまで知らなかったみたいだし?」

「父さん……? 累さんには、お父様がいるのですか?」

「義理の、だけだね」

そう言つて、累は肩を竦める。

そこでふと、累は義父が人探しをしていたことを思い出した。

もしかして、目の前にいる珠世こそ、黒死牟の探していた知り合いなのではないのか。

愈史郎は、絶対に違うだろう。

黒死牟と愈史郎が仲良く話している姿など、まったく想像できない。

「義父さんは黒死牟っていうんだけど……」

「こつ、こくしぼう!? まさか、巖勝様のことですか!」

珠世の反応は劇的だった。

目を見開いて驚いたかと思えば、頬を朱に染めて口元を手で隠し、その後、目に見えるほどに狼狽える。

周りから見れば、明らかに特別な何かがありますよ、と言っているようなものだ。

それに気づいてか、愈史郎が騒ぎだして『黒死牟って誰だ!』と累に噛みついてきたが、知ったことではない。

それよりも気になるのは、義父と珠世の関係だ。

（え？　なに、あの反応。義父さんと何かあった？　あったって反応だよな？　しかも、巖勝みちかつって義父さんの本当の名前じゃないか。それを知ってるってことは、それくらい深い仲だったってこと？　まさかの浮気案件？　義父さんが？　ああ、いや、義父さんは元々武家の当主だったって話だし、側室が居てもおかしくないのか。なら、そっちの線かな？　……だったらいいなあ。いくら義母さんが特殊な状態だとはいえ、家庭内不和とか勘弁してほしいし。あ、でも、今の義母さんなら喜んで受け入れそう。今も何やら手を打ってるみたいだし、屋敷に行ったら色々とトンデモナイコトになってそうだなあ……）

愈史郎の声を右から左に受け流しつつ、累は今後の家族関係を真剣に考えた。

その時だ。

壁を何カ所も破壊しながら、複数の何かが診療所のなかを飛び回る。

敵襲だと気付いた時には、部屋のなかは滅茶苦茶になっていた。

累は、鬼舞辻無惨に対する警戒心が甘かったことを悟る。

黒死牟は言っていたではないか。

鬼舞辻無惨は臆病者だと。

ならば、身を隠して安全を確保したあとに、痕跡を消そうと考えて追っ手を放つのは

当然である。

竈門一家の時もそうだったのだから、今回も同じように動くに決まっていたのだ。

だからこそ、なぜ鬼の接近に気がつかなかったのか、と悔やんでいた。

しかし、この件については累を責められない事情がある。

累は預かり知らぬことだが、愈史郎の血鬼術は人や建物の気配、匂いまでを隠蔽することが出来た。

だからこそ、警戒していたはずの累も、匂いに敏感なはずの炭治郎も鬼の接近に気がつかなかったのだ。

「鬼は、正面に一体。でも、感じる気配は二体分。隠れている奴は……木の上か。炭治郎、目の前にいる鬼を任せてもいい？ 木の上にいる鬼は僕がやるよ」

累は素早く状況を判断すると、手分けして鬼を倒すことを提案する。

炭治郎は『わかった』とだけ返事すると、油断なく鞆を持った鬼に向き直った。「十二鬼月である私に殺されることを光榮に思うがいい！」

鞆を持つ鬼——朱紗丸は上着を脱ぐと、二本だった腕を六本に増やす。

こうして、戦いは始まった。

そして、あっさりと終結する。

いや、そもそもその実力に差がありすぎたのだ。

累は鬼殺を続けてきただけあって、実力もさることながら、戦いの経験値が違う。

一風変わった血鬼術を使う鬼——矢琶羽やはばでは、相手にもならなかった。

鬼殺隊に入って日の浅い炭治郎も、狭霧山で元柱である左近次と錆兎に鍛え上げられ、さらには藤襲山で十を超える鬼を斬り、初任務も終えて実力と自信をつけている。

たかが複数の鞠を投げるしか能のない鬼が勝てるはずもないのだ。

なお、累は『弱い鬼を倒させて実力を把握し、そのあとに本命をぶつけてくる作戦』だと警戒していたのだが、そんなことはなかった。

大真面目に追っ手は二体のみであり、さらなる追加はなかったのだ。

なんとも無惨な結末である。

「この鬼は、自分のことを十二鬼月って言ってたけど……十二鬼月ってなんだ？」

そもそも、十二鬼月について説明を受けてなかった炭治郎は首をかしげた。

普通とは違う、特別な鬼なのは理解しているようだが、その内容はわかっていないらしい。

累が十二鬼月について軽く説明すると、炭治郎は少し期待するような目をして珠世を見た。

「じゃあ、今の鬼は無惨に近い血をして……」

「いや、今の連中は十二鬼月じゃないよ。弱すぎる」

炭治郎の期待を、累はあっさりと否定する。

十二鬼月には瞳に階級が刻まれていることを教えると、炭治郎は落胆して肩を落とした。

「落胆するのもわかるけど、上弦の壱とかになると真面目に戦うのが馬鹿らしくなるくらいに強いよ？ あれは義父さんじゃなきゃ無理。僕じゃ倒せない」

「上弦の壱……ちなみに、どのような感じだったのですか？」

興味を引かれたのか、珠世が累に問いかける。

累は数年前に見た様子を思い出しながら、問いに答えた。

「外見とか人格面はあえて省くけど、氷の血鬼術を使う鬼だったよ。何でも凍りつかせる風を吹かせたり、氷柱とか氷像を作って襲わせたりとか？ 手札が多かったのは印象に残ってる」

「なんでも凍りつかせる風……その鬼に対して呼吸は使えるのか？」

「普通は無理」

そう言つて、累は遠い目をした。

炭治郎と珠世は首をかしげる。

「普通、じゃなければ大丈夫なのか？ まあ、黒死牟さんは鬼だから大丈夫だとは思うけど……」

炭治郎の言葉に、累はゆるゆると首を横に振った。

「義父さんはね、正面から氷の血鬼術を突破したよ。義父さん曰く『呼吸に関しては、鼻から息を吸い、口のなかで氷と空気を分離させ、温まった空気だけを肺に送ればいい。残った氷は口から吐き出すだけだ。難上空二万メートルに行くには必須な技術しく考えることではない。体が凍りつくのは、常に身震シバリングいをし続けていれば防げる。故に、大した問題ではない。氷の粒が混じった風なら、剣圧で吹き飛ばすだけだ。対処するのは容易い。それ以外の攻撃は形があるのだから、人形であろうと生み出されるたびに破壊すればいい。ならば、普段からやっていることと変わらぬだろう？』……だって」

なんとも言えない空気が、禰豆子を除いた四人の間に流れる。

おそらく、この時の四人の思考は一致していただろう。

「黒死牟さんって、どこの美食意外と脳——」

その後、話にあつた黒死牟本人が登場したことにより場は混迷を深めたが、それはまた別の話である。



大正こそこそ噂話

本作の『上弦の壺』さんは、黒死牟のことが滅茶苦茶 苦手です。

よかつたね、初めて理解できた感情だよ（白目）

上弦の壺

「え？ いや、待つて。その理論はおかしい！ 絶対におかしいから!! え？ 実演するつて……今、吐き出したのが、俺が血鬼術で振り撒いた氷を口のなかで固めたもの？

本当に？ ええ……」（ドン引き）

大正こそこそオマケ話（壺）

黒死牟

「ふむ……珠世殿たちが……安全を確保できるまでは……同行すべきか……」

愈史郎

「同行者などいらん！ 帰れ！ ……ですよね、珠世様！」

珠世

（おおお落ちついて珠世。同行するだけ！ 一緒に行くだけだから……）

愈史郎

（思い悩む珠世様もまた美しい！）

珠世

（ああ、でも！ むりムリ無理！ は、恥ずかしい！ 過去のあるこれが思い出されて顔を合わせられないっ!!）

黒死牟

「まあ……無理強いはせぬ……今までも……問題がなかったのならば……む……」
（着物の裾をちよつとだけ引つ張られた）

珠世

「よろしくお願いしましゅ……」（囁んだ）

愈史郎

（囁んだ珠世様も美しい！ だが、同行者はいらんっ!!）

累

（鬼にされた旦那さんと保護した奥さんのこと、絶対に忘れてるよね）

大正こそこそオマケ話（弐）

黒死牟 VS 上弦の壺 を見ていた神仏

神仏（壺）

「俺、これだけ見て腹筋を板チョコにする自信あるわ」

神仏(弐)
「マジカ」

小波はやがて波へと育つ（柱合会議編）

昔ながらの風情ふぜいに溢あふれる日本家屋。

その奥の間に、鬼舞辻無惨はいた。

黒を基本とした着物に身を包んだ姿は惑うことなく女性女性のものだと言えるが、間違えてはいけない。

外見はどうあろうと中身は無惨で、元の性別は男である。

この外見は、屋敷の本来の持ち主を模倣したものだ。

もちろん、その人物はすでに無惨の腹のなかである。

「……む」

無惨の感覚が、増やした鬼が死んだことを告げた。

ただそれだけなら日常茶飯事の出来事なのだが、今回、無惨の感覚が死を察知した鬼は十二鬼月の一角である。

さすがの無惨も顔を顰しかめる事態だった。

「死んだのは……響凱か」

苛立ちを抑えながら、無惨は死んだ鬼を特定する。

そして、長々と息を吐き出した。

鬼殺隊にも苛々させられるが、すぐに死んでいく下弦の鬼にも苛々させられる。

だが、今回の件には僅かながら無惨の苛立ちを抑えられる要素が混ざっていた。

「まあ、いい。所詮、響凱は十二鬼月の下弦。それも末席の陸だ。最近は人を食べる量も減っていたからな。十二鬼月の面汚しから数字を剥奪する手間が省けたと思えばいいか」

そう言つて、無惨は頭の中から死んだ鬼のことを消し去つた。

そんな些末なことよりも、研究のほうが大切なのだ。

十二鬼月の空いた席を埋めるのも、後回しでいいだろう。

そんなことを考えながら、無惨は三角フラスコの中身をスポイトで吸い上げて、持っていた試験管のなかへと流し込む。

無惨の悲願は太陽光の克服だ。

そのために必要だと思われる『青い彼岸花』の情報は、未だに噂すら聞こえてこない。貿易会社や富豪の伝を使つて海外からも情報を集めているが、こちらも芳しくなかつた。

その一方で、太陽を克服した鬼の作成も成果が出ていない。

そればかりか、鬼を作り出しても鬼殺隊に倒されてしまうことも増えてきた。

無惨が不要と断じた鬼の処分を任せていると考えれば溜飲は下がるが、十二鬼月に手を出されるなら少し考えなければならぬ。

（十二鬼月の上弦は、ここ百年以上は変動していない。それに対して下弦は入れ替わりが激しすぎるな。……いつそのこと、下弦を解体してしまおうか？）

これ以上、余計なことに思考を割きたくないと考えた無惨は、次に下弦の鬼が倒されたら下弦の鬼全員を処分することを内心で決めた。

それが実際に実行されたのは、季節が移り変わるヒマすらなかったほんのちよつとだけ先のことである。



浅草を離れて数日が経った、ある日のこと。

珠世らの護衛をしながら移動していた黒死牟のもとに、かすがいがらす鏖鴉が一通の手紙を運んで来た。

差出人の名は産屋敷耀哉。うぶやしきががや

最近お馴染みになってきた、鬼殺隊の当主からである。

もしも、この場にかくし隠の後藤がいたら『また勘なんだろ、わかってるよ!!』と言って泣き崩れたかもしれない。

なお、本当に悪いのは耀哉にダイレクトメール神託を送りまくる神仏である。

閑話休題

耀哉からの手紙を受け取った黒死牟は、その内容に目を通す。

なかには、いくつかの驚くべき内容が書かれていた。

まず最初に驚いたのは、浅草で別れた炭治郎が下弦の鬼を討ち取ったという内容だった。

数名の隊士による合同任務だったらしいが、炭治郎が単独で頸を斬ったらしい。

負傷はしているらしいが、相手が下弦の鬼なら当然である。

むしろ、普通なら入隊して間もない隊士が斬れるような相手ではないのだ。

炭治郎が戦っている間、累は重傷者の手当てをしていたらしい。

鬼の棲む家のなかで戦場になったことや血鬼術の影響もあり、戦闘には加われなかったようだ。

この戦いで救われた民間人は四名で、現在は累が町まで護衛している、と手紙には書かれていた。

そこまで手紙を読んだ黒死牟は、一旦顔をあげた。

別れてすぐに下弦の鬼に出会すとは、やはり、炭治郎は鬼殺の定めのもとに生まれて

きたのだろうか？

もしくは、炭治郎が連れてくる彌豆子が引き寄せたのかもしれない。

彌豆子は、耀哉の勘が『助けるべきだ』と判断した子供だ。

少なくとも、黒死牟はそう考えている。

そのような存在だからこそ、より強力な鬼を引き寄せ続ける運命にあるのかもしれない。

（無惨に始まり、私と累に出会い、二年の時を経て再び無惨を見つけ、珠世殿と出会った。そして此度は下弦の鬼か。……改めて考えると、なんとも凄まじき巡り合わせよ）

事の重大さを認識した黒死牟は、累宛に『炭治郎の治療が済むまでは、禰豆子を連れて離れた町で待機するように』と手紙を出した。

禰豆子の存在が強力な鬼を引き寄せるのなら、怪我人と一緒に居させるのは危険だと判断したのだ。

黒死牟自身も、珠世の護衛が終わったあとに合流できるようにもしておくべきだろう。

次いで、耀哉には『炭治郎に柱を同行させるべきだ』と一筆認めることにしたのだが、その心配は杞憂であつたらしい。

耀哉からの手紙を読み進めてみると、炭治郎が呼吸法の基礎技術である『全集中の呼吸・常中』を修めきれしていないことを理由に柱には就任させず、代わりに柱の継子にする、と書かれていたのだ。

どの柱の継子にするかは決めかねているようだが、その判断は正しいものだろう。

柱の継子になれば、何かしらの事情がない限りは協同で任務にあたることになる。ならば、もしも十二鬼月に出会っても、生存できる可能性は高い。

出会った十二鬼月が上弦の鬼だと不安が残るが、そこは誰がついても同じだろう。その代わりに問題になると言えば、禰豆子の存在がそうである。

極々一部に存在が知れているとはいえ、黒死牟と累のことは現在も秘匿されたままだ。

禰豆子の存在もまた、秘匿するべきだろう。

とは言え、炭治郎は禰豆子と共にあることを望むだろうし、その意を酌くんだうえで柱の継子にするならば、その辺りの事情を知る者でなくてはならない。

黒死牟はそう考えていたのだが、耀哉の考えは違うようだ。

何故なら、手紙には『柱ちゅう合会議に出席してほしい』と書かれていたからである。

つまり、耀哉は禰豆子の存在だけでなく、黒死牟と累のことも公開するつもりなのだ。鬼からの被害者が集まる鬼殺隊の屋台骨が揺らぎかねない案件だが、耀哉は大丈夫だと判断したらしい。

それが勘によるものかは不明だが、おそらくはそうなのだろう。

(もしや、蝶屋敷の一件が予想以上にうまくいっているのか……?)

黒死牟の脳裏に一人の女性の顔が浮かぶ。

その顔を思い出した黒死牟は、嬉しいような悲しいような、なんとも言えない微妙な顔をした。

気を取り直した黒死牟は、耀哉からの手紙を読み進める。

すると、その文末にはこう書かれていた。

『そろそろ奥方殿を抑えきれなくなってきたから、蝶屋敷に顔を出してくれと助かるなあ。今、黒死牟殿のすぐそばに手土産てみやげ、もとい、ちようどいい匣おとぎもとい、関心を引ける人物がいるはずだから、いいよね？』

手紙を読んでいた黒死牟は、書かれていた内容に思わず頭を抱える。

確かに、彼女と珠世は以前からの知り合いだが、現在は特殊な状態なため、一方的なものだと言えるだろう。

彼女の存在を珠世が知ったとき、どのような反応をするのかは、正直な話、黒死牟にも想像がつかない。

あと、今の彼女には『とある野望』があるようなので、あまり会わせたくないなあ、というのが黒死牟の本音である。

旧交を温める分には構わないのだ。

だが、彼女が掲げる『とある野望』のせいで、黒死牟自身にとって良からぬ事が起きることがほぼ確定している。

それを上手く避けることが出来るのか、と不安を感じているのだ。

だが、耀哉がこうして手紙に書いたということは、そうしたほうがいい、ということである。

産屋敷家の直感力を知っているだけあって、避けることは出来そうにない。

下手に逆らって、物事が悪い方向に流れても困るのだ。

黒死牟は長々とした息を吐き出すと、腹を括くることにした。

どうせ避けられぬ事態であるならば、意を決して向き合うしかないのだ。

「珠世殿……少し……話がある……」

こうして、黒死牟は珠世を連れて産屋敷邸と蝶屋敷に出向くことが決まった。

幸いだったのは、黒死牟が柱合会議に参加するのは炭治郎の怪我が癒えてからになる、ということだろうか？

鬼殺隊に味方する鬼の公開と、炭治郎の継子問題をまとめて議題にあげて、反対する者を煙に巻こうとしているのかもしれない。

何はともあれ、炭治郎が動けるようになるまでの期間を、黒死牟は不安を払拭ふつしょくするようにならなければならない。

なお、鬼にされた男性のこともあり、愈史郎は新たな隠れ家で留守番を任されることになる。

もちろん、珠世が鬼殺隊の元に行くことには大反対していたが、結局、決定が覆ることとはなかった。

「珠世様あああ!!」



某所にある産屋敷邸。

鬼殺隊の当主たる産屋敷耀哉の住まいであり、柱合会議が開かれる会場でもある。

ここに来るためには複数人の隠かくしと錠かすがい、鴉の案内が必要不可欠であり、その人員も定期的に入れ代わるために、位置を特定することはほぼ不可能だ。

なお、耀哉だからなんて俺は別件なんだよっ!!の親友たる後藤は別である。

産屋敷邸の庭は広さもさることながら、庭師によつて風情ある素晴らしい景色が作り出されていた。

桜や銀杏いちじょうなど、四季によつて表情を変える樹木が表情を変える様を楽しめるよう配置されているし、なにより、例の池にはたくさんの鯉が泳いでいる。

そんな庭が、柱合会議に出席する者たちの集合場所だった。

池に架かる石橋を、一人の女性が歩いている。

蝶の形をした髪留めをした女性は、その長い黒髪を靡なびかせながら上機嫌に鼻唄を歌っていた。

彼女の名は胡蝶カナエ。

鬼殺隊の最高剣士である『柱』の一人で、『花柱』に就任した女性だ。

そして、蝶屋敷の実質的な女主人でもある。

彼女が上機嫌な理由はいくつかあるのだが、そのひとつは『月柱の存在を公開すること』が決まったからだだった。

胡蝶カナエは柱に就任する以前から、『人と鬼は仲良くなれる』と公言して憚はまからない狂人である。

少なくとも、鬼の被害者が集まる鬼殺隊のなかでは、それが彼女に対する認識だった。だが、どれだけ鬼を斬り、どれだけ悲惨な現状を見ても、カナエの意思は変わらない。

その様も合わせて、益々ますます狂人であると認識されていったのだ。

しかし、彼女は狂ってなどいない。

彼女はただ、知っているだけだ。

鬼に身を窺やっしてなお、人を守るために鬼殺を続ける存在がいることを、知っていただけなのである。

突然ではあるが、胡蝶カナエは普通の人間ではない。

確かに、彼女は人間の両親から生まれた、純粹な人間ではある。

だが、彼女は前世の記憶を持って生まれてきていた。

それも、二人分の記憶を持って、である。

なお、生まれたばかりの彼女に記憶の混乱などなかった。

何故なら彼女、いや彼女たちは寿命を迎えたあとに辿り着く場所において、神仏を脅してそうなるように仕向けたからである。

もちろん、一部の神仏たちからは危険人物だと認定されたが、豆腐で悪乗りしていた神仏たちからは『面白くなりそうだからいいじゃん』と軽いノリで了承されていた。

その結果、不思議な耳飾りのチカラで二人の魂はひとつに溶け合い、輪廻の輪へと戻されたのである。

「はやく来ないかなあ、巖勝様。あなたのカナエが待ってますよお？」

そう言つて、カナエは花のような笑みを浮かべた。

今生での名は胡蝶カナエ。

前世での名は継国カナエ。

ならびに、栗花落カナエ。

黒死牟こと『継国巖勝の正妻』と『初代・花柱』の魂と記憶を受け継ぐ彼女は、一日千秋の思いで夫の帰りを待っていた。

ちなみに、そんな彼女が掲げる野望はただひとつ。

途絶えてしまった『継国家の再興』である。



（この敷居を跨ぐのも、随分と久しぶりだな）

そんなことを考えながら、錆兎は産屋敷邸の門を潜る。

数日前、錆兎は救援要請を受けて駆けつけた場で、下弦の鬼を斬っていた。

その功績をもって、柱に復帰することが決まったのである。

ちなみに、その救援要請を出したのが炭治郎だったことには驚いた。

先日、手紙で下弦の鬼を斬ったと書いてあっただけに、十二鬼月と連戦しているなど

誰が考えるだろうか？

運が良いのか、悪いのか、判断しづらい話である。

ともかくにも、久し振りに参加することになった柱合会議だ。

その議題のなかには、錆兎の柱再就任に関する話も含まれている。

会場である産屋敷邸の庭に向かうと、すでに幾人かの人影があった。

そのなかには見知った顔もあれば、見知らぬ顔もある。

見知らぬ者たちは、錆兎が柱を辞したあとに就任した新たな柱たちだろう。

ちなみに、錆兎が水柱だったところから柱として活動し、現在も在任しているのは『岩

柱』である悲鳴嶼行冥と『音柱』である宇髄天元の二人だけである。

そのころに比べれば、鬼殺隊の戦力は大幅に増大していると言えた。

鑄兎のことには気付いたが、顔を知らない者たちは首をかしげている。だからだろうか。

鑄兎のことを知る天元が率先して声をかけた。

「よお、鑄兎！ 久し振りじゃねえか！ 下弦の鬼を派手に仕留めたって聞いてるぜ！」
「お久し振りです、宇髓さん。相変わらず派手ですな」

「元・水柱が再び柱として復帰するとは、とても喜ばしいことだ」

「悲鳴嶼さんも、お変わりないようで」

寶石類を身につけた派手な男と、合掌しながら数珠じゆずを鳴らす男行冥が鑄兎に挨拶をする。

それで鑄兎が何者なのか理解した者たちが、次々と挨拶にやってきた。

一通りの挨拶が済んだあと、鑄兎は一人だけその輪のなかに加わらなかつた人物に目を向ける。

「久し振りだな、義勇」

「鑄兎……」

少し離れた位置に突っ立っている親友義勇に、鑄兎は声をかけた。

「水柱として、しっかりとやってるみたいじゃないか。俺は安心したぞ」

「大したことじゃない」

「ああ。柱ならば皆、当然のようにやっていることだ。だが、だからと言って誰もが出来

るわけじゃない。そんなに自分を卑下するな」

「ああ」

「ところで、真菰はどうした？　日輪刀にちりんとうが濃い白色に染まったから『霞の呼吸』を学ぶと

言い出したときは驚いたが、あつという間に柱にまでなっていただろう。まだ来ていないのか？」

「真菰はもういない」

「義勇……お前の言葉が色々足りていないのは知っているから驚きはしないが、その言い方だと真菰が死んだようにしか聞こえないぞ」

久し振りに会った義勇は相変わらず口下手なのか、色々と言葉が足りていない。

しかし、それでこそ義勇だと感じる。ある種の境地にいる錆兎は気にしなかった。

義勇のことを知る柱たちは、会話を成立させている錆兎に驚きの視線を向けている。その視線だけで、義勇がどういう目で見られているのかを、錆兎は察してしまった。

「——で、真菰はどうした？」

「真菰さんは少し前に引退しました」

錆兎と義勇の会話に割り込んできたのは、現・霞柱が消えた柱の時透無一郎だ。

無一郎が言うには、鬼との戦いの最中に逃げ遅れた人を庇かばった際に、脚をやられてし

まったらしい。

「僕も継子として現場にいたのに、真菰さんに怪我をさせてしまいました……」

そう言つて、無一郎は肩を落とした。

彼なりに責任を感じているらしい。

「無一郎……」

錆兎は励ましの言葉をかけようとしたが、その前に無一郎は自力で立ち直つた。

「だから、責任はとりますつ!!」

ふんすつと荒い鼻息とともに、無一郎は握り拳をつくる。

勢いに圧された錆兎は戸惑いながらも『そ、そうか。まあ、頑張れ』としか言えなかつた。

無一郎の言う責任がどういう意味を持つのか。

錆兎がおね×シヨタそれorシヨタ×おねれを知るのは、まだ先のことである。

真菰に関する話が一段落した直後、新たな人影が庭先に現れた。

全身に刀傷を負つた男で、霧囲気からして堅気とは思えない。

その人物を見て、義勇は言葉の爆弾を投げつけた。

「義兄さん」

その瞬間、空気が凍りついた。

錆兎ですら、理解の及ばぬ発言だった。

誰もなにも発しない時間が過ぎ、やがて、刀傷を負った男の全身に鳥肌が立つ。そして、空気が爆ぜた。

「その呼び方は止める富岡ア!!」

凄まじい怒号が鼓膜を叩く。

錆兎が耳を押さえて顔を顰めていると、事情を知っているらしい女性——胡蝶カナエが二人の関係を説明をしてくれた。

「あの人は『風柱』の不死川実弥さん。富岡さんのお姉さんである薦子さんの旦那さんです」

「義勇の姉? ……いやいや。義勇からは死んだと聞かされていたような……?」

錆兎は顎に手を当てて、過去の記憶を思い起こそうとする。

そして、思い出したのは次のような言葉だった。

『俺の姉は、幸せになるはずだった未来を鬼によつて奪われた。だから、俺は鬼を許さない』

しばし考え、錆兎は自分の思い違いを理解する。

「つまり、死んではいけないが、幸せになる未来とやらを奪われた?」

錆兎の呟きを聞いたカナエは納得したように手を打った。

「薦子さんは、幼かった富岡さんを庇つて背中に大きな傷を負ってしまったんですよ。」

それが元で翌日の結婚式は取り止めになって、最終的には結婚の話自体も流れてしまったとか」

「ああ、それで『幸せになるはずだった未来を奪われた』という発言に繋がるのか」
 錆兎は納得したように腕を組む。

毎度お騒がせな義勇の口下手だが、解説すると納得がいつて気持ちがいい。

なお、そう思えるのは錆兎を含めて極少数である。

「義兄さん。おはぎだ」

「まずは その呼び名を止めろオ!! おはぎなんぞ誰が食う……いや、待て。まさか、それは薦子の手作りか?」

「ムフフ……」

「チイツ! 薦子め、弟と旦那の仲を取り持つ姉富岡兼妻の気遣いに余計な知恵をつけさせやがって……って、量

が多いな!? さては会議中に皆で食べてもらおうつもりで作りやがったな? おい、富

岡ア。薦子からだつって屋敷の使用人に渡してこいイ」

「わかった」

義勇がおはぎの詰め込まれた重箱を包んだ風呂敷を片手に庭から出ていく。

その背中を見ながら、実弥は盛大にため息を吐いた。

「……やべエ。薦子が絡んだときだけ富岡が何を言いたいのか理解できるようになって

きやがった……」

「……不死川。お前はきつと、疲れている」

普段のねちっこさをどこかへやった『蛇柱』の伊黒小芭内が、肩を落として落ち込む実弥の肩を叩く。

なお、小芭内の珍しい様子を見ていた『恋柱』の甘露寺蜜璃がキュンと胸を高鳴らせていたが、残念ながら彼は気がついていなかった。

「限定的とは言え、義勇の言いたいことを理解するとは。なかなかやるな！」

「なかなかやるな！　じゃねえんだよオ、おいイ！！　つうか、そう言うてめエは誰だア！」

親指を立てる錆兎の姿が癩に障ったのだろう。

実弥は嘔みつくように反発する。

「落ち着け、不死川。そいつは元・水柱の錆兎だ」

「俺も初めて会ったが、なかなか話せる男だぞ！　富岡の少ない言葉のなかに込められた意味も、しっかりと理解していた！　同棲している胡蝶の妹でも解説に苦心しているというのに、よもや、あれほどまで意志の疎通が出来るとは思わなかった！　世の中は広いな！」

そう言って、『炎柱』の煉獄杏寿郎は大声で笑う。

何やら聞き捨てならない内容が含まれていたような気もするが、気のせいだろうか？

「富岡さんは私の妹と同棲しているんですよ。つまり、未来の義弟ですね」

そう言つて、カナエが満面の笑みを浮かべる。

思つてもみなかつた親友の変化に、錆兎は驚いた。

女性と同棲していることもだが、話を聞くと、告白したのは義勇からだったらしい。

その口説き文句が『毎日、鮭大根を作つて欲しい』というのは義勇らしいが、それを蝶屋敷に訪れている人の目がある場所今で言う壁ドン！しなからでやつたそうだ。

ちよつと見てみたかつたと思つた錆兎は悪くない。

「派手な告白と言えば、不死川もだろう？ 俺は嫁たちから聞かされたクチだが、確か

……『傷だらけの男と傷物女で似合いだろうがア！ てめエは黙つて俺のところに嫁に来ればいいんだよオ!!』だったか？」

「人様の色恋沙汰を話のネタにするのはやめろオ!!」

実弥が顔を真っ赤にして叫ぶが、周りはニヤニヤとしながら見ているだけだ。

ちなみに、蔦子に嫁に来いと言つた後日、義勇が嫁蔦子の弟だと知つた実弥は愕然紹介されたとした

らしい。

そうしていると義勇が戻つてきた。

その傍らかたわには、鑄兎もよく知る人物の姿もある。

「おお、炭治郎か。怪我は平気か？ もう大丈夫なのか？」

「あ、鑄兎さん！ 先日はありがとうございます！」

鑄兎の言葉を聞いて、その場にいた全員の視線が隠後藤に背負われた怪我人炭治郎に集中する。

「あいつが竈門炭治郎か。鬼殺隊に入つてすぐに下弦の鬼を斬るたあ、派手なことしやがる」

「うむ！ そのうえ、先日も下弦の鬼に出会っている！ あまりにも強い鬼にばかり遭あいすぎるが故に、お館様が心配なさるのも理解できるな！」

天元と杏寿郎の発言は約一名を除いて、この場にいる者たちの心の内を代弁していた。

繰り返すが、約一名を除いて、である。

「その花札みてえな耳飾り。……そうか。最終選別で、俺の弟の腕を折りやがったのはてめエかア！ 竈門炭治郎オ!!」

「ええっ!?!」

炭治郎を見て、その約一名実弥がキレた。

驚く周囲を余所よそに、肩を怒らせながら歩いてきた実弥は、その手を炭治郎の頭に伸ばし、

「——よくやったア！ 誉めてやるウ!!」

荒々しく撫でた。

「ええ!？」

これには周囲だけでなく、当事者の炭治郎も驚き、次いで困惑する。

わけがわからない。

疑問符を浮かべて困惑する周囲を代表して、錆兎は実弥に問いかけた。

「弟の腕を折った炭治郎を怒らないのか?」

「怒るわけがねえだろオ? こいつが弟の腕を折つたのは、俺の弟がお館様のご息女に殴ったり、髪を引っ掴んだりした乱暴を働きやがったからだア。お館様のご家族に怪我をさせるような奴は、俺の弟じゃねえんだよオ!!」

実弥の言葉に、周囲は納得する。

なお、約一名だけ気まずそうに視線をやらかした兄をもつ無一郎そらす者もいたが、そこには誰も気付かなかつた。

◆◆

産屋敷邸の室内に場所を移し、柱合会議が始まった。

最初の議題は錆兎の柱再就任である。

「錆兎。君が再び柱として戻ってきてくれたことを嬉しく思う。どうか、これからも

人々のために力を振るっておくれ」

「はい！ お任せください、お館様！！」

簡単ではあるが、こうして錆兎は再び柱として返り咲いた。

柱としての呼称は『漸柱』である。

その由来は『水の呼吸』から派生した、二刀流による呼吸法『漸の呼吸』からとられた名だった。

漸、という文字を選んだのは錆兎自身だ。

漢字としては『漸く』や『漸む』と読むことができ、意味合いとしては『徐々に進む』というものがある。

数年間、悩み、苦しみ、迷いながらも歩んできたからこそ、錆兎はこの文字を選んだ。そして何より、この『漸』という字には『水』を意味する『さんずい』が使われている。

水の呼吸を修めた者として、師との繋がり講師を外したくはなかった、という側面もあった。

錆兎の柱再就任の儀も終わり、会議は次の議題へと移る。

「皆、気付いていると思うけど、改めて伝えておこうか。錆兎が柱に復帰したことで、在任している柱の人数が定員の九人を超えた」

その場にいた炭治郎以外の全員が、僅かに頷いた。

錆兎を柱に再任する話は鎧鴉からの連絡で周知されていたため、どうなるのだろうか
と疑問に思っていたのだ。

ちなみに、柱の定員が九名なのは、『柱』という漢字が九画で成り立っているからであ
る。

耀哉^{かがや}はやや置いて続きを話し出した。

「柱の定員をどうするのか。それについては『柱』という制度を制定した本人に意見を聞
こうと思う」

「本人、ですか？」

蜜璃が疑問の声をあげると、耀哉は悪戯^{いたずら}を仕掛ける子供のような顔をする。

「そう。今から三百年ほど前に、バラバラだった鬼狩りたちを纏めて『鬼殺隊』という組
織の強固な地盤を作った方々を呼んであるんだ。……じゃあ、入ってもらおうかな」

耀哉がそう言うのと、襖^{ふすま}のひとつがすつと開いた。

そこにいたのは、強大な気配を隠しもしない六つ目の鬼だ。

今の今まで気配を殺していたらしい。

「なっ!？」

錆兎の腰が僅かに浮き、刀へと手が伸びる。

だが、不思議なことに鑄兎以外の柱たちは目を見開くばかりで動こうという気配が見えない。

「義勇!?!」

慌てた鑄兎は傍にいた親友へと声をかけるが、当の義勇は『どうした?』とでも言うような目でこちらを見ている。

「いや待て義勇! 鬼だぞ鬼! しかも俺が勝てなかった六つ目の鬼だ!! お前にも話してあっただろうが!!」

鑄兎は『思い出せ!』とばかりに話かけるが、義勇はいつもの無表情を崩さず、むしろぼんやりとした様子だ。

まさか、何かしらの血鬼術けつきじゆつを受けているのか?

そう思い至った鑄兎は焦る。

そんな鑄兎の焦りなど知らぬとばかりに、義勇はいつもと変わらない様子で口を開いた。

「鑄兎。月柱の黒死牟殿だ」

「んん!?!」

義勇の言葉を、鑄兎は理解できない。

まあ、今回の件に関しては仕方のない話でもあるのだが。

「ああ、あれが胡蝶姉が地味に繰り返して言つてた六つ目の鬼か。聞いてた通りの派手な面構えだが、この派手な気配を殺せるとかやべえな。譜面が完成したとしても一人じゃ勝てる気がしねえ」

そう言う天元の表情は引き攣つっている。

カナエ以外の柱たちも個人差はあるものの、似たようなものだった。

そんななか、一人だけ皆とは違う行動をする者がいた。

無一郎である。

彼は慌てた様子で平伏すると、一礼してから挨拶をした。

「お、お久し振りです、ご先祖様！」

「ご先祖様？」と、事情を知らない者たちの頭上に疑問符が浮かぶ。

困惑する周囲を余所よそに、無一郎と黒死牟の会話は続く。

「無一郎か……元気そうで……なによりだ……有一郎は……息災か……」

「は、はい！ 今は炎柱のもとで継子をしています！」

「そうか……お館様のご家族に……粗相は……なかりうな……」

「もちろんです！ あまね様に水をかけて追い返したご迷惑をお掛けしたのは、あの一件のみで、あれもぼつ……私の身を

案じてのことですし！ 兄も反省しています!!」

「ならばよい……精進いたせ……」

「はい！」

黒死牟との会話が終わると、無一郎はホッと息を吐いた。

かなり緊張していたらしい。

無一郎との会話が一段落したところで、意外な人物から声があがる。

その意外な人物とは行冥だった。

「黒死牟殿の声には聞き覚えのある。もしか、十年ほど前にお会いしたことはございませんか？」

「む……その声は……もしか……寺の住職をしていた……行冥和尚では……」

「ああ。やはり、そうでしたか。あの時、黒死牟殿緑巻に渡した笛はうまく音が鳴らなかったからちゃんとして方学んだに手作りしていただいた尺八は、今でも愛用させていただいております」

「そうでしたか……いつかまた……笛の共演でも……」

「そうですね。喜んで、お付き合いしましょう」

行冥と黒死牟は朗らかに笑いあう。

だが、周りの人間は与えられた情報が斜め上すぎて混乱していた。

尺八仲間だったなんて、誰が予想できるか。

そんな周囲の状況に対して、耀哉は更に畳み掛けるような発言をする。

「来てもらったのは黒死牟殿だけじゃないんだ。……紹介しよう。かつて鬼殺隊に所属

していた鬼の医者、珠世さんだ」

耀哉の紹介に合わせて、襖の向こうから珠世が現れた。

彼女はそのまま黒死牟の隣へと座ると、一礼してから挨拶をする。

「医者の珠世でございます」

その様子を見てカナエが目を輝かせているが、彼女が何かを言うよりも速く、杏寿郎が笑いだした。

「よもやよもや、だ！ 煉獄家にある古文書に記された方々にお会いできるとは思わなかった！」

「煉獄家には、お二人のことが記された書物が残っていたんですか？」

一時期は継子という師弟関係だったこともある蜜璃が問うと、杏寿郎は『うむ！ ただし、保存状態はあまり良いとは言えんがな！』と笑う。

その発言を聞いて、黒死牟は『日の呼吸を記した書物』の状態を察してしまった。会話が一段落したと見た耀哉は、オマケとばかりに紹介を続ける。

「それと、累と禰豆子だ。あと数名、鬼殺隊に協力してくれる者たちがいるけど、今日、ここに来てもらったのは彼らだけだ。皆、仲良くしてもらえると嬉しいな」

いつの間にやら、黒死牟の隣に座っていた累と、その膝の上にいる禰豆子に視線が向く。

なぜか禰豆子は小さくなったままだったが、ご満悦な表情を浮かべているため、炭治郎はあえて触れなかった。

さて、ここまで連続して情報を与えられ、混乱するというのは酷である。

現れた鬼が一人だけならまだしも、四人も現れたうえに身内と言える柱のなかに接点のある者が次々に現れ、さらには『まだいるよ』と言われれば無理もない。

そんな状況のなか、錆兎は義勇に視線を向ける。

先程、義勇は黒死牟のことを知っているような発言をした。

だが、錆兎には知らされていない。

そして、天元の『胡蝶姉が繰り返し言っていた』という発言は、黒死牟のことは柱のなかでは知られた話である、ということの意味している。

つまり、引退した真菰も知っている、ということだ。

(知らなかったのは、俺だけ……?)

愕然とした錆兎は、ふと、炭治郎を見た。

柱ではない炭治郎も混乱しているだろうと、そう思ったのである。

だが、現実は無情だった。

「炭治郎は……」

「えっと、すみません。知ってました」

ブルータス
炭治郎、お前もか。

この時の錆兎が受けた衝撃は凄まじかった。

あまりのことに、錆兎の口から『俺は……嫌われている？』なんて言葉が出てくるくらいには衝撃だったのだ。

「落ち着け錆兎。今回の件は派手に間が悪かったただけだぞ」

天元が慰めの言葉をかけるが、錆兎の耳に届いていたのかは謎である。

そんな錆兎に憐れみの視線を向けながら、小芭内は耀哉へと問いかけた。

いくら鬼殺隊に協力していようが、鬼は鬼である。

以前から話を聞かされた柱ならまだしも、鬼殺隊の隊士には受け入れがたい話だ

と思うからだ。

だが、耀哉は再び悪戯を仕掛ける子供のような顔をして言ったのである。

「じつは、以前から蝶屋敷で働いてもらってる方がいるんだ。小芭内は利用することが少なかったから気付かなかったみたいだけど、病棟にお世話になったことがある隊士は皆、察していたようだよ？ ねえ、実弥」

耀哉の言葉に、実弥の肩が僅かに跳ねた。

なお、柱が怪我をすることは稀である。

とくに鬼殺隊最強と目される行冥と、技巧派の義勇と小芭内は怪我をすることが極端

に少ない。

杏寿郎は実家である煉獄家に病弱な母親がいることもあり、
人並み外れて辛抱の利く体だと自認する家系
 医師と介護人を兼ねた者が常駐している。

そのため、怪我をしても蝶屋敷には行く必要がないのだ。

ほかの柱も似たようなもので、例え怪我をしても擦り傷程度なので、蝶屋敷に行ったことのある者は少なかった。

蝶屋敷の病室や処置室にまで行ったことがある柱は、しのぶと交流のあった義勇と、刀傷の絶えない実弥くらいだろうか？

あとの柱は屋敷の使用人に頼めばこと足りるので、蝶屋敷の近くには寄っても、屋敷のなかにまで入っていく必要がなかったのである。

ちよつとした例外は、蝶屋敷で開かれる女子会に参加している蜜璃だったが、
周りが気にしないから大丈夫だと思っていた。
 彼女はあまり気にしてなかったらしい。

耀哉が公表した今でも、彼女は『そつか、おばさまのことかあ』と呑気に構えている。
 鬼に対する恨みの無さが、蜜璃の態度に現れていた。

「蝶屋敷に鬼が？ ……どういふことだ、胡蝶、不死川」

小芭内が鋭い視線を向ける。

だが、カナエはさらりと受け流して言った。

「すべてはお館様と相談して決めたことです」

なお、蝶屋敷に鬼を受け入れた背景には表人を食べない鬼という存在の証明向きなな理理由の他に彼女の掲げる

『野望』が関わっているなど、おくびにも出さない。

場の緊張感が高まるが、それは行冥が手を叩いたことで霧散する。

「話が大きくずれている。議題は柱の定員に関するものであったはずだ」

蝶屋敷に鬼がいるのは問題だが、月柱の件やお館様の了承がある以上、今は黙認しろ、と言外に言っているらしい。

「そうだったね、行冥。場を混乱させてしまつてすまない。……じゃあ、黒死牟殿から何かあるかな？」

耀哉から水を向けられ、黒死牟は頷いた。

なお、何故か柱合会議に毎回のよう同席させられる後藤が『いや、混乱させたのはオメエだろ』という視線を耀哉に送っていたのは余談である。

「柱の定員数は……『柱』という文字の……画数が九画だという……それ以上の意味は……ありません……財政的な不安がない限り……定員数を増やすことに……問題はな
いでしょ……」

「なるほど。それなら、何名まで増やそうかな？」

耀哉に問われ、黒死牟は悩んだ。

例え柱の定員を倍にしても、その地位に相応しい人材が居なければ無意味である。増やすにしても、その上限はそこまで多くは出来ないだろう。

ならば、『柱』の画数を定員数にしたように、理由のある上限を設けるべきだ。

「お蝶様屋敷を支えるべき柱……故に……最高剣士の地位を……『柱』と定めたのが……そもそも始まり……ならば……『支える』という字を足して……『支柱』……支という文字は……四画ですので……増やす上限は……四名で如何いかでしょうか……」

「なるほど。誰か、意見のある子はいるか？」

黒死牟の発言を聞いた耀哉は、今度は柱たちに意見を求める。

すると、カナエが手を挙げた。

「私の妹であり、継子である胡蝶しのぶは鬼の頸くびは斬れませんが、独自に開発した毒を以て下弦の鬼を一体討伐しています。今までは柱の定員ということで継子のままでしたが、定員数の上限を上げるのなら、柱に昇格させていただけませんか？」

「そうだったね。なら、しのぶを柱に昇格させることにしよう。屋敷はどうしようかな？」

「屋敷に関しては、蝶屋敷を増築する形の方が何かと便利だと思います。何より、しのぶには任務より研究のほうを優先してほしいのです。柱に推薦するのも、研究の資金的な理由が強いので……」

「なるほどね。任務については鎗兎や黒死牟殿たちが加わる予定だから、問題はないかな？ それで、しのぶ以外に条件を満たしている子は居たかな？」

「鬼を五十体以上討伐した、という条件でなら該当者は多数います。……ですが、十二月と戦えるのか？ と言われると、誰も彼もが少々実力不足かと」

行冥が数珠を擦り合わせながら報告する。

耀哉は『そうか』と残念そうに呟くが、下手な人物を柱に昇格させるわけにもいかない。

柱の任務は平隊士のそれとは危険度が違う。

実力の伴わぬ者をあてても、すぐに命を落とすのが目に見えるほどに危ない話が多いのだ。

柱の定員数と昇格についての話が一段落した時、おもむろ徐に珠世が手を挙げる。

「柱の皆様にお願ひしたいことがあります」

そう前置きして始まった珠世の話は、それを聞いていた全員に少なくない衝撃を与えた。

珠世が長い年月をかけて研究している、鬼を人間に戻す薬。

まゆつぼ眉唾物とも言える話だが、禰豆子のことにまで話が及ぶと、全員の表情が変わった。

何故なら、禰豆子の血鬼術は鬼に由来するものだけを焼き尽くす、親殺しとも言える

代物だったからだ。

上手くすれば、人を鬼に変化させる『無惨の血』だけを殺し、人間の部分だけを残すことも出来るかもしれない。

そのうえで、禰豆子自身の体質変化も著しい。

このまま変化していけば、より安全な形で人間に戻れる薬を作れるかもしれない。

「もし、人間に戻れる薬が作れなくても、現在の禰豆子さんの血鬼術は、無惨に有効打を与えることが出来ると思われます。血の研究が進めば、彼女の血鬼術以外にも『親殺し』が出来る薬が作れる可能性もあるのです」

無惨の討伐は鬼殺隊の悲願だ。

そして、珠世からの依頼は『無惨に近い血を持つ鬼の血液採取』である。

要は『十二鬼月を見つけたら、討伐するついでに血を採取してほしい』ということなので、鬼殺隊としてやることは変わらないのだ。

柱ほどの実力者たちなら難しい話ではない以上、依頼を断る必要はない。珠世から採血用の短刀が各々に配られ、会議の議題は次へと移る。

その後、柱合会議は夕刻まで続けられた。

鬼殺隊にとって転換期と言える会議は、日暮れを迎えることで幕を閉じたのである。



大正こそこそ噂話（壱）

胡蝶カナエ

あの世に逝った継国カナエと粟花落カナエの魂がポ○ラ合体して生まれたのが胡蝶カナエという、とんでもない設定のもとに生まれた女傑じよけつ。

そんな存在がいたら、鬼が来ても怖くない。

おかげさまで、ご両親は健在で蝶屋敷で薬師をしてる。

前世の記憶とか継国家の再興とか家族にはちゃんと話してあるうえに、了承済み。

鬼いちゃんに逃げ場はない。

蝶屋敷や任務先で共に働いた隊士に布教活動していたのも、堂々と鬼いちゃんを迎え入れるため。

着々と地盤は固まっている。

おかげで実弥と炭治郎は楽が出来た。

ただし、代償（？）として二人の母親が狙われることに……。

継国家の血筋を増やすために側室候補を集めている。

とくに、未亡人あまのことか旦那だんなさん家の母親とかに恵まれなかつた奥様おんさまとかが狙い目。

鬼いちゃんはそのうち『人妻殺し』と呼ばれるだろうね。

お労いたわしや、兄上……（棒読み）

最近では忍しのびの奥様友達から『吉』の付く花街花魁にいい感じの人がいたけど、見に来てみる？』とか連絡を受けた。

そのうち、隠かくしの姿で調査に乗り出す予定。

大正こそこそ噂話（弐）

元・霞柱 真菰

手鬼のいない最終選別からは無事に帰ってきた。

ただ、真新しい日輪刀を握ったら濃い白色に染まって吃驚びっくりする。

青くなると思つてたから、予想と違つて愕然とした。

師である左近次からは『適性が低い呼吸法にこだわつて死ぬよりも、適性の高い呼吸を学んで生きてほしい』と説得される。

なので、呼吸法を学び直した。

適性が高いだけあつて、あつさり覚えて霞柱にまで登り詰める。

そのうち、時透真菰になる予定。

ちなみに、キメツ学園物語の設定の影響を受けて、黒死牟と行冥の楽器仲間に数えられている。

大正こそこそ噂話（参）

霞柱 時透無一郎

霞柱に真菰が在任してたので、柱就任最速記録は露と消えた。

その代わりに運命の人を見つける。

継子になつて行動を共にしてたら惚れていた。

年上のお姉さんが醸し出す色気と母性に惹かれたわけではない。

無一郎

（心頭滅却、煩惱退散！ 真菰さんを変な目で見ちゃだめだ……っ！！）

真菰

（顔を真っ赤にしてる無一郎も可愛いなあ。そうだよね、男の子だもんねえ）

怪我をした真菰が引退を表明したあとに、精一杯背伸びをして告白する。

告白の内容が胸中の琴線に触れたらしく、真菰にひとしきり笑われたあとに受け入れられた。

無一郎

「真菰さん！ 僕の子供を産んでください!!」

真菰

「ん、いいよ。無一郎の子供、産んであげる」

現在は霞屋敷にて同居中。

大正こそこそ噂話（肆）

風柱 不死川実弥

本来なら炭治郎が歩むはずだった道を代わりに歩み、柱にまで上り詰めた男。

炭治郎とは違い、鬼をつれて任務をしていたわけではないので、蛇柱が話を知らないのも無理はない。

ちなみに、鬼にされてしまったのは原作通りに母親。

彌豆子と同じような形で飢餓状態を克服している。

要は、花柱の狂人じみた思想の拡散と不死川家の奮闘があったからこそ、現在の鬼殺隊は『人を襲わない鬼』に関して原作よりも寛容になつているのだ、ということ。

その代償（？）として、不死川家の母親は花柱に（側室候補として）狙われることになつた。

弟との確執はあるようで、じつはない。

詳しくは次回の更新で。

本作での実弥は既婚者。

蝶屋敷に傷の縫合に来て、たまに世話をしてくれたのが蔦子だった。

ほかに縫合の出来る子は、一部を除いて実弥の外見を怖がって近付いてこないから仕方ない。

何回か会ううちに普通に話すようになった。

この時点でお互いに気になっていた模様。

任務で蔦子が元々住んでいた地域に行つた際に、蔦子の過去を知つてブチキレル。

歸つて早々、蔦子に突貫し、なんやかんやあつて最終的には押し倒した。

無理強いは良くないと叱られたが、それでもしないと蔦子は踏ん切りがつかなかったろうとも言われて、最終的にはよくやつたと誉められる。

後日、蔦子から『弟の義勇です』と紹介されて愕然とした。

実弥

「なん……だと……？」

現在は風屋敷にて同居中。

大正こそこそ噂話（伍）

不死川蔦子（旧姓・富岡）

水柱・富岡義勇の姉。

結婚直前に鬼に襲われ、当時の水柱に助けられた。

その際に背中に大きな傷を負い、それが元で結婚の話が流れる。

ただ結婚の話が流れただけならよかったのだろうが、そこまでの流れが悪すぎた。

薫子は町でも評判の美人であり、結婚の相手も家柄と顔のいいお坊ちゃん。

そういうった事情もあり、元々嫉妬していた者たちが悪意のある噂を流した。

例をあげると『薫子の傷は野盗によるもので、女性としても傷物にされたらしい』といった感じのもの。

そういうった噂に尾ひれや背びれ、胸びれがついて泳ぎ回った結果、愛し愛されていたはずの男性には『外聞が悪い』と捨てられ、周囲からは好奇と悪意、さらにはねつとりとした嫌な視線を向けられ、身の危険すら感じた薫子は住み慣れた土地を離れることになった。

その際に負った心の傷は深く、人間不信と恋愛恐怖症を患^{わずら}っている。

年齢的にも行き遅れになりそうな頃に実弥に出会い、傷の縫合やら雨のなかで子犬を拾ったりやら、色々あつてお互いに惹かれていく。

とくにアニマルセラピーは効果があつた模様。
義勇は動物が苦手だから縁がなかった

その後、薫子の過去を知ってブチキレた実弥が『俺が幸せにしてやらあ!!』と襲来。

人間不信やら恐怖心で作られた心の壁^{A.T.フィールド}を暴風の如く吹き飛ばして、身も心も丸裸
 (意味深)にされた。

葛子の心の深い所に届く言葉と熱い思いを受けて、日輪刀最終的には耳元で愛の言葉を囁か
れて承諾する。身体

さすがはスケベ柱。

やるのがスケベですね。

葛子

「年下の子に押し倒された挙げ句、あんなに滅茶苦茶にされるなんて……！」

実弥

「うるせエ！ 幸せにしてやるから、黙って俺について来いイ!!」

??

「無理強いは良くない。だけど、よくやった！ さすがは私の息子！」

義勇

（姉さんを捨てた男よりマシだし、本人も幸せそうだからいいか）

現在は風屋敷と蝶屋敷を歩き来する生活をしながら、旦那と弟の仲を取り持とうと奮

闘中。



大正こそこそオマケ話

しのぶ

(うう……新型の顕微鏡が高すぎる……お給金で買えなくはないけど、それをするとほかに手が出なくなるし……)

義勇

「……」(鮭大根食べた帰り)

【数日後】

しのぶ

「え!? これをくれるんですか!」(困惑)

義勇

「(姉が蝶屋敷で)世話になってるからな」

しのぶ

(蝶屋敷では見たことない人だけど、鬼殺隊の人みたいだから貰っても大丈夫かな?)

——はっ! ま、まさか! 姉さんに近付くために私から懐柔しようとしてる? 『将

を射んと欲するならば、まずは馬を射よ』って言うし……させるものですか! 私の実験に付き合わせて、姉さんには近付けさせないようにしてやる! これなら一石二鳥でしよ!!)

【数日後】

しのぶ

「富岡さん、富岡さん！ 新しい薬が出来たんで、試しに行きたいんです！ 付き合ってくださいませよね!!」

【数日後】

しのぶ

「富岡さん、富岡さん！ また新しい薬が出来たんで——」

【数日後】

しのぶ

「富岡さん、富岡さん！ また——」

【数日後】

しのぶ

「富岡さん、富岡さん——」

【数日後】

しのぶ

「富岡さん——」

.....。

……。

……。

カナエ

「うちの妹がごめんなさいねえ」

（鮭大根を出す）

義勇

「鮭大根が食べれるから」別にいい」

しのぶ

「姉さんとの距離が近い気がする……」

（ムカムカ）

【数日後】

しのぶ

「やった……毒で下弦の鬼を倒したあ!!」

【帰宅後】

しのぶ

（下弦の鬼を倒せる毒が完成したのは、富岡さんの協力あってこそよねえ……よし、お祝
いってことでどこかに食事にも——）

蔦子と話す義勇（いつもより柔かな表情）

しのぶ

「——！」（心臓が跳ねあがる）

蔦子と話す義勇（笑顔）

しのぶ

「——！！」（落雷が落ちたような衝撃を受ける）

しのぶ、その場を逃げ出す。

しのぶ

（うわあ………！　なんで逃げ出したの私！　なんで逃げ出したの私!?　富岡さんは姉さんに近づく悪い虫！　そうでしょ!?　ああ、いや、さっきのあれを見ると、本命は蔦子さんだった？　ああ、もう！　この際、どっちでもいいわ！　どう足掻いても現状は変わらないしっ!!　ああ………！　富岡さんを遠ざける役をしたはずの私が、逆に惹かれてたなんてえ………!!　一生の不覚にもほどがあるでしょう!!）

→自己分析が得意な子

カナエ

「あらあら、しのぶ。どうしたの?」

しのぶ

「うわあん！ 姉さあん！！ 斯々かくかくしかじか然々あ！！」

（大泣き）

カナエ

「そつかあ、しのぶも恋しちやつたのねえ」

（事情を知るからこそその微笑ましげな笑顔）

しのぶ

「笑い事じゃないのに……！」（涙目）

カナエ

「そうねえ……それなら、まずは今までの御礼も兼ねて、しのぶが鮭大根を手作りしてあげればいいじゃない。そこから様子を見ましょう！」

（満面の笑み）

【少し時間を戻して蔦子と義勇の会話】

蔦子

「最近しのぶちゃんと居ることが多いけど、どんな感じかしら？」

義勇

「（鬼殺を頑張る）良い娘だと思う」

（しのぶの見た、いつもより柔らかい表情）

蔦子

「あら、義勇がそんな顔をするなんて珍しいわね。義勇にも春が来たのかしら？」

義勇

「？」

蔦子

「……これは自覚も何もないのかしら？」

義勇

「（姉さんが言いたいことが）よくわからない。けど……」

蔦子

「けど？」

義勇

「（一緒にいるのは）嫌じゃない」

（しのぶが見た笑顔）

蔦子

「あらまあ……」（吃驚^{びっくり}してる）

義勇

「？」

蔦子

「義勇。絶対にしのぶちゃんを手離しちや駄目よ？　ほかの男になんて渡しちや駄目な
んだからね！」

義勇

「……どうすればいい？」

(しのぶが他の男という場面を想像して嫌だった)

蔦子

「そうねえ……なら、こういうのはどうかしら？」

【数日後】

しのぶ

「あの、富岡さん。今までの御礼を兼ねて鮭大根を作ってみましたんですけど……」(もじも
じ)

義勇

「そうか」(微妙に表情が明るくなる)

【食後】

義勇

「ひとつ、大事な話がある」(しのぶに近付く)

しのぶ

「ひゃい!？」

（顔を真つ赤にして壁際まで後退る^{あしずき}）

義勇

「? ……なぜ逃げる?」

しのぶ

「につ逃げてません! 富岡さんが近いだけです!!」

（顔真つ赤）

義勇

「（話が出来ないから）逃げるな」

（壁ドン開始）

しのぶ

「——っ!!」（顔真つ赤&お目々ぐるぐる）

義勇

「俺のために毎日、鮭大根を作ってくれないか?」

しのぶ

「あつ? えつと? ええ?」（大混乱）

義勇

「……嫌か？」（吐息がかかる距離）

ざわつく食堂、見守る周囲。

影から応援する姉二人。

しのぶ

「わ……わかりましたよ！ 作ればいいんですよ！ 作れば!!」

義勇

「？ 何を怒っている？」

しのぶ

「こんな事されたら私っ！ もう富岡さんのところにお嫁に行くしかなないじゃないです

かあ!!」

義勇

「嫌なのか？」（素）

しのぶ

「嫌じゃないですよ馬鹿あ！ 富岡さんの馬鹿あ!!」

（嬉し恥ずかし大泣き）

小波はやがて波へと育つ（蝶屋敷編）

蝶屋敷。

そこは花柱・胡蝶カナエが家族と共に暮らす屋敷にして、最新鋭の医療設備を所有する施設だ。

さらには、身寄りや行き場のない鬼の被害者たちを救い上げる、駆け込み寺の役割も担っている。

そして、例のあの日以降、竈門一家も蝶屋敷の一区画にお世話になっていた。

「ねえねえ。まだかな？　まだかな？」

居ても立っても居られないとばかりにソワソワした様子で、竈門家の次女——花子は母親の葵枝に尋ねる。

そんな娘の頭を優しく撫でながら、葵枝は微笑ましげな表情を浮かべた。

「もう、花子ったら。お兄ちゃんが来るのは午後からになるって聞いてたでしょう？」

まだ午前中なんだから、今のうちにお仕事を片付けておきましょうね」

「はあい」

葵枝がそう言うと、花子は素直に従う返事をする。

だが、その表情からは嬉しさが隠しきれていなかった。

何故なら、今日は竈門家の長男炭治郎と長女禰豆子が蝶屋敷にやつて来る、待望の日だからである。

元々は炭治郎だけが産屋敷邸と蝶屋敷を訪れる予定だったが、その直前に禰豆子が血鬼術に目覚めたのだ。

そして、簡単ながら検査珠世が調べたをした結果、血の呪いが外れていることが判明したのである。呪いが外れさえしていれば、鬼舞辻無惨に追跡されることはない。

ならば、家族のいる蝶屋敷へ出入りしても大丈夫だと判断されたのだ。

つまり、今日は約二年ぶりに竈門一家全員が揃う日なのである。

だからこそ、花子は朝から浮き足立ち、ソワソワとしていた。

それは竈門家の男兄弟たちも変わらないようで、次男の竹雄と三男の茂も張りきって仕事を熟こなしている。

女性比率の高い蝶屋敷において、二人は数少ない男手だ。

怪我人の世話をする病棟がある蝶屋敷には、治療や介護に必要な物資が毎日のように運ばれてくる。

そのため、彼らは力仕事を任せることができ、貴重な戦力となっていた。

今は蝶屋敷に届けられた重たい荷物の整理をしているらしく、同僚である不死川家の兄弟たちと協力して、玄関と倉庫の間を行き来している。

喜色満面な様子で荷物を運ぶ二人の姿は、蝶屋敷の職員や滞在する者たちから微笑ましげに見られていた。

「茂、絶対に兄ちゃんが来る前に仕事を終わらせるぞ！」

「うん！ しつかりやつてるぞって良いとこ見せたいもんね！」

そう言つて二人は笑いあうと、声を合わせて重たい箱を持ち上げた。

ちなみに、竈門家の末っ子である六太は、二年経つた今でも仕事を割り振るにはまだ幼いと言える。

だが、蝶屋敷の職員と一緒になつて、入院患者の体調管理をする仕事をしていた。

何より、幼い六太から体温計を渡されたり、体調を問われた患者は皆、ほっこりとした気持ちになるようだ。

時折、怪我の具合を見た患者が発狂して暴れまわることもあったりするが、そこは年長組の男勢が出張つて鎮圧し、寝台に縛り付けているので安心である。

パタパタと走り去る花子の背中を見送りながら、葵枝はふと、二年前にお世話になつた人たちのことを思い浮かべた。

かすがいがらす
錠 鴉からの連絡では、黒死牟と累も蝶屋敷に立ち寄ることになつたと聞いている。

炭治郎は怪我をしているため、会議には最初のほうだけ顔を出し、禰豆子と共に蝶屋敷に来る予定になつていた。

だが、黒死牟らは最後まで会議に参加するようなので、蝶屋敷こちぢらに来るのは暗くなつてからになるだろう。

お世話になつた二人のうちの一人を思い浮かべながら、葵枝は物思いに沈んだ。



約二年前。

あの日から僅かな期間だが、葵枝は家族と共に黒死牟と生活していた。

鬼殺隊の本部である産屋敷邸に連絡が届き、移動中の護衛役や隠蔽作業いんぺいを担当する隠かくしが来るまでは時間がかかる。

それまでの間は町の宿屋に部屋を借り、息を潜ひそめて生活することを余儀なくされていたのだ。

そして、追手に見つかれば殺されてしまうという恐怖は、想像していた以上に子供たちの心身に大きな負担を与えていた。

ただの琵琶の音や似た音に反応してしまうほどに、無惨の恐怖は子供たちの心に深く刻まれていたのだ。

もちろん、それは葵枝とて同じである。

だが、葵枝は母親として『子供たちを守り、安心させなければ』と気を張り続けた。

基本的に、鬼の活動する時間帯は夜である。

それを身をもって知る子供たちは、夜の闇を恐れて気を張っていた。

そのため、なかなか眠りにつけず、例え眠りについても微かな物音で起きてしまう。

夜に眠れなければ昼にこそ睡眠をとるべきなのだが、これがまた難しい。

周囲から聞こえる喧騒のなかに、琵琶の音が混ざろうものなら一気に意識が覚醒するのだ。

そういう事情もあり、葵枝と黒死牟は昼夜を問わずに子供たちを落ち着かせ、眠りについても傍^{そば}を離れずに見守っていた。

眠ることで体力を回復する特殊な個体だとはいえ、黒死牟はあくまでも鬼である。

そのため、極端に消耗しない限りではあるが、基本的には睡眠を必要としない。

それに対して、葵枝は普通の人間だ。

子供たちのことを優先していれば、いずれ限界が来るのは目に見えていた。

そんな生活が数日ほど続いていた、ある日のことである。

ついに、無惨の追手が竈門一家を襲ってきたのだ。

始まりを告げる琵琶の音と、次々に聞こえてくる鬼たちの声。

宿のなかにすら出てきた鬼の数を把握するのは至難の技だろう。

黒死牟は葵枝たちに一纏^{ひとまと}めになって伏せているよう伝えると、近場に出てきた鬼から

次々に斬り捨て始める。

その強さは圧倒的だったが、当時の葵枝にはそこまで気にする余裕などなく、早く終わってくれと願うばかりだった。

やがて琵琶の音が鳴り止み、辺りに夜の静けさが戻る。

息を潜めていた葵枝たちの耳に、こちら葵枝たちを氣遣う黒死牟の声が聞こえた。

「大事ないか……」

「は、はい」

部屋に戻ってきた黒死牟の姿を見て安堵した葵枝は、辛うじて返事を返す。

すると、すうつと全身から力ちからが抜けていくのがわかった。

それと同時に意識が遠退き、目の前が真っ暗になる。

緊張の糸が切れたことで意識を失ったのだ。

そのことに気付いたのは、再び意識を取り戻したあとの話である。

意識を取り戻した葵枝が初めに目にしたのは、自分葵枝に寄り添うように眠る子供たちの顔だった。

ぼんやりしたまま上半身を起こすと、それに気付いた黒死牟が視線を向ける。

「起きたのか……まだ横になっているといい……眠っていたとはいえ……疲れが抜けたわけではないだろう……」

そう言う黒死牟の腕のなかには、すやすやと寝息をたてる六太の姿があった。それを見た葵枝は目を丸くした。

六太は黒死牟の顔を怖がっていたのだから、当然の反応である。

だが、考えてみれば自然なことなのかもしれない。

本来の六太はまだ甘えん坊な幼子であり、父親の炭十郎が亡くなったあとは、長男の炭治郎にべつたりと付いて回っていた。

だと言うのに、父親や長男炭治郎だけでなく、長女も不在で母親は意識を失っている。

そうなれば、頼りになるのは他の兄妹けいしたちなのだが、こちらも怯えおびが止まらないために六太が安心できる場所ではない。

消去法で黒死牟の傍そばに寄っていたのだが、そこは意外なほどに落ち着く場所だった。そもそも、黒死牟として人の親だったのだ。

父性を備えていて当たり前なのである。

そして、六太ほどの幼い子供は他人から寄せられる感情に敏感だった。

だからこそ、黒死牟の視線に籠こめられた慈愛の感情に気付いたのである。

そのことを理解した六太が黒死牟に懐なつくのは非常に早く、それ以降、べつたりと張りつくようになっていた。

六太の様子を見て気が抜けたのか、再び睡魔が葵枝を襲う。

葵枝の状態を見て取った黒死牟は音もなく近付くと、その傍らかたわに六太を寝かせた。

「今しばらく……眠るといい……葵枝殿は少しばかり……頑張りすぎだ……」

黒死牟の声が葵枝の耳に優しく響く。

その声に安らぎを覚えながら、葵枝は再び意識が遠退くなかでちよつとしたお願いをする。

黒死牟は僅かばかり目を見張るが、すぐにクスリと笑つて了承の頷うなずきを返した。

黒死牟の手が、葵枝の手に軽く触れる。

それを感じた葵枝の表情は、穏やかなものになつていた。

本来なら支え合うべき夫炭十郎に先立たれ、女手おんなでひとつで子供六人を育ててきた葵枝の心

は、今回の一件で限界に達していたのだろう。

それを察した黒死牟は、眠つてしまった葵枝の頬を優しく撫でる。

「今はゆつくりと……眠るといい……私がいる間は……ご夫君に代わり……守つてみせよう……」



眠りについた葵枝は、夢を見た。

真つ暗な闇のなかで、家族を探してまわる夢である。

周りが見えず、手探りで探しまわるが誰も見つかからない。

胸のうちに不安が広がっていくなか、空から柔らかな光が差し込んできた。空を覆っていた雲が去り、大きな月が見えるようになっていたのだ。

優しく輝く月の光が辺りを照らし、探していた家族の姿も見えるようになっていた。

ホッと胸を撫で下ろすと、葵枝の周りに家族が駆け寄ってきた。

もう離れることがないようにと、葵枝は子供たちと手を繋ぐ。

そして、いつの間にか見えるようになっていた自宅に向かつて歩き出した。

炭治郎がいて、禰豆子がいて、竹雄と茂が傍にいて、花子と手を繋いでいた六太が、キラとした瞳で月を指差し、興奮するままだに燥はしやいでいる。

葵枝は月を見上げていると、とても安らかな気持ちになっていた。

夜空に浮かぶ月は、天に輝く太陽のように明るくはない。

だが、直視すれば目を焼かれる太陽と違って、いつまでも見ていられる優しい存在だ。

だからだろうか？

葵枝は、夜空に輝く大きな月から目が離せなくなっていた。

◆◇
 はしびらいのすけ
 嘴平伊之助は孤児である。

親に捨てられ、何故か猪に育てられ、近くに住んでいた 青年たかはるの祖父に言葉を教わり、

山に住む動物たちと力比べをしながら生きてきた。

そんな彼の生活に転機が訪れたのは、鬼殺隊の隊士と力比べをして勝ったときである。

人よりも強いという鬼の存在を知り、最終選別のことを聞き出して参加した。

山のなかで七日間過ごすという試験内容だったが、伊之助にとつては苦にもならない。

元々から山のなかで生活していたのだから当然であつたし、鬼と戦うのも動物たちとの力比べより楽しめる。

ある意味で、充実した時間だったのかもしれない。

正式に鬼殺隊に所属してからは、鏖鴉から鬼の居場所を聞き出して戦うという生活に変わった。

外の世界で遭遇する鬼たちは手強かったが、倒すたびに己が強くなったことを実感できさる。

その感覚が心地好く、伊之助は夢中になって鬼を探し始めた。

そんな生活のなかで出会ったのが、同期の隊士である竈門炭治郎と我妻善逸。

そして、鬼の累と禰豆子である。

伊之助がホワホワとした何かを感じるようになったのは、彼らに出会ってからだろう

か？

その感覚がむず痒くて反発するように大声や怒声をあげたりもしたが、正直な話をすれば嫌いではなかった。

累と彌豆子とは藤の花の家紋をもつ家で別れたが、ホワホワする感覚は止まらない。怪我が治ってから、それは変わらなかった。

彌豆子と累が待つ町と、伊之助たちが請け負った次の任務先が同じ方角だからと同行した先で出会った、二体目の十二鬼月。

その戦いで負傷した伊之助は、同じように負傷した善逸と共に蝶屋敷に運び込まれる。

ちなみに、戦った十二鬼月は毒を使う鬼で、普通の嗅覚しかない善逸ですら臭いと感じるくらいに刺激臭のきつい相手だった。

嗅覚の鋭い炭治郎など、その臭いだけで戦闘不能になるほどのものだ。

またにも戦えなくなった炭治郎を庇いながらの戦いだっただけに苦戦を強いられたが、最終的には救援に駆けつけた鎧冴によって倒されたのである。

閑話休題。

蝶屋敷に運び込まれた伊之助を待っていたのは、今までに感じたことがない、特大級のホワホワだった。

薄らぼんやりとする意識のなかで、伊之助は枕元で誰かが歌を歌っているのを理解する。

聞こえてくるそれは、指切りの歌だった。

その声の主を、伊之助は知らない。

なのに、何故だか安らぎを感じている自分がある。

出会ったことのある誰とも違う声になのに——と、伊之助は戸惑った。

けれど、伊之助の身体は、心の奥底に眠る何かは訴えている。

その声の主を、自分は知っている、と。

目を覚ました伊之助が目にしたのは、自分によく似た女の人だった。

その人は目を覚ました伊之助を見るなり涙を流して抱きつくと、何度も何度も自分の

名前を呼び続ける。

伊之助は困惑した。

知らない女性に泣きつかれる理由がわからない。

それと同時に、抱きつく女性の腕のなかで、心底安心しきっている自分があることに

驚いていた。

知らないはずの女性に名前を呼ばれて安心する。

腕のなかに抱かれていると、心の底からホワホワする。

これはおかしい。

そう思うのに、身体は受け入れている。

こんな感覚を、自分は知らないはずなのに。

困惑する伊之助を余所に、女性は名前を名乗った。

女性の名前は嘴平琴葉。はしびらことは

伊之助の母親だ、と。

嘴平伊之助は孤児である。

孤児である、はずだ。

だから、つい、衝動的に叫んでいた。



『俺に母親はいねえええつ!!』

物思いに沈んでいた葵枝の耳に、そんな叫び声と硝子の割れる音が聞こえてきた。ガラス

驚いて音が聞こえてきた方向に振り向くと、ドタバタと足音を響かせながら、大きな猪がこちらに向かって走ってくる。

いや、正しくは違う。

猪の毛皮を被った人間だ。

毛皮には硝子の破片がくっついてるので、先ほどの破壊音はこの人物によるものだ

ろう。

「どけっ！ ばば——」

この瞬間、猪男の末路は決まった。

凄まじい音が鳴る。

葵枝の頭突きが炸裂した音だ。

猪男が大の字になって倒れ伏すと、一人の女性が慌てた様子で廊下を走ってくる。

「琴葉さん」

葵枝は走ってきた同僚の名を呼んだ。

「ああ、葵枝さん！ ちょうどよかった！ 今こつちに——きやあああ！！ 伊之助え！！」

琴葉は葵枝の足元に倒れている猪男に気付くと、慌てて駆け寄り抱き寄せた。

琴葉の言う『伊之助』という名前に覚えのあつた葵枝は、もしやと思い、問いかける。

「……まさか、琴葉さんが長年探していた——」

「息子ですう！ 息子の伊之助ですう！！」

わんわんと泣きじやくる琴葉を前に、葵枝は自分の頬が引き攣るのを自覚した。

（頭突き、食らわせちゃった）

やってしまったとばかりに額に手をあてた葵枝は、すぐに琴葉に謝罪する。

その後、騒ぎを聞きつけた竹雄と茂たち男組が到着し、伊之助は担架で病棟に逆戻り

することになった。

余談ではあるが、このときの衝撃により、伊之助は赤子だったときの記憶を僅かながら思い出したらしい。



柱合会議での役割も終わり、怪我の治療を理由に場を辞した炭治郎と禰豆子は、隠の後藤とその同僚に背負われながら蝶屋敷へと移動していた。

炭治郎は、家族との約二年ぶりになる再会に胸を踊らせ、ソワソワとしている。

家族とは手紙でやり取りしていたが、やはり、直接会うのとは色々と違うのだ。

その証拠というわけではないが、箱に入る前の禰豆子に家族に会いに行くと話をする
と、目を輝かせて喜んでいた。

「おおし、着いたぞお」

そう言つて後藤が足を止めたのは、広々とした敷地をもつ屋敷の前である。

後藤が言うには、炭治郎たちがいる場所はおくまでも蝶屋敷の病棟であり、その周囲にある建物の大半が蝶屋敷に付随する施設の一角なのだという。

「さっきの柱合会議で増築が決まったからな。まだまだ蝶屋敷の所有地は広がるぞ」

後藤は何気なく言っているが、蝶屋敷は建物と設備を含めて相当な資金がかかっている。

もちろん、そのことに炭治郎が気付くことはなかった。

蝶屋敷の玄関まで来ると、ちょうど訪問客が帰るところだったらしい。

帰ろうとして扉を開けた黒髪短髪の人物が、後藤に背負われた炭治郎を観察するように見つめていた。

白い道着から見える肉体は鍛えあげられ、細身ながらもがっしりとしている。

隊服こそ着てはないが、おそらくは鬼殺隊の隊士だろう。

「額に傷痕。耳に花札みたいな飾り。——なるほど、お前が竈門炭治郎か」

炭治郎を観察していた道着の人が納得したように頷くと、開きっぱなしになっていた玄関に向かって大声を出す。

「葵枝さまん！ お宅の長男がきたぞお!!」

その声が聞こえたのか、奥のほうからドタドタと慌ただしい足音が複数聞こえてくる。

そして、足音の主たちが姿を現した。

「兄ちゃん！」

「お兄ちゃん！」

次々と現れる弟妹たちが、炭治郎——ではなく、彼を背負っている後藤へと突撃する。その体当たり染みだ抱擁を受けるたびに、後藤の肺から空気が吐き出された。

「ぐっ！ ぐっ！ お、俺はあ、あ!? がんば、げへえ!! ……ない……だろ……!!」

後藤の抗議する声は、受けた衝撃の前に阻まれる。

四発の突撃を受け止めた後藤の顔は青褪め、息も絶え絶えになっていた。

なお、その様子を見ていた同僚の隠が『受けきって倒れなかつた後藤さんってスゲエ』とか思っていたのは余談である。

「竹雄！ 茂！ 花子！ 六太！」

弟妹たちの名を呼ぶ炭治郎の目尻に涙が溢れた。

二年ぶりの再会だ。

当然である。

だが、二年という歳月は炭治郎にひとつだけ大きな衝撃を与えていた。

それは、身長が伸びている、ということである。

とくに竹雄の背が最も伸びていて、今はまだ伸び始めの時期だという。

名は体を表すとは言うが、竹雄の成長は正しくそれだ。

「兄ちゃんの身長ぐらい、すぐに追い越すかもね」

ニヤニヤしながらそう言った竹雄の姿に、炭治郎がちよつとだけ嫉妬したのは内緒で

ある。

ちなみに、炭治郎の身長は一年前からあまり変わっていない。

なんとなく、炭治郎は落ち込んだ。

「ねえ、ねえ！ 禰豆子お姉ちゃんは？」

花子がキョロキョロと禰豆子の姿を探す。

すると、禰豆子の入った箱を背負った隠は『それなら、ほら』と玄関の上がり口に荷を下ろした。

その声を聞いた竹雄は覆面の下に誰がいるのか気付いたようで、気安い感じで挨拶をする。

「あ、やらかした玄弥さんだ。（こんに）ちわっす」

「ああ、炭治郎兄ちゃんに腕を折られたって話題になつてた玄弥さんかあ。（こんに）ちわっす」

「話を聞いたおば様に腕ひしぎ十字固めを極められてた玄弥さんだ。久し振りに来たんだし、おば様を呼びますか？」

「ぐああああ！！ わざわざ説明すんなよ恥ずかしい！ 俺だつてちゃんと反省してるつうの！！」

竈門家の弟妹たちからの情け容赦ない言葉に、箱を背負っていた隠——不死川玄弥は頭を抱えて悶えた。

そこに追い討ちをかけるように、六太の呟きが続く。

「かなたちちゃんのお犬さんになったんだよね」

「ごふっ!？」

「お、お犬さん?」

弟の言葉に困惑した炭治郎は、説明を求めて竹雄に視線を向ける。

その視線を受けた竹雄はガシガシと自分の後頭部を掻きながら、後藤に助けを求めた。

後藤は一瞬だけ『俺が説明するのか』という目をしたが、仕方ないとばかりに長々とため息を吐く。

「玄関先でやるような話じゃないし、取り敢えず、室内なかに上がらせてやれよ」

後藤が言い淀よどんでいると、まだ帰っていないかった白い道着の人がそう提案する。

それもそうだと思ひ直した一同は、場所を移すことにした。

「なんか、すみません。引き止めるような形になっちゃって……」

炭治郎は後藤に背負われたままで、移動の提案をしてくれた道着の人に頭を下げる。

すると、相手は朗らかな笑顔を浮かべた。

「いいって、いいって。まあ、オレも溜る火かさん——人を待たせてるし、もう帰るからな。

あとは家族水入らずでゆつくりしなよ」

そう言つて、道着の人は踵きびすを返した。

その時、ふわりと漂ってきた匂いを嗅いだ炭治郎は、ふと、あることに気付く。

（あれ？ あの人の、もしかして——）

去っていく道着の人の背中——『素流』と書かれている——を、炭治郎はぼんやりと見送った。

◆◇◆

病棟内にある食堂に場所を移した炭治郎たちは、改めて、玄弥が『かなたという人物の犬になった』という経緯を聞くことになった。

ちなみに、道すがら合流した葵枝は、小さくなった禰豆子を膝の上に乗せて抱擁したり、髪を結ったりしている。

なお、玄弥は話すのは止めてくれと訴えたが、食堂にやってきた不死川家の弟妹たち——弟の弘ひろし、こと、就也しゅうやに妹の貞子ていこ、寿美すみ——が参加したことにより、その意見は却下されていた。

現在の兄弟間における力関係ちからが良くわかる話である。

「まあ、取り敢えず説明するとだな」

そう前置きして、後藤は玄弥——不死川家に起こった出来事を話し始めた。

◆◇◆

そもそもの始まりは、不死川家の母親が無惨の手によって鬼にされてしまったことで

ある。

母親に関しては、禰豆子と同様に黒死牟らのおかげで大事に至らずに済んだのだが、家族の混乱は凄まじかった。

特に、長男である実弥は荒れに荒れた。

不死川家の父親は、他人に恨まれることを重ね続けたあげくに刺されて死ぬような屑野郎である。

そんな男から、小さな体で子供たちを守り通してきたのが母親だった。

そんな大切な存在が、横から現れた鬼舞辻無惨誰とも知れない露野郎に鬼にされたのである。

これからは母親を守り、親孝行していくことを心に決めていた実弥にとっては憤懣ふんまん遣る方無い話だっただろう。

落ち着くまでに時間を要したが、最終的には竈門家と同じように、不死川家の者たちも母親に飢餓状態を乗り越えさせる決断をした。

そして、禰豆子と同じように、僅かながら理性を取り戻すことに成功したのである。その後、不死川家の母親は暫くしばら黒死牟たちが預かることになった。

竈門家と違うのは、不死川家の者たちは無惨と接触したわけではないので、追手を心配する必要がなかったことだろう。

問題は、これから先の不死川家の収入と、母親が帰ってきたときにどうするのか、で

ある。

収入に関しては何とかなるだろう。

普通に生活してもいいし、この頃には黒死牟専属の鎧鴉がいたため、鬼殺隊の支援を頼ることもできた。

だが、母親の件は簡単にはいかない。

いくら不死川家の者たちが共に暮らすことを望もうと、鬼を憎む者たちはいい顔はしないだろう。

最悪、鬼になった母親を斬りに来るかもしれない。

ならば、どうするか？

実弥が出した結論は『文句がある奴は力ちからで黙らせる』というものであった。

父親の血が騒いだとか言っちからてはいけない。

なお、家族を守るために力ちからを求める姿は、家族の絆を見るのが大好きな累に受けが良かったのは余談である。

もちろん、黒死牟もただ見ていたわけではない。

放おちからつておくちからと何をしでかすかわからなかったちからので、多少の軌道修正はしたのだ。力ちからを求めるなら鬼殺隊に入るのが近道だと論ことし、まずは育手そだてを紹介してもらおうように

説得した。

隊士になれば階級に応じた給金も支給されるし、家族を養うことも出来る。

一軒家を買うことが出来れば、そこに母親をかくま匿うこともできるだろう。

もしも、柱にまでなることが出来れば、鬼殺隊内部での発言力も大きくなるため、もしかすれば母親をかくま匿う必要もなくなるかもしれない。

黒死牟の説得が功を奏して発奮はっふんしたのか、はたまた、元々から才に恵まれていたのか。鬼殺隊に入隊した実弥は柱にまで上り詰めた。

ここまでが、不死川家と実弥についての話である。

そして、ここからが問題になっている玄弥の話だ。

風柱にまで上り詰めた実弥だが、そんな兄の背中を見ていた弟の玄弥は心配だった。なにしろ、毎回のように兄は身体稀血の匂いで鬼を誘き寄せてに傷を負って帰ってくるのである。

心配しないほうがいい。

だから、少しでも実弥の負担が減るようにと、玄弥が鬼殺隊の隊士になることを目指すのは時間の問題だった。

しかし、玄弥には呼吸を扱う才能がない。

どんなに修行しても、呼吸法が身につかなかったのである。

玄弥は焦った。

すぐそばに、見様見真似で『花の呼吸』を身につけた天才がいたのも悪かったのかも

しない。

そうしている間に、自我を取り戻した母親が蝶屋敷にやってきた。

最初は誰もが驚きはしたが、実弥が柱になる前から蝶屋敷の主人が『鬼に対して理解ある人物』に代わっていたため、大きな騒動にはならなかったのは救いだらう。

それから暫くは肩身の狭い思いをしていたが、それも日々の積み重ねで解消されていった。

玄弥は安心する。

母親のことは大丈夫だ。

弟妹たちもしっかりやっている。

何かあっても、蝶屋敷の人たちが助けてくれるだろう。

ならば、残る心配は実弥だけだ。

このとき、内心で焦りを募らせていた玄弥を蝶屋敷に押し止めていた枷が外れた。

後顧の憂いがなくなった影響で、目的に向かって邁進することが出来るようになったのである。

(日輪刀さえあれば、俺は兄ちゃんの力になれるはず……！)

気持ちだけが先行し出した玄弥は、そんな危険極まりない考えに到達する。

それと同時に、花の呼吸を身につけた天才奴が蝶屋敷の住人に内緒で最終選別に参加することを小

耳はきに挟はさんだ。

それを知った玄弥は、自分も最終選別に参加することを決意する。

そして、藤襲山ふじかさねやまで行われた最終選別を、玄弥はボロボロになりながらも切り抜けた。

何度も死ぬような目に遭ったが、泥臭く藻搔あいて生き抜いたのだ。

だが、山を下りてきた玄弥が目にしたのは、集合場所の広場に無傷でやってきた天才の姿だった。

藤襲山での七日間が、玄弥の精神をギリギリまで削っていたのも悪かったのだろう。

圧倒的な実力差現実に、玄弥の心は限界を迎えようとしていた。

（日輪刀……そうだ。日輪刀さえあれば……）

見えてしまった現実ものに蓋をして、玄弥は日輪刀を求める。

日輪刀さえあれば、実弥の助けになれるという根拠のない幻想すがに縋すがつたのだ。

その結果、とにかく日輪刀が欲しかった玄弥は正常な判断ができないまま、耀哉の娘である かなた を殴うってしまふ。

そのことを知ったとき、兄である実弥はどんな顔をしただろうか？

実弥の妻である蔦子と、たまたま居合わせた面子めんつの説得によつて事無きを得たが、それでも怒りは治まらなかつたらしい。

実弥は、玄弥の首根つこを引つ掴んで謝罪に向かつたのである。

産屋敷邸に來た実弥と玄弥は、耀哉とあまね、あなたを前に土下座して詫びた。そのときに、玄弥は　あなた　から、こう言われたのである。

『許してあげてもいいですが、条件があります』

『条件……？』

『鬼舞辻無惨の頸くびを持ってきてください』

このとき、たまたま同席していた後藤は思った。

待てや、一寸たりとも許す気ないやろ、
あかん、滅茶苦茶怒つてる、と。

さすがに条件の内容が酷かったために、その案はなかつたことにされたが、代わりに出してきた案こそが『例シリアスは死んだの話』なのである。

『なら、あなたは私の犬、もとい——専属かくしの隠かくしになつてください』

『おい、待てやチビツ子。なんで今、犬いぬつて言った？』

つい突つ込みを入れた後藤は悪くないだろう。

むしろ、年齢一桁が言つていいような台詞ではない。

あとから聞いた話だが、かなた　は以前から父・耀哉と後藤の關係うじょうが羨うらやましかつたらしく、自分だけの隠かくしが欲ほしかったらしい。

それを聞いた耀哉とあまね、後藤がどんな顔をしたのかは、お察しである。

というか、そんな風かぜに見られていたと知つて後藤は泣いた。

こうして、玄弥はかなた専属の隠犬になったのだ。

なお、あまり訓い犬 感覺の扱いに、怒髪天を衝つく勢いだった実弥の怒りすら鎮火したのは余談である。

◆◇

「まあ、こんな感じだわな」

そう言つて話を締めくくると、後藤は温くなつたお茶で口くちを湿らせた。

その隣りでは、玄弥が顔を真つ赤にして頭を抱えている。

食堂内になんとも言えない微妙な空気が流れるなか、一羽の鎧鴉が窓枠に止まつた。

「オイ、カナタ様ガオ呼ビダ！ イヌ！ 急急ゲ！」

鎧鴉の指令を聞いた炭治郎は顔を引き攣つらせる。

炭治郎に専属でついている鎧鴉もなかなか口くちが悪いが、この鴉も相当なものだ。

指令を受けて去つていく玄弥の背中中は、炭治郎の目には、いつぞやの後藤の姿と重なつて見えていた。

去つていく玄弥後藤二号に向かつて、炭治郎は無言で手を合わせる。

どうか、玄弥の心に平穏が来ますように——と、ただただ祈るのであった。

◆◇

太陽が西に沈みきつた頃に、黒死牟たちが蝶屋敷へとやつてきた。

柱合会議自体は早めに終わっていたのだが、日が沈むのを待っていたら、この時間になつたらしい。

善逸と伊之助に再会を果たし、治療を受け終えていた炭治郎はもちろん、以前から交流のあつた蝶屋敷の面々も黒死牟たちを歓迎した。

「土産だ……皆で……分けあうといい……」

そう言つて差し出されたのは、高級菓子のカステラと木箱に大量に詰め込まれた瓶入りのラムネだ。

お土産を見た者たちは一斉に歓声をあげ、蝶屋敷の年少組は興奮して黒死牟に飛びついている。

そんな黒死牟の姿を見ていた善逸や伊之助は、未知の空間に迷い込んだよう

な奇妙な感覚に襲われていた。

「何というか、普通に受け入れられているのな」

ぼつりと善逸は呟いた。

実際、異様な光景ではある。

鬼殺隊にとつて、鬼とは不倶戴天の敵だ。

一緒にいるなどあり得ない。

善逸や伊之助には彌豆子に累という特異な前例があるから受け入れられるが、他の隊

士に受け入れられるかと言われると微妙である。

「まあ、こんな光景が見れるのは蝶屋敷だからこそだよ。他の場所じゃあ無理だね。それに、今でこそ顔を晒さらしてるけど、前は顔を隠してたし」

いつの間にか近くに来ていた累がそう言うと、善逸と伊之助にお土産のラムネを差し出した。

「あれ、俺たちも貰つていいのか？」

「のどや食道、胃をやられてるわけじゃないだろう？　なら——」

「うおおおお!?　なんじやこりゃあ!?　口のなかがビリビリシユワシユワしやがるぜ!?」

先にラムネに口をつけたのだろう。

伊之助は未知の感覚に大興奮している。

無邪気な伊之助の姿に毒気を抜かれたが、善逸の懸念も尤もつともな話だ。

事実、今の蝶屋敷で鬼の存在が受け入れられているのは、カナエが自身の考えを広めて、風柱の実弥とその母親が日々の実績を積み重ねていたからである。

そうでなければ色々と難しかっただろう。

今日の柱合会議で鬼殺隊に味方する鬼がいることを伝達することになったが、これからも信用を得るためには実績を積み上げるしかない。

結局のところ、やることは変わっていないのだ。

「ま、コソコソしなくて良くなった分、気楽ではあるのかな？——義父さんは別だけど」

「ああ、まあ、あれはなあ……」

年少組に群がられている黒死牟を見て、善逸は苦笑する。

蝶屋敷では受け入れられているが、六つ目の人間など一般的にはいるはずがない。

なので、黒死牟が外出する時は、相変わらず包帯と深編笠ふかあみがさが必要なのだ。

ちなみに、初めて黒死牟を見た善逸は、その姿と「音」に恐怖して気を失いかけた。

一緒にいた珠世の姿を見て持ち直していたが、危うく、黒歴史が増えるところだったのである。

「伊之助、伊之助！ ほら、カステラも美味しいよ！ 食べて、食べて！」

善逸が危なかつた記憶を思い出している。その横で、十数年ぶりに奇跡の再会を果たした母と子の団欒だんらんがあつていた。

母親母が息子伊之助にべつたりと張りつくように構い倒す姿は、失った時間を取り戻すのに必死になっているようにも見える。

対する伊之助は、初めこそ反発するように離れようとしていたが、手作りのおにぎりやらお菓子やらを食べさせられるうちに慣れたのか、今では大人しくされるがままに

なっていた。

「ほら、伊之助。あーんして」

「あーん」

「おいしい？ おいしい？」

「うめえ……」

「よかつたあ!!」

（なんだこれ……滅茶苦茶ホワホワする……）

胸の奥から湧いてくる不思議な感覚に、伊之助はいまだに戸惑っている。

だが、心地好く感じるその感覚に身を任せることにしたようだ。

こうして、蝶屋敷の賑にぎやかな夜は更ふけていくのであった。



夜も更けて皆が寝静まった頃、胡蝶カナエの姿は私室にあった。

蝶屋敷の一角に作られた、カナエ個人用の和室である。

和室と言っても個人のために用意された空間である以上、窓や扉の施錠が可能で防音や防諜対策は万全だ。

窓や壁も特別な造りで空気の振動も伝わりにくい仕様のため、室内で大声や楽器を鳴らしても外には伝わらないという仕様になっていた。

なお、蝶屋敷に存在する個人部屋はすべて同じ仕様であるため、夫婦や恋人たちによる夜の運動会が行われていても、戸締まりにさえ気をつけておけば安心である。

そんな部屋のなか、卓袱台ちゃぶだいを挟んだ対面には、どこか居心地が悪そうな様子の黒死牟が座っていた。

卓袱台の上にはお揃いの湯飲みが一式と、茶菓子の入った籠かごがひとつ置いてある。

「こうやって二人きりでゆつくりするのも久し振りですねぇ」

「そうだな……」

カナエの言葉に返答を返す黒死牟は、本当に居心地が悪そうだ。

その理由は、次のカナエの言葉に集約されていた。

「二二年は彌豆子ちゃんに構ってばかりで、私のことは放ほつたらかしましたものねぇ」
痛いとこを突かれたのか、黒死牟は言葉に詰まる。

一応、擁護しておく、手紙は出していたのだ。

こうなる可能性を恐れていたのもあるが、黒死牟は真面目な男である。
しばらく会えないからと言って、完全に放置していたわけではない。

カナエの任地範囲内にいるときは、お互いの都合がつく範囲で密かに会えないかと探つたりもした。

まあ、柱は忙しいのでほぼ会えなかったが。

それはそれとして、実際問題、禰豆子の件に関しては仕方のない話だ。何しろ、鬼に関する案件である。

黒死牟以上に安心して任せられる人物はいない。

それはカナエも理解していた。

理解しているうえで、このような態度をとっているのだ。

それは何故か？

黒死牟の譲歩愛する夫 言葉買を引き出すためである。

つまり、打算ありきの態度なのだ。

それがわかっているからこそ、黒死牟は下手に発言することが出来ない。

謝罪の言葉はもちろんのこと、仕方がないなどと言おうものなら責め立てられて、泣き落としにかかって対応に困っているうちにカナエの欲しがっている内容の言質をとられるに決まっている。

なお、これらはすべて経験談だ。

ちなみに、黒死牟敵 勝とカナエの夫婦喧嘩の勝率は、拾い対零である。

どちらが零で、どちらが拾いかは論ずるまでもない。

黒死牟は頭を抱えた。

どう考えても、自分にとって良くない未来しか見えなからだ。

黒死牟はちらりとカナエの顔を窺う。

ぷくりと頬を風船のように膨らませたカナエは、黒死牟の視線に気づくとピイツとそつぽを向いた。

（うむ。カナエはいつ見ても可愛い）

どこの青年と似たようなことを考えた直後、そうじゃないとばかりに頭を振って雑念を追い出す。

黒死牟は長々とため息を吐いた。

どう考えても勝てる道筋が見つからない。

まあ、いくら足掻いても、カナエが女の涙を使った時点で決着がつくのだ。

黒死牟の悩んだ時間は結局のところ、無駄なものではない。

カナエの拗ねた可愛い姿（黒死牟主観）が見れるという意味では有益かも知れないが、そこは受け止め方次第である。

「どうしても……お前以外の女を……抱かねばならんのか……」

「……その言い方は狡いですよ、巖勝様。独り占めしたくなるじゃないですか」

「独り占めしてくれて……構わないのだが……」

「駄目です」

カナエは黒死牟の誘惑（？）をきつぱりと跳ね除けた。

これほどカナエが継国家の血筋——というよりも、側室や子供に拘るのには理由がある。

元々は武家の娘だったから、という理由ではなく、もつと切実で、もつと感情的なものだ。

「だって、巖勝様を引き止めるのは私だけじゃ無理だったじゃないですか」

そう言われ、黒死牟は再び言葉に詰まった。

カナエが言っているのは、三百年前に継国巖勝と鬼舞辻無惨が対峙したときの顛末を指している。

あの日より、巖勝は鬼として、黒死牟として生きてきた。

だが、その裏側で泣いた女がいる。

それが継国カナエだった。

確かに、前世のカナエは武家の娘だ。

戦国の世でもあったし、夫と死別するなど珍しくもない。

そう教わり、覚悟を決めて継国の家に嫁いできた。

だが、巖勝が半死半生の状態で帰ってきたとき、カナエの覚悟は大いに揺らいだのである。

それだけ巖勝のことを愛していたということでもあるだろう。

そして、巖勝がそうだった時の話を聞いたとき、カナエはひとつの事実に思い至ったのだ。

巖勝は命を賭して、無惨の頸くびを斬ろうとした。

そこにどんな葛藤があつたかは、本人にしかわからない。

だが、心の天秤が傾いた先は、家妻と子供たち庭ではなく使命無惨の討伐感だった。

無論、巖勝が家庭を、カナエのことを大切に思っていなかったわけではない。

むしろ、逆に信頼していたからこそその判断である。

例え巖勝が志半ばで倒れたとしても、カナエならばしっかりと家を守ってくれと信じていたから、無惨の頸を狙ったのだ。

だが、継国カナエは納得しなかった。

巖勝の思いや考えは理解しよう。

しかし、それを受け入れるかどうかは、カナエに選択権があるはずだ。

そして、継国カナエは夫が命を賭して使命を果たせるように支える武家の妻であるよりも、家族のもとに必ず帰ると決意をさせる巖勝の妻であることを選んだのである。

だからこそ、継国カナエは巖勝に密かな思いを寄せていた初代・花柱つゆりの栗花落つゆりカナエを誘惑した。

義弟縁をが連れてきた鬼珠世の女医さえも巻き込んだのも、そのためだ。

一般的な立場の弱い者や後ろ楯のない者と懇ろな関係を持ち、さらには子供まで出来れば言うことはない。

責任感の強い巖勝は、それだけで見捨てられなくなる。

自分が死ねば、その者たちが路頭に迷うことになるかとわかつているから、己の命を粗末に扱うことはなくなるだろう。

事実、巖勝——黒死牟は己の命を粗末に扱うことはしなくなつた。

だが、時代が流れた大正の世には、黒死牟を引き止める者はいない。

胡蝶カナエだけでは足りない。

義息子である累の存在だけでも足りない。

偶然にも栗花落カナエの前世の自分の子孫を拾い、それに気づいた黒死牟が我が子のように可愛がつている娘もいるが、まだ足りない。

だから、胡蝶カナエは願うのだ。

もっと家族を増やし、自縄自縛じしようじばくになつてくれと。

家族の数だけ黒死牟の枷かせが増えるのだ。

大いに結構である。

他者との繋がりが増えるたびに、黒死牟巖勝が無惨と刺し違えて日の光を浴びながら消えてゆく悪夢から遠ざかるのだ。

「カナエ……お前との子だけでは駄目か……」

「もちろん、私も巖勝様との子供が産みたいですよ。——でも、今は駄目です。私は花柱ですからね。戦線を離れるわけにはいきません」

そう言つて、カナエはため息を吐いた。

数年前に上手くすれば引退が出来そうな瞬間があつたのだが、奇しくも、それが元で黒死牟と遭遇することが出来たのだ。

当時は黒死牟との運命的な出^再会^会いに浮かれていたので気づくのが遅れたが、あの時に上手く立ち回つておけば、今頃は柱を引退して子供を授かつていたかもしれない。

もちろん、そんなことは口には出さない、というよりも、以前、ぼやいていたのを妹のしのぶに聞かれた際に、両頬を思いつきり引つ張られて怒られたのは姉妹間の秘密である。

「だからこそ、側室候補を集めたんですよ。まあ、嘴平さんは息子さんと再会したばかりだから暫^{しばらく}くはそつとしておくとして、不死川さんは珠世さんが『鬼が妊娠できるようになる薬』か『鬼を人間に戻す薬』を完成させるのを待たないといけませんね。珠世さん自身も同様、と。残るは竈門さんと塚山さんなんですけど——」

カナエの話聞いた黒死牟は、盛大にため息を吐いた。

「カナエ……本人の意思を……無視してはいかん……」

「そう、ですな」

黒死牟の言葉に、カナエはばつが悪そうな顔をする。

交流がなくても落ちかけてます

「まあ、嘴平さんは巖勝様との接点が蝶屋敷と手紙くらいしかありませんでしたし、最近来たばかりの塚山さんは巖勝様に会ったこともないですし……」

黒死牟は同意するように頷いた。

それと同時に話の流れ、その潮目が変わったのを直感的に理解する。

上手く立ち回っておけば、側室だの何だのという話を有耶無耶に出来るかもしれない。

もちろん、そんなはずはないのだが。

「——それなら巖勝様。ひとつだけ約束してくれますか？」

「む……」

「巖勝様のことを憎^{にく}からず思ってる人たちのことを、拒まないであげてください」

黒死牟は目を丸くする。

正直な話をすれば、彼女たちから向けられた視線の意味に気づいていなかったわけではない。

ただ、そこまで慕われる理由が黒死牟にはわからなかった。

そんな内心を察したカナエは、困惑する大黒死牟の鼻先を指先で弾いて困ったような顔をする。

「人誑ひととらしなところは昔から変わらぬです。本当に老若男女を問わないんだから。――

まあ、同じような感じで昔繼國カナエと栗花裕カナエの私も落とされたわけですけど……」

カナエはそう言うのと、黒死牟に抱きついた。

ふわりと、女性特有の良い香りがする。

突然のことに黒死牟は驚いたが、ややあつて、カナエを抱き締め返した。

「来る者は拒まない。――約束、してくれませんか？」

黒死牟の腕のなかで、カナエが切なそうな声で問いかける。

それを聞いた黒死牟は白旗をあげるしかなかった。

「それで……お前が納得するのなら……」

「良かった……」

心底ホツとしたような、安堵の聲がカナエの口から漏れる。

どうやら、カナエは『来る者拒まず』という約束を取りつけたことで、それを話の落

とし所と定めたようだ。

こうして、蝶屋敷の夜は更ふけていく。

このときに交わした約束が、今後にどう影響してくるのか。

それは、誰にもわからないことである。



大正こそこそ噂話（巻）

竈門 葵枝

あらためて紹介するまでもないが、炭治郎と禰豆子の母親。

二人以外にも竹雄、茂、花子、六太と、総勢六人の子供を産んで育ててきた女性。

夫である炭十郎が原作開始前に亡くなっていることもあり、かなりの苦労人でもある。

原作での炭治郎の過去回想においても炭十郎の姿は痩せ細っていたので、かなり長い期間、病弱な夫の介抱をしつつ子育てをしていたようだ。

本作では黒死牟のおかげで一家全員が無事であり、蝶屋敷にお世話になるようになった関係で生活環境が改善している。

今回の話でもわかる通り、黒死牟に思慕の情を持っていたが、炭十郎のこともあつて忘れるつもりでいた。

ただし、目敏めざとい花柱にはすぐに看破されてしまう。

色々と話し合いをしていたのだが、思わぬところから花柱側に援護が入った結果、気がつけば側室候補になっていた。

六太

「お母さん。僕、弟か妹が欲しい」

→ 無垢なる瞳。

葵枝

「え!?! ち、ちよつと六太……どうしたの?」

→ 顔真つ赤 & 困惑。

花子

「ええええ? 私は妹がいい!!」

→ 兄弟弟はいるから妹がいると全部そろろう。

葵枝

「花子までどうしたの!?!」

→ 動揺中。

その後、暫くしてから葵枝は側室候補になることを受け入れる。

炭十郎が夢枕に立ったのか、はたまた、ただ単に開き直って自分の心に正直になっただけなのかは定かではない。

ちなみに、病弱な夫を持つ身であったためか、産屋敷あまねと仲が良い。

ついでに『とある方面の希望と願望』が似ているため、そちらでも気が合うようだ。

あまね & 葵枝

「……（だって、いつも——だったものねえ）」

→一瞬だけ目が合って、すぐに逸らす。

大正こそこそ噂話（貳）

嘴平 琴葉

皆さまご存知、嘴平伊之助の母親。

原作では例の『とつととくたばれ糞野郎』に殺されているが、本作では鬼殺隊の規模が大きくなって隊士が増えた影響で助かっている。

ただ、男運の無さはそのままだったようで、家庭内暴力や嫁姑問題は変わらなかった。原作同様に例の宗教団体に保護されたのちに逃亡。

伊之助を崖下の川に落として逃がしたのだが、その直後に周辺調査でやって来ていた鬼殺隊の隊士に保護された。

その際には『とつととくたばれ糞野郎』も、同じ任務で調査に来ていた別の隊士に見つかっており、琴葉を追うのに時間を要した模様。

ヤバイ鬼に追われているのを気配で察した隊士が琴葉を逃がすことを優先したため、伊之助を回収することが出来なかった。

その後、琴葉から鬼殺隊に宗教団体の実態についての情報が渡り、複数の柱による強

襲で例の宗教団体は壊滅している。

しかし、そこまでやっても『とつととくたばれ糞野郎』を討ち取ることは出来なかった。

なお、琴葉の逃走時と拠点の強襲で、数多くの隊士（当時の柱を含む）が死亡している。

多くの死者が出たことを琴葉はとても気にしていたが、誰一人として責めるような言葉を発する者はおらず、しつかりと被害者として認識して扱っていた。

そのこともあり、琴葉は伊之助を探したい本心を抑え込み、恩返しのためにも蝶屋敷で働くことを決意する。

上記の理由により、蝶屋敷に保護されたあとは看護師として生活していた。

顔も良く、ちよつと抜けてるところが可愛らしいため、蝶屋敷では今でも人気が高い。

治療に来た一般隊士や隠かくしに生き別れになった息子の話をして情報を集めるが、なかなか手がかりは見つからなかった。

そんななかで、最も精力的に探してくれたのが花柱が引き合わせてくれた鬼いちゃんである。

一般隊士や隠かくしよりも身軽に動けただけで、別に暇ひまだったわけではない。

鬼いちゃんは最終選別にそれらしき名前を名乗った人物が居たことや、義息子累からの

定期連絡で同姓同名の人物が炭治郎と共にいることを知って手紙で知らせたりもしていた。

おかげさまで鬼いちちゃんへの好感度は意外と高い模様。

花柱

（計画通り……!!）

→新世界の神顔

琴葉

（そっかあ、あの鬼ひとの子供を産んで欲しかったのねえ……伊之助に弟妹を作ってあげるのもいいかなあ）

→勘の鋭い人

大正こそこそ噂話（参）

不死川 玄弥

家族愛が空回りした結果、二次創作でも数が少ない隠かくしルートに突入してしまった不憫兼 苦勞人枠。

不本意ながら後藤二号を拝命する。

思春期に突入して女性と上手く話せなくなったが、隠の覆面をしていると大丈夫だと

最近になつて気づいた。

なお、産屋敷かなたは別枠。

お館様の娘である　かなた　を殴つた件で、兄である風柱との仲が険悪になりかけた。

ついでに母親からはお仕置きとして、腕ひしぎ十字固めを極められている。

しかし、さすがに犬扱いされているとなると同情が湧いたらしい。

行き先で玄弥と風柱が会おうと『大丈夫か？　元気でやっているか？』と氣遣われるくらいの仲に収まっている。

身体が大きくて丈夫、という部分を買われて耀哉と　あまね　から　かなた　の嫁入り先の候補にされていることは知らない。

耀哉

「娘がああ成つた責任を取ってもらわないとね」

→ 仏のような笑顔。

あまね

(……)

→ 目を逸らす。

大正こそこそ噂話（肆）

産屋敷 かなた

最終選別で玄弥に殴られた（と思われる）子。

原作では明確に誰が殴られたのかは判明していないが、姉妹の違いは髪飾りくらいしか判別方法がないため、単行本とにらめっこして かなた に決めた。

原作で亡くなった姉たちは髪飾りが違ったので除外。

十七巻で名前が紹介された時は髪飾りが外れていたので判断出来ないが、次のページで あまね から着物を受け取る場面の並びをそのまま適用すると、髪飾り的には かなた になる。

なお、髪飾りが長男の輝利哉と同じ形なため、彼とは双子かもしれない。

（五つ子だった模様。あまね様、お疲れさまです）

玄弥を自分専属の隠犬にするために交渉術を披露する——が、さすがに『相手が受け入れられない条件』と『相手に受け入れさせたい条件』の落差が酷い。

しかし、要求通りに玄弥を得たので満足している。

じつは玄弥にある種の執着を持っているのだが、それは最終選別で殴ったり髪を引っ掴んだりされた 乱暴被虐性欲されたことが切っ掛けだった。

かなた曰く、なんか変な扉被虐性欲が開きかけた気がするらしい。

今は玄弥に無理難題を吹っ掛けて、苦勞しながら駆けずり回る姿を楽しんで見てい
る。

かなた曰く、なんか変な扉加虐性欲が開きそうな気がするらしい。

両方の扉が開いてしまうと手がつけれないので、玄弥には早めに対処して欲しいと
ころ。

なお、どちらの扉も年齢一桁が感じていいものではない。

いくら早く大人にならないからって、お館様のお宅は教育が進みすぎ。
じつは、身近に元凶がいる模様。

最近では玄弥の首に鎖付きの首輪を着けようかと、真剣に悩んでいる模様。

ちなみに、かなたがこのまま成長すると『誘い受け』とか『女性優位からの逆転即
落ち2コマ』とかになる可能性が高い。

かなた

「お母様の部屋にあった御女性側総受け本 本は勉強になりますね」

→興奮気味。

あまね

「……」

→汗が止まらない。



大正こそこそオマケ話

炭治郎

「……」

→空を見上げて放心している。

実弥

「なにバカ面づらしてんだア、お前？」

炭治郎

「あ……えつと……」

実弥

「風柱の不死川実弥だア。覚えなくてもいいぜエ？」

炭治郎

「あ、はい！ 大丈夫です、覚えました！」

実弥

「そうかい。——で、何をポケットとしてやがったんだ？」

炭治郎

「えっと……」

実弥

「悩んでますって面してたぜ？」

炭治郎

「……じつは、うちの母親が再婚？ するかもしれない……」

実弥

「……ほおう」

→察した。

炭治郎

「その、急な話だったんで、頭が追いつかないというか……」

実弥

「ああ……もしかしなくても、月柱関係か？」

炭治郎

「え、わかるんですか!？」

実弥

「まあ、胡蝶姉が色々やっててウチの母親も候補になつてつからなア……」

炭治郎

「ああ、そういう……」

→納得した。

実弥

「まあ、ウチの親父は暴力ばかり振るう糞野郎だったから、お袋が幸せなら良いかとは思ってるんだがなア」

炭治郎

「そうなんです。——ウチの父は病弱だったけど、家族仲は良かったです。だから、急には受け入れられなくて……」

実弥

「なるほどなア……」

炭治郎

「黒死牟さんのことは嫌いじゃないんです。ただ、父さんのことを考えると、いいのかな？　つて考えちゃって……」

実弥

「お前のお袋さんは月柱のことをどう思ってるんだ？」

炭治郎

「好き、みたいです。なんか、蝶屋敷に来る前に色々あったみたいで……」

実弥

「ああ、ウチのお袋も似たような感じで惚れてたみたいだなア」

炭治郎

「そうなんです。——まあ、それで反対するのも悪いかなって考えてて、俺以外の家族も乗り気だし、結局は俺の心の問題なんですよね」

実弥

「まあ、そうだな。——だが、ひとつだけ覚えとけ」

炭治郎

「なんですか?」

実弥

「お前のお袋とウチのお袋が月柱の内縁の妻になるとだな、俺経由で富岡の野郎と親戚関係になるんだよ」

炭治郎

「ああ! そうですね!!」

→キラキラした瞳。

実弥

「……なんで喜べるんだ、てめエ」

炭治郎

「いや、お世話になった方ですし」

実弥

「……そうかい」

炭治郎

「義勇さんのこと、嫌いなんですか？」

実弥

「元々嫌ってたからなア。蔦子の影響で富岡の野郎が言葉が足りねえだけだつてのは理解できたがよオ。それを直せって言つてんのに、態むさとかつてくらしいに理解しやがらねエ」

炭治郎

「あ、あははは……（義勇さあん！）」

竹雄

「あ、兄ちゃん。それに実弥さん。こんにちは」

実弥

「おう、竹雄か」

炭治郎

「あ、そうか。竹雄は蝶屋敷にずっと居るから知ってるのか」

竹雄

「うん、まあね」

実弥

「そーいや、竹雄はお袋さんの再婚？　話はどう思ってたんだ？」

竹雄

「ああ、俺は反対しないです」

炭治郎

「やっぱりか……」

竹雄

「いや、最近まではちよつと悩んでたけど、兄ちゃんが来てからは悩まなくなったかな」

炭治郎

「俺が来てから？」

竹雄

「うん。——ほら、善逸さんっているじゃん」

実弥

「誰だ、それ？」

炭治郎

「俺の同期です」

実弥

「へエ。……そいつがどうしたって？」

竹雄

「その善逸さんが禰豆子姉ちゃんに色目を使うんだよね」

→目からハイライトが消える。

炭治郎

「ああ、まあ……」

→よく知ってる。

竹雄

「そのうえで、カナヲ姉ちゃん——は、訓練でも触れられないからともかく、アオイ姉ちゃんとうちの花子、なほちゃん、きよちゃん、すみちゃんに不死川さん家の貞子ちゃんと寿美ちゃんに馴れ馴れしいんだよね」

→目が笑ってない笑顔 & 青筋が立つ。

実弥

「ほほウ？」

→片手の指を鳴らす。

竹雄

「兄ちゃんも機能回復訓練に参加してるんだから知ってるだろ？——って言うか、言われた当事者だったろ？ 善逸さんってば『女の子に触れるんだぞ（中略）女の子はおっぱい二つ、お尻二つ、太もも二つ（中略）幸せ!! うわあああ幸せ!!』って庭で大騒ぎして^{ひんしゆく}響^{ひんしゆく}を^{ひんしゆく}買ってたじゃないか」

炭治郎

「ああ……」

→遠い目。

実弥

「ほほウ？」

→両手の指を鳴らす。

竹雄

「ちなみに、今は機能回復訓練から逃げ出して遊び呆けてます」

→ゲス顔。

実弥

「そうかい。——なら、ちょうどいいじゃねえかア。柱直々に訓練をつけてやるぜエ

……!!」

→ 青筋顔 & 両手の指を鳴らす。

竹雄

「行つてらっしゃーい」

→ 満面の笑み。

【実弥、善逸を探しに立ち去る】

炭治郎

「……善逸、大丈夫かな……?」

竹雄

「兄ちゃん、さっき言つてた母ちゃんの話だけどさ」

→ 切り替えが早い人。

炭治郎

「あ、ああ」

竹雄

「黒死牟さんが居たら、姉ちゃんに変な男は寄つてこれないと思うんだよね」

→ 綺麗な笑顔。

炭治郎

「ああ、なるほど！」

→ 納得した顔。

竹雄

「度胸のある変なのが来てもし、黒死牟さんに勝つてからにしろって言えばいいし」
→ とつても綺麗な笑顔。

炭治郎

「なるほど！ それは安心だな!!」

→ 超納得した顔。

【その頃の実弥】

実弥

「選べエ。訓練に戻るか。俺に殺されるかア」

善逸

「ギャアアアアアア!!」

小波はやがて波へと育つ（下弦会議編）

蝶屋敷にある訓練場。

そこでは現在、機能回復訓練と「全集中の呼吸・常中」の訓練が行われていた。

参加者は竈門炭治郎、我妻善逸、嘴平伊之助の三名である。

一時期、善逸と伊之助は訓練から逃げ出していたのだが、ある人物との交^{拳での語り合い}流以降は

毎日参加するようになっていた。

伊之助は先日、急に現れた男に勝つために、前向きな姿勢で訓練に参加している。

どうやら、語り合いの最中に『基礎中の基礎も出来ねえとは、山の王とやらも大したことねえな』と言われたことが、余程、腹に据えかねているらしい。

それから大奮起した伊之助は、ある目標をたてた。

『すべての柱を倒して黒死牟に挑む』

どうして黒死牟にまで飛び火したのかは不明だが、やる気があるのは良いこと

なので、その点には誰も触れていない。

「この屋敷の主に挑むためにも、俺は強くなる!! まずは走り込みだ!! 来い、お前ら

!!」

伊之助はそう言うのと、はっぶん発奮して訓練に挑んだ。

ちなみに、ここは蝶屋敷なので家主は「花柱」である胡蝶カナエになるのだが、伊之助の意識的には黒死牟が主だぬしという認識らしい。

屋敷の持ち主という意味では間違っている。

だが、蝶屋敷のなかで『最も強い者』という意味では間違っていないため、周囲は訂正の必要性を感じていなかった。

この『すべての柱を倒してまわる』という発言と発想が未来で行われる【柱稽古】の原型になるのだが、それは本人も預かり知らぬことである。

それに対して善逸はというと、どこか後ろ向きな姿勢で参加しているような印象であつた。

例女の子にはおっぱい2つ云々の発言以降、善逸の訓練相手が男性である比率が上がったことが原因だ

原作と違って交代要員がいるから仕方ない
自業自得である。

だからと言って、善逸のやる気を出させるためだけに女性職員を矢面に立てるわけにもいかない。

そんな悪循環おちいに陥っている間に、善逸のやる気は削そがれていった。
あまり良くない傾向である。

何か対策を考えなければならぬ。

皆が頭を悩ませて考えた案を実行してみたのだが、これが思いのほか大当たりしていた。

「きやあああ！ 善逸さん、頑張つてえ！」

「むー！ むー！」

「みんな！ 声援、ありがとう！！」

胡蝶姉妹が考案した【禰豆子と蝶屋敷の美人な女性職員たち女性だらけの応援団】が声援を送る。

すると、善逸は途端にやる気になっていた。

これを見た周囲の者たちは呆れと共に、善逸のやる気を引き出す方法を理解したようである。

「禰豆子ちゃんたちの応援が俺に力ちからを与えてくれる！ 見ててね！ 俺、頑張るから！

超頑張るからねえええ！！ ——だからとつとと捕まれやゴルア！！」

素晴らしい動きを見せる善逸を、累るいが紙一重で避けていく。

ナントカと鉄はさまは使はいようだと言われているが、その通りだなと納得する一幕であった。

そして、炭治郎はというと【全集中の呼吸・常中】を習ってはいしたが、完全にはものに出来ていない。

狭霧山で修行していた時点で、起きている間は「全集中の呼吸」を続けることは出来るようになっていたのだが、睡眠中は普通の呼吸に戻ってしまったているのだ。

ならば、寝ている間も呼吸法を使い続ける「全集中の呼吸・常中」が習得できるようにと、この機会を使って訓練しようという話になっていた。

そのお陰か、全身訓練の「鬼ごっこ」では栗花落カナヲ——見様見真似で「花の呼吸」を使えるようになった天才——と、毎日互角の戦いを繰り返している。

それと並行するように「日の呼吸」の訓練も行っているのだが、こちらは思うようには進んでいない。

炭治郎の身体の動き自体は、過去に「日の呼吸」を習得しようとしていた者たちよりも様になっている。

幼い頃から「ヒノカミ神楽」を練習してきた成果だろう。

だが、いざ「日の呼吸」の型として放った時の負担が凄まじい。

今の炭治郎では「日の呼吸」の型を連続して三つ、無理をして四つも舞えればよし、といったところだろう。

それ以上に舞おうとすると、息が続かずに倒れてしまうのだ。

それでも過去に修行していた者たちよりはマシだと言うのだから、如何に「日の呼吸」が体力を削るものなのか、それがわかる話である。

訓練の様子を見ていた黒死牟は、改めて自分の弟がどれほど規格外な存在だったかを認識するのだった。



昼間は訓練が行われていた蝶屋敷の訓練場であるが、夜は別の顔を見せることがある。

月に一度くらいの間隔で開かれている女子会の日だ。

女子会というだけあって参加者は女性のみ。

集まる者たちに偏りがあるとすれば、基本的に蝶屋敷に関わりのある者か柱と その家族、または継子である、と言ったところか。

元々はカナエが中心になって、一部の奥様友達だけで始めたのが始まりだ。

そこに恋の話や相談をしに来た者たちが加わり、今の形になったという経緯がある。

そのため、この偏り方も当然だと言えるだろう。

訓練場にはすでに数名の人影があり、そのなかには「元・霞柱」である真菰の姿もあった。

腱を切られてしまった足には包帯が巻かれていて、彼女の傍らには補助器具の松葉杖が置かれている。

怪我を理由に鬼殺の最前線から退いた彼女だが、その代わりとして年下の彼 氏を手

に入れていた。

鬼殺隊にいと、そう言った浮いた話から縁遠くなる——そんな余裕がないか、鬼殺に人生を捧げてしまう人が多い——ため、彼女は勝ち組と言えるだろう。

「そう言えば、煉獄さんのところは具合が悪いから来れないって連絡が来てましたけど、宇髄さんのところの奥様方も居ませんか？ 今日是不参加ですか？」

小気味良い音をたてながら歌舞伎揚を囁じついていた真菰が、常連の姿が見えないことに気づいた。

女子会の最古参の面子である彼女たちが姿を見せないことは少なく、過去の集まりを思い返してみても最低一人は参加していたように思う。

首をかしげる真菰。

その問いにはカナエが答えた。

「ああ、鬼の調査に出かけているみたいですよ？ 人に紛れて生活しているみたいで、隠れるのが上手な鬼らしいですね」

カナエがそう言うと、納得の表情を浮かべる。

「つい忘れがちになりますけど、須磨さんたちって〔くのいち〕でしたっけ」

幸せそうに桜餅を食べていた〔恋柱〕の甘露寺蜜璃が、思い出したように呟いた。

彼女も宇髄の妻たち三人——それぞれの名前を須磨、まきを、雛鶴という——を知っ

ているが、彼女たちが「くノ一」として働いている姿を見たことがないために忘れていたらしい。

「そう言えば、そうでしたね。いつもの須磨さんを見ると、そんな感じがしなくて……」

炭治郎の母親である葵枝きえが言葉を濁すと、一同は苦笑いを浮かべた。

確かに葵枝の言う通り、須磨という女性から受ける印象は「くノ一」という職業からかけ離れている。

だからこそ「くノ一」なのかもしれないが。

「まあ、普段の須磨さんはああいう感じですけど、やるときはやるんですよ？ ああ見えても、彼女たちは一般的な隊士よりは強いですし」

「そうなんですか？」

カナエが須磨を持ち上げると、普段の彼女を知る者たちだけでなく、このなかでは浅草で無惨の妻役だった人新参になる麗も驚いた声をあげる。

彼女が須磨に会ったのは数回程度だが、そういった雰囲気を感じられなかったのだらう。

なんとか須磨と「くノ一」を繋げようと、想像力を働かせていた。

「お茶のおかわりが出来ましたよ」

その光景を見ていた　しのぶ　が、苦笑しながら声をかける。
 皆の視線が一齐に集まると、しのぶ　はお茶の配膳をしながら話に加わった。

「彼女たちは目立たないことが一番重要ですからね。むしろ『あの人、じつは忍なんです』って言われても『いや、それはないだろ』って思われるくらいの方が都合がいいんですよ」

しのぶ　の説明を聞いた者たちは納得する。

事実、知っていたはずの彼女たちが忘れてしまうほどに、須磨だけでなく、まきをと雛鶴も「くノ一」だという印象を受けなかった。

素性を知る者でこうならば、知らない者は夢にも思わないだろう。

「それはそうと、今は葵枝さんのところの一番上の息子さんと娘さんが来ているんでしよう？　それに、琴葉さんの息子さん伊之助も見つかつたとか」

納得した雰囲気で纏まつた所で、風不死川実弥柱の妻である薫子つたこが新たな話題を振ってきた。
 最近、蝶屋敷に泊まるようになった炭治郎たちの話である。

「炭治郎は鱗うろこたき　滝さんから聞いてた通りの子だったよ。家族思いのとつてもいい子」

「禰豆子ちゃんも可愛いですよね！　構ってあげると抱っこを強請ねだつて来て、抱きあげて頭をナデナデしてあげるときゅーって抱き締め返してくるんです!!　なんですか、あの可愛い生き物はっ！　って思っちゃいましたよ！　禰豆子ちゃん可愛いですよね！

可愛いですよね!!」

真菰が話題に同調して話を始めると、それに呼応するように蜜璃も話し出した。

蜜璃は禰豆子のことがとても気に入っているらしく、言葉の端々から感じる圧力が凄いことになっている。

これには禰豆子の母親である葵枝も苦笑するしかなかった。

「琴葉さんも、伊之助くんが見つかって良かったですねえ」

「ええ、本当に。——お館様の直感で『会えると思う』とは言われてましたけど、やっぱり不安でしたから……」

志津——原作でようやく名前が判明した不死川家の母親——の言葉に、伊之助の母親である琴葉が頷く。

実際、生き別れてからの十五年間は長かった。

何度も何度も『あの時に死んでしまったのではないか?』と思い悩み、そのたびに折れそうになる心を叱咤激励して生きてきたのだ。

そして、あの猪の被り物を脱がした時の衝撃は、言葉では言い表せない。

実際、言葉を失っていたし、体が硬直して暫くは思考すら停止していた。

「今は息子さんを甘やかして構い倒してますものねえ」

珠世が諷うように笑うと、その様子を思い出した面々は生温かい視線を向ける。

その視線が恥ずかしくなったのか、琴葉は顔を赤くして俯いてしまった。

「そう言えば、累くんが来るのも久し振りですよね。なほもきよもすみも懐いていたから、とても喜んでますよ」

琴葉から話題を逸らそうとしたのか、蝶屋敷で働く隊士の神崎アオイが異なる話題を切り出した。

彼女はこの集まりに自発的に来ることはないのだが、毎回のようにカナエと蜜璃に両脇を抱えられて、半ば強制的に参加させられている人物だ。

カナエと蜜璃曰く『命短し恋せよ乙女』ということらしい。

ちなみに、同じような理由でカナエの継子であるカナヲも強制的に参加させられている。

彼女に関しては自発的に行動することが少ないので『少しでも心が動くように』との願掛けも兼ねて連れてこられているのだが、現状では芳しくないようだ。

「累も罪作りよねえ？ いったい誰に似たんだか……」

「えっ!? あの子たちってそんな関係なんですか!？」

そう言つてカナエが笑うと、興味津々な様子で蜜璃が食いついてきた。

「姉さん。なんでもかんでも恋愛話に絡めるのは止したほうがいいわよ？ あの子たちは、そんなんじゃないんだから」

その様子を見たしのぶは、呆れたようにため息を吐いて姉を諫める。

だが、カナエは『そうかしらあ？』なんて惚とほけているため、効果はなさそうだ。

「じゃあ、彌豆子ちゃんかしら？ 柱合会議のとき、累あの子の膝の上に居たものねえ」

「そう言えば、そうでしたね。なんだか顔も満足そうでしたし……」

カナエの呟きに蜜璃が相槌あいつちを打つと、周囲は色めき立った。

とくに葵枝は我が子のことだ。

蜜璃に躡にじり寄って『その話、詳しく！』なんて言つて迫せまっている。

皆が仲良く話をしているなかで、カナヲは一人で沈黙を保っていた。

話の合間にカナエやしのぶ、アオイが話しかけているのだが、反応らしい反応は返つてこない。

それ自体はいつものことではあるが、今日は少しだけ様子が違っていた。

徐おもむろに衣えのう囊——ポケットのこと——から銅貨を取り出したカナヲが、それを指先で弾い

て宙に放り、落ちてきたところを両手で取る。

手のなかに収まった銅貨は「表」と書かれた面が見えていて、それを見たカナヲは顔をあげた。

「黒死お義父牟さんが来たのも久し振り。私が好きなラムネも買ってきてくれて、嬉しかった」

カナヲの声を聞いて、ぴたりと会話が止む。

周囲の視線は自発的——銅貨での判定はしていたが——に会話に参加したカナヲに

釘付けになつてゐる。

当のカナヲはいつものように微笑んでいるが、その笑みは作り物めいた固いものではない。

本当に嬉しく思つてゐることが伝わってくる、柔らかなものだった。

「——今日のカナヲはとても可愛い!!」

カナエが興奮気味に抱きつくと、カナヲは嫌がる素振りもなく受け入れる。

すると、そこに蜜璃も加わつて、カナヲは揉みくちやにされてしまった。

そんな光景を　しのぶ　とアオイが呆れたように見つめ、周りに居た者たちは微笑ましく見守るのだった。



無限城。

そこは鳴女なきめと名付けられた女の鬼が血鬼術けっさじゆつで管理する、巨大な建造物である。

そして、鬼舞辻無惨きぶつじむざんを始めとする鬼たちの本拠地でもあった。

この城は地下深くに存在しているため、太陽の光が届くことは絶対でない。

そんな城内で、無惨は先程までは日光を克服するための研究に勤しんでいた。

だが、ある瞬間を境目に無惨の表情が激変する。

そして、目の前にあつた机を叩き割つた。

無言で佇む無惨からは、濃厚な怒気が漏れ出ている。

一言で言い表すなら、無惨はキレていた。

少し前に「響下弦の陸」が死んだばかりだというのに、今この瞬間に「刺激臭の凄い鬼下弦の伍」が死んだのだ。

それを知覚した時、無惨が近くにあった机を叩き割ってしまったのも無理はない。

空席になっていた「じゅうにぎづき十二鬼月」の席を埋めたばかりでもあったのだ。

怒りに任せて物に当たったとしても仕方がないだろう。

むしろ、人に当たらなかつただけ穩便に済んだくらいだ。

無惨にしては上出来である。

冗談はさておき、無惨はかつてないほどにキレていた。

下弦の鬼を選定するのも簡単ではない。

なにしろ「じゅうにぎづき十二鬼月」になるためには、無惨の与える血の量に耐えられない個体でないという意味がないからだ。

元の実力的には五十歩百歩であっても、血に耐えられる量には個体差がある。

そして、その上限値は見る事が出来ず、感覚的な物差しで適度に与えてやらねばならない。

過去には「じゅうにぎづき十二鬼月」に選んだものの、与える血の量に耐えられずに体が崩壊すると

いう話も少なくなかった。

今でこそ失敗することは少なくなつたが、それでも失敗がなくなつたわけではない。なので「十二鬼月」に選定するのは、かつて数字を与えた鬼に近い個体を選ぶようにしていた。

だが、そんな都合のいい個体がそう居るわけでもない。

似たような境遇の人間はそれなりにいるが、性別や性格、考え方は千差万別である。だからこそ、選定するには時間がかかり、鬼殺隊に倒されるたびに苛々させられるのだ。

なお、個体ごとに耐えられる量を調べながら与えてやると、強い鬼を簡単に量産することができると。

なおかつ、時間の節約にもなるのだが、そんな手間をかけるくらいなら研究に時間を割くぞ、と考えるのが無惨だった。

その気になれば、下弦の鬼程度なら量産できるのに、それをしない。

無惨が頭無惨と言われる一因でもある。

「鳴女っ！ 【十二鬼月】の下弦のみを集めろ!! 今すぐにだ!!」

顔に青筋を立てた無惨が激しい口調で命じると、鳴女は直ぐに琵琶の弦を鳴らした。痲癩かんしやくを起こした主人ほど手のつけられないものはないと、よく知っているからだ。

鳴女が琵琶の弦を鳴らし続け、漸く一ヶ所に下弦の鬼が勢揃いする。

これで仕事を果たしたと、鳴女はホツと胸を撫で下ろした。

何の予告もなしに集められた下弦の鬼たちは、突然の出来事に戸惑いを隠せないまま、落ち着きもなく右往左往している。

そんな下弦の鬼たちの様子は、無惨の神経を逆撫でしていた。

正しく、火に油を注いでいるのと同じである。

なにしろ、現在進行形で各々の状況対応力や危機管理能力の低さを、自ら露呈しているのだ。

ただでさえ不機嫌な無惨が怒らないわけがない。

せめて、身構えるなりしてから落ち着いた様子で周囲に気を配れば印象は違つたろうが、普段から不死身であることに慢心していたのか、そういった行動は見受けられなかった。

漸く一人の鬼が無惨に気づき、首をかしげながら観察する。

その様子が無惨から離れた位置で見えていた鳴女は、観察している鬼に同情した。

観察している鬼の瞳には「下陸」と刻まれている。

極々最近「十二鬼月」になったばかりの新しい鬼だ。

彼は無限城の外で数字を与えられた鬼である。

もちろん、無限城の話など聞いたことはないだろう。

さらに言えば、数字を与えに來た無慘は本来の男性体で現れていたはずだ。

現在の無慘は擬態しているため、女性の姿である。

気配も変えていることもあり、目の前にいる女性が無慘だと気づくのは無理だろう。

「さつさと頭を垂れて蹲え……っ！ 平伏しろっ!!」

無慘がそう言った次の瞬間には、下弦の鬼たちは綺麗な平伏姿を披露していた。

よく見れば、各個人で差があるが冷や汗をかいている。

下弦の鬼たちは、声を聞いて初めて無慘の存在に気づいたのだ。

問題は『これ以上、無慘の機嫌を損ねずに居られるのか?』である。

ここまで無慘の機嫌を損ねたのだ。

処分されたとしても不思議ではない。

もし生き残れる可能性があるとするれば、無慘に気に入られることだろう。

だが、今日に限って言えば、それはない。

鳴女は知らないことだが、今日の無慘は本気で下弦を解体するつもりでいるからだ。

もはや、下弦の鬼たちに生き延びる方法はない。

「も、申し訳——」

口を開いた「下弦の肆」が、何かによって潰される。

潰したものの正体は、無惨の腕から伸びた触手だった。

毒々しい肉の塊かたまりが蠢くうごめ様は生理的嫌悪感を感じずにはいられないが、今、下弦の鬼たちはそれどころではない。

下弦の仲間である鬼が、無惨の手によって攻撃された。

しかも、口を開いただけで。

この世には理不尽なことが起きることは知っているが、さすがにこれは慮外のことだ。

あまりのことに、下弦の鬼たち全員が滝のような汗を噴き出した。

「誰が、口を開いていいと言った？」

「も、申——」

潰された「下弦の肆」は、再生しながらも謝罪を口にしようとして再び無惨に潰される。

他の下弦の鬼は動くことすら出来ない。

ただただ頭のなかで、今の状況が非常に不味いことだけを理解した。

「私は今、非常に機嫌が悪い。——何故だかわかるか？」

無惨の問いかけに、誰も何も答ええない。

誰も彼も、頭のなかが真っ白になっているからだ。

だが、運悪く、本当に運が悪く【下弦の陸】が考えてしまったのである。
(いきなり呼び出されたんだぞ？ わかるわけないだろ！)

次の瞬間、無惨の触手によって【下弦の陸】は潰されていた。

飛び散った血が隣りに平伏していた下弦の鬼たちに降りかかる。

だが、恐怖のあまりに動けない。

「わからないのか？ この能無しどもが……!!」

無惨の顔に青筋が立つ。

この間に、再生が終わった【下弦の肆】が平伏し直した。

その顔色は真つ青を通り越して、真つ白になっている。

「先程【下弦の伍】が殺された。つい先日、殺された【下弦の陸】の後任が決まったばかりだというのが」

無惨の声から察せられる怒りの度合いに、下弦の鬼たちは無意識に息を飲む。

「何故、貴様ら下弦はそこまで弱い？ 上弦の鬼たちはここ百年、顔ぶれが変わらないというのに、何故、下弦のみがこれ程までに死んでゆく？」

無惨の怒りは鎮まらない。

むしろ、悪化の一途を辿っていた。

そんななかでも、つい【下弦の陸】は考えてしまう。

先程、無惨に思考を読まれたことすら忘れていた。

（そんなこと、俺に言われても……）

突然、木製の床に輝ひびが入る。

それを知覚するより前に「下弦の陸」は触手で叩き潰されていた。

今度は、再生しない。

今、この瞬間に「下弦の陸」は死んだのだ。

下弦の鬼たちの間に戦慄が走る。

身体が小刻みに震えだし、目の前に差し迫せまった恐怖に怯えた。

先程、二度も潰された「下弦の肆」など、思考が滅茶苦茶に混乱しているうえに、腰

が抜けて動けなくなっている。

（――逃げるしかないっ！）

そんな状況のなか、一縷いちるの望みを賭けて「下弦の参」が逃走した。

無限城のなかに逃げ場所などなく、鳴女の許可なしに出入りすることなど出来ないの

に。

おそらくは恐怖に耐えきれず、冷静に物事を判断できなくなつたのだろう。

例え冷静だったとしても、待っているのは「死」だけなのだが。

ひたすら逃げ続けていた「下弦の参」だったが、その命は一瞬で刈り取られた。

不快な音を立てながら、先程までは「下弦の参」だったものが元いた場所に投げ捨てられる。

無^{ふたつの意味で} 惨^{くみび}に頸^{くび}を切られたらしい。

「私は貴様らに存在価値を見出だせなくなつた。貴様ら下弦が次々に死ぬたびに、私の貴重な時間が削^{けず}られていく」

下弦の鬼たちに重圧がかかる。

そんなはずはないのだが、物理的に空気が重くなつたようにも感じた。

「貴様ら如^{ごと}きに時間を割くことなど、私はもうしない。下弦は今日、今すぐ、この場で解体する」

「お、お待ち——」

堪^{たま}らず声をあげた「下弦の式」だったが、立ち上がった瞬間に上半身が消える。

上半身があつた場所には、無惨の触手が存在していた。

上から半分を失つた「下弦の式」だったも^{下半}の^身が、音を立って床に倒れる。

残つたのは、無言で物事の推移を見守つていた「下弦の壺」と、極度の混乱状態から戻つてこれない「下弦の肆」だ。

無惨は動けない【下弦の肆】に触手を降り下ろす。

「ぎ、鬼舞辻さ——」

ハツと正氣に戻った「下弦の肆」だったが、混乱するあまりに無惨の名を呼びながら潰された。

反射的に両手で頭を庇うような動きをしていたが、その程度で防げるような攻撃ではない。

例え手を下さなくても、無惨の名を呼んだので「血の呪い」で死んでいただろう。

ついに最後の一人となった「下弦の壺」は、その表情を少しだけ不満気にしていた。

この「下弦の壺」は名を魘夢えんむと言ひ、他人の苦しむ声や姿が大好きな鬼である。

だからこそ、今の状況には不満があつた。

思っていたほど、下弦の鬼たちが断末魔の悲鳴をあげることがなく——悲鳴をあげる

隙がなかったとも言ふ——絶望の表情も見れなかったからだ。

だが、そんなことは無惨には関係がない。

無惨は無言で下弦の壺を叩き潰した。

凄惨せいさん。

この現状を一言で表現するならば、その言葉が相応ふさわしい。

そんな光景を生み出した鬼の祖は、長々とため息を吐き出したあとに踵かかとを返した。

隠れ家になっている屋敷に戻るのだろう。

鳴女が琵琶の弦を弾くと、無惨の目の前に襖ふすまが現れ、左右に開いた。

無惨が屋敷へと移動すると、琵琶の音と共に襖が閉じる。こうして、無限城からは鳴女以外の鬼は去った。

あとに残るのは、下弦の鬼たちが遺した肉片と血だけである。

鳴女はすつと立ち上がると、血だらけになった床に視線を向けた。目を皿皿眼のようにして、何かを探している。

すると、鳴女の視線がある一点で止まった。

鳴女は素早く血塗ちまみれの床に降り立つと、着物が汚れるのも構わずに見つけたものを手に取る。

それは鬼の角だった。

下弦の鬼で唯一、角を持った者の残骸だ。

鳴女はそれを持って元いた場所へ移動すると、琵琶の弦を一度だけ弾く。

すると、鳴女の足元に壺が現れた。

とある上弦の鬼が作り、鳴女用だと言って置いていった壺である。

本来の用途は花を活いけるためのものだろう。

だが、鳴女はその壺のなかに鬼の角を入れた。

さらには血鬼術で床を操り、下弦の鬼たちが流した血を壺のなかへと流し込む。

そうして、しばらく待っていると壺のなかに変化が現れた。

僅かに気泡が立ったかと思うと、白くて小さな手が見えたのだ。
それを確認した鳴女は、ホッと息をついた。

「あなたは、生きてね」

壺のなかに向かつてそう話しかけると、鳴女は琵琶の弦を弾く。
すると、いつものように襖が現れ左右に開いた。

襖の向こう側は、古びた民家のようなようだ。

長いこと人は住んでいないようで、壁や木戸には穴が開いている。

しかし、日光を避けることは出来そうな空間だった。

日光が万一にも当たたらぬように、物陰になつている場所に壺を置く。

すると、壺のなかから出てきた手が、鳴女を行かせまいとして着物の端を掴んだ。

だが、力が入らないように、掴んだはずの指先から、着物の端はするりと抜ける。

鳴女は壺から出てきた手を握り返すと、先程の言葉をもう一度繰り返した。

「あなたは、生きるの。——いいわね？」

名残惜しむように、握った手に頬を寄せる。

そして、それを最後に鳴女は無限城へと帰っていった。

鳴女が去つて暫くすると、日が暮れたのか、辺りが暗くなる。

すると、今まで変化のなかつた壺が急に揺れだして倒れた。

だが、壺の中身を満たしていたはずの血は一滴も零れない。

その代わりに出てきたのは、白い肌をした幼子わきなごだった。

ガタガタと震える体を抱き締めながら、おそるおそる周囲を見回す幼児の瞳には、はつきりと「下肆」と刻まれている。

「な、なき、め……なき、め、さん……？」

蚊の鳴くような弱々しい小さな声で「下弦の肆」である零余子むかごは、無限城あの場所から逃がしてくれた恩人鳴女の名を呼ぶ。

そして、返事がないことで状況を察したのか、すすり泣く声だけが悲しげに辺りに響くのだった。



大正こそこそ噂話（壺）

塚山つかやま麗れい

原作二巻で登場し、月彦つきひこと偽名を名乗っていた鬼舞辻無惨の妻役をしていた人。
殺された死んだ最初の夫との間に一人娘がいる。

富豪の家系であるため、その伝つてや財力を無惨に狙われ、いいように使われていた。

自分が居たという痕跡を残さない無惨の臆病な性格からして、原作では死んでいる可能性が高い。

本作では警察が無惨の正体を暴いたため、証拠の隠滅やら何やらが一切出来ず、現場を見ていた鎧かすがいがらす鴉を經由して鬼殺隊にまで情報が回った。

そのため、無惨の情報を知る者として、身の安全の確保を理由に蝶屋敷にお世話になっている。

ついでに、彼女の実家と接触して情報を共有した結果、鬼殺隊に金銭的な支援を約束してくれた。

家の都合で結婚した最初の夫とは死に別れ、慰なぐさめてくれた二人目鬼舞辻無惨の夫に恋愛感情をもっていたが騙されていたということで、恋愛と結婚というものに嫌気が差しつつある。

蝶屋敷に來た際に花柱から目をつけられているが、上記の理由により、実利や対価をもつて話を説いたほうが受けが良かった。

そのため、彼女は花柱の要求を『蝶屋敷で安全に生活できるように取り図るかわりに、鬼いちちゃんの子供を産む』という話だと割りきっている。

しかし、その認識がいつまで続くかと、一部で賭けの対象になっていることは知らない。

麗

「契約ですものね。大丈夫。ちゃんと産みますから」

→冷めた瞳

まきをを

「(その態度が何時まで保つかねえ……)」

→二週間と予想。

須磨

「(私、知ってます！ ああいう人に限って、ちよつと優しくされるとすぐに落ちるんですよ!!)」

→一週間と予想。

雛鶴ひなつる

「(貴女たちねえ……)」

→呆れた目で見ながら三週間と予想。

天元

「(とか言いながら地味に賭けてんじゃねえか)」

→派手に初日で即落ちと予想。

ちなみに、彼女の凍った心を溶かすための鍵は、元・旦那たちの声と鬼いちやんの声に含まれた感情と熱量の差に気づけるかどうか？ という点。

塚山家のことを気にせず彼女自身と向き合い、大切に、大事にされていることに気が

つけば即落ちする可能性が高い。

世間知らずなお嬢様育ちなだけあって、彼女はチョロい部類の人。

娘さんから攻略すると、さらに落ちやすくなる。

ちなみに、鬼いちやんと娘さんは仲がいい。

三度目の正直で幸せを掴むことは出来るか？

原作で姓は判明していないため、そこに関しては捏造している。

ただ、元ネタが存在していて、知りたい人は「つかやま ゆたろう」で検索してみよう。

大正こそこそ噂話（弐）

不死川 志津

不死川一家の母親。

暴力的な夫から、小さな体で七人の子供たちを守り通した母の鏡。

原作では鬼舞辻無惨に鬼にされたあげくに、自らの手で子供たちを殺し、最終的には息子の実弥に討たれるという悲劇を演出させられた人。

実弥と玄弥の家族を守っていくという約束の話と合わせて、この仕打ちはなんだ！と憤慨した人は多いはず。

本作では偶然にも鬼化した直後に町中を見回っていた累が発見して、事無きを得た。鬼いちゃんと累には三年くらい同行していたが、その間に色々あつて、鬼いちゃんに惚れ込んでいくことになる。

一時期は累のお義母さん候補にまでなるが、鬼いちゃんが生前繼國カチエの妻への思いを捨てきれていなかったために、一線を越えることはなかった。

その後、鬼いちゃんと花柱が再会したことで失恋したかに見えたが『側室に欲しい』と言われて困惑する。

身を引こうとしたが、花柱から事情を聞かされて考えを改めた。

なので、彼女は花柱の最初の同盟者である。

鬼いちゃんへの好感度は、三年間——自我が戻ってからだと一年間——の積み重ねがあるおかげでかなり高い。

ちよつと筋肉フエチなところがあり、鬼いちゃんの腕とか胸板とか腹筋の具合とかが大好き。

よく触りたがつて、鬼いちゃんを困惑させる。

志津

「このカチカチ具合とかが好きなんよねえ」

→頬を赤らめながら恍惚こうこつかん感に浸る。

黒死牟

「……」

→くすぐつたい & 困惑中。

鬼いちやんに抱き抱えられて眠るのも大好きで、本人曰く、腕のなかにすっぽりとおさまる感じがいいらしい。

累が言うには、自我が戻る前からそういつた感じでしたようだ。

子供たちを守り続けてきた彼女の過去を考えると、自分を守ってくれる相手がいることに安心感を得ているのかもしれない。

原作第二百話目にして、ようやく名前が判明した。

筆者は捏造するつもりでいたので、原作で名前がわかって大歓喜している。

ついでに糞親父も登場した。

前科のせいで評価は悪いが、そのまま逝きそうだった実弥を死なせなかったことだけは誉めてやってもいい。

→謎の上から目線（蛇柱風）

しかし、その手を離せや！ と思った人は多いと思われる。

地獄に逝つてもDV親父がいるとか、どれだけ不幸になれば救われるのか……。

糞親父（原作&本作）

「……」

→無言の圧力×2。

黒死牟（本作）

「……」

→無言の超最終形態&泣き別れ顔コンボ威圧力。

黒死牟（原作）

（何故……こんなことになっている……？）

→困惑中。

大正こそこそ噂話（参）

神崎 アオイ

蝶屋敷に常駐する隊士 兼 看護師。

基本的には原作と一緒。

なので、彼女のことを知りたいなら原作を読もう。

蝶屋敷に常駐するようになって、一番お世話になった相手が嘴平琴葉である。

特に、ある事情でまともに戦えない隊士である彼女をあつさり受け入れ、温かな態度

で接し続けてくれたことがアオイの心を癒してくれた。

そういった事情で、琴葉のことをかなり慕っている。

昔はよく『お母さん』と呼んでいたとか。

琴葉の母性にやられたとも言う。

琴葉が息子を探していることを知っているため、伊之助が見つかったと知った時は一緒になって喜んでいた。

蝶屋敷に勤める者なら皆同じ気持ちだったろうが、アオイの喜びようは一段と凄かったようだ。

しかし、当の伊之助に会ったときの衝撃は凄まじかったらしく、言葉を失っていた模様。

本人曰く『もつと琴葉さんな子が来ると思ってたら猪だった件』とのこと。

しかし、琴葉の息子だということで気にかけている。

感覚的には手のかかる弟ができた感じかもしれない。

原作と同様に、炭治郎たちが退院する際に『とんでもねえ炭治郎』に遭遇する。

その結果、心の天秤に新しい錘おもりが引つ掛かって、ぐらぐらと揺れ続けることになった。

炭アオ？

伊アオ？

どちらに転ぶかは、この先、炭治郎と伊之助がアオイにどう接していくかが鍵になる。

ちなみに、その様子は竈門家と不死川家の子供たちにしつかりと見られていた。
寿美

「アオイお姉ちゃん、キユンと来た？」

→ 蜜璃の影響で恋バナ大好き。

アオイ

「ななななにをいつてるのあなたたち!？」

→ 凶星を当てられ動揺中。

花子

「アオイお姉ちゃん、あおはる？ あおはる？」

→ 蜜璃の影響で恋バナ大好き。

蜜璃

「なんだか恋バナの気配がキユンキユンする!!」

→ 警備担当地区に居ながら察知した。

大正つゆりこそこそ噂話（肆）

栗花落 カナヲ

花柱・胡蝶カナエの継子にして、見様見真似で「花の呼吸」を身に付けた天才。アオイと同様に、基本的には原作と一緒に。

詳しく知りたい人は原作を読もう。

本作では継国巖勝と初代花柱・栗花落カナエの子孫という設定。

Q. 鬼いちゃんが鬼だと一目でわかる要素はなんですか？

A. 六つ目

Q. カナヲの優れた身体能力はなんですか？

A. 視力

ということ、カナヲの目の良さは先祖代々の遺伝である。

容姿も初代にそっくりなので、初めて会った鬼いちゃんは吃驚びっくりした。

しかし、すぐに子孫だと見抜いて可愛がるようになる。

原作と同様に心の声が小さく、それは鬼いちゃんと会っても大して変わらなかったが『とんでもねえ炭治郎』に会ってからは劇的に変わった。

ちなみに、その様子は竈門家と不死川家の子供たちにこっそりと見られており、それ以降、炭治郎は『さん』付け&最敬礼で呼ばれるようになる。

もちろん、炭治郎は困惑した。

余談ではあるが、アオイが炭治郎と伊之助を気にしていることに気づいていて、彼女

のことが大好きなカナヲとしては『アオイと一緒に炭治郎と暮らせたらなあ』とか思っている。

だが、決めるのはアオイだからと口にはしていない。

アオイ

「ちちち違うから！ 私、そんなのじゃないですから!!」

→まだまだ動揺中。

カナヲ

(裏……まだ、なにも言わないでいよう)

→表裏銅貨で決めた。

貞子^{ていこ}

(これは……蜜璃お姉ちゃんに要報告な案件よね?)

→蜜璃の影響で恋バナ大好き。

大正こそこそ噂話(伍)

下弦の肆 零余子^{むかご}

いろんな意味で不遇、不幸な十二鬼月の下弦。

原作ではたった一話だけのために出演し、処分された。

性格は臆病らしく、鬼殺隊の柱に遭えば逃げることだけを考えていたらしい。

ただ、その考え自体は間違ったものではなく、勝てないと判断すれば逃げるのは当然である。

しかし、無惨のお気に召さなかったようで、ちよつとした問答の末に処分された。

本作では原作以上に酷い目にあっている。

だが、琵琶の君のおかげもあり、辛うじて生存できた。

ちなみに、彼女が無事だったのは血鬼術のおかげである。

名は体を表すという言葉通り、彼女は本体に生えた零余子——角が無事なら再生できるといふ生存特化型の血鬼術を所持していて、都合二回は頸くびを斬られても再生できるという性能をもつ。

なお、無惨による再生不能の攻撃すら一回の死亡に数えるという破格の性能だったことが今回の騒動で初めて発覚した。

そのうえ、彼女の失言により血の呪いが発動したため、再生した彼女からは血の呪いが外れているという奇跡が起きている。

なので、無惨は彼女の生存に気付いていない。

さらに、腹を立てるあまりに琵琶の君に注意を払っていなかったため、彼女が裏切りとも言える行為をしていたことにも気づかなかつた。

無惨の失敗は八つ当たりで叩き潰したこと。

原作と同じように吸収しておけば、零余子は再生できなかった。

数少ない女性の鬼ということで、琵琶の君とは仲が良い。

零余子は彼女を姉のように慕っていて、琵琶の君が血鬼術で作り出した小窓を通してよくお話していた。

堕姫？

零余子や琵琶の君と感性が合うとでも？

ちなみに、彼女の父親は重罪を犯した犯罪者を閉じ込める監獄（刑務所）の典獄（てんごく所長）である。

彼女はそこで死んだ者、死ぬ予定の者たちを食べていたため、ある程度は安定した生活が出来ていた。

それは父親が役職を外れても変わらなかったようで、どうやら後任の者にも手を回していたらしい。

なので、父親という存在は彼女にとって『絶対的な味方であり庇護者』という意味がある。

しかし、安定して食えることができるということは、その分だけ強くなるということでもあるため、実戦を経ることなく強くなってしまった彼女は無惨に目をつけられて十

二鬼月にされてしまう。

ちなみに、それまで無惨に見逃されていたのは『安定して人間を食べ続けることが出来る環境にいるなら、放っておいても十二鬼月級になるのでは？』と期待されていたから。

原作の累みたいに愛着をもっていたわけではない。

なお、戦ったことがないのに十二鬼月の序列が上がっているのは、単純に上の席が空いて繰り上がったせいである。

そして間髪入れずにさらに上の席が空いたため、下弦の肆まで繰り上がった。

十二鬼月になって以降も無惨公認で生家を離れずに生活していたが、鬼殺隊に縁ゆかりのある者が監獄を訪れた際に通報されて追い出されてしまう。

その時に零余子を討伐しに来た隊士が柱だったため、彼女は柱に遭うと逃げ出すようになった。

初戦闘が柱とか、冗談ではない。

その時は例の血鬼術を使って出し抜いた。

ちなみに、琵琶の君が彼女を逃がした先は、みんな大好き【那田蜘蛛山】である。



大正こそこそオマケ話

黒死牟

「さて……お館様に言われて……那田蜘蛛山まで……来てみたが……」

珠世

「ここに何かがあると言うのでしょうか？」

【草が揺れる音】

黒死牟

「む……」

珠世

「あら……」

→目を丸くする。

??

「――！」

→怯えている。

珠世

「この子は……下弦の肆!？」

黒死牟

「……」

→涙目ながらも頷く。

珠世

「何があつたのか。話してもらえますか？」

「下弦の肆は無惨主催によるパワハラ会議ならぬリストラ通告の内容を話し、ついでに身の上話もする」

黒死牟

「……」

→頭無惨な暴挙に頭が痛い。

珠世

「それは……大変でしたね……」

→かなり深く同情する。

下弦の肆

「……ひつく……ぐすつ……ひつく……」

→涙としゃっくりが止まらない。

珠世

「調べてみましたが、血の呪いは外れているようですね」

下弦の肆

「きぶんつじしやま……こあい……」

→ 体の震えが止まらない。

珠世

「（か、可愛い……！）」

→ 幼い下弦の肆の姿に母性本能を刺激される。

黒死牟

「……」

→ 何となく、嫌な予感がした。

珠世

「ところで、あなたの名前は？」

→ 禰豆子を思い出している。

下弦の肆

「む、零余子……」

→ 迷子の子供のように怯えている。

珠世

「なるほど。むか……零余子ですか」

→ 琴葉と伊之助を思い出している。

黒死牟

「……」

→ 嫌な予感が強くなる。

珠世

「それなら、今日からあなたの名前は珠芽^{たまめ}。私の義娘ということにしましょうか。私の名前は珠世。珠世お義母さん、と呼んでくださいいね？」

→ 慈愛に満ちた笑み。

珠芽

「おかあさん……う？」

→ 突然の申し出に吃驚^{びっくり}する。

珠世

「それから、こちらが巖勝^{みちかつ}様。あなたを守ってくれる、お義父さんです。——ね？」

→ 有無を言わさぬ圧力付きの笑み。

珠芽

「おとうさん……!!」

→ 輝きを放つような無垢なる瞳。

黒死牟

「……」

→ 嫌な予感が当たって頭が痛い。

【珠世の隠れ家に移動する】

愈史郎

「お帰りなさい！ 珠世様!!」

（ああ珠世様！ 珠世様だ珠世様！ 珠世様ああ!!）

→ 大興奮。

珠世

「久しぶりですね、愈史郎。変わりはないですか？」

愈史郎

「はい！ もちろんです!!」

（ああ、珠世様がそこに居られるだけで世界が色づく！ 華やぐ！ さすがは珠世様だ

！ やはり何時いつ見てもお美しいいいいい!!）

→ 暴走中。

珠芽

「……」

→ 珠世の足にくつついて、ビクビクしている。

愈史郎

「………何ですか、コレは？」

(珠世様にぴったりと引つ付きやがって………羨ま怪しからん!!)

→ 暴走鎮静化 & 不審者に警戒中。

珠世

「愈史郎。この子は珠芽と言って、私と巖勝みちかつ様の義娘むすめです」

→ 悪意はない。

愈史郎

「……!!」

(……!!)

→ 背後に落雷が落ちる。

珠世

「珠芽。この子は愈史郎です。あなたのお義兄ちゃんですよ」

→ 本気で悪意はない。

珠芽

「おにいちゃん………!」

→曇りくものない眼まなこ。

愈史郎

「……」

（……）

→口から魂が抜ける。

黒死牟

「……」

→無言で合掌する。

【この後、禰豆子と志津、珠芽の血が珠世の研究に役立ち、浅草で無惨に鬼にされた男性が自我を取り戻して、呪いも外れました】

育つた波はうねり打つ（無限列車編）

柱合会議から三ヶ月ほど過ぎた、ある日のことである。

川沿いの道に建てられた茶店で一服ついていた煉獄杏寿郎のもとに、ひとつの指令が舞い込んできた。

それ自体は何ら変哲のない任務である。

だが、任務に参加する隊士の名簿を見て、杏寿郎は指令書から顔をあげた。

「随伴する隊士は我妻善逸、竈門炭治郎、嘴平伊之助と、特別隊士の竈門禰豆子を合わせた四名か！ あの少年と合同任務とはな！ よもや、こうも早く機会が回ってくるとは思わなかった！」

そう言つて、杏寿郎は腕を組んで唸り始める。

そんな様子を不思議に思ったのか、隣に座っていた継子の時透有一郎が眉を顰めながら問いかけた。

ちなみに、彼は〔霞柱〕である時透無一郎の双子の兄である。

「どうしたんです？ 杏寿郎さんが考え込むなんて珍しいですね」

「いや、なに！ 次の指令が合同任務でな！ 前に話した竈門少年が随伴する隊士に加

わっているようなのだ！」

「ああ、例の強い鬼にばかり遭遇し続けてるって隊士ですか」

有一郎は納得して頷いた。

竈門炭治郎と言えば、鬼舞辻無惨の人相書きの作成に関わった家庭の長男だ。

そして、現在では「日の呼吸」を使える唯一の人材でもある。

そのうえ、入隊してからの軌跡も有名だ。

鬼殺隊の上層に近い人間なら知らない者はいないだろう。

さらには、有一郎にとっては先祖である黒死牟にも目をかけられている人物であるため、知らないわけがなかった。

ふと、何かを思い出した有一郎は、急に体を震わせる。

「どうした？ 風邪でもひいたのか！」

「いやいや、体調を崩したわけじゃないです。ちよつと……昔のことを思い出して……」

有一郎が歯切れ悪く説明すると、杏寿郎は納得して笑った。

「なるほど、黒死牟殿のことか！ 確かに黒死牟殿も強い鬼だな！ そのうち、また手合わせ願いたい！」

杏寿郎はそう言って笑うが、有一郎にとって黒死牟は苦手な相手である。

例え手合わせだろうと向き合いたくはない。

それくらい強烈な恐怖を体に叩き込まれていた。

その恐怖を味わったのは、時透兄弟が鬼殺隊のお世話になるより前のことである。

当時の時透兄弟は、事故と病やまいで亡くなった両親と同じように杣人そまびと——木こりのこと——をしていた。

そこにやって来たのが、産屋敷耀哉うぶやしきかがやの妻である産屋敷あまねである。

彼女は、鬼殺隊という組織の基盤を作り上げた剣士けんしの子孫継嗣敵勝に協力してもらおうと、わざわざ景信山かげのぶやまの奥深くにまで歩いてやって来たのだ。

そんなあまねに対して時透兄弟——いや、有一郎が返した返事は『否』だった。両親を亡くしたばかりの有一郎は、双子の弟である無一郎を『何があつても守らなければならぬ』と考えていたのである。

それ故に、何度あまねが自宅まで足を運ぼうと、有一郎は頑かたくなに拒絶し続けた。

しかし、何度追い返されようと、あまねは足繁しげく時透家に通い、根気よく説得を続けた。

有一郎たちの両親が他界していると聞いていたせいである。

せめて、危険の多い山を下りて、安全な町——出来れば蝶屋敷、欲を言えば産屋敷邸

で生活してほしかった。

人の親として、見て見ぬふりなど あまね には出来なかつたのだ。

だから、この頃の あまね は鬼殺隊とは関係なく動いていたのである。

そんな あまね の思いなど知らない有一郎は、頑として譲らなかつた。

家族と暮らした土地を離れたくない。

両親の墓だつて、この土地にある。

そんな気持ちもあつたのだ。

様々なことが重なつて苛々していた有一郎は、ある時、あまね に水を浴びせかけて追い返してしまう。

この一件が原因で有一郎と無一郎は喧嘩をしたのだが、この後に待つていた事態に比べれば些細なことである。

有一郎と無一郎が喧嘩をして口を利かなくなつて暫く経つた ある日の夜。

その日は夏ということもあつて蒸し暑く、時透兄弟は家の入り口の戸を開けて眠つていた。

そこに、鬼がやつて来たのである。

『騒ぐな……』

恐ろしい気配を隠しもしない六つ目の鬼は、時透兄弟を睨み付けると、その顔に青筋を立てて言った。

『あまね様に……水をかけて追い返すという……不埒な働きをした者がいると聞いた……』

体中の細胞が絶叫して泣き出すような恐怖を感じながら、時透兄弟はお互いを抱き締めあつて体を震わせる。

『我が子孫でありながら……その不敬……万死に値する……!!』

一歩一歩、ゆっくりと近づいてくる六つ目の鬼。

それを前にした時透兄弟は、ただ悲鳴をあげることしか出来なかつた。

なお、無一郎は完全にとぼちりである。

その後、時透兄弟は産屋敷邸に送り届けられ、無一郎が鬼殺隊に志願したのをきっかけに、有一郎も鬼殺隊に入隊することになったのだ。

「うう……!!?」

当時のことを思い出してしまった有一郎は再び身を震わせたあと、ハツとなつて杏寿郎に問いかけた。

「まさか、次の任務に黒死牟様が来るなんてことはないですよね? ないですよね!」

よほど怖い思いをしたのか、有一郎は必死である。

その姿が面白かったのか、杏寿郎は笑いながら首を振って否定した。

「いや、黒死牟殿は参加しない！ なんでも、今は珠世殿の隠れ家に行っているらしい！」

そう聞かされた有一郎はホツと息を吐くと、額にかいた汗を拭う。

その姿を見ていた杏寿郎は、ふと考えた。

苦手な相手を、苦手なままにしておいていいのだろうか？

早いうちに、苦手意識を克服するべきではないか？

杏寿郎がそんなことを考えているとは露知らず。

有一郎は残っていたお茶を飲み干すと、会計を済ませるために店の人を呼ぶのだった。



杏寿郎のもとに舞い込んだ合同任務だが、それは思いの外あつかりと片がついた。

柱である杏寿郎に回される任務という意味でも、強い鬼に遭遇し続けていた炭治郎と彌豆子がいた、という意味でも意外な結果である。

請け負った任務の内容だが、列車に住み着いた鬼がいるというものだった。

数人の隊士を送ったが誰一人として帰ってこない、という話である。

確かに、鬼は強そうだった。

杏寿郎以上に大きくがっしりとした体軀たいくをしており、腕や太股ふとももも相応に太く、かなりの筋肉を搭載している鬼だった。

もしも、腕や手に捕まるようなことがあれば、逃げ出すことは叶わずに、骨という骨を碎かれて簡単に負けていただろう。

二つの頭を無理矢理にくつつけたような奇妙な頭部には、目が四つもあるために視野も広そうだった。

左右非対称ではあったが、正面から戦うしかない車両のなかでは有利に働いていたことだろう。

額には角が四本もあり、肩と二の腕あたりにも角が生えていた。

頭の角はともかく、肩の角は凶器に成りうる。

体軀と筋肉量、体重などのことも相俟あいまつて、ただの体当たりでも油断はできなかつただろう。

そのうえで危険だったのは血鬼術けつきじゆつである。

外見的には肉弾戦に特化しているように見せておいて、血鬼術は姿を隠すことに特化していたのだ。

姿を隠している間は杏寿郎でも気配が探りづらく、さらには炭治郎の嗅覚や善逸の聴

覚、伊之助の皮膚感覚にも引つ掛からなかった。

もしも、杏寿郎がいない状態で奇襲を受けていたとしたら、それだけで壊滅していた可能性もあつただろう。

送り込んだ隊士が消息を絶つた理由も納得である。

しかし、今回は相手が悪かった。

——炎の呼吸 壱ノ型 不知火

その速さは善逸の使う「霹靂一閃」よりも、さらに速い一撃である。

本来であれば「炎の呼吸」より「雷の呼吸」のほうが速いのだが、これについては使い手の問題だ。

純粹に、杏寿郎の身体能力が善逸のそれより優れていた。

ただ、それだけの話である。

炭治郎たちが気付いた時には、鬼の頸は宙を舞っていた。

鬼が何かをするよりも早く、杏寿郎の日輪刀が頸をはねたのだ。

あまりにも呆気ない幕切れに、炭治郎と善逸は開いた口が塞がらない。

伊之助は実力の一端を見せた杏寿郎の姿に次元の違いを感じ取り、武者震いしていた。

その後、杏寿郎自身が鬼の倒滅を確認して任務の完了を告げ、今に至る。

「今回は場所に救われたな！　もしも、列車という狭い空間でなければ、鬼の姿を捉えるのにも苦労しただろう！」

そう言つて、杏寿郎は快活に笑つた。

炭治郎たちは「全集中の呼吸・常中」を習得したが、それは柱になるための第一歩でしかない。

それを考えれば、今回の一件は『柱と自分のいる位置』を確認するのに良い機会になつただろう。

しかし、これはまだ、杏寿郎の実力の一端でしかない。

これから間もなく、それを目撃する機会に遭遇することになるとは、この時、誰も思つてもいなかつた。



『遠足は、帰るまでが遠足ですよ』

いったい誰が言い出したことかは不明である。

一説には、1950年代にチョモランマに登頂した登山家が言つたとされる『例え登頂できたとしても、生きて帰つて来れなければ登頂に成功したとは言えないのではないか？』という言葉が元になっているとも言われているが、正確な起源はわからない。

だが、現代でも使われる決まり文句であり、そこには『寄り道せずに帰りなさい』と

いう学童向けの意味とは別に『目的を達成したあと油断してはならない』という意味がある。

日本のことわざにもある『勝つて兜かぶとの緒を締めよ』にも通じるものがあるだろう。

そして、この言葉は現在の炭治郎たちにも当てはまる言葉である。

確かに、炭治郎たちは鬼を倒した。

与えられていた任務を達成した、という意味では彼らの仕事は終わりである。

しかし、それは鬼殺隊の事情であつて、敵対する鬼にとつては無意味な事柄だ。

気を抜く炭治郎たちを嘲笑あざわらうかのように、鬼の悪意はそこまで迫っていた。



杏寿郎が鬼を斬つたことで車両のなかは一時的に騒然としたものの、現在は平穏な空気を取り戻していた。

乗客のなかには鬼殺隊のことを知る者もいたらしく、何も知らない人々を落ち着かせるのに協力してくれたのである。

その後も列車は走り続け、もう少しで駅に到着するだろう。

そんな時に、異変は起こった。

ごごん、と二回続けて音が鳴る。

初めはただ、車両の屋根に何か重さのあるモノが当たったのだと、誰もが思ったこと

だろう。

ただ、線路の周囲は開けていて、何かが降ってくるような場所ではない。

そのうえ、ここは走っている列車の車両である。

いったい、何が車両の屋根に落ちると言うのだろうか？

続いて起きた異変が、車両に乗っていた乗客全員に恐怖と混乱を撒き起こした。

天井から鋭い刃が突き出てきたのである。

車両の中央辺りに差し込まれた刃は、ゆっくりと上下しながら天井を切り裂き始めた。

なんとも凄まじい切れ味である。

この時点で、杏寿郎は乗客に隣の車両へ避難するように呼びかけを終えていた。

状況を理解した乗客が、慌ただしく隣の車両へと移動してく。

そんななか、天井を切り裂いていた刃が止まり、屋根の上へと引き抜かれた。

丸い円を描くように切り込みを入れられた部分の天井が、何度か音を立てながら振動する。

屋根の上にいる何者かが、斬った部分を落とそうとしているのだ。

そうこうしているうちに天井は抜け落ち、床へと落下する。

そして、屋根の上にあった何者かが、天井に空けられた穴から車両のなかへと入ってきて

た。

現れたのは鬼だ。

それも、刀を持つ鬼である。

鬼の体軀は杏寿郎と同じくらいの大ききさだろうか。

先程まで列車に潜んでいた鬼よりは小さいが、平均的な身長より大きいのは間違いない。

その鬼から漂う匂いを嗅いだとき、炭治郎は思わず鼻を押さえた。

濃い。そして、重たい。

今まで出会ったどの鬼よりも、鬼舞辻無惨の血の匂いが強く感じられる相手。

それが、目の前に現れた鬼だった。

それもそのはず、鬼の瞳には「上弦」と「弐」の文字が刻まれている。

「よもやよもや、だ。竈門少年と共にいれば強い鬼と出会うやもしれんとは思っていたが、それが【上弦の弐】とは!!」

杏寿郎が刀を抜いて構える。

炭治郎たちも身構えたのだが、そんななか、伊之助がポツリと呟いた。

「……なんかコイツ、黒死六牟目に似てねえか？」

「あ、それは俺も思った」

「髪の結び方と言ひ、背恰好と言ひ、刀持つてることと言ひ。黒死牟さんを思いつきり意識してゐるって言うか、何て言うか……」

善逸と炭治郎が同意する。

すると突然、鬼が怒声をあげた。

「黒死牟……黒死牟だどっ!?!」

あまりの怒気に炭治郎たちは思わず後退りする。

顔に青筋を立てた鬼は構わず続けた。

「彼奴の……彼奴のせいで俺はっ!! ああ、何もかもが腹立たしいっ!! 黒死牟め

……っ!! 狛治めえっ……!!」

「うわあ。はくじつてのは何だか知らないけど……黒死牟さん、かなり恨まれてるじゃ

ん」

捻じ曲がって禍々しい不快な音を聴いた善逸が、顔を青くして慄いた。

すると、鬼は急に杏寿郎を睨みつけて叫ぶ。

「貴様もだっ!! 煉獄ううう!!」

「うむ! 心当たりはないな!!」

「——でしようね!!」

さらっと返す杏寿郎に、これ以上は鬼を刺激してほしくない善逸が、涙目になって

ツツコミを入れる。

「いくら黒死牟くろしむ様に似た鬼だろうと、所詮は紛まがい物でしょ？ 本物と比べたら何てことないよ」

有一郎はそう言うが、心なしか顔色が悪くなっていた。

黒死牟くろしむに対する苦手意識はなかなか深いようである。

炭治郎は匂いで、善逸は音で有一郎の状態を察した。

「いや、怖がつてんじゃねえか」

「はいはい！ 伊之助は黙ってようねえっ！」

伊之助の歯に衣着せぬ物言いを、善逸が慌てて制止する。

有一郎がすごい顔で伊之助を睨にらんでいるが、今は仲間割れしている場合ではない。

「ふうむ……何やらお前とは因縁があるようだが、思い当たる節がないな!! 少し語ってくれるとありがたい!!」

「いや、なんで説明を求めているんですか!？」

思ってもみなかった杏寿郎の対応に、善逸はツツコミを入れた。

「貴様……っ!! 俺にあれだけのことをしておいて、忘れただど!？」

杏寿郎の発言を真に受けた鬼が、激しく歯はぎし軋りをしながら睨にらみつける。

額ひたいに浮かんだ血管は、今にも切れそうだ。

「絶対に許さんぞつ!! 煉獄ううう!!」

鬼が刀を構え、杏寿郎もそれに応じる。

「恨まれる筋合いがないとは言わないが、鬼を斬るのが鬼殺隊の使命!!」

一歩、杏寿郎が前に出た。

それだけで「上弦の弐」から発せられていた威圧感が中和され、炭治郎たちは無意識のうちに畏縮いしゆくしていた体が楽になるのを実感する。

その背中は頼もしく、とても大きく見えていた。

「来い!!」【上弦の弐】よ!! この煉獄の赫あかき炎刀が、貴様を骨まで焼き尽くす!!」



杏寿郎たちと「上弦の弐」の戦いは、列車を飛び出して外へと場所を移していた。

あまり自由に動けない車両のなかでは不利だと言って、車掌に列車を止めるように直談判した結果である。

提案はすぐに受け入れられたのだが、急いで列車を停止させようとした影響で慣性の法則が働き、全員の体勢が崩れてしまう。

だが、杏寿郎と有一郎はその隙を利用して、鬼を車両の外へと弾き出していた。

鬼が外に出てしまえば列車は安全である。

再び列車を動かすように指示をして、炭治郎たちは乗客を逃がすことに成功した。

だが、この時に炭治郎と善逸、伊之助の三人も場を離れるべきだったのかもしれない。なぜなら、鬼は比較的弱い隊士である炭治郎たちをわざと狙い、杏寿郎たちに防戦を強いたからである。

弱い者から狙うのは、戦の常道だ。

自分たちが足を引っ張っているという事実には、炭治郎たちは悔しくて歯噛みした。

状況を打開するべく、炭治郎は「日の呼吸」を使うべきかと思案する。

炭治郎は「日の呼吸」を使った方が強く、そして速く動けるのだ。

僅かな隙でもいい。

それさえあれば、この状況を打開する切っ掛けになるだろう。

「善逸！ 伊之助！ 援護を頼めるか!?!」

「わかった!」

「自分を守るのも親分の務めだからな！ 任せとけ!!」

修行仲間である二人は、炭治郎が「日の呼吸」を連続して使ったあと、一時的に動けなくなることを知っている。

その間の援護を頼んだのだと、すぐに察しがついたのだ。

そのやり取りを聞いていた杏寿郎と有一郎も、何かしら仕掛けるのだと気づいたらしい。

炭治郎に向かって、一瞬だけ視線を寄越していた。意を決して、炭治郎が「日の呼吸」を使う。

それを見た鬼は、向かってくる炭治郎に刀を振るった。

——日の呼吸 幻日虹

高速の捻りと回転で、炭治郎は振るわれた刃を躲す。

それと同時に、鬼は炭治郎の姿を見失った。

姿を追っていたはずの相手を見失い、驚いた鬼は目を見開く。

——日の呼吸 炎舞

いつの間にか視覚の外にいた炭治郎が刀を振るい、鬼の持つ刀はあっさりと叩き斬られた。

「なん……だと……？」

刀身を失ったことに動揺した鬼が、困惑した声をあげる。

だが、炭治郎の攻撃は終わっていない。

炎舞は、大きな半円を描く斬撃を二度入れる連続技だ。

相手が動揺している間にも、炭治郎は刀を振るう。

今度は鬼の左腕を、二の腕の半ば辺りから斬り落とした。

刀身と片腕を失った鬼が、炭治郎を忌まげに睨みつける。

「この……糞餓鬼い!!」

鬼は残った右手に折れた刀を握ったまま、炭治郎を殴り飛ばした。

炭治郎は、刀の持ち手で迫り来る拳を受け止める。

軽く吹っ飛ばされてしまったが、なんとか無事だった。

だが、殴られた影響で呼吸が乱れてしまい、反動が体を襲っている。

動けなくなってしまう炭治郎に向かって、鬼は折れた刀を投げつけた。

炭治郎の頭を狙ったそれは、割って入った伊之助によって防がれる。

「チイツ！ 邪魔な猪め!!」

苛立つ鬼は舌打ちすると、刀を投擲した体勢のまま、片足の力だけで伊之助へと体当

たりした。

あまり力が入っていなかったために伊之助は無事だが、炭治郎を守る位置から外れ

てしまう。

しかも、伊之助が押しやられた場所は、杏寿郎からは邪魔になる位置だ。

一息で駆け寄った鬼は、今度は足を振るって炭治郎の頭を狙う。

しかし、動けない炭治郎を、善逸が抱えて避けてみせた。

その間に近寄っていた有一郎が、二人を守る壁のように道を塞ぐ。

一瞬だけ、鬼が足を止めた。

それを隙と見た伊之助が、足を狙って刃を振るう。

足を斬られては敵かなわんと、鬼は飛び上がった刃を避けた。

武器と片腕を失い、さらには身動きのとれない空中にいる。

杏寿郎と有一郎は、それを好機と見た。

「一瞬で多くの面積を根こそぎ抉えぐり斬る!!」

「はい!!」

——炎の呼吸 奥義 玖ノ型・煉獄

杏寿郎と有一郎が息を合わせて型を放ち、凄まじい勢いで肉薄する。

頸くびに迫る刃を前にした鬼は、頬を引き攀つからせて——、

「——馬鹿め」

杏寿郎と有一郎を嘲笑あざわらった。

急速に腕を再生させ、日輪刀を正面から拳で受け止める。

刃を受け止めた拳は引き裂かれていくが、それと同時に脇の下から、新たに腕が生え

てきた。

「腕が二本だけだなんて、誰が言った?」

心底おかしそうに鬼が嗤わらう。

大技を放った直後の二人を、鬼の拳が襲った。

だが、杏寿郎と有一郎は焦あせらない。

僅わずかに重心を傾かたむけて、眼前に迫せまった拳を紙一重で避ける。

だが、それも含めて鬼の狙いだった。

斬り裂かれている最中の拳に力を入れて、刀が抜けないように固定する。すると、杏寿郎と有一郎の顔色が変わった。

武器を手離すか否か。

杏寿郎と有一郎の思考が一瞬だけ止まったのだ。

「くたばれ、煉獄うろうう!!」

鬼が腕を振りかぶる。

驚いたことに、その背中からは五本目の腕が生えていた。

さらには失ったはずの刀を持っている。

先ほど炭治郎に向かって投げたものとは違い、その刀身は折れていない。

それが杏寿郎に向けて振り下ろされた。

じつはこの刀、外見的には普通のそれなのだが、その素材は鬼の肉である。

それ故に、折られても失くしても、何度でも再生出来るのだ。

振り下ろされた刃が杏寿郎に迫る。

その時、二人の間にひとつの影が割り込んだ。

——素流 鈴割り
パキン。

そんな音と共に、振り下ろされた刃がへし折れる。
予想外の事態に鬼は目を見張った。

——脚式 流閃群光

驚く鬼に追撃の技が叩き込まれる。

その威力は凄まじい。

大柄の体を持つ鬼であるはずの鬼が、やすやす易々と吹き飛ばされた。
着地したあとも勢いを殺しきれずに、あしすき後退るほどの威力である。

「あの人は……」

突如として現れた人物に見覚えがあった炭治郎は、目を見開いて驚きを露あらわにした。
以前、蝶屋敷で会った白い道着の人だったからだ。

「こゝ、恋こはく猫さん」

驚いた様子で、有一郎が白い道着の人——恋猫の名を呼ぶ。

そこには『どうしてここに?』という意味が込められていた。

「いや、すまないな! 助かったぞ、恋猫!」

「本当だよ、まったく……オレに行き先も告げずに黙って任務に出掛けやがって」

柱である杏寿郎に向かって、恋狛はため息ついでに悪態をつく。

このやり取りを聞いていた炭治郎たちは、目を白黒させていた。

柱の杏寿郎に向かってのタメ口である。

いったい、どういう立場の人なのだろうか？

そんな疑問が頭に浮かんでいた。

「今回の任務は列車のなかでの任務だったからな！ どこで鬼が出てくるか分からないかった！」

杏寿郎がそう言うと、それを聞いた恋狛は再びため息をついた。

「せめて列車の名前くらいは言つとけよ。鎧鴉が教えてくれなかったら、わからなかったんだからな？」

「……むう！」

ばつが悪そうに、杏寿郎が唸る。

「帰ったら千寿郎にも謝れよ？ あの子がやれ下駄の鼻緒が切れただけの、黒猫が道を横切つただの、神棚が倒れただけのと大騒ぎしてたんだけぞ？」

少しは反省したように見える杏寿郎の態度に、恋狛はやれやれと言わんばかりにため息をついた。

相当、お疲れのようだ。

炭治郎は匂いで、善逸は音でそれを察した。

「千寿郎はいつから心配症になったのか……」

「いや、さすがにあれは心配にもなるな。帰つて神棚と仏壇を見てみるといい。……凄く……」

杏寿郎と恋狛の気の抜けるような会話が続く。

目の前に鬼がいることなど忘れていような自然さだ。

ちなみに、千寿郎とは杏寿郎の弟の名である。

だが、その会話も鬼の叫び声により中断した。

「まだ生きてやがったのか!! 狛治はくじいいい!!」

濃密な怒気が「上弦の弐」から放たれ、ビリビリと空気を震わせる。

「はくじ? 誰のことだ?」

「んん? ……ああ、成る程な」

杏寿郎が首をかしげると、恋狛はどこか納得したような表情でため息をついた。

「知り合いか?」

杏寿郎が不思議そうに問いかけると、恋狛は簡単に説明する。

「狛治つてのはオレの先祖の名だ。——で、あいつは先祖が継いだ素流道場の隣にあつた、剣術道場の跡取り息子だな」

そう言つて、恋猫は肩をすくめた。

恋猫は先祖の猫治と顔が瓜二つなのだ。

見間違えても仕方がない。

そして、恋猫は「記憶の遺伝」によつて、先祖の記憶を夢という形で追体験することがあつた。

特に猫治に関しては色濃く遺伝しているようで、なかなかの頻度で夢を見る。

だからこそ、目の前にいる鬼が、恋猫の先祖に強い執着を持つ相手であることを知つていた。

「ちなみに、その先祖を襲いに來たコイツを撃退したのが当時の煉獄家当主だな」

「なるほどー」

説明を聞いた炭治郎たちも納得した表情になつたが、それでも素流道場を襲つた理由がわからない。

やはり、隣近所で仲が悪かつたのだろうか？

そんな疑問を浮かべていると、怒気を強めた鬼が喚わめきだした。

「猫治いつ！ 貴様さえ……貴様さえ居なければ……！ 恋雪こゆきは俺のものになつては
はずだつたのにつ！！」

顔を真っ赤にして「上弦の弐」が叫ぶ。

その物言いに対して、恋狛は静かにキレた。

「何をいつているんだ、この鬼は。脳味噌が頭に詰まっていけないのか？」

表面上は冷静に見える恋狛だが、浮き出した血管や震える筋肉、濃密な気配に至るすべてから、怒りの感情が溢れている。

総毛立つほどに凄まじい怒りが、炭治郎たちの肌を叩いていた。

「だいたい、恋雪さんがお前を選ぶわけがないだろうが。具合の悪かった恋雪さんを無理矢理外に連れ出したあげく、喘息の発作を起こして苦しむ恋雪さんを放置して……お前は逃げた！ 狛治さんが恋雪さんを見つけていなければ、危うく死ぬところだったんだぞ!? その事を忘れて、何をふざけたことを言ってるやがる!!」

自分勝手なことばかり言う鬼に対して、恋狛は怒りを爆発させた。

ちなみに恋雪とは、先祖である狛治の妻の名である。

その話を聞いた者たちは、この鬼が何を思つて素流道場を襲つたのか、その理由がわかつた気がした。

要するに、横恋慕していたのだ。

とは言え、そうだとしても、やらかしたことは重大で擁護できないものである。

だからこそ、恋狛の言葉を聞いていた者たちは、汚物を見るような目を向けていた。

「え？ なに、それ？ 普通に屑野郎じゃん」

ドン引きしながら『無いわ、無いわ』と善逸が咳くと、恋猫と【上弦の弐】以外の全員が頷いた。

わなわなと肩を震わせる鬼は、血走った目を恋猫に向ける。

「恋雪を……恋雪を寄越せっ!! 猫治いい!!」

雄叫びをあげる鬼が、再生して五本になった腕で刀を振り回しながら突撃をしかける。

だが、恋猫は振るわれる刀を素手で捌いていた。

素流は【護る拳】である。

大切な誰かを守るために鍛え上げられ、磨かれてきた技だ。

それが今、存分に発揮されていた。

その隙をついて杏寿郎と有一郎が腕を斬り飛ばし、頸を狙う。

だが、残る腕で防がれ、逸らされ、なかなか頸までは刃が届かない。

腕もすぐに再生されてしまうため、先程までの戦いと変わらない状況になっていた。

二本だった腕が五本になったのは脅威である。

事実、先程までは戦いに介入できていた炭治郎たちでもなかなか近寄れない領域になつていた。

だが、恋猫という守りに特化した戦力が加わったことにより、杏寿郎と有一郎には余

裕が生まれている。

そして、攻め手に余裕があるのであれば、杏寿郎には切れる手札があった。

「少しの間、場を頼めるか!？」

「もちろんです!!」

有一郎は力強く頷き返す。

それを見た杏寿郎は一度後退すると、日輪刀を両手でしつかりと掴み、思いきり握り締めた。

すると、元々から赤かった日輪刀の色が徐々に変わり、さらに赫く染まる。

少し前に黒死牟と手合わせした際に教わった切り札——【赫刀】である。

黒死牟から教わったのはいいが、日輪刀を赫刀化させるためには少しの時間が必要だったのだ。

そのため、余裕のなかった先程までは使えなかった手札である。

「待たせたな!!」

杏寿郎はそう言うと、勢いよく戦線に復帰した。

赫刀の威力は凄まじいが、それ以上に特筆すべきは『鬼の再生力を阻害する効果をもつ』という点だろう。

その効果の強弱は使い手によって異なるが、不死身である鬼の優位性を崩す一因にな

る。

それは、相手が「上弦の弐」であろうと変わらない事実だった。

杏寿郎の赫刀に斬られた腕の再生が鈍い。

その事実を前に、鬼は演技でない焦りを見せる。

腕が斬られて数が減り、それを補うために次々と腕を増やしていく。

だが、赫刀の効力によって、増えた腕はたちまち機能不全に追い込まれていた。

焦る「上弦の弐」の脳裏に、撤退の文字が浮かぶ。

その直後、有一郎によって足を斬り飛ばされていた。

地面に鬼が倒れ伏す。

その頸に、赫刀が迫っていた。

赤い刃が頸に食い込む。

その直前、何処かで琵琶の弦を弾く音がした。

倒れていた鬼の身体が、地面に吸い込まれるようにして沈む。

杏寿郎は目を見開いた。

地面に襖が現れたからだ。

それと同時に、頸に食い込んでいた赫刀が標的を失い空を切る。

「待——」

制止する言葉をかける間もなく、鬼は襖の奥に落ちていった。襖は素早く閉じると、幻のように跡形もなく消える。

あとに残されたのは、やり場の無い怒りと悔しさだけだった。



追い詰めたはずの鬼を取り逃がした炭治郎たちは、やり場の無い感情をもて余していた。

まず最初に感じたのは「上弦の弐」に逃げられた悔しさだ。

それが落ち着くと、次に湧いてきたのは上弦の鬼を相手にして生き残ったという安堵が。

それから、もっとやれたのではないか？ という後悔が湧いてきたのだ。

いつまでも落ち込んではいられない。

それは、わかっている。

だが、特に「日の呼吸」という切り札を持っていた炭治郎は、その思いが強かった。もつと長く、連続して舞えたなら、上弦の鬼を倒せていたはずだ。

悔しさと不甲斐なさを顔に滲にじませる炭治郎を氣遣うように、善逸が氣を紛まぎらわせようと口を開いた。

「それにしてもさ。コハクさんって凄いな。素手で「上弦の弐」に食らいつくんだぜ

「？」

「ああ、かなり出来る奴だ。乗り越えるべき壁が新たに現れやがった！」

心底嬉しそうにしながら、伊之助は『俺も素手で刀を叩き折りてえ!!』と興奮して腕を振り回している。修行だ、修行するぞ!!』と興奮して腕を振り回している。

伊之助の向上心溢れる姿に善逸は呆れ、炭治郎は笑う。

彼らに落ち込んでいる暇などない。

一步一步、少しずつ積み重ねて強くなるしかないのだ。

「俺も、煉獄さんやコハクさんみたいに強くなれるかな？」

炭治郎までも前向きに検討し始めたことに、善逸はげんなりとして肩を落とす。

「炭治郎もやる気かよお……まあ、つき合うけどさ。けど、あの素手で鬼に立ち向かう兄さんみたいにはなれねえだろ」

その言葉を聞いた炭治郎は首をかしげると、善逸の顔を不思議そうに見た。

「……何を言ってるんだ、善逸？」

「な、なんだよ炭治郎？俺、なんか変なこと言ったか？」

疑問符を浮かべて戸惑う善逸。

すると、炭治郎は思いがけない言葉を告げた。

「善逸。コハクさんは女の人だよ？」

「——ふえっ!？」

善逸の口から、変な声が漏れていた。



大正こそこそ噂話（壱）

炎柱 えんぼしら 煉獄 杏寿郎

通称、煉獄の兄貴。

筆者的には映画館で会いたい人。

詳しい人柄や情報は原作を読もう。

こつそり鬼いちやんから赫刀を教わっていた。

だが、身体能力が大きく跳ね上がる「あざもの痣者」になったわけではないので、握力が足り

ずに赫刀化に少々時間がかかる。

ちなみに、後述する恋狛は幼馴染みにして許嫁いいなすけである。

大正こそこそ噂話（弐）

時透 有一郎

時透無一郎の双子の兄。

原作では故人である。

性格は少しキツめで、いつも颯めつ面しかをしているため取っ付きにくい。

極一部にしかデレを見せないため、貴重なツンデレ枠。

敬うべき人は敬えるため、上層部では問題は起きていない。

鬼いちちゃんによる教育しゅけが身に染みた模様。

次の【炎柱】になる予定だが、おそらく本作中ではお預けになるだろう。

ちなみに、年上の文通相手がいる。

双子だけに、女性の好みも似るようだ。

大正こそこそ噂話（参）

煉獄 恋こはく狢

原作最大の悲恋が回避された結果、生まれた子孫。

先祖はもちろん、狢治と恋雪。

名前の大元は先祖夫妻の狢治×恋雪。

組み合わせにはいくつかの候補があったが【狢】の字をどうしても使いたかったので

【恋狢】となった。

姓に関してはなかなか良いのが思い浮かばなかったので、ちよつと前倒しして煉獄姓を与えている。

ちなみに姓の候補には「相楽」とか「悠久山」が上がっていた。

ふたえ二重の……ナンデモナイデス。

外見は粕治のそっくりさんだが、瞳は恋雪似の女性。

最低でも月に一回は蝶屋敷に薬を取りに来ているが、偶然にも善逸と伊之助には出会わなかった。

炭治郎とは柱合会議の直後に蝶屋敷の玄関で出会っている。

善逸と同様に、炭治郎も最初は男性だと誤解していたが、擦れ違った時に感じた匂いで女性だと気づいた。

大正こそこそ噂話（肆）

かいな壊拵

本作の「上弦の弐」で原作には登場しない鬼。

その正体は素流道場の隣りにあった、剣術道場の息子。

鬼としての姿は鬼いちゃんのパチモノ。

無惨様が鬼いちゃん対策で生み出した十二鬼月じゅうにきげつきに初期からいる古株。

名前の由来は「腕」と掛けてあり、無手の相手治に負けた事と剣術道場の息子なのに「腕」つてどうよ？ 的な皮肉を利かせたもの。

原作18巻の設定こぼれ話に顔が出ている。

どんなに改悪しても、心がまったく痛まない素晴らしい人材。

原作の猗窩座とは違い、女性を好んで食べる。

そのため、基本能力的には原作の猗窩座以上に強い。

ついでに藤襲ふじかさねやま山の「手鬼」並みに手と刀を増やせるので間違いなく厄介な鬼。

だが、どこかの戦闘民族並みに舐めてかかる悪癖がある。

今回も舐めてかかって負けた。

無惨様から『またか』と言われるくらいに学習しないヤツ。

余談だが、祝言間近の女性を好んで襲う習性がある。



大正こそこそ零れ話こぼ

本当なら壊撃かいなとの戦いの最中に、恋豹の道着とサラシが斬られて『実った果实』がこぼれる話を入れたかった。

流れが悪くなるから外したのだが、その話があったら善逸は誤解しなかったと思われる

る。

ついでに壞拏かいなが『狛治に胸があるはずがない』と動揺し、色々考えた果てに『あいつの目元が恋雪に似てる。じゃあ、恋雪じゃね?』と言い出す予定もあった。

さらに『恋雪、俺のものになれ!』とか言い出し、それに対して今度は杏寿郎が『恋狛は俺の嫁になる約束をしている』と怒り、恋狛を巡って戦いが激しくなるという展開。

その様子を見た恋狛が『戦う理由がおかしい』とツツコみを入れる予定があった。



大正こそこそオマケ話

カナエ

「巖勝様みちかつ、お帰りなさい」

→ 夫の帰りを玄関で待つてた妻。

黒死牟

「ああ……いま帰った……」

→ 昔を思い出してほんわかしてる。

カナエ

「いろいろと大変だったみたいですね」

→ 珠世に義娘が出来たことを言っている。

黒死牟

「そうだな……いろいろなと……動きが出るやもしれん……」

→ 無惨が下弦を解体したことを言っている。

カナエ

「こちらでもいろいろと動きがありましたよ」

→ 須磨が推薦する人を見てきたことを言っている。

黒死牟

「話は……聞いている……」

→ 【上弦の弐】との戦闘があつたことを言っている。

カナエ

「なら、話が早いですね。今、【音柱】の奥様たちが吉原に鬼がいるからと調査に出かけ

ているんです」

→ 交渉開始。

黒死牟

「ほう……木を隠すなら……森のなか……ということか……」

→ 気づいてない。

カナエ

「新たに得た情報と合わせると、巖勝様に行ってもらいたいです」

→策を張り巡めぐらせている。

黒死牟

「なるほど……」

→下弦が解体されているため、上弦が潜ひそんでいる可能性が高いのだと思っている。

カナエ

「だから、巖勝様は吉原に行つて花魁おいらんを一人、身請みうけしてきてくださいね！」

→彼女にとっての本題。

黒死牟

「うむ……わかっ……」

→ようやくく、何かおかしいと気づいた。

【このあと熱い議論が交わされ、結局、黒死牟は吉原に通うことになりました】

育った波はうねり打つ（吉原編）

炭治郎たちが「上弦の弐」と遭遇してから、三ヶ月余りの時が過ぎようとしていた。

現在、季節は梅雨の時期を迎えようとしている。単行本でアジサイが咲いていた

上弦の鬼との戦いで、炭治郎たちは実力不足を痛感していた。

「全集中の呼吸・常中」を会得し、自らの実力に自信を持てた矢先の出来事だけに、その衝撃は大きかっただろう。

しかし、それで立ち止まるような彼らではなかった。

彼らは実力を少しでも伸ばそうと、蝶屋敷で鍛練を続けながら任務を熟すこなという生活を続けている。

その鍛練には、胡蝶姉妹や黒死牟、累を始め、蝶屋敷を訪れた柱たちが参加することもあった。

鍛練を手伝ってくれる人物が凄いいことになっているが、そのおかげもあって、炭治郎たちは段飛ばしに実力をつけていった。

それ以外にも変化がある。

炭治郎が「水の呼吸」と「日の呼吸」を組み合わせた呼吸を使って、これまでよりも

長く戦えるようになったのだ。

これには黒死牟も素直に驚いた。

過去に遡さかのぼつても【日の呼吸】をまともに扱えた者はとても少ない。

そのため、呼吸を組み合わせて使う者など久しく見なかった。

そして、炭治郎は誰に教えられるでもなく、自力でそれを編み出したのだ。

これは素晴らしいことである。

炭治郎の確かな成長を、黒死牟は密かに喜んでいた。

そんな生活を続けていた、ある日のこと。

蝶屋敷を珍しい客が訪れていた。

【音柱】の宇髓天元うずいいてんげんである。

カナエに呼ばれて蝶屋敷を訪れた天元は、玄関で出会った看護師に待合室へと案内された。

その道すがらに通りがかった訓練場から、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

声に誘われた天元が訓練場の様子を覗きこむと、そこには一種の地獄が広がっていた。

「オイオイ、随分と派手な鍛練をしてるじゃねえか」

現在、訓練場では打ち込み稽古が行われていた。

その指導をしていたのは、

【水柱】の富岡義勇、

【蛇柱】の伊黒小芭内、

【恋柱】の甘露寺蜜璃、

【霞柱】の時透無一郎、

そして、その双子の兄である時透有一郎である。

義勇の足元には炭治郎と善逸、伊之助の三人が。

小芭内の足元には、蝶屋敷で機能回復訓練を受けていた隊士たちが汗だくで倒れ込んでいた。

この惨状が生み出された経緯はこうである。

まず最初に蝶屋敷を訪れたのは蜜璃だった。

カナエと呼ばれて来たのだが、ちようど留守にしていけないらしい。

すぐに帰ってくるという話なので待っていたのだが、そこで目についたのが、炭治郎たちが鍛練をする訓練場だった。

カナエが帰ってくるまでは暇を持て余していることもあり、蜜璃は和氣藹々と鍛練に参加する。

善逸が大喜びしたのは言うまでもないだろう。

さらに、その話を聞きつけた隊士たちが下心を丸出しにして訓練に参加してきた。

訓練場はかつてない大盛況な状態になるのだが、彼らが浮かれていたのもここまでである。

何故なら、蜜璃と同じように呼び出しを受けていた小芭内が、嫉妬という名の黒い瘴気しやうきを放ちながら訓練場にやって来たからだ。

そこからの訓練は、天国から地獄に様変わりした。

特に、蜜璃（どことは言わないが、局部きょくぶ）に対して不埒ふらちな視線を向けていた者たちは徹底的にやられていた。

そこにやって来たのが、義勇と時透兄弟である。

小芭内の容赦のない扱しじきを受けた隊士たちは、救いを求めて義勇たちに手を伸ばした。

この場にいたのが義勇だけなら、ただ無視される結果に終わっただろう。だが、ここには有一郎がいた。

有一郎は情けない姿を見せる隊士に対して毒を吐き、鍛え直してやるべきだと訓練に参加したのだ。

いつの間にか義勇と無一郎も共に鍛練に参加することになっていた件について、二人一緒に『なんで?』と疑問符を浮かべていたのは余談である。

そして、現在に至る。

「あ、宇髓さん！」

天元の姿に気づいた蜜璃が、大きく手を振りながら声をあげた。

元気良く手を振っていたために、ちよつと零れ出そうになっていたのを小芭内が慌て止めている。

その光景に苦笑しながら、片手をあげただけの気安い返事をしたあと、天元は疲労困憊といった様子の隊士を観察した。

期待の新人三人組は、訓練の様子を見学していた者たちの手によつて引きずられながら、邪魔にならない訓練場の隅すみへと移動させられている。

訓練場の片隅には、体力の尽きかけた死に体の山が築かれていた。

義勇と小芭内は、なかなか厳しく指導したようである。

「宇髓さんもカナエさんに呼ばれたんですか？」

「ああ。——もしかして、全員がそうか？」

天元の問いかけに、無一郎が頷いた。

「カナエさんはちようど留守にしているみたいで、待つてる間に訓練に参加してたんです」
「なるほどなあ」

天元が納得して頷いていると、訓練場に向かつて足音が近づいてきていることに気が

ついた。

入り口に視線を向けてみると、訓練場の前をカナエが通り過ぎていく。ちようど出先から帰ってきた所らしい。

「お。胡蝶姉！ こつちだ、こつち！」

天元が呼びかけると、その声に気づいたカナエが引き返してきて訓練場を覗き込んだ。

「あ、宇髄さん。来てたんですね。皆さんも、訓練お疲れ様です」

カナエの声に、床に倒れ込んでいた炭治郎たちが顔だけ向けて挨拶を返した。

彼らの腕や足は痙攣するように小刻みに震えていて、回復にはまだまだ時間が必要だろう。

「それで、これだけの人数を派手に呼び出した理由はなんだ？」

そんな炭治郎たちを後目にして、天元はカナエに呼び出した理由を尋ねた。

最高戦力である柱を複数呼び出したのだ。

余程のことがあるのだろう。

すると、カナエはにつこりと笑って驚くべきことを口にするのだった。



日本一、色と欲に塗れたド派手な場所。それが吉原という街である。

昼夜を問わずに人が出入りする場所だけに、いつ、誰が姿を消したかなど、気にする者は少ない。

そのため、鬼が潜んでいてもおかしくはない場所でもある。

今回、鬼がいるとわかったのは、消えている人間が美しい遊女に限定されていたからだった。

以前から遊女が急に姿を眩くらますことはあつたが、最近のそれは少々度が過ぎている。そのため、鬼殺隊の存在を知る者たちから『調べてみてほしい』との依頼があつたのだ。

まずは、天元自身が客として潜入して調べてみた。

その結果、確証は得られなかったが、鬼の気配がするのは間違いない。

なので、さらに詳しく調べるために、天元の妻たちに遊女に成り済ましてもらい、内部調査を行っていたのだ。

そんな時に新たな情報が入ってきた。

無惨が「十二鬼月」の下弦を解体したというものである。

この情報を得た天元は、すぐに内偵をしている妻たちに調査の中断を言い渡した。何故なら、彼は吉原に潜む鬼の正体を「十二鬼月」だと予想していたからである。

下弦が解体されたという時期以降も、吉原では遊女の被害が続いていた。

つまり、吉原に潜む鬼は下弦ではなく、上弦の鬼である可能性が非常に高いのである。相手が上弦の鬼であれば、潜入していた妻たちの安全はもちろん、周囲に住む一般人の安全も保証できなかつた。

相手は、百年以上も討伐の記録がない鬼である。

迂闊うかつに手を出すわけにはいかなかつた。

そんな時に声をかけてきたのが「花柱」の胡蝶カナエである。

『正確な居場所がわからないのなら、誘おびき出せばいいんですよ』

カナエはそう言うと、ひとつの作戦を提案するのだつた。



「むふ……むふふ……むふふふふふふ……」

堪こらえることに失敗したような不気味な笑い声。

そんな声を漏らしているのは、「元・霞柱」の真孤まごもだつた。

彼女は頬が笑みの形に歪むのを堪こらえながら、目の前に座る美女に化粧を施している。

上質な生地に美しい刺繍が施された着物に身を包み、結い上げられた髪には簪かんざしを

差した美女。

その正体は——、

「うん！　これでバッチリだよ、無一郎！　綺麗、綺麗！」

時透無一郎である。

基本的に親しい者には笑顔を、そうでない者たちには塩対応な無一郎だが、今回に限っては顔から表情が抜け落ちていた。

人生で初めての女装をさせられたのだ。

無理もない話である。

彼の隣では、有一郎が同じように化粧を施されている最中だった。

「駄目だよ、有一郎くん。顰めつ面して眉を寄せないで！ 白粉が落ちちやうでしょ！」

「ぐぬぬっ……!!」

軽く叱責された有一郎は、苦虫を噛み潰したような顔をした。

その度たびに白粉を塗り直しているの、なかなか化粧が終わらない。

ちなみに、化粧を担当しているのは有一郎と文通している尾崎隊士である。

その向こうでは、一人の遊女あそびがどんよとした雰囲気きふきで座り込んでいた。

ちよつと特殊な化粧によって、口元の傷すら消された小芭内こばうちである。

余談だが小芭内と同じような飾りを鏤丸かぶらまる——小芭内こばうちが連れている蛇へび（♂）——も着けていた。

「頼む、甘露寺……見ないでくれ……」

「ええ？ 綺麗ですよ、伊黒さん！」

小芭内の化粧を担当した蜜璃が褒め称えるが、むしろ逆効果であることは言うまでもない。

ちなみに、彼は髪の長さが少々足りなかったため、カツラを着用して誤魔化している。肩を落とす小芭内を、蜜璃は必死に立ち直らせようとしたが、やはり効果は薄い。

どうしたものかと悩んでいると、そこにカナエがやって来た。

「あらあら、蜜璃さん。お困りのようですね」

「あ、カナエさん」

「出たな、元凶」

蜜璃と小芭内は対照的な反応をする。

それも仕方のない話だろう。

彼らが女装させられているのは、カナエの差し金だからだ。

確かに、遊郭には大勢の女性が詰めているのはわかる。

だが、男性がいけないわけではない。

特に小芭内と義勇は客として乗り込んでも良かったくらいだ。

変装して潜入するにしても、店に勤める男衆に見えるようにして紛れ込めば済む話で

あつたはずである。

しかし、カナエはそれを否定した。

遊郭のなかを歩いていても不審に思われない姿と言えば、遊女以外にあり得ないと反論したのだ。

わからない話ではない。

だが、納得がいく話でもない。

女装させたい女性陣。

女装したくない男性陣。

双方の議論は平行線を辿り、最終的には多数決で決めることになった。

しかし、いざ多数決をとる直前に舞い込んできた一羽のかすがい鎧からす 鴉が、すべてを決めてし

まったのである。

『お館様からの伝言をお伝えします。記念に写真を撮ってきてね、だそうです』

その時、小芭内は漸くようや気づいた。

カナエは今回の作戦を小芭内たちに提案する前に、耀哉に作戦と潜入方法を伝えていたのだ。

耀哉はそういったもよお催しが好きである。

以前、柱全員に『義勇の笑顔が見たい』と頼み込んだことがあるくらいだ。

まあ、あれは義勇が孤立しないようにと耀哉が気を使って開催されたものであるが。

義勇の件それはともかくとして、柱の男性陣が女装するとなれば、話に乗ってくるのは火を見

るよりも明らかだった。

つまり、この議論は単なる時間稼ぎでしかなく、最初からカナエの掌てのひらのうえで踊らされていたのである。

「おい、富岡。お前も何とか言つてやれ」

小芭内は、普段なら絶対に頼らないであろう義勇に援護を求めた。

義勇は小芭内の隣に座つて、しのぶから化粧をされていたのだが、その表情はいつも通りに凧ないでいる。

「しのぶはもちろん、カナエ義姉さんに口で勝てる者がいるとは思えない。逆らうだけ無駄だ。むしろ、余計に酷くなる可能性もある。だから、ここは堪こらえておくべきだ。なにも、毎日女装しろと言われているわけではない。今日という日の僅かな間だけの我慢だ。それに、まあ、なんだ）……そのうち慣れる」

「慣れてたまるか!!」

義勇の言葉に小芭内はキレた。

だが、義勇の言葉を翻訳できる。しのぶは、理解ある旦那の態度に上機嫌である。

「ふふふ。帰つたら鮭大根を作つてあげますね」

実姉カナエによく似た笑みを浮かべた。しのぶが、蠱惑的な声で囁ささいた。

その瞬間、義勇の雰囲気明るくなったのに気づけた者が何人いただろうか？

小芭内は義勇の変化がわからなかったが、しのぶの声は聞こえている。

そのため、義勇が買収されたことに気づいていた。

「見損なつたぞ、富岡」

「……鮭大根は（自分の）命よりも重い」

小芭内の恨み節も何のその、帰つたあとの鮭大根しか頭のない義勇には届かない。

その横顔を思い切り殴つてやりたくなつた小芭内だが、その前にカナエが声をかけてきた。

「伊黒さん。怒るのはいいですけど、その前にやることがあるんじゃないですか？」

「……なに？」

とてもいい笑顔を浮かべるカナエに対し、小芭内は胡散臭そうに視線を向ける。

だが、次に発したカナエの言葉で、あえて見ないようにしていたものを直視することになった。

「蜜璃さんのこと、誉めなくていいんですか？」

「——！！」

そう、蜜璃も遊女のように着飾っているのだ。

だが、小芭内はあえて蜜璃に視線を定めないようにしていた。

見るに堪えない？

逆である。

蜜璃の醸し出す色香が、小芭内には刺激が強すぎるのだ。

今の彼女はまさに魔性の女である。

一度でも蜜璃の艶姿を見れば、小芭内は目が離せなくなるだろう。

それどころか、彼女を絶対に手に入れようと動くかもしれない。

日頃から彼女に対する自分の欲を抑制している小芭内だ。

その辺りのことは、自分が良くわかっている。

はつきり言えば、自分を制御する自信がなかった。

それがわかっていたから、あえて直視しないようにしていたのだ。

「えっと……伊黒さん。その……似合ってますか……う？」

「——！！」

胸の前で手をモジモジさせながら、蜜璃は小芭内の表情をチラチラと窺った。

ちなみに、義勇を殴ろうと立ち上がりかけていた小芭内と、座っている蜜璃。

その立ち位置の関係上、蜜璃の視線は自然と上目使いになっている。

髪が結い上げられているからだろうか。

普段は可愛いと感じる彼女の印象が変わり、美しいという言葉が脳内を巡る。

自分でも思っていた通り、小芭内は蜜璃から視線を逸らせなくなっていた。

ぷっくりとして柔らかそうな唇。

女の色香を振り撒くうなじ。

吸い付きたくなるような白い首筋。

優しく撫で回したくなる華奢な肩と鎖骨。

豊かに実った果実が生み出す豊穰なる溪谷。

これらの破壊力を前に耐えられるほど、彼の防御力は高くない。

小芭内は、思わず鼻を押さえていた。

「きゅ……」

「きゅっ。」

「綺麗だ。とても……に、似合っている……っ!!」

「——よかったあ!!」

力なく座り込んだ小芭内は、顔が赤くなっているのを見せたくないのか、うつむいた

まま蜜璃を誉めた。

（キャツ！ 伊黒さんに誉められちゃった!!）

それを聞いた蜜璃は、ぱあっと花のような笑顔を浮かべて喜びを露にする。

その笑顔をチラリと覗き見てしまった小芭内は、心臓を射抜かれたような衝撃を受けた。

(う、美しいっ……まるで天女のようにだ……っ!!)

小芭内の理性という名の城壁が、ガラガラと音を立てて崩れていく。

何と言うかもう、いろいろと我慢するのが馬鹿らしくなるような、そんな心境になりつつあった。

小芭内は自分の体に流れる血を、とある事情で嫌悪している。

周囲からは『気にする必要はない』と常日頃から言われているのだが、心のなかに凝りとして残っていた。

口元の傷に関してもそうである。

あまり見られたいものではない。

だが、その傷に蜜璃は平気で触れてくる。

化粧を施されている時にも、気味悪がる様子もなく、平然と触れてくるのだ。

それどころか、戸惑う小芭内に向かって微笑みかけてくるほどである。

『これはもう、告白してモノにするしかないんじゃないかねえかア?』

小芭内の耳元で、全身に傷のある悪魔が誘惑する。

誰かに似ているのは気のせいだろう。

それを考えないわけではなかった。

元々、蜜璃は『添い遂げる殿方を探すため』という異色の理由で鬼殺隊に入った女性

だ。

そんな彼女の周りで同僚たちが次々に結婚していることもあって、その願望も強まっているようにも見える。

蜜璃が焦っているわけではないが、幸せそうな夫婦を見るたびに憧憬の眼差しを向けていることに、小芭内は気づいていた。

だから、ちよつと押せば倒れて頷いてくれるのではないかとすら感じていたのだ。

『南無……これほどまでに綺麗な心をした娘を、穢けがれた者が汚よごしていいものだろうか……』

小芭内の耳元で、涙を流す盲目の天使が囁ささやいた。

誰かに似ているのは気のせいだろう。

小芭内自身も、それを気にしていた。

彼の出自や過去を知り、彼女の表情が曇るのではないかと恐れてすらいた。

『いいじゃねえか。押し倒しちまえよ！』

『南無……』

なんやかんやと天使と悪魔が耳元で騒ぐ。

すると、そこに第三の勢力が現れた。

六つ目の墮天使だ。

誰かに似ているのは気のせいだろう。

『最近の甘露寺殿は……必要以上に……身体を密着させることが……多くなっている……あれは……わざとであろう……それに……なんとか……二人きりになろうとも……しているようだ……つまりは……そう言うことではないのか……』

墮天使の言葉に対して、悪魔は口元を歪める。

そして、確信をもって言った。

『つまり、甘露寺は——』

ぱちん、と小芭内は頬を叩く。

周りにはぎよつとして小芭内を見ているが、知ったことではない。

「か、甘露寺！」

「は、はいっ!？」

蜜璃の肩を勢いよく掴んだ小芭内は、意を決していた。

周りの視線？

知ったことではない。

場を弁えろ？
わきま

無理だ。

もう、この胸の内に宿る熱い思いを止められそうになかった。

「甘露寺、俺は——」

「——そろそろ準備は終わったツスカあ？」

隠かくしの後藤が部屋を覗のぞき込む。

その直後、小芭内は石のように硬直した。

同時に、女性陣の嘆きが部屋に木霊する。

「ああああ！ 後藤さん！ 間が悪い!!」

「今、とつても良いところだったのに!!」

「今のは惜しかった!! 今のは惜しかったあ!!」

いきなり批難ひなんが飛んでくるという状況に、後藤は困惑した。

だが、無一郎に『氣にする必要はない』と言われて首をかしげながらも了承する。

上弦の鬼との戦いを直前に控えた一幕は、こうして幕を閉じたのだった。

◆◆

「……甘露寺」

「……はい」

「……また、あとで話す」

「——っ！ はいっ!!」



鯉夏は憂いを帯びた表情のまま、身仕度を整えていた。

明日、彼女は身請けされる。

その話は街中に拡散されて、すでに鬼の耳にも届いていることだろう。

鯉夏が身請けされるという話は数日前から噂として流していたのだが、鬼がやってくることはなかった。

彼女は吉原でも指折りの花魁である。

何の前触れもなく居なくなれば、大きな騒ぎになるはずだ。

だから、居なくなっても不自然ではない時期に喰らいに来るつもりなのだろう。

身請けを直前に控えた今であれば、手紙に『足抜けします』と書いておくだけでいい。それだけで『身請けを断りきれずに受け入れるしかなく、それが嫌で足抜けした』のだと、人は勝手に想像してくれるからだ。

だから今夜、鯉夏を喰らいに鬼は必ずやってくる。

じつは鯉夏自身、遊女を狙う鬼に対して思うところがあった。

何せ、彼女が可愛がっていた遊女が数人、不自然な消え方をしていたからだ。

おそらくは、鬼に喰い殺されたのだろう。

だからこそ、鯉夏は鬼殺隊の策に乗り、危険な囃役を引き受けた。

それは、戦う力を持たない者が鬼に対して出来る、数少ない反抗だった。

「囚役とは言うが、彼女自身は私室とは中庭を挟んだ真逆の位置にある別室に隠れている。」

実際に囚にしたのは、彼女の名前と部屋だった。

花魁である彼女は個室を与えられているため、鬼もそこに現れるだろう。

そう予想してのことである。

故に、彼女の私室や周囲の部屋には変装した柱を潜ませていた。

だが、それでも『もしも』ということはある。

相手はおそらく上弦の鬼だ。

どんな血鬼術けつきじゆつをもっているのか、わからない。

そういう理由で、鯉夏の側には鬼殺隊の最高戦力である黒死牟と、柱であるカナエが

護衛として控えていた。

「日が暮れましたね……」

カナエがポツリと呟いた。

「鬼が、来るのですね？」

「うむ……」

鯉夏は黒死牟とカナエに向き直ると、三つ指で頭を下げた。

「私を可愛がってくれていた姐さんたちも、私が可愛がっていた遊女たちも不自然に居なくなつてしまいました。だから……」

「わかつている……鬼の頸は……必ず落とすと……約束しよう……」

黒死牟は安心させるように言うと、ふと、何かに気づいたように顔をあげた。

「どうやら……鬼が……出たようだな……」

黒死牟の言う通り、外が異様に騒がしい。

道を行く人々の喧騒のなかに、爆発音が混ざっていた。

「黒死牟さん」

襖の向こうから声がかかる。

隠の後藤の声だ。

「どうした……」

「鬼が出ました。瞳の数字は伍。頸を斬ったんツスけど、死にませんでした。倒すには何か、特殊な条件が必要みたいツス」

後藤からの報告を受けた黒死牟は、考え込むように顎に手を当てる。

「手伝いは……要りそうか……」

「いや、要らないんじゃないツスか？　なんか、見てて可哀想になるツスよ？」

後藤の言葉に、黒死牟とカナエは不思議そうに首をかしげるのだった。



時は少しだけ遡る。さかのぼ

日が落ちて周囲が暗くなり、店の通りに人が賑わってきた頃。

鯉夏花魁の私室には無粋な侵入者の姿があつた。

吉原に潜む上弦の鬼、墮姫である。

彼女の前には鏡台に向かって座る鯉夏（？）の姿があつた。

美しい餌えさを前にした墮姫は、思わず舌なめずりをする。

「あんたは今夜までしかいないから、ちゃんと食べておかなくちや。——ねえ、鯉夏？」

墮姫の声に、鯉夏（？）が振り向いた。

「え？」

墮姫は目を見張つた。

そこにいたのは、見知らぬ遊女だったからだ。

遊女の表情は凜ないでいて、冷たい瞳が墮姫を射ぬいている。

「だ、誰よあんた!？」

墮姫は動揺した。

目の前にいた人物は明らかに鯉夏ではない。

だが、その顔は美しく、墮姫が食べたいと思う基準は超えていた。

(誰だか知らないけど、食欲を喰^{そそ}る顔ね。——なら、食べちゃおっか) そう考えた一瞬が命取り。

堕姫の頸^{くび}はくるくると宙を舞っていた。

「あれ……?」

困惑する声^こが、堕姫の口^{くち}から漏れる。

頸^{くび}を斬ったのは有一郎だ。

背後から奇襲する形になっていたのだが、あまりにも手応えがなかったせい^せいか、首をかしている。

「ええ? いくらなんでも呆気なさ過ぎるでしょ。こいつ、本当に上弦の鬼?」

頸^{くび}を斬った当人である有一郎は、畳に落ちた堕姫の頭を掴みあげた。

瞳に刻まれた数字を確認する。

そこには確かに「上弦」と「伍」の文字があった。

それを見た有一郎はなんとも言えない微妙な表情をする。

「あれ? もう頸^{くび}が斬れてる」

鬼が来たことに気づいた者たちが部屋までやって来るが、皆、有一郎の持っている頸^{くび}を見て疑問符を浮かべた。

「上弦、ですよね?」

「上弦、だな」

堕姫の頸くびに視線が刺さる。

「……上弦、じゃない、とか？」

「自称ってこと？」

有一郎の持つ頸くびを前にして、全員が首をかしげた。

普段、表情に乏とほしい義勇ですら疑問符を浮かべている。

「誰が自称よ！ 誰が!!」

好き勝手ばかり言われて腹を立てたのか、堕姫が叫ぶ。

突然の大声に皆が驚くが、有一郎は軽く毒を吐いて返した。

「いや、だって、上弦の鬼おにって百年以上も討伐されなかった連中でしょう？ こんなに

あっさり頸くびが斬れるとか、あり得ないって」

「私は【上弦の伍】よ！ ちゃんと数字だってもらってるんだから!!」

「……自称じゃないの？」

「この糞くそ餓が鬼おにども!!」

嘲あざける有一郎と無一郎に堕姫がキレる。

そんな様子を見ながら義勇は疑問に思った。

この鬼は、いつになったら崩れて消えるのだろうか？

義勇は少しだけ考え込んだあとに、墮姫の身体を切り刻み始める。

「ちよ、ちよつと！ あんたヒトの身体に何してるのよ!？」

墮姫が制止の声をかけるが、義勇は止まらない。

すると、その奇行に秘められた意味を悟ったしのぶはポンと手を打った。

「ああ、身体のどこかに頸くびとは異なる急所があるかもしれないと考えたんですね！ な

るほどなるほど」

「なるほどなるほど……じゃないわよ!! 止めさせなさいよ!!」

納得顔のしのぶに墮姫が噛みつくように叫ぶ。

「僕たちは鬼殺隊。君は鬼。鬼を殺すのが僕たちの仕事なんだから、止める理由がない

よね」

「富岡、心臓は試したか？ ——そうか。なら、頸くびを斬った回数か？ 断面を薄切りして

みるか……」

墮姫を小馬鹿にするような発言をする無一郎に、義勇と一緒に墮姫の倒し方を模索す

る小芭内。

端から見ているだけになってしまった者たちもいるが、そちらは知恵を出しあつて墮

姫が死なない理由を考えている。

すると、外から爆発音が聞こえてきた。

音の発生源は離れているようで、そこまで大きな音ではない。

それから間をおかず、^{かすがいがらす}鋸 鴉が連絡を寄越した。

「カアアアア！ 月柱カラノ情報通りニ地下空洞発見！ 囚ワレテイタ遊女ヲ救出！！」

救出ウウウ！！」

「んなっ!？」

堕姫が動揺する。

彼女は着物の帯のなかに遊女を捕らえて、好きなきときに喰えるようにしていた。

その帯を保管していたのが、地下空洞である。

吉原中に出入口があるものの、そこに行くための道幅は人が通れるようなものではない。
い。

そのうえ、吉原の地下に空洞があるなど誰が思うだろうか。

人の意識が向きにくい場所だけに、絶対に安全だと思っていた。

そんな場所が鬼殺隊によって襲撃されたのだ。

驚かないわけがない。

しかし、地下空洞の位置がバレたことに関しては仕方のない部分もある。

何しろ、地下空洞の存在を暴いたのは黒死牟だ。

気配を読む武芸の達人でもあり、鬼である黒死牟の気配察知能力は凄まじい。

だが、その黒死牟とて、地下空洞の存在を知ったのは偶然だった。

吉原に通いつめて「花魁道中」に並んで歩いていた時に、たまたま地下に人の気配を感じたのである。

何度か行き来しながら正確な場所を把握した黒死牟は、そこに何かしらの拠点があると察して、今回の計画に組み込んだのだ。

救出された遊女がいると聞いて、一同の表情が緩む。

取り零しそうだった命を無事に救えたのだ。

当然である。

だが、その一瞬の隙をついて、墮姫は自分の頸を取り返した。

さらに、部屋の外から帯が突っ込んできて、彼女の逃走を手助けする。

「逃がすか!!」

窓から逃げ出した墮姫を追い、柱たちが次々と外へと飛び出していく。

そんな光景を、街の人々はあんぐりと口を開けて見送った。



「……なんか、おとりもの大捕物になってますね」

こつそりと様子を見ていた後藤がありのまま伝えると、黒死牟は思わず額をびしやりと叩いていた。

決して柱たちが不甲斐ない訳ではない。

墮姫が死なない理由がわからないからこそ、この状況になっているだけだ。仕掛けさえわかれば討伐するのは容易い。

だが、あまり状況が良いとも言えなかった。

今はまだ一般市民に被害が出ていないからいいものの、さつさと討伐しないと被害が出かねない。

「ここは巖勝様みちかつに出ていただいたほうが良さそうですね」

「そうだな……」

苦笑するカナエに、黒死牟も同意する。

「すまないが……ここは任せる……」

「武運を」

カナエに頷き返し、窓を開け放った黒死牟は夜の街へと飛び出した。

残されたのはカナエと鯉夏、そして後藤の三人だ。

男一人に女が二人。

しかも、女は二人とも美人である。

「あー、俺は持ち場に戻りますんで」

そんな状況に居づらくなったのか、後藤はそそくさと部屋を出ていった。

そんな後藤の後ろ姿を見送ったあと、カナエは鯉夏にチラリと視線を向ける。

その視線に気づいているのか、鯉夏はそわそわとして落ち着きがなくなっていた。

なにしろ、鯉夏を身請けしたのは黒死牟である。

そして、カナエは彼の妻だ。

鯉夏からすれば、居づらいなんでもものではないのだろう。

「鯉夏さん」

「は、はい」

「今回は鬼殺に巻き込んでしまい、申し訳ありませんでした」

カナエが頭を下げる。

今回の囷作戦を考えたのは彼女だ。

一般人を危険にさらす可能性がある作戦だっただけに、囷役になってくれた鯉夏に頭

を下げるのは当然だった。

「いいえ、同意したのは私です。それに、私自身でも考えていた話でしたから。もしも提案されなかったら、私のほうから お話するつもりでした」

鯉夏は苦笑する。

親しい者たちを殺された鯉夏にも、胸中に少なくない怒りが渦巻いていた。

無念を晴らせるのなら、協力を惜しまない。

そう決めていたのだ。

「だから、謝罪はいりません」

そう言つて、鯉夏は笑みを浮かべる。

「それに……」

「それに？」

「たまたまとは言え、条件の良いところに身請けされる絶好の機会が巡つてきましたから。——今後とも、よろしくお願いします」

思わずカナエは目を丸くし、そして小さく吹き出していた。

鬼殺隊の柱としてのカナエは、鬼を誘き出して倒したい。

対して、親しかった者たちを失った鯉夏も、皆の仇を討ちたかった。

黒死牟の妻としてのカナエは、夫が『絶対に生きて帰らないといけないな』と思うような何かを持った人を求めている。

対して、花魁である鯉夏は身請けされた先に幸せが待っているとは限らないことを知っているため、なるべく身請け先の環境や条件の良いところに身請けされたかった。

つまり、カナエと鯉夏の利害は ある程度一致していたのだ。

そのうえで、鯉夏は『店の旦那様や遊女たちが安心して暮らせるならば』と楼主に訴えて囹役を買つて出ている。

つまりは『楼主や女将に恩返しする』という体を取って恩を売り、身請け話に口を出せないようにしているのだ。

さすがは吉原でも指折りの花魁したた強かである。

だが、身請けを了承した理由は、それだけではないだろう。

少なくとも、彼女自身が黒死牟を好ましい相手だと感じてくれているのは間違いない。

いくら敵討ちのためとは言え、拒否できるといふ選択肢がある状態で、好きでもない相手に身請けされるような人間はいないと思うからだ。

「鯉夏さん」

「はこ」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

そう言つて、カナエは頭を下げた。



それが現れたのは突然だった。

「うわああああん!! お兄ちゃあああん!!」

脱兎の如く逃げる墮姫てしが、助けを求めて兄を呼ぶ。

その直後、彼女の背中から別の鬼が生えてきた。

「ううううん……」

まるで寝起きの人間のように、背伸びをする鬼の男。

その気配と威圧感、墮姫とは比べ物にならないほどに濃厚だ。

新たに現れた鬼を見て、墮姫を追っていた者たちは一斉に悟った。

この鬼こそが真の「上弦の伍」である、と。

全員が警戒度を一気に上げ、何が起こってもいいように身構える。

空気が張り詰めるなか、墮姫の兄・妓夫太郎ぎゆうたろうは妹を追いかけていた者たちを睨みつけ

て目を掻いた。

「テメエらなああ。俺の可愛い妹を虐めて楽しんでたみたいだなあ。許せねえなああ。

許せねえなああ」

頬ほほや腕から血が出るのも構わずに、妓夫太郎はボリボリと掻きむし筆る。

怒っているように見えて、妓夫太郎の思考は冷静そのものだ。

敵の戦力——柱か、それに近い実力者。

敵の人数——遊女の姿をしているが、一部は女装した男性が混ざっている。

おそらくは男が二人に女が四人。

そのほかにも得物の長さを確認し、見えない部分を持ち主を見て想像し、それらにつ

いての対応策を考える。

しかし、思っていたより敵の数が多い。

このまま戦えば、物量によって押し負けるのは目に見えている。

それをすっかりと認識した妓夫太郎は、相手が嫌がる策をとった。

妓夫太郎が堕姫に何事かを耳打ちする。

堕姫は驚いた表情を見せたあと、にやりと笑って先程と同様に脱兎の如く逃げ始めた。

「あつ！ 待て!!」

「行かせねえからなああ」

——けつきじゆつ血鬼術 飛び血鎌

追いかけてようとする有一郎を、妓夫太郎が持っていた鎌から血の斬撃を飛ばして妨害する。

有一郎に続いて しのぶ や蜜璃が追おうとしたが、妓夫太郎が血の斬撃を人のいる民家に向かって飛ばしたことで足を止めざるを得なかった。

「お前らには俺の相手をしてもらうからなあ。勝手に追おうとするなよなあ」

ボリボリと頬を掻きながら、妓夫太郎は笑みを浮かべる。

勘の鋭い者はすでに気づいていた。

妓夫太郎と堕姫は、同時に頸を斬らねば倒せないことを。

そして、妓夫太郎が堕姫を逃がしたのは、同時に頸を斬れない状況にして、鬼殺隊に消耗戦を強いて潰すつもりなのだ。

「取り立てるぜ、俺はなあ。やられた分は必ず取り立てる」

妓夫太郎が手に持つ鎌が不気味に脈打ち、滴り落ちる血が刃を濡らす。

「死ぬときグルグル巡らせる。俺の名は妓夫太郎だからなあ」



鬼殺隊と妓夫太郎の戦いは膠着状態に陥っていた。

人数の利は鬼殺隊にある。

だが、妓夫太郎の意思ひとつで自在に曲がる飛び血鎌が、まだ退去している最中の人々を狙っていた。

そのために、そちらの守りに手数を割かなければならなかったのだ。

鬼に気づかれないように罾を張っていたことが、裏目に出た形である。

幸いにも、柱同士の連携がそこその形になっているおかげで被害は出ていない。

しかし、早急に対処しなければ死者が出るのも時間の問題だろう。

——けつきじゆつ血鬼術 飛び血鎌

——水の呼吸 参ノ型 りゅうりゅうま流流舞い

——蛇の呼吸 伍ノ型 蜿蜿長蛇えんえんちやうだ

妓夫太郎が民家や一般人に向けて血鎌を飛ばし、義勇と小芭内がそれらをすべて斬り裂いていく。

——炎の呼吸 壺ノ型 不知火

——霞の呼吸 肆ノ型 移流斬り

有一郎と無一郎が斬り込むが、妓夫太郎は両手に持った鎌で刃を受け止めた。

「背中がお留守ですよ」

——蜂牙ノ舞 真靡まなびき

妓夫太郎に しのぶ が迫せまる。

ちなみに、この時に義勇が『馬鹿正直に呼ぶとは……!!』と思つていたなど知る由よしもない。

だが——、

「お前らが俺の頸くび斬るなんて、無理な話なんだよなあ」

妓夫太郎は首を真後ろまで振り回すと、迫つていた刃先に噛みついて止めた。

あまりにも酷い絵面えづらに、 しのぶ は表情を強張こわばらせる。

——血鬼術 円斬旋回・飛び血鎌けつきじゆつ

妓夫太郎の両腕に巻きつくように、血鎌が現れた。

直感的に危険を察知した三人は、慌てて飛び退る。

腕に纏った血鎌は広範囲に放たれた。

近くにいた三人だけでなく、一般人や建物にも血鎌が迫っている。

——炎の呼吸 肆ノ型 盛炎のうねり

——霞の呼吸 陸ノ型 月の霞消かしよう

——水の呼吸 拾壺ノ型 凧

——恋の呼吸 参ノ型 恋猫しぐれ

それらは有一郎と無一郎、助けに入った義勇と蜜璃の手によって霧散した。

——蛇の呼吸 弍ノ型 狭頭の毒牙

隙を見て近寄っていた小芭内が頸くびを狙って刃を振るう。

だが、妓夫太郎はそれすらも防いでいた。

小芭内が舌打ちする。

その顔にはうっすらと汗が浮かび、施していた化粧が崩れて隠していたものが見えるようになっていた。

「お前の口元にある汚い傷……醜いなあ、醜いなあ。なんとなく親近感が湧くなあ。お前が鬼になったら愛着が湧くかもなああ」

妓夫太郎が愉快だと言わんばかりに笑い声をあげる。

小芭内の表情が苦し気に歪んだ。

傷口に塩を塗られたような気分だった。

だが、言われた小芭内 以上に、その言葉を看過できない者がいた。

「そんなことない!!」

「あ?」

「伊黒さんの傷は醜くなんてないもの!!」

声を荒げたのは蜜璃だ。

「傷があつたつて、伊黒さんは優しくくてカッコいいんだから!」

「甘露寺……」

蜜璃の言葉に、小芭内はドキリとした。

「伊黒さんはね! 道に迷つてた私に気づいて助けてくれたの! それから靴下をくれたりするのよ! 食事に誘ってくれた時も、私のことをとつても優しい目で見ってくれるの! 伊黒さんと一緒に食べるご飯が一番美味しいの! とつても幸せな気分になれるの! たくさんたくさん私のことを楽しませてくれて! 幸せな気持ちにさせてくれて……!!」

「甘露寺……」

小芭内の胸にほわほわとした温かい気持ち湧き上がる。

「伊黒さんのことを何も知らないのに、外見だけ見て酷いことを言わないで！ 伊黒さんはっ！ 伊黒さんはねえ！！ とつてもいい男なんだから！！ 私の大切で大切な……とつても大好きな人なんだからあああつ！！」

蜜璃は叫んだ。

吉原中に聞こえるのではないかと思えるような、大きな声で。

「か、甘露寺……」

小芭内が膝から崩れ落ちる。

胸がキュンとなったのだ。

いや、キュンどころか、ズキユウウン！！ くらいの勢いだった。

心臓を鷲掴みにされて、心ごと持っていかれた気すらしている。

それくらい、蜜璃の告白にも聞こえる言葉に衝撃を受けていた。

逆に、妓夫太郎は困惑している。

自分は今、いったい何を聞かされているのだろうか？

そう思っていた。

「それからねっ！ えつとねっ！！」

「甘露寺」

躍起になっている蜜璃を義勇が止める。

なおも蜜璃は「だってだって！」とごねているが、そこにしのぶも止めに加わった。

「甘露寺さん。もう、そのくらいにしてあげてください。……伊黒さんがいろいろと限界みたいなので」

そう言われ、蜜璃は小芭内に目を向ける。

小芭内はうすくま踞すくまっていた。

顔を真っ赤に染めて、緩みそうになる頬を必死に押さえていた。

鬼の目の前にいるというのに無防備に過ぎるが、惚れた女性に『大好きな人』だと言われたのである。

そうなってしまうのも、仕方のない話だろう。

それに対して、妓夫太郎はまだ困惑していた。

お前ら、いったい何をしに来たんだ？ と問いかけてやりたい気分である。

とりあえず、すぐ側にいる男が妬ましい対象であることには間違いない。

「……妬ましいなああ。妬ましいなああ。あんな綺麗な女に受け入れられているなんてなあ。許せねえよなあ！ なああ!!」

妓夫太郎が鎌を振りかぶる。

すると、急に世界が回りだした。

「……あ？」

間拔けな声^{こゝろ}が口から漏れる。

くるくると回転する視界の端。

そこに、六つ目の鬼が立っていた。

◆◆

堕姫は街の外を指して走っていた。

彼女と妓夫太郎は二身一体。

どちらか片方の頸^{くび}が無事なら消滅しない体だ。

そして、妓夫太郎は猛毒の使い手でもある。

彼の攻撃に掠^{かす}っただけでも、体に毒がまわって死に至るのだ。

そのため、妓夫太郎は無理に相手を倒す必要はない。

この不死性と毒があれば、余程のことがない限りは彼女たちに負けはないだろう。

それに、例えば妓夫太郎が消耗しても、堕姫が人間を食らえば回復ができる。

二人が繋がっているからこそ出来る芸当だった。

鬼殺隊にとつては底意地の悪い作戦である。

しかし、妓夫太郎には誤算があつた。

屋根伝いに駆ける墮姫の視界に、同じように屋根の上を駆けてくる人影が映る。なにやら派手な装飾をつけた、大柄な男だった。

墮姫は行きがけの駄賃だと言わんばかりに、男を攻撃する。

このままいけば真正面から擦れ違う形になるため、邪魔な相手でもあったのだ。だが、墮姫の伸ばした帯が男に当たる寸前――、

「――えっ？」

男の姿がかき消えて、墮姫の視界が回りだした。

◆◆

妓夫太郎の頸を斬った黒死牟が、刀を鞘に納める。

小さな鏢鳴りが聞こえるくらいに、辺りは静寂に包まれていた。

妓夫太郎の体が崩れ始める。

誰かが墮姫の頸を斬っていたらしい。

すると、黒死牟が頸を失った妓夫太郎の体に短刀を突き刺した。

血を採取しているのだ。

それを見た柱たちが『ああ、そう言えば』と思い出し、各自で持たされていた短刀を取り出している。

研究用の血液は、多くて困ることはない。

妓夫太郎の身体に、次々と短刀が突き刺さった。

鬼殺隊は何人で吉原に来たんだ？

そんな疑問が妓夫太郎の脳裏に浮かぶが、すでに敗けは決まっている。
詮無きことか、と考えるのをやめた。

「まさか、黒死牟が来てたとはなあ」

妓夫太郎のぼやきに、黒死牟は沈黙で返す。

別に返事を期待していたわけではないため、妓夫太郎は特に何も言うこともない。
今はただ、妹の堕姫、いや、梅のことだけを考えていた。

妹と共にいれば守ってやれただろうか？

いや、どちらにせよ物量で押し潰されたか？

まあ、黒死牟が吉原に来ていた時点で敗けは決まっていたようなものだったか。
自分の失敗はどこにあったかを考えながら、妓夫太郎の頸は崩れて消えた。

「よオよオ！ 吉原のど真ん中でド派手に愛を叫んだ告白会場はここかい？」

そんな軽口と共に、天元がやって来た。

極々一部がその軽口に過剰な反応を示しているが、ただただ微笑ましいだけなので、

各自、視界の外に追いやっている。

「照れるな、照れるな」とからかいの声をかけたあと、天元は吉原の街並みに目を向けた。多少、建物に被害は出ているが、倒壊するようなものではない。

大半が、壁の傷や瓦が割れたなどの軽い被害だ。

そこに対しては修繕費を工面してやれば、大きな波風を立てることなく話がつくだらう。

それに、人的被害もない。

一般人にも、鬼殺隊にもだ。

百年以上も討伐出来なかった上弦の鬼を倒した代償にしては、明らかに小さい被害である。

偉業、と言っても良いだろう。

まあ、鬼殺隊の切り札でもある「月柱」に加えて、柱の半数を動かしたのだ。戦力的には当然の結果と言えなくもない。

「ま、なんにせよ。これで残る上弦の鬼は五体だな」

また一步、鬼舞辻無惨の頸に近づいた。

それを実感しながら、天元たちは事後処理に向かうのだった。



「悪かったなあ。俺が読み違えちまったせいだなあ」

「やっぱりアレよ！ 私とお兄ちゃんは一緒にいなきや駄目なのよ！ 二人がそろえば無敵だって、昔、言ってたじゃない！」

「そうだったなあ」

「あ、でもでも！ 私の頸を斬った奴はいい男だったなあ」

「……お前なあ」

「もちろん、お兄ちゃんの次にいい男だったって意味だけどね！ ……ちよつと！ 拗ねないですよ、お兄ちゃん！」



大正こそこそ噂話（壱）

【音柱】 宇髓 天元

忍なのに忍ばない、ド派手な元・忍者。

とにかく派手好きな自称・祭りの神。

詳しくは原作を読もう。

原作とは違い、下弦解体の前情報があったので、奥様方を危険にさらさずに済んだ。

本来なら今回の吉原編で負傷し柱を引退するが、本作では無事だったので残留するここに。

なお、地味に女装を逃れている。

大正こそこそ噂話(弐)

【恋柱】 甘露寺 蜜璃

恋に悩む鬼殺隊の乙女。

特殊な体質をしている捌倍娘^{はちばい}。

詳しくは原作を読もう。

周囲に既婚者が増えているため、結婚願望が強まっている。

小芭内にいろいろと仕掛けていたが、なかなか上手くはいかなかったようだ。

原作でも思いが通じあっていたが、本作では感情に任せて告白したような形になった。

大正こそこそ噂話(参)

【蛇柱】 伊黒 小芭内

いつも蛇(錆丸^{かぶらまる})と一緒にいる人。

ネチっこさに定評がある(たぶん)純情派。

結婚願望が強まっている蜜璃から『当たってる? 当ててるのよ』攻撃を受けながら

も、今一步踏み出せないでいた。

今回の一件で蜜璃の色香に惑わされ、理性が崩壊しかける。

事が終わったら蜜璃に告白しようと考えていたら、逆に告白されることに。

次の柱合会議には恋人繋ぎして産屋敷邸に来たことから、二人の仲はうまくいったよ
うだ。

後日、甘露寺家に報告に行ったら母親に泣いて喜ばれていた。

大正こそこそ噂話（肆）

尾崎 桜乃さくの

数少ない女性隊士。

原作では那田蜘蛛山で亡くなった故人。

姓は原作に登場しているが、名前は判明していない。

そのため、名前は別作品から採用している。

名前の採用理由はキメツ☆学園でテニス部に所属していることから。

あつちは竜崎でこっちは尾崎。

崎つながりて語感もいい。

髮形的には監督のほうが近いのだが……ウウム。

ついでに【花の呼吸】の使い手で【花柱】の継子の一人になっている。
 真菰まじもから年下の良さを布教されているようで、最近、文通相手を見ると内心で葛藤が
 起きるらしい。

大正こそこそ噂話（伍）

鯉夏

吉原にある遊郭【ときと屋】の上級花魁。

面倒見がよく、下の子たちに慕われる優しい女性。

あまりにも甘やかしすぎて、たまに女将に叱られるらしい。

原作では身請け話が出ていたが、本作では黒死牟が身請けした。

黒死牟に対する恋愛感情はあるが、それ以上に相性が良かったらしい。

精神的な相性もそうだが、から……ゲフンゲフン。



大正こそこそオマケ話

無惨

「妓夫太郎が死んだ。上弦の月が欠けた」

【上弦の壺】

「誠に御座いますか！」

無惨

「戦いの手順に不備はなかった。ただ……黒死牟が来ていたことだけが誤算だった」

【上弦の壺】

（うわあ……あの人が来てたのか。やだなあ……）

【上弦の弐】

（黒死牟黒死牟黒死牟ここここここ恋雪いいい!!）

【上弦の参】

（ヒイイツ！ 妄執に囚われた男の嫉妬が恐い!!）

【上弦の肆】

「無惨様!! 私^くが掴んだ情報……あふん！」

→頸^{くび}を斬られた。

無惨

「妓夫太郎は死んだ……が、百年振りに上弦の入れ替わりがあった。少しは使えそうな手駒が増えて、私は少しだけ気分がいい」

【上弦の肆】

(無惨様の手が私の頭に！ いい……とてもいい……)
→うっとりしている。

無惨

「玉壺。情報が確定したら半天狗と共に其処そこに向かえ」

【上弦の参】

「ヒイイ。承知致しました……!!」

無惨

「それから……お前は与えた血が馴染み次第、耳に花札のような飾りをつけた鬼殺隊の隊士を探しだして消せ」

→やっぱり、縁壺関連は怖い。

【新・上弦の陸】

「は、い……」

→無惨の血を大量に与えられて悶もたえている。

【無惨、立ち去る】

【上弦の壺】

「玉壺殿お！ 俺も行きたい！」

→わくわくしてる。

【上弦の肆】

「ヒョッ……」

→ものすごく嫌そうな顔。

【新・上弦の陸】

（無惨様の言ってた隊士つてのは……こいつか。なんだよ。こんなガキなら俺でも殺れるぜ）

→記憶が流れ込んできている。

育つた波はうねり打つ（刀鍛冶の里編十α）

吉原で「上弦の伍」を討ち取ってから二ヶ月の時が過ぎた。

季節は夏、真つ盛りである。

百年振りに上弦の鬼を討ち取つたとあつて、鬼殺隊の雰囲気は盛り上がりを見せていた。

それは蝶屋敷のなかでも変わりではなく、病床にある隊士たちにも良い影響を与えている。

上弦の鬼を討伐したということは、それだけ大きな出来事だったのだ。

もちろん、良い影響を受けたのは臥せっている者たちだけではない。

鬼殺に励む隊士たちも、いつそう奮起していた。

「修行だ、権八郎！ 紋逸！ 俺について来い！」

「今日の伊之助は一段と気合いが入ってるな。どうしたんだらう？」

「この間、また傷のおっさんに負けてたからな。悔しかったんだろ」

首をかしげる炭治郎の疑問に、善逸があきれた様子で答える。

「実弥さねみさんに？ —— ああ、この間の稽古のことか」

「おっさんだなんて呼んだらいけない」と嗜めながらも、炭治郎は納得の表情を浮かべた。

定期的に行われる実弥や錆兎との稽古で、炭治郎たちはいまだに勝ち星を上げたことがない。

稽古は木刀を持って行う実戦形式で、基本的に柱一人に三人がかりで挑んでいる。

人数的には明らかに炭治郎たちのほうが有利なのだが、ことごとく覆されて敗北を喫していた。

実力に差があるのは当たり前前の話なのだが、負ける側としては、そろそろ強くなった実感が欲しいところでもある。

「足が折れるまで走り込みだ！」

「いや、それは駄目だろ。しのぶさんに締め上げられるぞ」

善逸がそう言うと、伊之助は沈黙した。

少し前の話になるが、伊之助は病棟の窓ガラスを割ったことがある。

その際にしのぶから説教を受けたのだが、それが相当堪えたいらしい。

それ以来、伊之助はしのぶを怒らせないように気をつけるようになったのだ。

ちなみに、そのあとに母親の琴葉からお叱りを受けている。

伊之助がシヨボくれたのは言うまでもない。



そんな修行と任務漬けの日々を送っていた、ある日の晩のことだった。

「新しい刀？」

漬け物を挟んでいた箸を止め、炭治郎が首をかしげる。

彼の対面には、お茶を啜る累の姿があつた。

珠世に体を弄つてもらい、飲み物は飲めるようになったらしい。

「なんか、刀鍛冶の人が蝶屋敷に来るらしいよ？」

「こ、今回はまだ刀を折つたり刃零れさせないんだけどなあ……」

顔を青くした炭治郎は、嫌な汗が流れる額を腕で拭う。

炭治郎の日輪刀を担当する鋼鐵塚はがねづかという刀鍛冶は、刀への愛情が深すぎる人物である。

以前、彼は炭治郎が刀を破損させたことに怒り、包丁を持って襲いかかつてきたことがあつた。

そのため、その様子を見てしまった蝶屋敷の子供たちから恐れられている。

刀を折って申し訳なく思っていた炭治郎は、追いかけても仕方ないと感じていたらしい。

それを聞いた者たちからは「いくらなんでも人が良すぎだろう」と言われていた。

「ああ、炭治郎の刀じゃないからね？」

「そうなのか？」

累の言葉に炭治郎はホツとした。

「どうやら、追いかけられずに済むらしい。

だが、それならそれで疑問が浮かんできた。

「いったい、誰のための刀なのだろうか？」

「それが顔に出ていたのか、累は苦笑する。

「新しい刀はね。伊之助のための刀だよ」

「伊之助の？」

「んあ？」

炭治郎が目丸くし、天ぷらをかじっていた伊之助が累の顔を見た。

伊之助の刀もまた、破損……はともかく、折れてはいないからだ。

「ほら。この間、伊之助の刀を担当している鉄穴森さんかなもりって人が来てたでしょう？」

「あ。……ああ」

「やっぱり、あれは許せなかったみたいでさ。新しく刀を作ったらいいんだよね」

累に言われて炭治郎は納得する。

伊之助はわかっていないようだが、あれは衝撃的な事件であった。

炭治郎たちが機能回復訓練を終えて「全集中の呼吸・常中」を会得したころの話である。

蝶屋敷に、刀鍛冶である鋼鐵塚と鉄穴森の二人がやって来たことがあった。

炭治郎と伊之助の刀が折られたということで、新しい刀を持ってきたのだ。

その際に炭治郎は鋼鐵塚に追いかけて回されたのだが、それはあくまでも余談である。問題なのは、新しい刀を与えられた伊之助の行動だった。

何故なら、彼は新しく与えられたばかりの刀を石で殴りつけ、見事にボロボロにしてしまったのである。

伊之助曰く『そっちのほうがかッコいいから』ということらしい。

丹精込めて作った刀をボロボロにされて、怒らない職人はいない。

怒った鉄穴森が、伊之助を糞餓鬼呼ばわりしながら殴りにいこうとするのも当然の話だった。

「あの時は鉄穴森さんを止めるのが大変だった」と、当時のことを思い出した炭治郎が力なく笑う。

何となくだが、また同じことが繰り返されるような気がしてならない。

同じように考えたのは炭治郎だけではないらしく、善逸も遠い目をしていた。

「……まあ、皆そう考えるよね」

累も同じように考えているようで、苦笑いしている。

しかし、その懸念が良い意味で外れることになるとは、誰にも予想出来なかった。

◆◆

それから数日後のことである。

ついに、鉄穴森が蝶屋敷に到着した。

「お、お久しぶりです。鉄穴森さん」

「ああ、炭治郎君ですか。お久しぶりです」

少し挙動不審になる炭治郎に、鉄穴森は機嫌が良さそうに返事をする。

お面をしているので表情はわからないが、少なくとも匂いからは良い感情しか読み取れない。

少しだけ、炭治郎はホッとした。

だが、ここから機嫌が急降下することも考え得る。

そのため、炭治郎の心境は安堵から一転し、堪らなく不安になっていた。

「それで伊之助殿は居ますか？」

鉄穴森の纏っていた空気がピリツとしたものに変わる。

「ああ、やつぱり」などと思いつつ、炭治郎は内心で慄おのきながらも鉄穴森を案内した。
「伊之助え！ 鉄穴森さんが来たよ！」

声をかけると、中庭で鍛練をしていた伊之助が腕や背中を伸ばしながらやってきた。
その瞬間、鉄穴森の視線と伊之助の視線がぶつかり合つて火花を散らした……ような気がする。

「来ましたね。伊之助殿」

何やら、黒い瘴気のようなものが鉄穴森の体から漏れでている……ような気がした。
それは伊之助も感じているらしく、ちよつと後退あしすきりしている。

「今回の刀は自信作なんですよ。どうぞ、お納めください」

鉄穴森は、持ってきていた二振りの刀を伊之助に差し出した。

奇妙な圧力を感じていた伊之助は恐る恐る受け取ると、鞘から刀を抜き放つ。

「ほう……」

「へえ……」

伊之助が前回のような暴挙に出ないようにと同席していた黒死牟と累が、感嘆の声をあげた。

伊之助の持つ新たな刀は、一見すると何の変哲もないものである。

だが、よく見てみると刃の部分細かく波打っていた。

のこぎり
鋸 のようにも見える、変わった刃である。

「昔の刀匠が作った刀の資料を読み漁りましてね。偶然、このような形状の刀を見つけ
たんですよ。作るのが難しく、かなり時間がかかりましたけどね」

「人のふんどし褌を借りた形になるので恥ずかしいのですが」と、そう言つて鉄穴森は頬を搔
く。

職人としては、自分の発想力で生み出したかったのだろう。

だが、グズグズしていれば伊之助がボロボロになった刀で戦い、命を落とすかもしれ
ない。

鉄穴森は職人の誇りと伊之助の命を秤にかけたのだ。

その結果が、この新しい刀なのだろう。

「よかつたな、伊之す……」

炭治郎は、伊之助に目を向けて固まった。

伊之助の目が、とても輝いていたからである。

まるで、新しい玩具おもちゃを与えられた子供のような目だった。

「ちよつと試し切りしてくらあ!!」

「え? ちよつ……伊之助え!」

嬉しさを抑えきれない様子の伊之助が、飛び跳ねながら部屋を後にする。

お礼も言わずに立ち去った伊之助に呆れながら、炭治郎は鉄穴森に「すみません」と頭を下げた。

「いやいや。良いんですよ、炭治郎君。私としては、伊之助殿に気に入って貰えただけでも大満足です」

「そ、そうですか？」

申し訳なさそうにする炭治郎に、鉄穴森は笑顔を向ける。

「ええ。……もしも、あの刀でも駄目だった場合はどうしてくれようかと考えてましたから」

再び鉄穴森の体から、黒い瘴気が溢れだした……ような気がした。

頬を引きつらせながら、炭治郎は笑う。

内心では『伊之助が気に入ってくれて良かった!!』と思っていたが、それを口に出すことはなかった。

「それはそうと……鉄穴森殿……」

話が一段落したのを見計らい、黒死牟が鉄穴森に声をかける。

「なんででしょうか、黒死牟殿？」

「あの刀は……斬れるのか……」

黒死牟に問われ、鉄穴森は苦笑した。

当然の疑問だと思っていたのだろう。

「ええ、もちろんです。まずは包丁という形で再現して研究を重ねましたからね。少なくとも、伊之助殿にボロボロにされた刀よりは斬れますよ」

そう言つて、鉄穴森は胸を張つた。



伊之助への刀の譲渡が済んだあと、黒死牟はあることを思い出していた。

三百年前に黒死牟が鬼殺隊にいた頃の話になるが、刀鍛冶の里には彼——つぎくにみちかつ継国巖勝の弟、よりいち縁壺を模した戦鬪用の絡繰人形があつたのである。

それは今、いったいどうなっているのだろうか。

少し気になったので、鉄穴森に聞いてみることにした。

問われた鉄穴森は少し黙つたあと、申し訳なさそうに頭を垂れる。

「あるにはあるのですが……さすがに三百年前の物ですし、絡繰人形の整備を代々続けていた家の当主が急死しまして……」

「そうか……それは……惜しい人を……亡くした……」

黒死牟は僅かに目を見開き、故人に対して黙禱を捧げる。

しかし、三百年前の絡繰人形がいまだに現存していると聞いて、黒死牟は素直に驚いていた。

さすがにもう動いていないだろう、もしくは、新しい物に作り替えられているだろう。いや、既に失われていたとしても不思議ではない、と考えていたのである。

「一度……刀鍛冶の里に……顔を出すとするか……」

黒死牟はそう決めると、刀鍛冶の里に行く許可を求める書状を耀哉かがやに送った。

その返事は返って来なかったが、後日、手紙の代わりに隠かくしの後藤ごとうが蝶屋敷を訪れたのである。

「後藤殿……もしや……」

「……察して」



黒死牟は、後藤の案内で刀鍛冶の里を訪れていた。

ちなみに、刀鍛冶の里に行くとき皆に告げた際に、子供たちから『お土産よろしく!』と要求されていたのは余談である。

なお、一部の女性陣は里に温泉があることを知っていたために『行きたい!』と駄々を捏こねていた。

だが、刀鍛冶の里は鬼殺隊の重要拠点のひとつであり、幾重にも隠されている場所である。

そういった事情もあって、連れていくことは不可能だった。

なので、その代わりに後日、黒死牟が普通の温泉宿に連れていくことを約束していたりする。

ちなみに、その様子を見ていた後藤がなんとも言えない微妙な顔をしていたことに、黒死牟は気づいていなかった。

（あの駄々の捏ね方。たぶん、約束を取りつけるために わざとやったんだろうなあ……）

「どうした……後藤殿……」

「いや、なんでもないツス」

絡繰人形を管理している家に行ってみると、そこには一人の少年が待っていた。名を小鉄と言い、絡繰人形本体と作動させるための鍵を管理しているらしい。

「普段、絡繰人形は倉のなかに保管してらんです。今は直せる人もいないし……」
寂しそうな小鉄の声に、黒死牟は「そうか……」としか返せなかった。

絡繰人形の修復方法を学ぶ前に、指導者でもある父親が亡くなったのだ。

指南書や様々な資料は残っているそうだが、やはり、父親から学びたかったのだろう。現在は、父親が亡くなる直前に言い遺した『次の世代に繋いで欲しい』という言葉を守るために、才能がないとわかっているが、必死になって修行中なのだそう。

「あ、絡繰を仕舞ってある蔵は里から少し離れた場所にあるんです。訓練をするには、里のなかだと狭くて……」

そう言つて、小鉄は黒死牟を連れて里の外にある広場へと案内する。

「本当に、あの絡繰人形にそっくりな人ですね」などと話しつつ、人形が安置されているという蔵へと向かう。

そして、絡繰人形と対面して黒死牟は驚いた。

想像していたよりも、痛みの少ない状態で安置されていたからである。

そもそも、この絡繰人形は訓練用に作られたものだ。

ならば、もっと激しく壊れ、修繕した痕跡が残っていたとしても不思議ではない。

だが、それがないのである。

ということとは、人形に傷を残すほどの攻撃を当てることが出来た者がいない、ということの意味していた。

(絡繰人形に落とし込んでなお、お前は孤高の領域にいるのか。縁壺……)

後世に生まれた剣士の質が悪いわけではないだろう。

だが、誰一人として追いつけなかったという事実には、黒死牟は一抹の寂しさを感じていた。



見るべきものは見た。

満足そうにしながら、黒死牟は宿泊している旅館へと足を運ぶ。

その最中、あつてはならない気配を感じて黒死牟は駆け出した。

（この気配……間違いない……）

全速力で駆けつけた黒死牟の視界に、手足の生えた巨大な魚の姿が見えた。

その足元には、火男のお面をつけた里の住人が尻餅をついて後退りしている。

——月の呼吸 壺の型 闇月やみつき・宵よいの宮みや

一刀のもとに魚の頸くびを両断にしてみるが、傷口がすぐさま再生を始めていた。

黒死牟は目を見張る。

だが、よく見てみると、先程までは巨体で見えなかった部位に壺がくつついているの
に気がついた。

すぐに察した黒死牟は、壺に一撃を入れて叩き割る。

その途端、魚の化け物は悲鳴をあげて崩れ去った。

やはり、壺が本体だったらしい。

「壺を割れ！ さすれば消える!!」

里の各地で戦う鬼殺隊の隊士に聞こえるように、黒死牟が珍しく大声をあげる。

すると、その声を聞いた者たちが同じように叫んで回り、化け物の巨体が各地で次々

に崩れ始めた。

里に常駐する警備役の隊士は、それなりに腕が立つ者を選別している。弱点さえ判れば、こうもなるだろう。

黒死牟は日輪刀を鞘に納めると、その代わりに妙に肉感のある鞘に納められた刀を持ち出して、抜き放った。

たくさんが目玉がついた、不気味な刀である。

しかも、それは形を変えて、巨大な太刀になった。

黒死牟の肉を使って生み出された刀である。

「やっ……」

里に蔓延^{はびこ}る化け物の群れに、黒死牟は目を向けた。

「少しばかり……本気でやるとしよう……」

そう言つて、黒死牟は駆け出した。

まずは逃げ遅れた人々を襲う魚の集団へと飛びかかる。

——月の呼吸 玖ノ型 降り月・連面

無数の斬撃が降り注ぎ、里の人々を襲おうとしていた化け物が背負う壺を割っていく。

「い、黒死牟殿！」

「逃げよ……しんがり……殿は私が務める……」

「は、はいー」

大急ぎで逃げていく背中を見送ったあと、黒死牟は前方から押し寄せていた魚の群れに向かって刀を振るった。

——月の呼吸 拾ノ型 穿面斬・蘿月らげつ

回転鋸のような形状をした斬撃が、複数並んで突き進む。

そして、化け物の体を壺ごと斬り裂いていった。

魚の化け物は数を減らしたが、消えた分だけ新たに押し寄せてくる。

どうやら、黒死牟を脅威と見て優先的に排除しようとしているらしい。

それはそれで好都合だ。

——月の呼吸 捌ノ型 月龍輪尾

横薙ぎの斬撃が広範囲に渡って化け物を斬り裂いた。

正面から来ていた化け物の数が減る。

すると、化け物のなかにも少しは頭の回る個体もいたようだ。

それらは建物に登って迂回し、背後から飛びかかるように襲ってくる。

だが、黒死牟は動じない。

——月の呼吸 拾肆ノ型 兇変・天満織月

襲いかかつて来る化け物を、前後左右まとめて薙ぎ払う。

——月の呼吸 漆ノ型 厄鏡・月映え

再び正面に向かつて刀を振るえば、地を這う斬撃が化け物たちを斬り裂いた。今の攻防でかなりの数を減らしたらしい。

黒死牟の前に立ちほだかる魚の化け物は、粗方消え去っている。

もちろん、残った化け物も数瞬で同じ道を辿った。

その後も、黒死牟は次々に壺を背負った魚の化け物を倒していく。

凄まじい進行速度だ。

あつという間に里長の住む屋敷に辿り着くと、暴れまわっていた一際巨大な魚の化け物が目に映る。

——月の呼吸 拾陸ノ型 月虹・片割れ月

上から地面に向かつて複数の三日月が突き刺さる。

ただそれだけで、いくつもの壺を背負った巨大な化け物は退治された。「強つー」などと里長や護衛たちが口を揃えていたが、それはさておき。

黒死牟が敵の数を一気に減らし、常駐する隊士たちの奮闘もあつて、里全体の騒ぎも落ち着いてきたように見える。

雑魚はこれで大丈夫だろう。

だが、気配からして上弦の鬼がどこかにいるはずだ。

黒死牟は近くにいた化け物を倒しながら、鬼の気配を探る。

そして、旅館の屋根にその姿を見つけた。

「ヒィヒィ！」

角をもち、目の裏返った老人の鬼。

与えられた数字はわからないが、その気配の誤魔化し方は間違いなく上弦の鬼だ。

ここでふと、黒死牟の脳裏に過るものがあった。

この老人の鬼に見覚え、というか、特徴に聞き覚えがあるのだ。

しかし、それが何故、どこで聞いたのかを思い出せない。

「まあ……斬ってから……考えればよからう……」

日輪刀に持ち替え、黒死牟が老人の鬼——半天狗の頸を一刀両断する。

すると、一方からは頭が生え、もう一方には体ができていた。

しかも、二体とも若々しい姿に変わっている。

「分裂か……小賢しい……」

——月の呼吸 参ノ型 厭忌月・銷り

二体に別れた鬼の頸が、再び宙を舞う。

だが、そこから四体が増えた。

ここで漸く、黒死牟は脳裏に過つたものの正体に気づく。

「そういえば……何度斬ろうとも……分裂する……鬼がいると……聞いたことがあったが……こやつがそうか……」

黒死牟がその話を聞いたのは、百年以上も前のことである。

まさか、まだその鬼が生き残っていて、上弦の鬼にまで成り上がっているとは思わなかった。

黒死牟に鬼のことを話してくれた人物が聞けば、倒せなかったことを悔いて憤死しかねない話である。

勿論、その人物は普通の人間なので他界しているが、それくらい責任感の強い人物だったのだ。

——月の呼吸 陸ノ型 常世孤月・無間

四体が増えた鬼を、赫刀化させた日輪刀で木っ端微塵に斬って捨てる。

すると、鬼の気配が小さくなった。

どうやら、四体程度が最も力を発揮する人数らしい。

「しかし……細切れにしても……死なんとはな……」

目の前の肉片に本体はいないと感じた黒死牟は、周辺に鬼が隠れていないかと気配を探る。

注意深く探ってみれば、少し離れた位置に鬼の気配があつた。

だが、視線を向けてみても鬼の姿は見えない。

どういふことか？ と考えていると、妙に低い位置から視線を感じた。

気になった黒死牟は、視線を感じた位置をじっくりと観察してみる。

すると、そこには――、

「ヒィヒィー！」

手のひらに収まるくらいの、分かりやすく例えると、野ネズミ程度の大きさをした老人の鬼が、落ち葉に隠れるようにして立っていた。

思わず、黒死牟の目が点になる。

「これはまた……なんとも……！」

黒死牟は苦笑いをした。

どうやら、あれが本体らしい。

そうと判れば話は早かつた。

木っ端微塵にした鬼の肉がなんとか再生しようとする^{うごめ}蠢いているが、それももはや関係ない。

――月の呼吸 伍ノ型 月魄災禍

再生しようとしていた肉塊を、刀の振り無しで生み出した斬撃で斬り飛ばす。

万一にも邪魔をされないように念を入れたのだ。
そして――、

――月の呼吸 式の型 珠華ノ弄月

取り囲むように放たれた三本の斬撃が、逃げ出していた本体の行く先を塞ぎながら頸を斬り落とした。



上弦の鬼――半天狗を討ち取った黒死牟は、改めて、里の各地に目をやった。先程までは壺を背負った魚の化け物がいたのだが、それらの姿は消えている。

黒死牟が斬った鬼は壺のような物は持っていないかった。

外見からしても、壺との繋がりを見出だせない。

おそらくは、魚の化け物は別の鬼が生み出したものなのだろう。

しかし、そうなると今、里を襲っていた化け物がいなくなったことへの説明がつきづらい。

化け物が消えた理由として考えられるのは、二つある。

生み出した本体が倒されたのか。

はたまた、逃げ出したのか。

黒死牟は腕を組んで考え込んだ。

可能性として高いのは撤退したというものである。

何故なら、魚の化け物の強さと数から考えて、あれを生み出した者は上弦の鬼である可能性が高いからだ。

この里に常駐する隊士も弱くはないが、上弦の鬼に勝てるか？ と聞かれれば、無理だとしか言いようがない。

だから、いないのは撤退したからだと考えるのが自然である。

しかし、相手は刀鍛冶の里を見つけたほどの情報猛者だ。

里を襲うにしても、もう少し何かありそうなものである。

故に、黒死牟は楽観視をしていなかった。

何か仕掛けているのではないかと疑っていると、黒死牟の顔に影がかかる。

ふと見上げてみると、月を背負った六本腕の人影が見え――、

「ぬっ……!?!」

黒死牟に斬りかかってきた。

◆◇◆

小鉄は走っていた。

一刻も早く、里に戻らねばならなかった。

里のほうからは戦いの音がしていたが、今は止んでいるらしい。

だが、それでも急がねばならなかった。

小鉄が里に戻つてくると、壊れた建物が視界に入る。

化け物たちは盛大に暴れたらしく、無事な建物を探すほうが大変そうな有り様だ。

悲惨な状態に変わり果てた里の姿におの慄きながらも、小鉄はあるものの姿を必死になつて探す。

すると、屋根より高い位置から金属がぶつかり合う音がした。

剣戟の音だ。

小鉄は急いで音のする場所を目指して走り出す。

そうして目にしたのは――、

「ああっ!」

小鉄の家が管理していた絡繰人形「縁壺零式」と斬り結ぶ、黒死牟の姿だった。



【縁壺零式】と刃を交えていた黒死牟は、言い知れぬ既視感に襲われていた。

黒死牟と【縁壺零式】がこうして打ち合ったことはない。

だから、過去の経験によるものとは違うはずだ。

それはそれとして、何故、この絡繰人形は黒死牟に狙いを定めて打ちかかってくるの

だろうか？

小鉄少年が何かしたにしては、あまりにも奇妙な行動である。

いや、そもそも、絡繰人形は決められた動きしかしないはずなので、明らかに異常なのだが。

「もしか……鬼の仕業か……」

一瞬、それが正解だろうかと思うが、それにしては何も感じない。
人形だからなのか、殺意や戦意というものをまるで感じないのだ。

「黒死牟さん！」

「小鉄少年か……」

慌てた様子で駆けてくる小鉄の姿を認めた黒死牟は、わざと鏢迫り合いに持ち込み、会話が出来るような状況へと持つていく。

「何が……どうなっている……」

「それが、俺にもよくわからなくて……とにかく、勝手に動き出したんです！ 【縁壺零式】が！」

小鉄は一連の流れを早口で説明する。

黒死牟と別れたあと、蔵から帰ろうとした小鉄の前に鬼が現れた。

壺からウネウネとした気味の悪い体が出ている鬼で、小鉄を『作品の材料にしよう』と言つて殺そうとしてきたのである。

だが、その鬼は一瞬で頸を断たれて死んでしまった。

鬼の頸を斬つたのは、蔵で安置されているはずの「縁壺零式」である。

「動くはずないんですよ、本当なら！　だって、首の後ろに鍵を差してやらないと、動かない仕組みなんですから！」

小鉄は必死に訴える。

その手のなかには、絡繰人形を動かすための鍵が握られていた。

黒死牟は困惑した。

上弦らしき鬼が倒されていたのは喜ばしいが、それならそれで謎がある。

何故、この絡繰人形は勝手に動いているのだろうか？

どうやら鬼の仕業ではないらしい。

それに、絡繰人形は黒死牟を狙っているようなのに、鬼の急所である頸は狙っていない。

それもまた奇妙な話である。

何はともあれ、絡繰人形を止める方法を考えなければならぬ。

なるべくなら傷をつけずに止めたいところなので、自然に止まってくれとありがたいのだが。

「無理そうだな……」

黒死牟は早々に諦めた。

何しろ、本来なら必要な鍵がない状態で動いているのだ。動く理由がわからない以上、自然に止まる可能性は低い。

ならば壊すのが最も手っ取り早いのだが、絡繰人形の修理が出来る者がいないため、それは憚はばられた。

「黒死牟さん！ 壊しても大丈夫です！ 俺が絶対に直しますから！！」

「ほう……」

「あ、でも、出来れば原形がわかるように、綺麗に壊してもらえると嬉しいです。木っ端微塵にされるとわからなくなるので……」

「善処しよう」と笑って、黒死牟は罅迫り合いをやめた。

再び「縁壺零式」との打ち合いが始まる。

それは激しいながらも、流麗なものであった。

無駄な力攻めなどなく、まるで予めあらかじめ予定されていた動きをなぞる殺陣たてのようにも見える。

そのなかで、黒死牟が絡繰人形の腕を斬り飛ばした。

斬られた腕の断面は、綺麗な切り口をしている。

注文通りの綺麗な解体の仕方に、小鉄はホッと息を吐いた。

だが、黒死牟は訝いぶかしむ。

腕を斬った絡繰人形の動きが良くなった気がしたのだ。

再び腕を斬り落とす。

また、絡繰人形の動きが良くなった。

黒死牟の表情が険しいものに変わる。

腕の数が人間のそれに近づくたびに、絡繰人形が強くなっていると感じたのだ。

残る腕の数は四本。

ならば、あと二本分は強くなる可能性がある。

そして今、黒死牟は八割程度の力で戦っていた。

(どこまで強くなる……?)

手に負えなくなるのではないか?

そんな予感すら抱いだいていた。

今ならまだ、なんとか頸くびを狙える程度の動きだ。

さっさと動きを止めてしまえ。

そうも思ったが、何故だか実行する気にはなれない。

不思議と心が高揚していた。

既視感を感じているせいだろうか?

昔、誰かとうやうやって剣技を高め合つた気がする。

相手は誰だつたらどうか？

縁壺？

それにしては動きが悪い。

あの弟ならば、もつと速く、強い一撃を放つはずだ。

多すぎる腕が邪魔をしているのか？

腕を減らすと動きが良くなるのは、もしや、そのせいか？

そう思い至つた時、黒死牟はつい、絡繰人形の腕をもう一本減らしていた。

その途端、絡繰人形の動きが変わる。

先程までの比ではない。

明らかに速く、重くなつていた。

久しく感じていなかった、鳥肌が立つような感覚と命の危険。

絡繰人形が繰り出す一撃を受けるたびに、眠っていた細胞が叩き起こされ、目の前の

事態に対応しようと足掻きだす。

黒死牟は、己が弱くなつていたことを自覚した。

鍛練を怠つたことなどない。

だが、命の危険を感じるような事態に遭遇したこともなかった。

そのため、黒死牟の体や感覚は知らぬ間に錆びついていったのだ。先程までは八割程度の力だと感じていたものが、半分程度のものだったと認識を改める。

余裕が出てきたところで、また一本、絡繰人形の腕を斬り離れた。再び人形の動きが変わる。

対応できていた動きに、ギリギリでしか対応しきれなくなった。

またまた、眠っていた細胞と閉じていた感覚を無理矢理にでも開いて、絡繰人形の動きに食らいつく。

知らず、黒死牟の口元が笑みの形に歪む。

己の剣技が磨かれているのが、実感としてわかるからだ。すると、絡繰人形が自ら刀を一本捨てた。

黒死牟は目を見開いて、絡繰人形を注視する。

絡繰人形の動きが、遠い昔に見た誰かに重なって見えた。

(縁吉……っ！)

黒死牟は、そこに弟の姿を幻視する。

手加減されているのか、人形の身体ではそこまでしか動けないのか。

そこはわからない。

だが、確かに縁壺の存在を感じていた。

互いの繰り出す剣戟の速度が上がる。

縁壺の姿をした絡繰人形は、ついに型まで繰り出すようになっていた。

それに打ち負けないように、黒死牟も型を使つて迎撃する。

黒死牟の意識に時間の感覚はすでにない。

いつたい、どのくらいの時間が過ぎたのか。

それはわからない。

だが、ついに決着の時が訪れた。

バキリ、と絡繰人形から異音が聞こえる。

黒死牟の刀が絡繰人形の頸くびを捉えた音だ。

ちやうど、その一撃が人形の顔を留めていた金具を破壊したようで、部品が外れて中

身あつわが露になる。

人形の中身を見て、黒死牟は驚いた。

絡繰人形のなかには、刀が一振り入っていたのだ。

しかも、見覚えのある鏢のついた刀である。

「これは……縁壺の刀か……」

どうやら、絡繰人形を作った技師が仕込んでおいたらしい。

その意図は定かではないが、おそらくは、絡繰人形を倒せた者に与えるつもりだったのだろう。

刀を人形に固定していた金具を外して、取り出してみる。
三百年も前の刀だ。

錆びついているだろうと思いついてみると、予想を裏切ることなく、錆びていた。

「うわあ……錆びだらけですね、その刀」

「まあ……三百年も……人形のなかに……あつたのだ……錆びもしよう……」

呆れたように黒死牟が言えば、騒ぎを聞きつけてやって来ていた者たちが近寄ってくる。

恐る恐る絡繰人形を啄つづいて動かないことを確認すると、動き出した原因を探るためか、慎重に調べ出した。

その光景を見ながら、黒死牟はため息を吐く。

「動き出した……原因など……わかるはずもなからうに……」

「え……？」

小鉄が首をかしげる。

言葉の意味がわからなかったようだ。

黒死牟は、自分が感じていたものをどう伝えるかと考える。

そして、ふと、しっくりとくる ひとつの事柄を思い出した。

「今日は……盆だ……武士の魂である刀に……絡繰人形という依り代……ならば……ア
レに取り憑き……動かしていたのは……刀の持ち主であろう……」

そう言つて、黒死牟は笑う。

小鉄が「それつてつまり、幽霊!」と身を震わせていたのは余談である。

蝶屋敷が襲撃を受けたと 鏝かすがい 鴉がらす が慌てて飛び込んできたのは、夜明けを迎えてか
らのことだった。



時は、刀鍛冶の里が襲撃を受ける前まで遡さかのぼる。

その日、琴葉は言い知れぬ不安を感じていた。

彼女は常人よりも感覚や勘が優れているらしい。

そのため、悪いことが起きる前はこうして胸がざわつくことが多かった。

だが、これほどまでに不安を感じるのは、どれくらい振りだろうか。

少なくとも、ここ数年は感じたことはなかったはずだ。

何度寝つこうとしても心のざわつきが治まらず、目が冴えてしまう。

こういう時にこそ、隣にいてほしい人が今日はいない。

そのことがまた、琴葉の不安を掻き立てていた。

琴葉は布団から抜け出すと、足音を立てすぎないように気をつけながら縁側へと向かう。

「あれ、琴葉さん？ 寝つけないんですか？」

縁側には蝶屋敷に住む鬼たちがいた。

鬼である彼、彼女らは、基本的に睡眠を必要としないため、夜間はこうやって縁側で

駄弁だべっていることが多い。

「今日は胸騒たぎが治まらなくて、それで起きてきたの。何か、悪いことが起きる予感さがして……」

琴葉が不安げな表情を隠さずに告げると、累と志津の表情が変わった。

二人は琴葉の感覚が優れていることを知っている。

さすがに産屋敷家の当主ほどではないが、的中率はそれなりに高いのだ。

ならば、どこかで何かが起こる可能性があった。

この日、蝶屋敷を離れていたのは黒死牟と、しのぶ、カナエとカナヲの四人である。

黒死牟は刀鍛冶の里へ行き、しのぶは水屋敷に行つて夫婦水入らずで過ごしているはずだ。

カナエとカナヲは、警備担当地区の見回りである。

何かあるとすれば、カナエとカナヲ、次いでしのぶのほうだろうか？

正直、黒死牟に何かあるとは思えない。

累はカナエと水屋敷に鎧鴉を使いに出すことにした。

琴葉が何かしらの危険を感じているとして、注意を呼びかけたのである。

次に、産屋敷邸に使いを出した。

こういった直感に関しては、耀哉に問い合わせたほうが正確だからだ。

そして最後に、蝶屋敷自体の守りを固めた。

黒死牟が不在の今、用心することに越したことはない。

炭治郎と伊之助を起こし、善逸は敢えて寝たままにして、蝶屋敷に待機していた鎧鴉たちに周辺の様子を探ってもらう。

そうして警戒していると、琴葉の不安が的中した。

蝶屋敷のある町の一角に、鬼が現れたのだ。

鬼の瞳には「上弦」と「陸」の文字が刻まれている、との情報もある。

「上弦の陸」……か」

「まさか、柱級の戦力が誰もいない時に来るとはね」

炭治郎と累は苦々しい表情をした。

「俺達で斬りゃあいいだろ」

新しい刀を得ている伊之助は、戦いたくてウズウズしているようだ。

とにもかくにも時間がない。

炭治郎たちは、すぐさま屋敷を出て迎撃に向かう。

蝶屋敷から少し離れた町の一角に、その鬼はいた。

鬼殺隊の隊服を着た鬼だった。

この時点で、何故、鬼が蝶屋敷の位置を知っていたのか？ という謎が氷解する。

まさか、鬼殺隊のなかから裏切り者が出るとは思っていなかった。

「何故、鬼殺隊の隊士が鬼に？」

炭治郎の疑問も当然だろう。

鬼殺隊の隊士になる者の大半は、鬼に家族を殺された被害者だ。

鬼に対する怒りが動力源になっていような集団から、裏切り者が出るとは思わないだろう。

「ハッ！ 俺は安全に出世できればそれで良かったんだ。そうしていたら、向こうから打診があったのさ。鬼にならないか？ ってな!! 鬼はいいぜえ？ 疲れねえし死なねえし何時までだって生きてられる！ 金だって簡単に手に入る！ 最っ高だぜ、鬼はよお!!」

あまりにも即物的な理由。

それを聞いて、顔をしかめない者はいなかった。

「そうかい。——なら、遠慮なんて要らないよね」

累が呟くと、次の瞬間、鬼の全身に蜘蛛の巣状の亀裂が入る。

「……は？」

何をされたか理解する前に、鬼の体は細切れの肉片になっていた。

自ら進んで鬼になり、傷ついた仲間を癒やす場所に攻めいるような外道にかける情けはない。

そう言わんばかりの容赦のなさだ。

「うわあ……」

一瞬で解体された鬼を見て、炭治郎と伊之助はドン引きした。

累を怒らせてはならない。

家族や仲間などの、他者との繋がりに関係する事柄では特に。

しかし、日輪刀で斬ったわけではないため、鬼は死んだわけではない。

気を取り直した炭治郎たちは、鬼の頸を斬ろうと肉片を注視した。

すると、どうだろう。

細切れになった肉片ひとつひとつが再生を始め、複数の「上弦の陸」になったのだ。

「……は？」

これには鬼を解体した累も、目を見開いて驚いていた。

「ふひひひ……っ！ 馬あ鹿がつ！ 言っただろう？ 死なないってなあ！！」

下品な笑い声をあげる鬼に苛立ちが募る。

累は舌打ちすると、近場にいた鬼の頸を斬り飛ばした。

だが、そこから更に分裂し、数が増える。

炭治郎と伊之助も分裂した鬼の頸を斬っていくが、さらに分裂して増えるだけという結果に終わった。

「こんなに俺を増やしてくれて、ありがとよ！ おかげでお前たちを殺しやすくなった

ぜー」

「うがあああ！ 腹立つ！ 一匹一匹は弱い癖に数だけ増えやがって！！」

「落ち着け、伊之助！」

苛立ちを隠せない伊之助を、炭治郎が宥める。

すると、蝶屋敷のある方角から雷鳴が轟いた。

炭治郎たちは一瞬驚くが、すぐに音の原因が善逸の「雷の呼吸」だと察する。

それはつまり、蝶屋敷にいるはずの善逸が戦闘に入ったことを意味していた。

「蝶屋敷に敵!？」

「まさか、あつちにもこいつらが湧いたのか!？」

炭治郎たちの驚きをよそに、鬼は舌打ちする。

「なんだよ。あつちにも戦える奴がいたのか。……まあ、いい。どうせ俺は倒せねえ」

炭治郎たちを見下すように吐き捨てた鬼は、改めて腰帯に挿していた刀を抜いた。

「この仕事が終わったら、俺は臨時収入でばあつとやるんだ！ とくに花札みたいな耳

飾りをつけた餓鬼！ お前には確実に死んでもらうぜ!!」

炭治郎は名指しされたことに驚くが、何か言う前に累に制される。

「炭治郎と伊之助は屋敷に戻ってもらえないかな。こつちよりも、あつちのほうが心配

なんだ」

「それはっ！」

「大丈夫だよ。この程度の相手に負けるつもりはないし、対策もある」

いつもと変わらない様子の累に、炭治郎は後ろ髪を引かれる思いをしながら頷いた。「任せた！」

「そつちこそ、皆のことを任せるからね」

炭治郎たちが踵きびすを返す。

すると、それを追おうと【上弦の陸】が動いた。

「逃がすかよ！」

「それはこつちの台詞」

——血鬼術 溶解の繭まゆ

分裂した【上弦の陸】の一体を、累の手から放たれた糸が包んで丸い球体が出来上がる。

慌てた鬼が刀を繭に突き刺すが、割れる気配は一向に見えない。

「くそつ！ なんだこりゃあ!!」

鬼が悪態を吐く。

それを冷めた目で観察しながら、累は一体、また一体と繭に閉じ込めた。

「この繭に使った糸束は柔らかいけど硬いんだよね。——で、繭のなかには溶解液が入ってるんだけど……」

話を聞いた【上弦の陸】はぎよつとする。

それはつまり――、

「……ねえ。斬られた分だけ増えることが出来るみたいだけどさあ……溶かされたら、どうなるのかな？」

己に対する天敵であることを意味していた。



蝶屋敷に雷鳴が轟く。

そのたびに、鬼の頸くびが宙を舞う。

だが、その分だけ鬼が次々に増えていた。

「くそっ！ 村田さん！ 糸野くめのさん！ そっちは大丈夫ですか!？」

「こっちは大丈夫だ！ 非戦闘員の避難は済んでる！」

善逸が呼びかけると、人垣の向こうから村田の声が聞こえる。

ちなみに人垣を構成しているのは、すべて「上弦の陸」だ。

いったいどこまで増えるのか、とにかく、際限なく増えている。

「だあああ！ もう！ テメエ！ 賽目さいのめ！ この野郎！」

「鬼になったあげく、よりによって蝶屋敷を襲うとはな！ 恥を知れっ！ 恥をつ!!」

村田と糸野は「上弦の陸」の素性を知っているらしい。

頻しきりに悪態や罵声を浴びせながら、増えた「上弦の陸」――賽目を斬り捨てていく。

「はははっ！ 負け惜しみですか、先輩方？」

賽目の一体が嘲笑すると、村田と糸野を数の暴力で圧倒しようとした戦力を集中させた。あまりにも密集し過ぎた人垣は、物理的な圧力をもって二人を潰そうとする。

だが、横合いから禰豆子が賽目たちを一纏めに蹴り飛ばした。

「すまない！」

「助かった！」

二人が禰豆子に礼を言うが、息を吐く間もなく、別の賽目たちが押し寄せる。

その賽目たちが持つ刀の切っ先が禰豆子に届く直前、善逸が壁を蹴って救援に駆けつけた。

「禰豆子ちゃんは俺が守る」

賽目の頸が複数、宙を舞う。

善逸が斬っていたらしい。

「我妻……お前……」

「普段からそんな感じならなあ……」

村田と糸野が残念そうに見ながら、ため息をついた。

「善逸！ 大丈夫か!？」

「だああああ！ こっちでも増えてるじゃねえか！ 面倒くせえ！」

炭治郎と伊之助の声だ。

増え続ける賽目たちを薙ぎ倒しながら姿を見せると、そのまま善逸たちと合流する。

「炭治郎！ 伊之助！」

「蝶屋敷の皆は!?」

「みんな無事だ！ 今は長倉と島本がついてる！」

「怪我が治りきつてないが、吉岡と野口も一緒だ！ 向こうは何とかなる！」

村田と糸野の言葉に、炭治郎と伊之助はホツとした。

だが、次の言葉には驚くことになる。

「それに、今回は神崎も戦ってるしな」

「え……?」

炭治郎は驚いた。

アオイは以前、鬼を見ると恐怖で戦えなくなると言っていたからだ。

戸惑う炭治郎に気づいた糸野は苦笑する。

「確かに神崎は鬼を怖がっていたけど……今回の相手は賽目だからなあ……」

「ただでさえ気に食わない顔見知りか、身勝手な理由で鬼になつてのを見れば怒りた

くもなるだろうさ」

そう言つて、村田もため息を吐いた。



糸束で相手を拘束しながら繭に閉じ込める。

その作業を繰り返していた累は、ついに増えた鬼をすべて繭にすることに成功していた。

出来上がった繭の数は二十九個。

もしも累が居なければ、それだけで詰んでいただろう。

「さて、こっちは放っておくとして、急いで蝶屋敷に——」

「やあやあ、凄いね。こんな手段で彼の長所を潰してしまうだなんて。驚いたなあ」

どこかで聞き覚えのある声が、累の耳に届く。

振り返れば、そこには見たことのある鬼がいた。

「上弦の……壺っ！」

不味い。

急に現れた鬼の姿を見た累の率直な感想である。

正直、この場に「上弦の壺」が来ているとは思わなかった。

鬼は群れを成さない。

この基本原則があるからだ。

だが、よく考えてみれば、上弦の鬼が複数来ているのは当然の話でもある。

なにしろ、鬼殺隊の拠点に攻め込むのだ。

半端な戦力であるはずがない。

累は自分の読みの甘さを今更ながらに理解した。

「あつちで戦ってる子たちは大したことないけど、君は鬼だし、面倒な相手みたいだからね。先に潰しに来たんだ」

「へえ……僕を潰せるつもりでいるんだ？」

「もちろん。——だって、黒死牟あの人はいないんでしょ？ だったら、俺と戦える相手はいないじゃない」

累の額に青筋が立つ。

【上弦の壱】にとつて、累の存在は眼中にないらしい。

怒りに任せて殴りたくなるが、辛うじて堪こらえることが出来た。

実際、累の糸と【上弦の壱】が扱う血鬼術の相性は悪い。

累の血鬼術が【上弦の壱】の血鬼術によって封殺されるのは、火を見るよりも明らかだ。

「まあ、様子見しながら情報を集めてたせいで、夜明けまであまり時間もないからね。さつさと君を片付けて、俺は屋敷から逃げ出した人のほうに行かせてもらうよ」

びしり、と累の表情が固まった。

「……なんだって?」

普段の累からは想像できないような、低い声。

それに気づいていないのか、鬼はさりりと言った。

「ん? ああ、俺は賽目君から『あの屋敷には女性が多い』って聞いているからね。ほら、女って腹の中で赤ん坊を育てられるぐらい栄養分を持つてるだろう? だから、俺は好んで食べてるんだ」

話を聞いた累の顔に青筋が立つ。

「上弦の壺」は気づかなかつたらしく、誇らしげに胸を張った。

「それに、俺はとある宗教の教祖をしていてね。毎日のように、救われない人々を救ってあげているのさ。あの屋敷にはそういつた救われない人たちが集まっているんだろう? だったら、俺が救ってあげなくちゃ! 大丈夫! 俺が食べてあげた人はみんな救われてる! だから、安心して!」

なんだ、その理屈は?

爪が手のひらに食い込むほどに、累は拳を強く握る。

それと同時に、なんととしても目の前にいる鬼を倒さねばらないと理解した。

「……お前はここに倒す」

「はははっ! 面白いことを言う子だなあ。やってごらんよ」

累と「上弦の壱」の戦いは、こうして幕を開けた。



一方、蝶屋敷周辺では相変わらず増えた賽目たちが跳ちようりようぼっこ梁りやう跋ぼく扞けんしていた。

まるで雨期の雑草か、台所に出てくる黒いアレのようである。

「があああ！ 本体はどこだあ!!」

「匂いじゃ差がわからない！ 善逸！ 音でわからないか!？」

「数が多すぎて雑音だらけなんだ！ これじゃあ差がわからないよ!!」

増え続ける賽目たち。

どこかに本体がいるはずだ。

それなのに、見つけれられない。

その事実が炭治郎たちを焦らせ、余計に体力を奪っていく。

「あああ！ もう！ 鬱陶しい!!」

共に戦っていた村田と糸野も、そろそろ体力の限界に来ていた。

「ハハハッ！ さっさと諦めて死んじまいな!!」

賽目たちの嘲笑が響く。

一人で笑うならばともかく、複数人で同じように笑い声をあげるため、不快感が増していた。

「ゲラゲラ笑ってんじやねえぞ、塵が」

——雷の呼吸 参ノ型 聚蚊成雷

知らない声が聞こえると同時に、賽目たちが細切れに斬り裂かれる。

人垣を構成していた鬼たちが崩れ落ち、急に開けた視界。

その先にいた人物に、炭治郎は見覚えがなかった。

だが、善逸は違つたらしい。

「か、かいがく 獺岳……？」

「……あ？ なんだよ。テメエも居やがったのか、カス」

獺岳と呼ばれた青年は、不快だと言わんばかりに顔をしかめた。

「げっ！ 獺岳だ」

「知ってるんですか？ 村田さん」

「話してる余裕なんざねえだろ」

炭治郎の問いを遮つて、獺岳は不機嫌さを隠さずに顎をしゃくる。

「おら！ さつさと町の外に出るぞ！ 避難してる連中と合流するんだ！」

「ま、待ってくれ！ その前にこの鬼の本体を探さないと！！」

慌てて炭治郎が反論するが、獺岳はその意見を鼻で笑った。

「お前、賽目と会つたことねえな？」

「えっ？」

炭治郎はきよんとする。

確かに、炭治郎は「上弦の陸」になった隊士と会ったことはない。

だが、それが何だと言うのだろうか？

「賽目って奴はな、安全に出世するためには手段を選ばない男なんだよ。安全に手柄が得られる状況なら、隊列乱そうが、命令に背いて突貫しようが気にもしねえ」

「ええ……」

炭治郎はその評価に顔を引きつらせた。

鬼になった人物は、その思考が歪むことがある。

それは炭治郎が任務の経験で得た、独自の考えだ。

体が崩れていく間際の鬼は、後悔や感謝をしながら消える。

そのことを匂いで察した結果、得た考えだった。

だが、「上弦の陸」になった人物は、鬼になる以前から頻繁にやらかしていたらしい。

その結果、蝶屋敷に運び込まれて来る怪我人が増えていたのだ。

挙げ句の果てに、今回の騒動である。

鬼を前にすると動けなくなると言っていたアオイが、問題児に対する怒りで恐怖を忘れるのも無理はなかった。

獺岳は気にせず話を続ける。

「そんな奴が、ひたすら増え続ける便利な身体を手に入れたんだ。わざわざ本体を危険な場所に置くわけねえよ。——つまり、最初はなから本体はここらには居ねえ」

本体を探していた炭治郎たちの行動は、完全な徒労。

そう言われ、炭治郎と伊之助は愕然とする。

炭治郎が村田と糸野を振り返ると、二人とも「彼奴あいつならやりかねん」と納得していた。伊之助が「なんじゃそりあぁあ!!」と怒りの雄叫びをあげたのも、無理のない話である。



累と「上弦の壱」——童磨の戦いは、いまだ続いていた。

その内容は、累の劣勢に終始している。

やはり、血鬼術の相性が悪いことが影響していた。

「ずいぶん粘ったけど、そろそろ終わりにしようかな。本当に時間もなくなってきたし……正直、飽きちゃった」

累の表情が悔しげに歪む。

それを見た童磨は、笑いながら扇を振るった。

——血鬼術 寒烈の白姫

二体の氷で出来た氷像が、すべてを凍てつかせる吐息を吹く。

累は素早く後退して躲すが、その行き先には童磨が回り込んで待つていた。思わず、累は足を止める。

だが、それこそが罠だった。

——血鬼術 冬ざれ氷柱

足を止めた累の身体に氷柱が降り注ぐ。

気づくのに遅れた累は、それをまともに受けてしまった。

氷柱に貫かれて身動きがとれなくなつた累に、童磨は容赦なく追撃を加える。

——血鬼術 散り蓮華

花卉の形をした細かい氷の刃が、累の身体を切り裂いていく。

攻撃が終わつたあとに見えてきたのは、ボロボロになつた累の姿だった。

「うん。まあ、こんなものかな？ 君は弱いくせに、よく頑張つたよ。君の頑張りは全部

無駄なのにね！ 偉い偉い！」

邪気のない笑顔で童磨は累を誉める。

ここに第三者が居れば、その発言に不快感を覚えただろう。

怒りからだろうか。

ぶるぶると累の身体が震える。

「ああ、可哀想に。きつと、君は『世の中には努力しても覆らないものがある』って知らなかったんだね？ でも、大丈夫だよ！ 君は鬼だし、今回のことでちゃんと学べたんだ。きつと次に活かせるよ！」

累の身体の震えが大きくなった。

だが、童磨は気にも止めていない。

「あ、でも。次に活かすのは無理かなあ？ ほら、俺と君は敵対してるから、その氷を溶かしてあげるわけにはいかないでしょ？ だけど、そろそろ太陽が昇って来ちゃう。自力での脱出も無理そうだし……やっぱり、ここでお別れだね」

そう言つて、申し訳なさそうな表情をした。

「じゃあ、俺はもう行くからね。さようなら」

童磨が立ち去ろうとする。

だが、その足は再び止めざるをえなかった。

何故なら、累の身体がズルリと剥け、なかから何かが抜け出たからだ。

「……トク。」

童磨の目が点になる。

思考が止まった僅かな隙。

その間に、累の拳が童磨の顔面にめり込んでいた。

「僕の家族に……手を出すなあつ!!」

防御する間もなく殴り飛ばされた童磨が、錐^{きり}揉み回転しながら地面に打ちつけられる。

一発殴つて少しだけスッキリしたのか、累は満足げな表情で童磨を見下ろした。

「ご高説、どうもありがとう。——ところで、僕に勝つたと思つてたの？ 可哀想に。哀れな妄想をして幸せだった？」

倒れ伏す童磨が顔をあげる。

すると、そこには青年と言えるほどに成長した累の姿があつた。

「ええ……なにそれ」

童磨が「そんなことが出来るなんて聞いてない」と頬を膨らませる。

もちろん、累は意に介さない。

「僕もね、出来るなら使わないでおきたい手段だったんだよ。……これ、ちよつと老けるし」

「老けるって……」

童磨は苦笑した。

累の身体は確かに成長している。

だが、それを『老ける』と表現するのは如何なものだろうか？ と考えたのだ。

「まあ、元に戻れない訳じゃないけど……この手札を僕に切らせたんだ。ここを抜けると思わないでよね」

「ううん……面倒なことになったかな？」

童磨は困ったように苦笑する。

確かに、青年にまで成長した累の身体能力は向上していた。

童磨にとつて、少し手を焼く程度ではあるが、日の出まで時間が無い今では正直、相手にしたくない。

だからこそ、童磨も手札を切ることにする。

——血鬼術 結晶ノ御子

童磨の持つ扇から、氷で出来た小さな氷像が生み出された。

嫌な予感があった累は、すぐさま氷像を壊しに動く。

だが、そうはさせまいと、童磨の血鬼術が道を阻んだ。

「ううん。一体じゃすぐにやられちゃいそうだから、三体くらい作っておこうかな？」

続けて二体を追加した童磨は、累に笑いかけた。

「この子たちはね、俺と同じくらい術を使えるんだ。君の相手はこの子たちにしても
らうよ」

「ふいけ——」

言い終わる前に、三体の氷像が累に襲いかかる。

「邪魔をするなっ！」と拳を振るうが、氷像は連携して累の行く手を阻む。

そうしているうちに、童磨は累に向かつて手を振りながら、この場を立ち去っていた。



獺岳という思わぬ増援によつて蝶屋敷を脱した炭治郎たちは、現在、避難していた人々と合流することが出来ていた。

「そろそろ夜明けだ！ 各員、粘れ！」

「はい！」

「切断してはいけませんよ！ 斬れば分裂して増える一方です！」

「はい!!!」

蝶屋敷の救援に駆けつけていたのは、なにも獺岳だけではない。

屋敷の主であるカナエと、同行していたカナヲはもちろん、近場にいた隊士も駆けつけている。

さらには、水屋敷で夫婦水入らずでいた義勇と しのぶ も救援に来ていた。

この場の戦力として、最も貢献しているのは しのぶ である。

彼女は鬼の頸を斬れないが、毒を以て鬼殺を行う剣士だ。

斬らずとも鬼を殺せる特製の毒は、斬れば増える【上弦の陸】——賽目との相性が良

かった。

それでも、彼女が救援に駆けつけるまでに増えた数が多すぎる。

そのため、用意していた毒の備蓄も底を尽きかけていた。

そこに最悪の増援が現れる。

累を足止めしてやって来た【上弦の壱】——童磨だ。

「あははっ！ 賽目君の言った通り、女の子がいっぱいだね！」

そんなことを口走りながら、童磨が突っ込んでくる。

「じ、【上弦の壱】だと!？」

「嘘だろオイ！ なんてこの糞忙しい時に!？」

「——つうか、賽目え!! テメエ、余計なことばかりしてんじやねえよ!!」

童磨の瞳に【上弦】と【壱】の文字が刻まれているのを見た隊士たちが狼狽えるが、すぐに迎撃するべく隊列を整えた。

だが、それを嘲笑うかのようには、童磨は一足飛びに隊列を飛び越え、避難している人々へと駆け寄っていく。

避難民の近くには、日輪刀を持ったアオイの姿があった。

「おっと、可愛い子発見」

「ひっ!？」

顔見知り以外の鬼の登場に、怒りで恐怖を抑えつけていたアオイの体が震えだす。

それを見た童磨は優しく微笑んだ。

「ああ、そうかあ。鬼が怖いんだね？ でも、大丈夫！ 俺が救ってあげるよ。——もう、怖い思いをする必要はないから。安心してね」

童磨の手がアオイに迫る。

アオイは動けない。

恐怖で足が竦み、腰が引けて動けなくなっている。

護衛をしていた隊士たちが駆けつけようと必死に足を動かすが、如何せん、距離があまりすぎた。

炭治郎と善逸に伊之助も、最前線で戦っているために間に合わない。

カナエとカナヲ、義勇としのぶも似たようなものだ。

アオイは死を覚悟した。

どん、と軽い衝撃がアオイの体を襲う。

「……えっ？」

童磨の手は、アオイに届いていない。

誰かが、彼女を突き飛ばしたからだ。

その代わりに童磨の手が貫いたのは、別の人物だった。

「し、志津さん!!」

志津の体を、童磨の腕が貫いている。

その光景を見て、アオイは真っ青になった。

「あれ? 珠世あのみ以外にも逃れ者がいたんだ。知らなかったなあ。——ちよつと邪魔だから、離してくれる?」

珍しいものを見るような目をした童磨が、扇を振り上げる。

志津の体を切り裂く気だ。

誰もが悲鳴にならない声をあげた、その次の瞬間——、

「はえ?」

童磨の体から、大量の木の枝が突き出てきた。

志津の血鬼術だ。

「このまま目の出まで、一緒にいましょうか」

怒れる母の瞳が童磨を射抜く。

ぞわりとした未知の感覚が、童磨を襲った。

「ははっ! 冗談——?」

ここで漸く、童磨が自分の体に起きた異変に気づく。

血鬼術が使えないのだ。

（不味い……!!）

童磨の顔色が変わる。

ちらりと東の空へ視線を向けると、今にも太陽が昇りそうになっていた。

「うわあ……時間切れかあ」

童磨は扇を使って自分の頸を斬ろうとしたが、生えた木の枝が邪魔で動かせない。

仕方なく、童磨は空に向かって声をかけた。

「ねえねえ、琵琶の君。ちよつと回収してもらえないかなあ？」

琵琶の音が鳴る。

それと共に、童磨の首を挟むような形で、開いた状態の襖が現れた。

再び琵琶の音が鳴る。

その途端に開いていた襖が勢いよく閉まり、童磨の首を切りつつ回収していった。

だが、童磨の体は残ったままだ。

童磨の腕は今も、志津の体を貫いている。

その場にいた全員が顔を青くした。

志津は鬼だ。

日光に当たれば死んでしまう。

「志津さん!!」

慌て皆が駆け寄る。

日光に当たらないようにと、各々の上着や近場にあった大きめの布を手を持っていった。

だが、彼らが到着するその前に――、

「……あれ？」

日光が志津の身体を照らしていた。

◆◆

「よくやった！ 童磨！ 賽目!!」

◆◆

大正こそこそ噂話（壺）

鉄穴森 鋼蔵

伊之助と無一郎の刀を担当している刀鍛冶。

詳しくは原作を読もう。

原作でも伊之助に新品の刀をボロボロにされていたが、本作では「だったらそんな感じの刀を作ってやろうじゃねえか!!」と奮起した。

結果、幕末に活躍した刀工が作った刀の資料を発見する。

そこから自分なりに工夫して出来上がったのが、今回の刀。

幕末の刀工が作った殺人奇剣の最終型が元ネタになるが、本作のはむしろ、実際にある“とある包丁”を刀にした感じ。

大正こそこそ噂話（貳）

縁壺零式

三百年程前に継国縁壺を模して作られた戦闘用の絡線人形。

戦国時代にあるまじき技術の塊。

本体の背骨になっていたのか、縁壺の刀が入っていた。

そのおかげか、本作ではお盆を利用して大好きな兄上に会いにきた縁壺が憑依する。

久しぶりに兄上とチャンバラごっこで遊んで満足して帰っていった。

なお、そのおかげで段階的なミックスアップが連続して起こり、兄上の実力が大きく

跳ね上がった模様。

大正こそこそ噂話（参）

【上弦の陸】

賽目さいのめ

原作で累に切り刻まれた隊士。

通称『サイコロステーキ先輩』

詳しくは原作で、と言いたい所だが、原作や鬼殺隊見聞録にすらまともな情報はない。見聞録の紹介ですら【累に刻まれた剣士】という扱いなので、賽目という名前はねつ造である。

しかし、知名度はある不思議な先輩。

本作では【上弦の陸】に昇格した。

ちなみに、彼を採用したのは【上弦の壱】である。

安全と出世を優先する性格。

無惨との相性が良かったのか、あっさりと血に馴染み、短時間で上弦の鬼と戦えるまでに成長した。

切断されると増えるという面倒な性質をもち、そこに上限はない。

余力がある限り、とにかく増える。

増えた分裂体の強さは本人の半分程度の性能。

強くはないが、そのウザさで【旧・上弦の陸】を押し潰した。

ちなみに今回の騒動では、本体は無限城に引きこもって出てきていない。

そのため、絶対に倒せないが、分裂体は日光によって消滅した。

余談ではあるが、本作では神崎アオイの同期という設定で、彼女が藤襲山ふじかさねやまで恐怖体験をすることになった原因だったりする。

「藤襲山ふじかさねやまで起きたこと。

呼吸法を覚えて調子に乗り、単身で突撃 ↓ 複数の鬼に遭遇 ↓ 勝てないと判断して逃走 ↓ 道中の鬼を引き連れてトレイン ↓ アオイを含めた隊士候補生への擦りつけ ↓ 逃走成功

なお、アオイはその事実には気づいていない。



大正こそこそオマケ話

竹雄

「ぐああああ!!」

→ 床を転げ回っている。

茂

「ぐああああ!!」

→ 床を転げ回っている。

六太

「ぐああああ?」

→ 兄二人の醜態を遊びだと思ってる。

炭治郎

「ど、どうしたんだ？ 何かあったのか？」

竹雄

「兄ちゃん！ どうしよう！！」

炭治郎

「何がだ？」

茂

「善逸さんに助けられた！」

竹雄

「なんか……なんか……！！」

竹雄 & 茂

「すっげえカツコよかった！！ けど、なんか悔しい！！」

炭治郎

「ああ……」

→ 事情を察して苦笑い。

うねった波は迫り来る（柱稽古編）

刀鍛冶の里と蝶屋敷が同時に襲撃されるという事件は、鬼殺隊に大きな衝撃を与えていた。

おまけに鬼殺隊の隊士から裏切り者が出ていたことも判明し、さらには【上弦の陸】になつていたという事実も加わって、隊全体に少なくない動揺をもたらしている。

そのうえで、志津が太陽を克服したことが鬼殺隊だけでなく、鬼側にまで知れ渡つたのだ。

これらのことが一夜にして起こつた影響で、鬼殺隊の上層部だけでなく、話を聞いた一般隊士までもが上を下への大騒ぎとなつていた。

そんな激動の一夜から数日後。

産屋敷邸では緊急の柱合会議が行われていた。

会議場にはすでに柱が揃つていて、あとは耀哉が来るのを待つのみである。

それまでの間、会議場に集まつた柱たちは意見交換という名の雑談を行つていた。

「刀鍛冶の里と蝶屋敷が襲撃されたと聞いた時は耳を疑つたが……最小限の被害で抑え

ることが出来たのは、せめてもの救いであろうな」

行冥が数珠と手のひらを擦り合わせて念仏を唱えようと、腕を組んだ杏寿郎が頻りに頷いて同意する。

「刀鍛冶の里に黒死牟殿が居てくれたのが幸いだつたな！ そのうえ、上弦の鬼を二体も倒せている！ これは大きなことだ！」

すると、不機嫌さを隠しもしない小芭内が口をはさんだ。

「それはそうと、裏切り者の件はどうなつたんだ？ 裏切つた挙げ句に少なからず世話になつたはずの蝶屋敷に攻め込むような恩知らずが鬼殺隊にいたこと自体、俺は信じられないんだが？」

小芭内と同じように感じていた者たちは多数いたようで、同調するように頷いていく。

「俺が軽く調べてみたが、とある港町に行つてからの足取りが途切れてた。どうも、海に近い町を中心に地味に広がっている宗教団体に取り込まれたらしいな。信者の数もそれなりに居たが、みんな変な壺を持つてたり、魚の形をした派手な帽子を被つてたり、魚を讃える変な歌を歌つてたり……いやあ、頭がおかしくなるかと思つたぜ」

辟易した様子で天元が報告すると、宗教団体と聞いてピンと来たカナエは「ああ、それで「上弦の壺」が変な帽子を被つていたんですね」と納得した。

「裏切り者を叩きのめすのは決定事項として……不死川さんのお母さんは大丈夫なんですか？ 太陽を克服したって聞いてますけど……」

少し悪くなつてしまった空気を変えるためか、無一郎が別の話題を取り上げる。

すると、実弥は深々としたため息を吐いた。

「ああ。今は蝶屋敷じゃなくて風屋敷（庵）にいるから大丈夫だ。最初は動揺してたらしいが……今じゃ『洗濯物を干す手伝いが出るようになった！』って喜んで外を出歩いてらァ」

「ああ、前々から洗濯物を干すアオイちゃんたちを見て羨ましそうにしてみましたからね」「おば様楽しいだろうなあ」と、納得するように蜜璃は頷いている。

その隣では、しのぶが「あまり人目につくようなことはしてほしくないんですけどね」と苦笑していた。

「皆様、大変お待たせ致しました」

そう言つて部屋に入ってきたのは あまね だ。

耀哉の姿はなく、彼女の両隣には輝利哉と かなた の姿がある。

「本日の柱合会議は夫の耀哉に代わり、私、産屋敷あまね が代理を務めさせていただきます」

柱たちの表情が曇った。

もしや、病状が悪化したのか？ と、耀哉の容態を案じたのだ。

「あまね様、もしや……」

行冥が代表して耀哉の容態を問う。

だが、あまね から返ってきたのは、危惧していたような内容とは少し違っていた。

「先日の一件での心労が祟ったようで、体調を崩してしまつたのです。回復すれば、再び皆様の前に出ることが出来ると思います」

あまね の言葉に、柱たちは一斉にホツと息をつく。

だが、それと同時に耀哉に心労をかけさせた者に対する怒りが向けられていた。

一番わかりやすいのは実弥である。

「賽目とかいう野郎、絶対に許さねエ……！」と、内心の思いが言葉として零れ出ていた。

口にしないだけで、他の柱たちも似たようなものである。

「本日、緊急の柱合会議を開かせていただいたのは、鬼の動きが変化したからです。おそらくは、志津様が太陽を克服したことに起因すると思われます」

「ここ数日のことですが、鬼の出現がピタリと止まりました。そして、一部の隊士からは『突然現れた襖ふすまに、鬼が飲み込まれた』という報告があがっています」

あまね と輝利哉の話を静かに聞いていた鎗鬼が唸った。

「戦力をかき集めている、ということでしょうか？」

「おそらくは」

次に鬼殺隊と鬼が戦う時は総力戦になる。

この場にいた者たち全員の脳裏に、自然とそのような考えが浮かんだ。

「鬼舞辻無惨の狙いが志津様であることは明らかです。なので、志津様には身を隠していただくようお願い致しました。秘匿性を上げるために、居場所を知る人員と接触回数は最低限で行う予定です。不死川様、黒死牟様もご了承ください」

「わかりました」

「承知しました……」

実弥と黒死牟は当然とばかりに頷いた。

特に実弥は母親のことである。

二度と無惨に触れさせてなるものかと、人知れず拳を固く握りしめていた。

◆◆

柱稽古。

岩柱である悲鳴嶼行冥が提唱した、合同強化訓練の通称である。

今までであれば、柱は任務の忙しさから継子以外の隊士に稽古をつけることが難しかった。

広大な警備担当地区の警戒に情報収集、自身の訓練などなど、やるが多かったた

めである。

だが、鬼の出没がピタリと止んだ今、来るべき決戦に備えて組織の地力を底上げする余裕が出来ていた。

一部の猪突猛進な者たちからは熱烈な歓迎を、一部の者たちからは汚い高音の悲鳴があがったのは御愛嬌である。

しかし、日頃から似たような稽古をしていた極一部の者は苦もなく突破し、柱たちの下を転々としていた。

言わずもがな、炭治郎たちである。

ほかに階級の高い隊士たちが食らいついていたが、次々と課題を突破していく炭治郎たちについていけず、一人、また一人と遅れをとっていく。

結局、最後の稽古場である月柱の特別訓練にまでついてこれたのは、片手の指で数えられる程度の人数であった。



「赫刀と……透き通る世界？」

炭治郎と善逸、伊之助とカナヲの四人は、初めて聞く単語に首をかしげた。

赫刀のほうは見たことがある。

以前、黒死牟と杏寿郎が使っていた場面を見たことがあるからだ。

しかし、透き通る世界とはなんだろうか？

そんな疑問が顔に出ていたのか、黒死牟は簡単な説明をした。

一言で言えば、人間の体が透けて見えるのだと言う。

説明を聞いた四人はまたまた首をかしげた。

やはり、他人の視点では見えなかったため理解しづらいのだろう。

だが、その領域に入ることが出来れば相手の動きを先読みすることが可能になるため、戦いの場で優位になるのは間違いない。

会得できるか否かは個人の才覚次第だが、訓練してみる価値はある。

強くなれる、と聞いて伊之助はやる気を出した。

単純であるが、そこが彼の良いところだろう。

逆に善逸はやる気が見えない。

だが、今回の件に関しては、黒死牟には善逸にやる気を出させる秘策があった。

「そんな奇妙な世界とか見たくもねえよ。筋肉とか骨とか血管とか、誰が好き好んで見るかってんだ」

「そうか……それは残念だ……」

黒死牟はあからさまに落胆したようなため息を吐くと、善逸に聞こえる程度の小声でぼそりと呟く。

「うまく使いこなせれば……服だけ透かして見ることも……出来たのだから……」
「!?!」

途端に善逸がすごい顔をして振り向いた。

「今の話……本当ですか?」

「ふっ……」

黒死牟は、遠い昔に弟が通りすがりの女中を透かして見てしまい、赤面していたことを思い出して笑う。

すると、その笑みを意味深なものとして受け取った善逸は、食い気味に迫った。

「今の話が本当だとすると……もしかして! 黒死牟あんな毎日のように皆を視姦してたつてこと!?! な、なんて羨ま……いや! なんて奴だ! 嫁が七人もいて毎日のように乳繰り合ってるってだけでも許せねえってのにつ!! ——この変態があああ!!」

突然騒ぎ出した善逸に炭治郎と伊之助、カナヲは首をかしげるが、黒死牟は構わずに問いかけた。

「信じるも……信じないも……お前次第だ……訓練……してみる気は……あるか……」

「よろしくお願いいたします!!」

素早い変わり身と綺麗な土下座に、話を聞いていた者たちは呆れたような視線を向ける。

黒死牟にも妙な視線が集まっているが、努めて気にしないことにした。

◆◆

「なあ、茂」

「なに？ 竹雄兄ちゃん」

「この間のカツコいい善逸さんは、幻だったんだな」

「そうだね……」

「でも……」

「でも？」

「なんか安心した」

「わかる」

◆◆

炭治郎たちが新たな領域に入ろうと悪戦苦闘している傍らで、それ以上に過酷な訓練をしている者がいた。

善逸の兄弟子にあたる雷の呼吸を使う剣士、獺岳である。

弟弟子である善逸曰く、雷の呼吸の壺ノ型だけが使えない剣士らしい。

彼は黒死牟との一对一の打ち込み稽古をしていた。

ただそれだけなら炭治郎たちもやったことのある形式であるが、今回の訓練は殺気や

威圧感を獺岳に叩きつけながらのものである。

黒死牟から放たれる気配は凄まじい。

対峙しているわけでもない炭治郎たちが、息苦しく感じるほどの圧力だ。

実際に向き合っている獺岳は、どれほどの圧力を感じているのだろうか？

チラリと様子を窺うと、獺岳は目を見開いたままで硬直していた。

その全身からは滝のような汗が流れ、呼吸も荒れたものになっている。

構えた木刀を何度も握り直しているが、体の震えが止まらず先端が定まっていない。

しかも、この訓練で使える雷の呼吸は、壺ノ型に限定させられていた。

明らかに異質な訓練である。

だが、黒死牟はこれを「必要な荒療治」だと言っていた。

さすがに個人の内面や過去に触れるために明言はされていなかったが、おそらく、獺岳という隊士は鬼に対する恐怖心を持っていて、それを克服するための訓練なのだろう。

下手をすれば獺岳の心が折れかねない訓練だ。

だが、それは本人も承知している。

獺岳が自ら望んだ以上、誰にも止められなかった。

「どうした……かかってこないのか……」

「く……く……そおー」

——雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃

落雷のような音が鳴るほどの踏み込みと共に素早い動きで接敵し、獺岳は木刀を振り抜こうとする。

だが、その技のキレは善逸の繰り出す霹靂一閃を見慣れている炭治郎たちからすれば、明らかに見劣りするものだった。

もちろん、そんなものが黒死牟に通用するはずもない。

「踏み込みが甘い……」

霹靂一閃の進路上に、するりと割り込んできた黒死牟の手。

そこに顔から突っ込み、勢いのまま投げ飛ばされる。

獺岳は空中で体勢を整えようとするが、少々間に合わず、不完全な状態で床に落下した。

なんとか受け身だけはとれていたようで、直ぐ様立ち上がると木刀を構える。

ちなみに、投げられたあとに寝転んだままで居たら、黒死牟の持つ木刀が獺岳の頭を狙って振り下ろされていた。

日頃、黒死牟から手解きを受けている者から見ても、かなり厳しい訓練である。

獺岳が突っ込み、黒死牟が投げ飛ばす。

それがひたすら繰り返された。

どれくらい時間が経ったのだろうか？

雷鳴のように轟いていた踏み込みの音も聞こえなくなり、今ではただの足音に成り下がっている。

風を斬るような音を出していた振りの速さも、幼い子供が振り回したような弱々しいものになっていた。

だが、獺岳は立ち上がり続けている。

何度も投げ飛ばされ、床に体を打ちつけようとも、獺岳は立ち上がり続けていた。

何時の間にかそうなったのだろうか？

獺岳の荒い呼吸の音だけが訓練場に響くようになっていた。

訓練場にいた誰もが、二人の訓練を見守っていたのだ。

黒死牟は、倒れている獺岳を見下ろしながら問いかける。

「どうした……終わるか……」

「ま、だ……まだ……っ！」

よろけながらも立ち上がる獺岳は、荒い息づかいをそのままに木刀を構えた。

——雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃

それは最早、技ですらない。

前のめりに倒れる体にそって腕を振るだけの、ただの悪足掻きだった。

黒死牟がさらりと対応すると、獺岳は再び訓練場の床へと沈む。

「もう終わりか……獺岳……」

容赦なく、黒死牟は床に倒れている獺岳に声をかけた。

獺岳もそれに応えようと、体を無理矢理にでも動かそうとする。

だが、体が震えてなかなか立てない。

それだけ体が疲弊しているのだ。

木刀を杖の代わりにして立ち上がろうとしたが、その途中で力尽き、獺岳は意識を手離した。

「ふむ……やはり……行冥殿の言う通り……気骨はあるか……」

倒れた獺岳を見下ろしながら、黒死牟が独りごちる。

その後、黒死牟は獺岳を米俵のように担ぎ上げると、訓練場を後にした。

それまでの訓練風景を見ていた者たちはハッと我に帰ると、中断していた訓練を再開する。

「あんなにボロボロになってまで訓練するなんて……」

「なかなか骨のある奴だったな！ 俺も負けていらねえぜ！」

炭治郎と伊之助は素直に感心すると、訓練に打ち込み始めた。

それに釣られるように善逸も再開するが、どうしても獺岳のことが気になるのだろう。

どことなく、気が入っていない様子である。

こうして、月柱による特殊訓練は初日を終えたのだった。



獺岳は夢を見ていた。

子供の頃の夢だった。

その頃の獺岳はまだ、あの人と一緒に住んでいた。

盲目で泣き虫だけど、とても優しい先生。

獺岳は、先生——悲鳴嶼行冥のことを親のように慕っていた。

寺には自分以外にも同じような境遇の子供たちが一緒に住んでいて、時々喧嘩をする

こともあるけれど、ひとつの「家族」としてまとまっていたように思う。

それを壊してしまったのは、獺岳だ。

ある日、獺岳は寺のお金を黙って使ってしまった。

何に使ったのかは、今ではもう覚えていない。

きつと、くだらないことに使ったのだろう。

それを家族に咎められ、罰として一日、寺の外に追い出されることになった。

悪いことをしたら罰を受けるのは当たり前。

それくらいのは、当時の獺岳にも理解できていたはずだ。

だが、その日だけは何故か受け入れられなかったことだけは覚えている。

寺から追い出された獺岳は、悪態を吐きながら夜道を歩いていた。

別に寺から離れる必要はなかったのだが、むしやくしゃやしていて大人しくしていられなかったのだ。

そんな時に出会ってしまったのが、人間の血肉を食らっていた最中の鬼である。

『こんな夜中にうろつくなんざ、不用心な餓鬼がいたもんだなあ？』

口元についた血を拭いながら、鬼が嗤う。

その足元には、こちらを向いて虚空を見つめる人だったものが転がっていた。

獺岳は息を飲んだ。

鬼の存在は先生から聞かされていた。

だが、現実を目にすることなどないだろう。

そう高を括っていたのだ。

この後のことは、すっかりとは覚えていない。

正気を取り戻したのは、すべてが終わったあとのことだった。

遠くに見える、住み慣れた寺。

そこから聞こえる、獣のような叫び声。

思い出せるのは、自分が言ったとは思えない言葉の数々と、実際に行動に移したという記憶。

それらを思い出し、足が震え、吐きそうになり――、

『――っ!!』

再び獣のような叫び声を聞いて怖くなり、転がるように逃げ出した。

それからの生活は激変した。

食べ物盗み、泥水をすすり、なんとか命を繋ぐという惨めな様。

家族同然に思っていた者たちを死に追いやったことを思えば、当然の報いだとも思える状況だった。

あの夜以降、安眠すらまともにしていない。

夜な夜な悪夢を見るからだ。

自分のせいで死んだ家族が次々に現れては、獺岳のことを責めてくる。

そんな夢を見るたびに、謝りながら飛び起きていた。

ある程度の時間が経つと、ひたすら『俺のせいじゃない』と繰り返しながら夜明けを

待つようになっていた。

精神的に参ってしまい、自己弁護をしなければ耐えられなかったのだ。

そんな日々を送っていた、ある日のことである。

獺岳は、鬼を狩る者——鬼殺隊の噂を耳にした。

その話を聞いた獺岳の頭に浮かんだのは『鬼を殺せば、償いになるだろうか？』という考えである。

たくさん鬼を斬り、どこの誰とも知れぬ者たちを助けていけば、自分を責める家族たちの怨念が許してくれる日が来るだろうか？

心のどこかで『自分は悪くない』と叫んでいる自分もいたが、そうではないことは獺岳自身がよく知っている。

そう言って自分を誤魔化し、正当化し続けるのにも限界が来ていたのだ。

獺岳が弟子入りしたのは、桑島慈悟郎というそだて育手の老人だった。

そこで日々、剣術と呼吸法を学ぶ。

厳しい修行だったが、手抜きは一切しなかった。

強くならなければ、死んだ者たちの幻影が獺岳を責めるように見てくるからだ。

だが、どれだけ強くなろうと、幻影が向ける目は冷たく、責めるものだった。そんなある日、急に弟子が出来た。

善逸という、ひたすら泣きわめくだけの、ただただ喧やかましい奴である。

慈悟郎曰く、女に騙されて借金を抱えていたところを拾ってきたらしい。

なんでそんな奴を拾ってきたのか。

そう思ったが、少なくとも家族を生け贄にした自分よりは上等な人間である。

だから、口にはせず言葉を飲み込んだ。

善逸はとにかく修行を嫌がった。

こつそりと逃げ出しては連れ戻される。

そんな光景が、毎日のように繰り返られていた。

そのたびに獺岳が稽古をつけてもらう時間が削れるのだから、堪ったものではない。

獺岳は、善逸を嫌うようになっていた。

さらに悪いことは続く。

獺岳が壱ノ型が出来ないのに対して、善逸は壱ノ型だけが出来るようになったのだ。

それを知った途端、幻影が向ける視線が冷たくなった気がした。

何故、あんな情けない奴に出来ることが、お前には出来ないのか。

全力で取り組んでいないから、いつまで経っても習得出来ないのではないかな。そんな幻聴すら聞こえてくるようだった。

獺岳が壱ノ型が使えない理由はわかってる。

はつきり言えば、獺岳は鬼が怖いのだ。

あの夜に出会ってしまった鬼から与えられた恐怖が、今もなお獺岳の心を縛っている。

それでも、獺岳は鬼を斬らねばならない。

鬼を斬り続けていなければ、死んだ者たちの無言の責め苦に耐えられなくなる。

鬼を斬って、斬って、斬り殺し続けて、いつか許してもらえる日を、獺岳は待っていた。

許される日など来ないことがわかっていてなお、待ち続けるしかなかったのだ。



「糞が……」

寝台の上で目が覚めた獺岳は、開口一番に悪態をついた。

思い出したくもない過去を、夢という形で見てしまったからである。

最近は見なくなっていた過去の夢。

それを見てしまったのは、きつと、思わぬ形で行冥に会ってしまったことと、今日の

無茶苦茶な訓練のせいなのは間違いない。

「目が覚めたか……」

声をかけられ、顔だけを声の主に向けてみると、そこには黒死牟が立っていた。

どうやら、獺岳が目覚めるのを待っていたらしい。

「ずいぶんと……魔まされていたな……夢見が……悪かったのか……」

「ええ、まあ……それなりに……」

顔をしかめて返事を返すと、黒死牟から手拭いを渡される。

気がつくのと、寝汗が凄いことになっていた。

着ていたのが隊服ではなく、病人用の寝間着になっていたのは、誰かが着替えさせてくれたのだろうか。

その寝間着が汗をたっぷりと含んで肌に張りつくようになってしまっているので、着替えが欲しいところである。

「着替えなら……そこだ……」

寝台の傍らにある、背の低い引き出し付きの机を黒死牟は指差した。

そこには、綺麗に折り畳まれた寝間着が置いてある。

風邪を引かぬようにと汗を拭きながら着替えていると、黙っていた黒死牟が口を開いた。

「鬼に……恐怖を覚えることは……恥ではない……何故……それを知りつつ……刃を振るう……」

黒死牟からの突然の問いに、獺岳は沈黙を維持する。

「剣術の……才能があろうとも……鬼に恐怖し……後方支援に……まわる者も多い……故に……誰も咎めは……しないだろう……」

そう問われて、獺岳は押し黙った。

突然、そんなことを聞かれるとは思わなかったこともある。

それ以上に、獺岳が鬼殺を続ける理由を話したくはなかった。

話すとすれば、獺岳が過去にやらかしたことを告げる必要がある。

あれは後ろ暗い過去であり、己の恥部だ。

出来れば話したくはないし、知られたくもない。

しばらく黙っていると、再び黒死牟が口を開いた。

「これは……人伝ひとついでに聞いた……話だが……自分が助かるために……同じ寺で暮らしていた者たちを……鬼に食わせると言った……そんな子供が……いたらしい……」

獺岳の体がびくりと跳ねる。

黒死牟が切り出した話の内容は、獺岳にとって身に覚えがあるものだった。

「へえ……そうですか。とんでもない屑くずがいたもんですね」

我ながら、白々しい。

獺岳は自嘲しながら吐き捨てる。

そんな獺岳の様子を観察しながら、黒死牟は表情を変えずに話を続けた。

「その子供は今……鬼殺隊に……入っているらしいが……如何なる気持ちで……鬼を斬っているのか……お前には……わかるか……」

言われて獺岳は察する。

黒死牟はすべてを知っていて、それでも敢えて暈ぼかした状態で問いかけてきているのだ。

その意図は、わからない。

獺岳は肩から力を抜いた。

隠すのも、取り繕うのも無駄だとわかったからだ。

ややあつて、獺岳は重たい口を開く。

「罪滅ぼし、が、したい、じゃないですかね？」

「ほう……」

つつかえながらも、なんとか言葉にした獺岳を、黒死牟は目を細めて見つめる。

「家族同然に育ててもらつておきながら、鬼に食わせるなんて真似をしたんですよ？」

普通、許してもらえないわけがないでしょう。……それがわかつていても、そうしていな

けりや自分がやったことに押し潰されちまう。……たぶん、そんな気持ちです」
「そうか……」

黒死牟はそう言うのと沈黙した。

獺岳が言った言葉に嘘はない。

実際、獺岳の今までの時間は、そのために費やしてきた。

これからもそうだ。

獺岳には鬼を斬り続ける以外に道はない。

そう思っている。

「これからも……鬼殺を続けるのなら……少し……態度を改めよ……お前は少々……度が過ぎる……」

黒死牟にそう言われ、獺岳は言葉に詰まった。

指摘された点について、身に覚えがありすぎるからだ。

獺岳の鬼殺隊内部での評判がよろしくないのは、先日の戦闘時に先輩隊士である村田の反応から見ても明らかである。

これもまた、獺岳が積み上げてきたものの結果だった。

「私の……言いたいことは……わかったか……」

「……ッス」

獺岳の返事に満足したのか、黒死牟は薄く笑みを浮かべる。

『えっ?! 素直で綺麗な獺岳とか気持ち悪いんですけど!』

唐突に、獺岳の脳裏に弟弟子の声と姿が浮かぶ。

(ウツセエ、善逸、黙ってる)

それにイラツとしながら、獺岳は頭の中からそれを追い出した。

「獺岳……」

「——っ! はい」

黒死牟の呼びかけに、獺岳は反射的に返事を返す。

もしかして、先程の脳内会話が口から漏れていたかのだろうか?

もしも、そうなら恥ずかしい。

そんな獺岳の様子に構わずに、黒死牟は続けた。

「明日からは……私を含めた柱を相手に……稽古をしてもらおう……」

柱との稽古と聞いて、獺岳は風柱との稽古を想起する。

成す術もなく、という訳ではないが、あまり手が出せずにタコ殴りにされたのは記憶に新しい。

「柱と戦い……その実力が認められれば……推薦を受けることが……あるかもしれない

……」

「推薦？」

柱と戦えと言われて気を引き締めるが、推薦と聞いて首をかしげる。

戸惑う獺岳を余所に、黒死牟の話は続く。

「柱からの推薦が……複数……得られたならば……新たな柱として……認められることも……あるだろう……」

「は？」

自分が柱になる。

そう聞かされた獺岳の心は、驚くほどに凜いでいた。

その事実には、獺岳自身ですら戸惑いを覚えている。

柱になることは、獺岳の目標でもあった。

そこまで登り詰めることが出来れば、贖罪の証になるのではないかと、と、そう思っていたのだ。

だが、いざ柱になれる機会を与えられた獺岳の心は凜いでいる。

これは、柱になる手段が問題なのだろうか？

いや、違う。

誰かに認めてもらいたいという欲求は間違いないとあった。

だが、認めてもらうだけでは駄目なのだと言っている。

（柱になったからって、どうなるってんだ？ あの人の、どんな顔をして会って……）
獺岳は、岩屋敷でのことを思い出す。

基本的に、柱と一般隊士が出会うことは少ない。

そのため、岩柱が悲鳴嶼行冥であると知ったのは、実はこの時が初めてだったのだ。

それを知った時、獺岳は頭を殴られたような衝撃を受けた。

鬼が寺を襲い、子供たちが犠牲になり、行冥は鬼殺隊に入ったのだと想像するのは簡単である。

つまり、今の行冥は獺岳の罪の証でもあったのだ。

あの時の獺岳は、とにかく行冥に会わないように努めていた。

とにかく避けて、避けて、避けまくって課題を達成し、挨拶もそこそこに山を下りてきたのである。

行冥が涙を流していたようだが、あの人はいつもあんな感じだからと無視していたのだ。

うつむいて苦い顔をする獺岳を余所に、黒死牟は部屋を出ていこうとしていた。

入り口の扉を開けて部屋を出る直前に、ふと、何かを思い出したかのように足を止め

る。

「ひとつ……言い忘れていた……」

そう言うと、黒死牟は肩越しに振り向いた。

「自分が助かるために……同じ寺で暮らしていた……者たちを……食わせると言った……子供の話だが……」

黒死牟はふと笑う。

「寺にいた者たちは……誰も死んでいないそうだ……私は……行冥殿から……そう聞かされている……」

「……は？」

獺岳はぼかんと口を開けて固まった。

その顔を見た黒死牟は満足そうに頷くと、今度こそ部屋を出る。

あとに残されたのは、思いもよらないことを聞かされた獺岳だけだった。



「なんで……寺に居たみんなは無事だったんですか？」

「南無……」。以前、黒死牟殿が滞在した際に、白打の基礎を学んだのだ。己が他者より強い故に、力の使い方ちからを知るべきだ、と仰られてな。そのおかげで子供たちを守れたのだ。

……人の縁とは、やはり尊いものだな」

「……俺の九年間はいつたい……」

「……獺岳。そなたの九年間がなければ、私を含めた者たちが、お前を許すことはなかっただろう。そのことは、覚えておきなさい」

「……!」

「獺岳」

「……はい……」

「……辛かったな」

「……ごめんなさい……先生……ごめんなさい……ごめんなさい……!」

◆◆

その日、産屋敷邸の一室には床に臥せった耀哉と、甲斐甲斐しく介護する あまね。

そして、かくし隠の後藤の姿があった。

「やあ、後藤くん。来てくれたのか」

「……大丈夫か? 体調、悪いんじゃないのか?」

布団に横になった耀哉は、全身のいたる所に包帯を巻き、皮膚が爛れていない場所のほうが少ないという有り様だ。

重病人と言つて差し支えない、悲惨な姿である。

「はは。見苦しい姿ですまないね。もう……時間がなさそうなんだ」

床に臥せった耀哉の姿に、後藤は拳を強く握りしめる。

耀哉は、まだ二十三歳。

人生はまだまだこれからだと言える年齢だ。

それなのに、誰から見ても死が近づいているのがわかる姿をしている。

「また、なんか無茶振りか？ 今度は何をして欲しいんだよ……っ！」

後藤は努めていつも通りに声をかけた。

声が震えていたのは、きつと気のせいだろう。

「ふふっ。今日はね……」

耀哉は、勿体振もったいつて笑みを浮かべる。

それを見た後藤は直感的に理解した。

この笑みは、ろくでもないことを言い始める前兆だと。

だが、その無茶振りも、あと少ししか聞いてはやれないだろう。

後藤は耀哉の願いを叶えてやろうと決意して――、

「――ちよつと、あまねを抱いてやってくれないかな」

「寝言は寝て言え」

手のひらを返した。

「いやあ、だって、私がいなくなったあとのことを考えると――」

「だからって、自分の奥さん他人に抱かせようなんて何を考えてんだよオメエはよ!!
病人じやなきやぶん殴ってんぞ!?!」

何故か嬉しそうに笑う耀哉に後藤は怒鳴る。

視力を失っている耀哉には、後藤の表情はわからない。

だから、布団を何度も叩いて『俺は怒っていますよ』とわかりやすく主張した。

「あまね様もなんとか言ってくださいよ! この馬鹿、言うに事欠いて——」
そこで後藤は氣づいてしまう。

あまね が頬を赤く染めながら、挙動不審なくらいに体を揺すり、隣の部屋に視線を向けては戻すという動作を繰り返していることに。

油が切れた鍼はりきのように首をまわし、後藤は隣の部屋へと続く襖ふすまに視線を向けてみる。
すると、わずかに開かれた襖の奥に、綺麗に敷いてある布団が見えた。

見えて、しまった。

「なんであんた乗り気なんだよ!?!」

後藤が怒鳴ると、耀哉が「ぐふっ!」とむせる。

そのむせ方は、笑いを堪えるのに失敗した時のそれだ。

「相変わらずの……はあ……良い突っ込み……くふっ!」

「息を切らしながら言うこっちゃんええよ!」

後藤が再び布団を叩くと、耀哉は呼吸を整える。

「はあ……はあ……あまねに対しても……くくつ……良い突っ込みだった。……そのまま突っ込んでくれないかなあ……性的に」

「まだ言うか！」

怒鳴る後藤に対し、耀哉は薄く笑みを浮かべた。

「だって、そうなれば私と後藤くんは穴きよ——」

「——言わせねえよおお!!」

後藤、渾身の突っ込み。

耀哉は再び笑いを堪えるのに失敗してむせた。

そのまま大笑いを始めて咳き込むと、体勢を横向きにしてもらい、あまねに背中を摩さすつてもらいながら呼吸を整える。

少し間をおいて、ようやく呼吸が整った耀哉は再び笑みを浮かべていた。

「ああ、可笑しかった……」

「そらあようござんしたね」

後藤が不貞腐れたように言うのと、耀哉が「ぶふっ！」と思いつつ笑いをする。

呆れたような目で耀哉を見てみると、耀哉は唐突に言った。

「……もう、十年近い時間が流れたんだね」

後藤は、それが何を指して言った言葉なのかを察する。

耀哉が後藤を親友だと言い始めたあの日から、それだけの時が過ぎていた。

「後藤くん。……私はね、自分がこんなに笑うことが出来る人生を送れるとは、思っていないかったんだよ」

産屋敷家の人間は短命である。

その短い命を削って鬼殺隊を維持し、鬼を倒すことだけに人生のすべてを捧げてきた。

歴代の産屋敷家当主がそうであったように、自分も同じように生きて、死ぬのだろう。

そう、思っていた。

「君と出会ってからの日々は……本当に楽しかった」

耀哉は穏やかな笑みを浮かべた。

見ただけで、心の底からそう思っているのがわかる。

そんな笑顔だった。

「ありがとう、後藤くん」

思わず、後藤は天を仰ぐ。

そのまま何も言わず、胸のなかを駆け巡る感情が落ち着くのを静かに待った。

ややあって、後藤は再び耀哉に顔を向ける。

「何を言っただよ、湿っぱい！ ……ほら！ 早く用件を言えよ！ どうせ、今日も無茶なことを言うんだろ？ ちゃんと叶えてやっからさ！ ——あ、でもさっきの『あまね様を抱いて』は無しだからな？ それ以外なら何でも叶えてやるよ！」

無理矢理に作った笑顔を浮かべ、努めて明るい声で先を急かした。
耀哉も「そうだね」と同意しながら、呼び出した用件を伝える。

「じつはね、火薬を集めて欲しいんだ」

「火薬？」

後藤は首をかしげたが、過去に似たような話があったことを思い出した。

「そういや昔、花火がしたいって駄々をこねてたことがあったよな」

「そう言えば、そうだったね。 ……打ち上げ花火は『鬼を誘き寄せかねないから』と却下されて、手持ちの花火で我慢しろって言われて ……懐かしいなあ ……」

「子供たちと一緒にあって、線香花火で誰が一番長く保っていられるか？ なんて勝負もしましたね ……」

当時を思い出したのか、あまねも一緒になって笑いあう。

ちなみに、線香花火の勝負で勝ったのは耀哉だ。

一番長く保ちそうな花火を勘で選んでいたため、後藤から『そんなことにまで勘に頼めるのか』と呆れられていたのは良い思い出である。

「確かに花火はしたいけど……今回はちよつと違うんだ」
「とうとうと？」

「後藤くんにはね、この屋敷を吹き飛ばすための火薬を用意して欲しいんだよ」
「……は？」

後藤は耳を疑った。

「この屋敷を？ 吹き飛ばす？ ……何で？」

なんとなく嫌な予感がしているのだろう。

後藤の表情が険しいものにならわっていく。

「近いうちにね。無惨がここに来そうな気がしているんだ」

「それを……迎え撃つために……？」

耀哉は頷くと、後藤に「お願い出来るかな？」と問いかける。

「耀哉」

「なんだい？」

「死ぬ気か……？」

「そうなるね」

耀哉はざらりと云つてのけた。

もしも、耀哉が弱っていないければ、後藤は殴っていただろう。

「なんでだよ……っ！」

絞り出すような、苦しげな声だった。

そんな声をさせてしまったことに罪悪感を感じながらも、耀哉は答える。

「私がもう長くないのは……わかるだろう？ だけど、君に何も伝えずに逝くことは……不義理だと思つてね」

後藤は奥歯を噛み締めた。

様々な感情が入り乱れて、叫びだしたくなるのを堪えるためだ。

「後藤くん。私が黒死牟殿に初めて会った時に、日輪刀を渡しただろう？ ……あの時の話を覚えているかい？」

「……ああ。刀を振つてみたけど、そんなに振れなかつたつて話だろ」

「あの時、私は『皆と一緒に戦いたくて』つて言つたけど……本当はね、自分の手で無惨を討ちたくてやつてみたことなんだよ」

そう言つて、耀哉は表情を歪める。

「僕は……鬼舞辻無惨を許せない……っ！！ 彼奴さえいなければ……！ 何度思ったことか……っ！！ だから最後につ！ 彼奴に……一矢報いて……目にものを見せてやりたいんだ……っ！！」

それは産屋敷家当主の言葉ではない。

産屋敷耀哉という、個人の思いが詰まったものだった。

その激情は、後藤も理解できる。

何故なら、彼も『鬼に奪われた』人間であり、剣術の才能がなくて隠かくしになった男だからだ。

後藤の心は揺れていた。

耀哉の気持ちは理解できる。

出来ることなら叶えてやりたい。

だが、耀哉が死ぬことだけは許容できなかつた。

ふたつの思いがぐるぐると、後藤の頭のなかを巡っている。

そこに、耀哉はだめ押しとばかりに言葉を重ねた。

「後藤くん。僕の最後の願いだ。……どうか、叶えてくれないか？」



「あれで、良かったの？」

「ああ」

「もつと、言い方があつたんじゃ……」

「実を言うとなね。もう、勘が働かないんだ」

「それは……」

「無惨が来るのはわかってる。——でも、そこから先に関することには、勘が働かないんだ」

「何故、勘が……?」

「それはたぶん……その時には私が——」



ふらふらとしながら産屋敷邸の廊下を歩く。

後藤の顔は血の気を失い、真つ白になっていた。

頭のなかも滅茶苦茶で、耀哉の自爆を止めたいのに止められないという、出口のない迷路から抜け出せないでいる。

いや、耀哉の自爆を手伝うという出口は見えているのだが、そこにたどり着きたくない、というのが正しいか。

（俺は……どうしたらいい?）

何度目になるかわからない自問自答。

耀哉を死なせたたくない。

だが、耀哉が言うには、その時こそが鬼殺隊にとって、無惨を倒せる最大の機会だと言おう。

ならば、そのために準備を整えるのが当然で、結果として耀哉の命は失われる。

「ぬがあああ!!」

行き場のない怒りに駆られ、後藤は建物の柱に頭を打ちつけた。
痛い。

だが、気分はまるで晴れない。

すると、音を聞きつけたのだろう。

廊下の角から輝利哉が顔を出す。

「後藤さん!?! 何をやってるんですか!?!」

「あ、輝利……」

そう言う輝利哉の姿を見て、後藤は固まった。

産屋敷家の子供は短命であったため、男子は十三歳になるまで女装させて育てるという決まりがある。

輝利哉は産屋敷家の嫡男だ。

だから、今までは女物の着物を着せて育ててきた。

だが、今の輝利哉はきちんとした男物の服を着ている。

それは、産屋敷家の当主を耀哉から引き継いだということの意味していた。

「その格好は……」

後藤が問いかけると、輝利哉は目を伏せる。

その手は、震えていた。

「今日中に、私はここを離れて新たな産屋敷邸へと移ります」

そう言つて、輝利哉は後藤を直視する。

後藤は言葉に詰まった。

子供らしからぬ強さに気圧されたと言つてもいい。

だが、輝利哉はまだ八歳だ。

本当なら、もつと親に甘えていたい年頃だろう。

「後藤さん。……父のことを、よろしくお願いします」

そう言つて頭を下げた輝利哉に、後藤は衝撃を受けていた。

もう、輝利哉は両親と生きて会うことはないのだと、覚悟を決めてしまつていたからだ。

後藤は目眩がした。

いつか来ると、わかつていたことではある。

だが、いざ目の当たりにすると痛々しすぎて、直視できない。

今まで、家族並に身近な距離にいた後藤にとつて、これはキツかった。

このまま、終わらせていいのか？

まだ、何か出来ることがあるんじゃないか？

後藤は頭を振ると、ひとつの決意を固める。

「輝利哉様。……俺に、任せてください」

そう言つて輝利哉に一礼すると、後藤は産屋敷邸を後にした。



「輝利哉、泣いているの？」

「後藤さんが……任せろつて……」

「え……？」

「何でだろう？ 後藤さんに任せておけば大丈夫だつて……もう一度、父上たちに会える気がするつて……そう思うんだ……！」



大正こそこそ噂話（壱）

獺岳かいがく

拗らせた性格をした善逸の兄弟子。

原作では無限城にて【上弦の陸】として登場し、善逸と交戦、死亡する。

性格やら言動やら、なかなかの悪役を演じていた。

なお、原作で善逸の指摘した“心の箱”に穴が開いているという話だが、その穴がどうして開いているのか？ という問いかけに対する解釈次第で、獺岳という人物の印象

は大きく変わる。

本作では『ただの自己顕示欲が強い悪党』ではなく『過去の過ちを後悔しているために、そうならざるを得なかった人物』だと解釈させてもらった。

今回の話のあと、数人の柱から推薦を受けて【鳴柱】なりばしらに就任した。

就任後、柱になったことを慈悟郎に直接報告。

それにあわせて過去の過ちも説明する。

『こんな馬鹿でも弟子と名乗っていいだろうか？』と尋ねたところ、慈悟郎からは『どんなになろうと弟子は弟子。見捨てはしない』と言われて拳骨を落とされた。

あまりの痛さに獺岳は涙したが……。

それ以降、獺岳は慈悟郎から贈られていたが『着る資格がない』としていた羽織を纏うようになる。

善逸との仲も改善した——かに見えたが、気のせいだったらしい。

結局は相変わらず(?)の模様。

大正こそこそ噂話(弐)

【岩柱】 悲鳴嶼 行冥

盲目ながらも鬼殺隊最強と呼び名の高い男。

いつも数珠を鳴らしているか、静かに泣いている。詳しくは原作を読もう。

本作では豆腐の波が押し寄せた結果、過去の悲劇が回避された。

ちなみに、寺に住んでいた頃に同居していた子の一人が押し掛け女房として岩屋敷に住んでいる。



大正こそこそオマケ話

珠世

「ついに完成したわ！ 鬼を人間に戻す薬!!」

愈史郎

「やりましたね、珠世様！」

（さすがは珠世様だ！ 誇らしげな表情もお美しい!!）

しのぶ

「私も大変勉強になりました！」

珠世

「いいえ、いいえ！ しのぶさんの協力でこんなに早く薬が完成したんです！ こちら

「こそ、ありがとうございました!!」

珠芽

「……ねえ、ねえ。お義母さん」

珠世

「なあに、珠芽?」

珠芽

「私ね、そのお薬を使ってあげたい鬼ひとがいるんだ」

珠世

「それは……」

珠芽

「……ダメ?」

→上目使いの『お願い』ポーズ。

愈史郎

「駄目に決まっているだろう! ——そうですよね? 珠世様!!」

珠世

「いくらでも持っていきなさい!!」

→親馬鹿(?) 発揮中。

しのぶ

「!?」

愈史郎

「珠世様あああ!?」

うねった波は迫り来る（無限城編）

風雲急を告げる鬼殺隊と鬼の長きに渡る戦い。

その決戦の幕は、鬼側の手によって切つて落とされた。

鬼舞辻無惨が産屋敷邸に襲来したのである。

「私には何の天罰も下っていない。何百何千という人間を殺しても、私は許されている。この千年、神も仏も見ることがない」

無惨は床に臥せった耀哉を見下ろし、傲慢に満ちた笑みを浮かべた。

腹立たしいまでの自分本位な言葉に、耀哉は失笑する。

わかつていたことだが、まるで意見が合わない。

相手は千年もの間、他者に犠牲を強いてきた男だ。

意見など合おうはずもなく、何を言っても無駄なのは当然である。

だが、耀哉は敢えて反論した。

時間稼ぎという意味もあったが、耀哉には無惨に対して言いたかったことがあったのだ。

「無惨。君は思い違いをしている」

そう言つて、耀哉は薄く笑う。

無惨の願い——永遠の命は叶わない。

真の永遠とは、世代を経ても受け継がれていく『人の思い』である、と耀哉は語る。

無惨は『自分は許されている』と言うが、それは大きな間違いだ。

この千年、彼は一度も許されたことはなく、何度も虎の尾を踏み、竜の逆鱗に触れ続けている。

だからこそ、この千年間、鬼殺隊はなくならなかつたのだ。

「それに……君が死ねば、すべての鬼が滅ぶんだらう？」

無惨に対してずつと言いたかつたことを言い切ると、耀哉は疲れたように息を吐いた。

会話によつて、それなりの時間を費やしている。

柱たちが産屋敷邸に来るまで、そう時間はかからないだろう。

無惨が耀哉を殺すために近寄ってくる。

その表情はわからないが、気配からして愉快的気分ではなさそうだ。

だが、言いたかつたことを言い切つた耀哉にとつて、それはもうどうでもいいことだつた。

今、耀哉の胸中には鬼殺隊の勝利を願う思いとは別に、家族への思いが溢れている。

隣で耀哉を支えてくれている あまね。

最後まで一緒にいたいと言つて譲らなかつた ひなき と ちか。

ここから遠く離れた新しい産屋敷邸に移つていった かなた と くいな。

幼くも当主として立たなければならなかつた嫡男の輝利哉。

そして――、

（……さようなら、後藤くん）

苦楽を共にした親友への感謝を胸に、耀哉は屋敷に隠された火薬の――いや、無惨討伐の口火を切つた。



複数の爆発をともに受けた無惨は混乱の極致にいた。

吹き飛ばされた肉体の割合は全体の七割程。

殺傷能力を上げるためか、細かい金属片が仕込まれていた結果である。

「おのれ産屋敷いいい!!」

怒りに満ちた咆哮が辺りに響く。

死体同然の輩からの手痛い反撃。

思わぬ抵抗を受けたために、無惨は激昂していた。

懸命に身体を再生させながら、無惨は半壊した産屋敷邸を睨みつける。

自分をこんな目に遭わせた下手人が生きてそこにいるために、無惨の意識は一点にだけ集中していた。

だから、無惨は気づかない。

今、彼の周囲には血鬼術によって産み出された肉の種子が浮遊している。

爆発のどさくさに紛れて、完全に包囲されていたのだ。

だが、怒りのあまりに視野狭窄に陥っていた無惨は気づけない。

無防備な無惨の身体に、肉の種子が変化した棘が突き刺さる。

(固定された、だど!?)

ここで漸く、無惨は自分が置かれた状況の不味さに気がついた。

産屋敷邸に向かって、いくつかの気配が近づいている。

おそらくは、柱たちだろう。

(――落ち着け。まだあわてるような時間じゃない)

無惨は焦る自分を落ち着かせるために、事前に調べていたことを思い出す。

近寄ってきている柱たちのなかに、最も警戒すべき黒死牟はいない。

何故なら、黒死牟の動きは鳴女によって常に監視されているからだ。

無惨が産屋敷邸に来る前にも確認をとったが、その時は蝶屋敷から出てきていないと

報告を受けている。

念のため、動きがあれば連絡するようにと言いつつ含めてあるのだ。抜かりはない。

今もまだ、鳴女からの連絡はないのだ。

だから、無惨が焦る必要は欠片もない。

ちなみに、蝶屋敷に太陽を克服した鬼志津がいないのは調査済みである。

さすがに黒死牟が居るときに調査は出来なかったが、隙をみて調べてはいたのだ。

閑話休題。

無惨の身体を固定する棘。

それを吸収して無効化しようとした無惨の腹に、なにかが突き刺さった。

「貴様は……珠世!？」

無惨は驚いた。

ここに居るはずのない人物の一人が、目の前に居たからだ。

「私の拳を吸収しましたね?」

「上手くいった」と珠世が勝ち誇った笑みを浮かべる。

その笑みは、無惨の背筋に冷たいものを感じさせるものだった。

「今、私の拳と一緒に吸収したのはなんだと思いますか? 鬼を人間に戻す薬ですよ!」

状況が随分と変わったと珠世は語る。

無惨は即座に薬の存在を否定しようとしたが、珠世の医師としての能力を知るだけに出来なかった。

そして、ふと気づく。

珠世が作った薬が無惨だけに使われるはずがない。

無惨は猛烈に嫌な予感がした。

「まさか……っ！ あの太陽を克服した鬼にも薬を……!?!」

「あら、無惨の癖に察しが良いですね？ ——もちろん、使いましたよ!!」

「貴様ああっ!!」

永遠の命という夢を奪われたことを知った無惨は激昂する。

最早、生かしてはおけない。

鬼を人間に戻す薬を作れる珠世も、その製造法を共有しているであろう鬼殺隊も、今

夜のうちに滅ぼすことを今、決めた。

だが、無惨は見落としている。

己にとつて都合の悪いことが続くあまりに、大事なことに気がつかない。

珠世はどうやって無惨に近づいたのか？

そもそも、珠世は蝶屋敷に居たのではなかったか？

蝶屋敷にいた珠世がここに居るのなら、一番危険度が高いあの男は？

重要なことに気づいた無惨の背筋に怖気が走る。

そして、それはすぐ近くにまで忍び寄っていた。

「いつまで……珠世に触れている……」

その声は今、絶対に聞きたくない声だった。

その声は今、絶対に聞かなくてはならない声でもあった。

無惨が吸収しようとしていた珠世の腕が、半ばから断ち切られる。

その直後、珠世は何者かに抱きかかえられ、離れた位置に移動していた。

さらに、無惨の視界はいつの間にも縦にずれている。

斬られたのだ、と理解したのは少し間を置いてのことだった。

「また貴様かつ！ 黒死——!?!」

顔に青筋を立てて吠えるが、その直後に棘付きの鉄球が無惨の頭部を襲う。

鉄球を投げたのは行冥だ。

彼もまた、珠世や黒死牟と共に潜んでいたのである。

（鳴女は何をしていた……っ!!）

無惨は内心で無限城にいる鳴女に怒りをぶつけるが、はっきり言って彼女に非はない。

い。

珠世と黒死牟は、愈史郎の『目眩まし』の血鬼術で鳴女に気づかれることなく産屋敷

邸に移動し、行冥と共に潜んでいたのだ。

ちなみに以前、浅草で無惨が炭治郎を抹殺するために放った刺客の鬼が『目眩まし』の血鬼術を目撃している。

もちろん、この情報は無惨にも共有されていた。

ただ、そのことを無惨が忘れていただけである。

「デメエかアアア！ お館様にイイ何しやがったアア!!」

怒りの形相で駆けてくる実弥を始めとして、次々に柱たちが現場にたどり着く。

「お館様ア!!」

「お館様!」

柱たちの姿を見た無惨は苦虫を噛み潰したような表情になるが、すぐに状況を覆すべく行動に出た。

「鳴女えええ!!」

琵琶の音が鳴ると共に、この場にいた者たち全員の足元に襖が現れる。

その襖は、半壊した産屋敷邸のなかにも現れていた。

「不味い! ——累!!」

「任せて」

黒死牟が叫ぶと、どこからともなく累が現れる。

彼もまた『目眩まし』の血鬼術で身を隠していたのだ。

それを見た無惨は舌打ちするが、落下しきる直前に大声で宣言する。

「今から貴様たちが落ちるのは地獄だ！ 今宵、鬼殺隊を滅ぼしてやろう!!」



波乱の幕開けとなった決戦は、場所を無限城へと移していた。

無限城を血鬼術にて操る鬼——鳴女は、内部に誘き寄せた鬼殺隊を全滅させるべく、壁や床を操りながら戦いの場を整える。

この数ヶ月、無惨は各地に散らばっていた雑魚鬼を回収し、血を与えて強力な力ちからを持つた鬼を増やしていた。

しかし、鬼殺隊の活躍によつて数を減らされていたため、無惨が強化できた鬼は多くない。

だからこそ、新たに加わった「上弦の陸」の能力はありがたかった。

斬れば斬るほど数が増えるため、現在の無限城には「上弦の陸」が大量に蔓延っている。

ちなみに、鳴女が内心で『ちよつと気持ち悪いな』と思っていたことは、無惨以外は誰も知らない。

べべん、と鳴女は琵琶の弦を鳴らす。

すると、城内の一部が動き、鬼殺隊の隊士たちを戦いの場へと誘う。

『出やがったな、賽目えええ!!』

『こおんの裏切り者があああ!!』

『はっ! 雑魚どもが喚いてんじやねえよ!!』

どうやら、鳴女の意図通りに鬼殺隊の隊士と「上弦の陸」の集団が出会ったようだ。

たちまち斬り合いが発生し、敵味方入り乱れた混戦になっている。

鳴女は再び琵琶の弦を弾いた。

今度は別の区画が動き出し、新たに戦いの場を整える。

『きいいいたあああなああああつ!! れえんごくおくううう!!』

『むっ!! 貴様は……あの時の「上弦の式」か!!』

『こいつは……!!』

『どうした、富岡。あいつを知ってんのかア?』

『姉さんを……襲った鬼……つ!!』

『あ……?』

柱たちを「上弦の式」がいる区画に誘導したが、何やら因縁がある組み合わせを導いてしまったらしい。

鳴女は知らない話なので、これは不可抗力というヤツである。

彼女に罪はない。

気を取り直して、鳴女はさらに琵琶を弾く。

それに合わせて区画が動き、一部の鬼殺隊を追いたてた。

行く手にあるのは、鳴女もお近づきになりたくない鬼の住み処である。

『おやおやあ？ ——うわあ！ 可愛い娘がいつぱいだあ！ そつかあ、俺の要望通りに女の子を送ってくれたんだね！ あとで鳴女ちゃんにお礼を言わなくっちゃ！』

『あの鬼は……志津さんを襲った変態鬼!?!』

『累が、女性を好んで襲う変態だつて言つてたわね』
うちの子

『変態……女の敵……っ！』

なお、鬼殺隊の女性たちが『変態』という度に、鳴女も頷いていたのは余談である。

【上弦の壱】からの要望を叶えた鳴女は、またまた琵琶を鳴らした。

すると今度は壁が動き始め、鬼たちを一ヶ所に集め始める。

そこには数人の人間と一人の鬼がいた。

『四方から鬼が来てるけど……糸で出入り口を塞げば、こつちには来れないでしょ』

『糞がつ！ オイこらテメエ！ ここを開けやがれ!!』

『自分で開けたら？ ——出来ればの話だけど』

『ぶっ殺すっ!!』

『おいおい。誰が、誰を派手にぶつ殺すって?』

『裏切っただけでなく、お館様にまで刃を向けるとは……最早、男らしくないとか、そういう次元の話ですらないな』

無限城に産屋敷たちを引き込んだままでは良かったが、現状では、討ち取るまでには到らなそうである。

鳴女は意識を切り替えると、凄まじい速度で移動する一団に目をつけた。

『炭治郎! あつちからカナエさんたちの声がするぞ!!』

『わかった! ——ん? カナヲや しのぶさんの匂いも、同じ方向からする……。たぶん、みんな一緒にいるんじゃないかな?』

『なら、さっさと合流しちまおうぜ! ——どけどけえ! 伊之助さまのお通りじゃあ!!』

その一団に向かって、鳴女は下弦の鬼と同程度に強化された雑魚鬼をけしかけるが、鎧袖一触がいしゆいつしよくとばかりに蹴散らされていく。

これは無理だな、と鳴女は判断した。

いくら鬼を集めても、所詮は戦い慣れていない雑魚鬼。柱稽古を経て強くなった炭治郎たちの敵ではない。

ならばと、鳴女は「上弦の陸」の分裂体を向かわせる。

あれなら時間稼ぎや体力を削るのに役立つてくれるだろう。

鳴女は次なる標的を探して、城内の状況を見てまわる。

そんな彼女の背後に忍び寄る者がいることなど、気づく余地もなかった。



『ウヒヤハハハ!! どおした煉獄う!! 逃げてばかりじゃないかあ?』

次々と襲いかかってくる腕の群れ。

その物量を前にして、杏寿郎は攻めあぐねていた。

この場には義勇と実弥もいるのだが、そちらにも手が回っているようで連携をとれそうにない。

「むう……これはいかんなー」

杏寿郎は赫刀化させた日輪刀で腕を斬るが、斬ったそばから数倍に増えた腕が向かってくるので本体に近づけずにいる。

「うわ、何あれ。気持ち悪い」

「まあた七面倒くさい奴に出会ったなあ……」

その声は、無一郎と有一郎のものだ。

どうやら、二人とも無事でいたらしい。

「ちようどいい! 時透兄弟! ちよつと手エ貸せエ!!」

実弥の声が響くと、二人は「了解」と軽く返して手の海に飛び込んだ。だが、やはり数が多すぎる。

全員が日輪刀を赫刀化させて腕を斬っているのだが、それでも処理が間に合わない。もう少し手が欲しいなと思っていると、そこに聞き慣れた声が響いた。

「キヤアアアア!? 何あれ何あれ!? 気持ち悪いわ!!」

「蜜璃、少しだけ下がってくれ。俺が処理する」

蜜璃と小芭内である。

大切な人をかばうために前に出た小芭内が、迫り来る腕の群れを斬り裂いていく。

手数が増えたことで状況を打開できるかと思われたが、事態は思わぬ方向へと動き出していた。

『今の声……女か?』

蜜璃の声を聞いた【上弦の弐】が動きを変える。

『女……美しい女……つまり恋雪……っ!?』

その狙いは——蜜璃だ。

『男に用は無ええええ!! 恋雪を寄越せえええ!!』

「またそれか!!」

謎の理論を展開した【上弦の弐】の叫びを聞き、杏寿郎は呆れた声をあげた。

「え？ え？ え？ キヤアアアア!! なになに!? いったい何なのおお!?」

急に狙われ始めた蜜璃は、困惑しながらもバタバタと逃げ回っている。

「何がどうなっている!？」

そんな状況の変化に、小芭内は苛立ちを隠せない。

蜜璃に迫る腕を次々に斬っていくが、勢いが衰える様子はなさそうだ。

「手伝います!」

そう言つて援護にきたのは有一郎である。

小芭内は加勢しに来た有一郎に礼を言うのと、敵が蜜璃を狙う理由に心当たりがないかと問いかけた。

先程の杏寿郎が言った『またそれか!』という言葉の意味を、継子である有一郎なら知っているのではないかと考えたのだ。

煉獄家の事情が絡む内容になるため、有一郎は迷ったが、考えてみれば炭治郎を始めとした数人が知る話でもある。

今さら隠すようなものでもないだろうし、相手は一時期だけとはいえ、煉獄家に世話になっていた小芭内だ。

話しても問題はないだろう。

「煉獄さん!」

「ん？ 構わないぞ！」

杏寿郎にも了解をとり、有一郎は煉獄家とのいざこざや過去の事情を簡単にまとめ話す。

その間にも、迫り来る腕を斬っているのは流石である。

ちなみに、説明を聞き終わった小芭内の顔に青筋が立ったのは、事情を知る者からすれば当然のことだった。

「つまりあれか。蜜璃はその恋雪という人物に見間違われているのか？」

「見間違われているというより、もう判断がつかない——」

「蜜璃が美しいのは認める。——だが、手を出すというなら容赦はしない……っ!!」

(あ、駄目だコレ。話を聞いてない)

黒い瘴気を放ち出した小芭内の様子を見て、有一郎は匙を投げた。

蜜璃はというと、小芭内から『美しい』と言われて嬉しかったのか、顔を真っ赤にして照れている。

体を左右に揺るたびに凄いことになっているが、小芭内の癩癩を恐れた有一郎は見なかつたことにした。

【上弦の弐】が蜜璃を優先して狙う影響もあって、ほかの者に対する攻勢が弱まってい

る。

それを好機と見た杏寿郎は、義勇と実弥、無一郎と連携して【上弦の弐】の本体へと迫った。

——水の呼吸 拾壺ノ型 風

義勇が迫り来る腕を細切れに斬り刻み、間合いを詰める手伝いをし——、

——霞の呼吸 伍ノ型 霞雲の海

無一郎が【上弦の弐】への道を斬り開く。

そうして見えたのは、丸々とした肉の塊だった。

腕を生やすことに特化させた結果、人の形を留められなくなっただけらしい。

だが、その影響で頸くびが肉に埋もれて見えなくなっている。

このままでは、頸くびを斬るのは不可能なことだと思われる。

しかし、ここにいるのは柱のなかでも屈指の攻撃力を誇る【炎柱えんぼしち】と【風柱】である。

——風の呼吸 壺ノ型 塵旋風・削ぎ

実弥の突撃が肉の防壁を削ぎ落とし——、

——炎の呼吸 玖ノ型 煉獄

杏寿郎の一撃をもって、頸くびを斬り落とした。



「そら！ 胡蝶印の毒付き苦無だ！ こいつは派手に効くぜえええ!!」

天元は矢継ぎ早に苦無を投げつけ、それをすべて命中させていく。

苦無を受けた者はすぐに苦しみ出すと、どろどろになつて溶けていった。

「毒を使うのは、あまり男らしくはないが……そうも言つてられなくてな。——悪く思うな！」

そう言うのと、錆兎は毒の塗られた特殊な小太刀で斬りかかる。

この小太刀は「上弦の陸」である賽目対策に作られた特注品で、刀鍛冶の里が総出で作り、隊士全員に支給されていた。

刃を受けた者たちは苦しみながら倒れ、腐つたように溶けていく。

——血鬼術 溶解の繭

二人に負けじと、累も次々に「上弦の陸」の分裂体を繭のなかへと閉じ込めている。

そんな彼らに守られていた一団のなかに、本来なら戦いの場に出てくるはずのない者たちがいた。

耀哉と あまね。

そして、にちか と ひなき である。

彼らも鳴女の生み出した襖のなかに落とされ、累によつて無事に着地し、現在は護衛されているのだ。

周囲に響き渡る戦いの音を聞きながら、耀哉は不思議に思っていた。何故、自分は生きているのだろうか？

予定では、屋敷と共に消し飛ぶはずだった。

そうして無惨の力を削いだあと、鬼殺隊の総攻撃で決着をつけるつもりだったのだ。火薬による自爆が不発だったのだろうか？

そんなはずはない。

大きな爆発があつたのは、目の見えなくなった耀哉でもわかる。

体のいたる所が痛いのは、その証左と言つてもいい。

ならば、何故？

「耀哉」

ぐるぐると同じ思考を繰り返す耀哉の耳に、最愛の人の声が届く。

音が聞こえづらいのは、爆発音で耳がやられたせいだろう。

鼓膜が破れたりしたわけではなさそうなので、時間と共に回復する程度のものだ。

ハッと我に返つた耀哉は、声のした方向に顔を向けた。

「すまない、あまね。……ちよつと、動揺していたんだ」

耀哉はそう言うのと、周りの状況を尋ねる。

そうして驚いたのは、自分たちが今いる場所が、無惨の拠点であること。

耀哉とあまねだけでなく、ひなきとにちかも一緒にいること。

そして、今は天元と鎗兎、累に守られ、鬼の攻勢に耐えているのだと言う。

「あ。義父さんが来た」

賽目たちを繭に閉じ込めていた累が、急速に近づく者の存在を感じ取り、その正体を呟いた。

その呟きから間もなく、黒死牟が現場に到着する。

黒死牟の腕のなかには、珠世が抱きかかえられていた。

「珠世……お館様を頼む……」

「任せてください」

珠世はさつと耀哉に近づくと、怪我の有無や容態を確認していく。

そうしている間、黒死牟は累たちに加勢して、押し寄せる賽目たちを押し止めていた。

斬つては増殖してしまうため、鎗兎と同じように特殊な小太刀を使うか、はたまた、血鬼術で生み出した刀で貫き、壁や柱、天井に固定していく。

そんななか、耀哉は気になっていた疑問をぼつりと呟いた。

「どうして……私は生きているんだろう？」

「それは……」

問われたあまねも答えを知らないようで、言葉を詰まらせる。

その答えは、思わぬところから返ってきた。

「そりゃあ、お館様！ 後藤が色々と地味に頑張ったのさ!!」

耀哉の眩きは、耳の良い天元にも届いていたらしい。

だが、後藤が頑張ったとはどう言うことだろうか？

曰く、いきなり音屋敷に突撃してきた後藤は、天元に頭を下げ、爆発物に関する知識を勉強していたと言うのだ。

さらに、そういった知識を求めて外部の様々な人々のもとを訪れていたらしい。

そうして出来上がったのが、爆発の威力を決まった方向にだけ解放する特殊な爆弾である。

耀哉を爆発に巻き込まず、攻撃したい相手だけを狙えるようにと試行錯誤を繰り返した後藤の努力の結晶だった。

「後藤くん……」

耀哉の瞳から、一筋の雫がこぼれ落ちる。

死ぬつもりだった自分と違い、親友は必死になって命を捨てなくても済むようにと努力をしていたのだ。

「あなた……」

耀哉の手を、あまねの手がそっと包み込む。

何故だろうか。

耀哉には、あまねが泣いていることが理解できていた。

同じように、二人の娘も泣いている。

きつと、離れた場所にいる子供たちも泣いている気がした。

(後藤くん。僕は、生きるよ)

耀哉はここにはいない親友に思いを馳せる。

残された寿命が少ないとしても、救ってもらったこの命が尽きるまで、精一杯生き続けよう。

そして、もう一度会い、礼を言わなければならない。

耀哉の体に、僅かながら活力が戻る。

心なしか、体を蝕んでいた病の痛みが和らいだような気がした。



「あああつ！ もう！ こいつら邪魔なんだよ!!」

倒しても倒しても、一向に減らない賽目の群れ。

それにうんざりしたのだろう。

我慢の限界と言わんばかりに伊之助が怒声をあげた。

「ヒイイイ!? また追加で来たあああ!!」

せつかく数を減らしたところに敵の増援が現れ、それを見た善逸が悲鳴をあげる。

「この先に皆がいるはずなのに……!!」

炭治郎も焦りを露にするが、次から次へと増援がやって来るので敵の数が減らない。気のせいではなければ、敵は明確な意図をもって炭治郎たちを集中して襲いに来ている。

実際、その考えは正鵠を射ていた。

先日の蝶屋敷の一件で、賽目は炭治郎を殺し損ねている。

その結果、賽目は無惨からの臨時収入を受け取れなかったのだ。

本来ならば無惨に八つ当たりされてもおかしくない状況なのだが、太陽を克服した鬼の話もあって、お咎めなしとなったのである。

その上で、今回も同じように報酬を願い出たところ、無惨は了承した。

無惨としては、どうしても太陽を克服した鬼を手に入れたかったのだろう。

そのため、今回こそはと躍起になっているのである。

新たに現れた増援を相手取る炭治郎たち。

すると、そこに思ってもみなかった味方が現れた。

——雷の呼吸 陸ノ型 電轟雷轟

一瞬にして、かなりの数の賽目たちが毒を受けて崩れ落ちる。

それを成したのは、善逸の兄弟子である獺岳であった。

「誰が襲われてんのかと来てみれば……お前らかよ」

「獺岳?! ……と、行冥さん」

「南無……」

助けに来て損したと言わんばかりに、獺岳はため息をつく。

ちなみに、行冥の瞳から一筋の涙が流れていることと、ついでのように名前を呼ばれたことに関連性はない、はずだ。

獺岳の態度に善逸はなんとも言えない表情をする。

だが、人の感情を匂いとして感じ取れる炭治郎と、盲目だからこそ嘘を見抜ける行冥は、獺岳がちよつとした嘘をついていることを察していた。

「ありがとうございます！ 助かりました！」

「別に助けに来たわけじゃねえよ。たまたまだ。たまたま」

「獺岳はこう言っているが……ちよつとした嘘をついている」

「はい！ 大丈夫です！ わかってますから！」

炭治郎の返しに、行冥は微笑を、獺岳は「何が？」というような表情をする。

だが、次いで紡がれた炭治郎の言葉を聞いて、獺岳は慌てだした。

「心配して来てくれたんですよね！」

「違うわ!! たまたまだつつつてんだろ!」

「大丈夫です! 俺は鼻が効くんぞ!」

「鼻が効くから何だ!? 違うもんは違うんだよ!!」

炭治郎と獺岳の押し問答は二、三周したが、埒が明かない。

最終的には獺岳が「失せろテメエら!!」とキレて、炭治郎たちを先に進ませることで解散となった。

その押し問答の際に、獺岳の“音”を聞いた善逸が、その真意を察して嬉しそうに顔を緩ませていたのは余談である。



東京の浅草。

そこはかつて、炭治郎と無惨が出会い、そして、珠世と愈史郎に出会った因縁の土地である。

現在、無限城では鬼殺隊と鬼の決戦が行われているが、それは表社会には何の影響もない話だ。

いつものように、浅草の街は人混みに溢れ、忙しくも穏やかな時間が流れている。

そんな浅草の町の裏通りに、賽目の本体はいた。

無限城での決戦など知らぬとばかりに、浅草の町で寛いでいたのだ。

無論、そのことは無惨も承知している。

むしろ、今回の一件では無限城の外にすることを推奨していた。

なにしろ、賽目の血鬼術は本体が倒されるか、術の媒体になる血がなくならない限りは際限がない。

そして、外の世界にいれば人間を喰らうことで力を取り戻せるため、決戦の場に留まる利点が皆無なのだ。

この時点で、鬼殺隊は詰んでいる。

いくら鬼殺隊の柱たちが強かろうが、所詮は人間。

体力には限界があり、戦えば戦うほどに武器も消耗、あるいは破損していく。

そして、無限城のなかではそれらの補給は出来ず、時間さえあれば全滅するのは自明の理だ。

最大の障害だった黒死牟も、結局は日輪刀がなければ鬼を倒せない。

最終的には力尽きることになるだろう。

状況は、明らかに鬼側が有利である。

少なくとも、今のまま物事が推移すれば、勝つのは無惨なのは間違いない。

賽目は無惨側に乗りに換えたことを自画自賛し、調子に乗っていた。

だからこそ、気づけない。

今日の浅草の街には警官が多く出歩いている、先程から賽目にチラチラと視線を送っていることに。

そして、それに気づいた時には――、

「――すみません。あなたは賽目さん、で間違いありませんね？」

「あ？ 警察う？ 警官が俺に何の用だよ？」

「ああ、大したことではありませんよ。――ちよつと……仕置きに來ただけですから」
彼の命運は尽きていた。



「あれえ？ 壊^{かいな}拏殿、もしかして死んじやった？」

口から吐く息が白くなるほどの冷気が漂う大広間。

その中央に陣取っていた「上弦の壺」――童磨は、仲の良かった同僚の気配が消えたことを察して眩いた。

しかし、そこに悲しみはない。

むしろ、女の子を（物理的に）食べるのを独り占めできる、と喜んでいた。

だが、その訃報から時を置かずして、賽目まで気配が消えたとなれば話は別だ。

無惨側に残った戦力は童磨と鳴女の二人だけ。

そして、鳴女は上弦の鬼になったとは言え、元々から戦闘には向かない鬼である。

そのため、童磨は実質一人で鬼殺隊と戦わねばならなくなった。

「不味いなあ、怒られちゃうよ」とぼやきながら、童磨は手に持つていた鉄扇を一振りして冷気を放つ。

それだけで、不意打ちを仕掛けようとしていたしのぶとカナヲを退かせると、追撃として氷で出来た蔦つたを伸ばし、あつという間に部屋の間へと二人を追いやった。

「だあああつ！ チクシヨウ！ 全部凍るとかふざけんな!!」

「そーだ！ そーだ！」

氷で出来た人形に追いかけられる伊之助が罵声をあげると、善逸も悲鳴を混じえながら同調する。

先程までの童磨なら、苦笑するくらいで流していただろう。

しかし、今ではもう、童磨を取り巻く状況が違う。

「強くてごめんねえ。俺、こう見えても【上弦の壺】なんだ。……もつと遊んでいたいけど、そろそろ、ちゃんと働かないと不味いみたいなんだよね。——だから、君たちの遊び相手を残していくよ」

——血鬼術 結晶ノ御子

童磨は鉄扇の上に氷の人形を生み出すと、自らの戦力を増やし始めた。

「善逸っ！ 伊之助っ！」

増えた氷の人形に追われる二人を助けようと、炭治郎が向かう。

だが、その行く手を二体の氷像が遮った。

——血鬼術 寒烈の白姫

「くっ……くっ……！」

氷像が放った氷の風を避けながら、炭治郎は悔しげに歯噛みする。

獺岳と行冥のおかげでカナエたちと合流出来たはいいものの、先程から氷の人形に行動を邪魔されてうまく立ち回れない。

この大広間にいる鬼殺隊の隊士は六人。

カナエとしのぶ、カナヲの三人だったところに、炭治郎と善逸、伊之助が援軍で駆けつけた形だ。

その六人を相手に、童磨は自身と同程度の血鬼術が扱える氷の人形を五体も作って対抗している。

柱稽古で習得した赫刀はともかく、透き通る世界は氷で出来た人形相手には無意味だ。

なにしろ、人形には血も、骨も、筋肉もない。

先読みする材料がないのだから、動作の起こりを読むことが出来なかったのである。

「これは……困ったわねえ」

事前に童磨の情報を聞いていたにも関わらず、状況を打開できないことにカナエも困り顔だ。

正直な話、童磨の血鬼術に対しては有効な対策がない。

一応の対策として日輪刀と同じ素材で作った銃を持ち込んでみたのだが、隙をみて当ても傷つけることさえ出来なかった。

遠距離からの攻撃が駄目なら近づくしかないのだが、そうなると童磨や人形が撒き散らす冷気が厄介である。

それを吸い込めば肺が傷つけられ、まともに呼吸を行うことすら難しくなるだろう。すると、そこに吉報が舞い込んだ。

『上弦ノ陸、賽目ノ消滅ヲ確認ー!!』

鏝鴉がもたらした吉報を聞き、カナエは満面の笑みを浮かべる。

無惨側の戦力の大半を担っていた鬼が消えた。

ならば、多くの味方が手透きになっているはずである。

この状況ならば、この場の脅威を取り除く有効な手段が打てるだろう。

カナエはそう判断した。

「外の状況が変わったみたいだし、こちらも切り札を切りましょうー!」

『切り札?』

カナエを除いた全員の言葉が重なる。

しのぶとカナヲも、カナエの言う切り札のことを知らないらしい。

二人とも、困惑しながら首をかしげていた。

カナエの言葉は、もちろん、童磨にも聞こえている。

そのため、人形を一度身の回りに集めると、何をするつもりかと警戒を露にしていた。すうつと、カナエは深く息を吸い込むと――、

「キヤー！ 助けてー！ おーかーさーれーるー!!」

それはそれは、見事な棒読みを披露する。

『はあ?』

童磨を含めた全員が呆気にとられ、カナエに視線を向けた。

カナエの行動がどういった意味を持つのか？

それがまるでわからない。

しかし、その答えはすぐに理解することになった。

突如として、轟音と共に無限城が揺れる。

「なんだ!？」

「地震……?？」

「……いや、違う。これは――」

突然の揺れに動揺しながら、カナエを除いた全員が身構えた。段々と近付いて来ているらしく、そのたびに音と揺れも大きくなっている。

「まさか……」

無限城の壁や床を破壊しながら突き進む。

そんな馬鹿げた荒業を実行できそうな人物に、心当たりがある者たちは顔を引きつらせる。

童磨もそれに気づいたようで、同じように顔が引きつっていた。

天井が大きくひび割れる。

その次の瞬間には、天井に大穴が空いていた。

天井だった残骸と共に落ちてきたのは――、

「俺、今からこの人の相手をするの？ うっそだあ……」

怒りに満ちた相貌で童磨を睨みつける黒死牟である。

「私たちでは貴方を倒せない。……なら、倒せる人を呼ばばいいんですよ」
そう言つて、カナエはとても良い笑顔をした。

顔に青筋を立てさせた黒死牟を見た童磨は、完全に及び腰になっている。

「俺の！ 家族に！ 近づくなあああ!!」

黒死牟の拳が童磨の頬を捉えた。

殴られる直前、童磨は黒死牟の背後に『蜘蛛のような顔をした異形の何か』を幻視する。

「ぶふうっ!？」

『殴ったあああ!？』

まさかの拳による攻撃に、見ていた者たちは驚いた。

日輪刀による斬撃を予想していただけに、想定を上回る速度と軌道で迫った拳を避けることが出来ず、童磨はまともに受ける。

別に、幻を見て『え？ 何それ?』と動揺したわけではない。

殴られた勢いのまま、童磨は大広間に作られた池へと頭から突っ込んだ。

「うわあ……」

その声は誰が発したのか、定かではない。

しかし、声の主が感じたことだけは、その場にいた全員に伝わっていた。

怒りで息を荒くした黒死牟がぐるんと首を回してカナエを見つけると、一足飛びに近寄り抱き締める。

「大丈夫か……なにか……されていないか……」

「私は大丈夫ですよ。巖勝様が助けてくれましたから」

「そうか……」

黒死牟はそう言うのとホツと息を吐いた。

「どんなに離れた場所にしても、妻の危険に駆けつける夫の姿……っ！ 絆だ……っ！

本物の絆だあ……っ！」

天井に空いた大穴から声がする。

気づいた者たちが見上げると、そこには累の姿があった。

どうやら、黒死牟についてきたらしい。

イチヤツきだした黒死牟とカナエを見ながら、累は「絆だ絆だ」と連呼しながら涙を流す。

そんな累の姿を周りの者たちが引き気味に見ていたのは余談である。

「痛いなあ……両親にも殴られたことないのに」

殴られた頬を擦りながら、童磨が池のなかから足場へと這い上がってきた。

黒死牟はカナエたちに下がっているように伝えると、童磨へと向き直る。

「今日は……逃げがさんぞ……」

「ははっ。俺は相手したくないんだけど……無理だよねえ。——だから、全力で足掻か

せてもらうよ？」

先に仕掛けたのは童磨の作り出した氷の人形だ。

黒死牟へと血鬼術を繰り出しながら、様々な妨害工作を繰り出していく。

粉氷による視界不良。

生み出した氷像による物理的な視界の封鎖。

氷である点を利用して、視認しにくい池のなかからの奇襲。

例え無駄であろうとも、使えそうな手段はすべて使っているといった感じである。

それに対して、黒死牟は己の肉から生み出した刀を持ち出すと――、

――月の呼吸 拾肆ノ型 兇変・天満織月

すべてを薙ぎ払った。

「もうやだこの鬼ひと」

童磨が死んだような目をして呟くが、それでも諦めたわけではない。

すぐに氷の人形を補充すると、再び黒死牟の視界を遮るように立ち回り始めた。

再び黒死牟が氷像ごと人形を薙ぎ払い、童磨へと飛びかかる。

――血鬼術 霧氷・睡蓮菩薩

黒死牟が振るう日輪刀が頸くびに届く直前、童磨のもつ血鬼術のなかでも最大規模の術が

放たれた。

童磨が手のひらの上に乗れるほどに巨大な菩薩像が、黒死牟へと手刀を振りおろす。

黒死牟は容易く躲かわすが、童磨の本命は菩薩像による攻撃ではない。

「あっ!?!」

最初に気付いたのは誰だっただろうか？

すべて砕いたと思われる氷の人形が、池のなかから飛び出てきたのだ。

しかも、その人形の手には――、

「日輪刀!?!」

見ていた者たちから驚きの声上がる。

日輪刀は鬼殺隊の武器。

鬼が持っている道理はない。

そう思い込んでいた。

だが、童磨は黒死牟を倒すために、過去に殺した鬼殺隊の隊士が持っていた日輪刀を回収していたのだ。

黒死牟の頸くびに、氷の人形が持った日輪刀が迫る。

そして――、

「――ですよねえ……」

黒死牟の頸くびに当たった日輪刀は、いとも簡単に折れてしまった。

「素人が刀を振るつたとて……斬れはせん……貴様に剣の心得があつたなら……まだ……話は違つたらうが……」

そう言つて、黒死牟は日輪刀を構える。

童磨は逃げ出そうとして――、

――月の呼吸 拾漆ノ型 無月滅界

刺突の壁に飲み込まれ、跡形もなく消滅した。



大正こそこそ噂話（壺）

後藤特製の爆弾

今で言うところの「クレイモア地雷」のようなもの。

無惨に重傷を与えられる特注品。

ちなみに「クレイモア地雷」が製造されたのは1950年代以降、製造に必要な理論が発表されたのを見ても1940年代半ばなので、後藤は耀哉の命を守るためだけに爆薬技術に関する時計の針を約三十年は進めたことになる。

大正こそこそ噂話（式）

月の呼吸 拾漆ノ型 無月滅界

本作オリジナルの「月の呼吸」の型。

目にも止まらぬ連続突きで、射程内にいる相手を塵にする。

名前の元ネタはオサレな死神の技と、時の番人の隊長が放つ、壁に当たると不動明王

が彫れる技。



大正こそこそオマケ話

鳴女

(あ、これ。終わった)

→ 童磨が消え去るのを見た。

珠芽

「——えいつ!」

→ 無惨の血の呪いを外す薬を注射。

鳴女

「!？」

→ 無惨の血の呪いが外れた。

珠芽

「鳴女さん! もう大丈夫だよ! 一緒に逃げよう!!」

鳴女

「む、零余子? 貴女、どうして……」

珠芽

「お義父さんとお義母さんに頼んで、お義兄ちゃんに連れてきてもらったの！」

愈史郎

「……」

→ 不満そうな顔。

鳴女

「お義父さん？ お義母さん？ それに、お義兄ちゃん……？」

→ 頭上で疑問符が乱舞している。

珠芽

「さあ、一緒に行こう！」

→ ぐいぐい引っ張ってる。

鳴女

「待って！ ちょっと待って！」

→ 気になる情報が多くて混乱中。

【このあと、無事に説得できました】

産屋敷邸の池に豆腐を落とせば、鬼舞辻無惨を津波が襲う

「ほらっ！　ちゃんと歩け！」

「畜生っ！　何がどうなってやがる!?　なんで俺は人間に戻ってんだよおお!!」

「喧しい！」

「話は署で聞いてやる。……ああ、そりゃあ、たつぷりとな」

「畜生っ！　畜生っ!!　ちつくしよおお!!」

両腕を拘束されて引きずられるようにして連れていかれる賽目の後ろ姿を眺めながら、一仕事を終えた男は煙草を口にくわえた。

「お疲れ様です、月野さん」

「ああ、藤田くんですか。君もお疲れ様」

同僚の警官——藤田が近付いてくると、連行されていく賽目に目をやり苦笑する。

「まさか、本当にこんな小さな小さな注射器ひとつで、鬼になった人間がもどに戻るとは思いませんでしたよ」

そう言って笑う藤田の手には、小さな注射器が握られていた。

相手に突き刺して握ることで薬液を注入できる注射器。

なかに入っていたのは『鬼を人間に戻す』ための薬だ。

そんなものが、おいそれと出来るとは思えない。

長い年月の積み重ねが生み出した、まさに血と汗と涙の結晶と言える代物である。

そんなものを作り出した人物たちに、月野は頭が下がる思いだった。

「この薬のおかげで、一人の殺人鬼を法のもとで裁くことができるんです。亡くなった方や遺族も納得してくれるでしょう。……薬を開発した方々には感謝しなくてはなりませんね」

月野はそう言うと「一本どうです?」と、藤田に煙草を差し出した。

藤田が受け取った煙草に火をつけ、自分の分にも同じように火をつける。

たっぷりと肺に空気を巡らせてから吐き出すと、煙は風に吹かれて闇夜に溶けるように消えていった。

「勝てますかね……?」

藤田がぼつりと呟いた。

それが何を指しての言葉かは、言わなくてもわかっている。

「賽目を見つげるために、東京以外の警官まで動員したんです。ここで勝って貰わねば、明日から枕を高くして眠れませんよ」

そう言つて月野は煙の立ち上る煙草を見つめた。

千年にも渡る鬼殺隊と鬼舞辻無慘の戦い。

その一件に関わることになるうとは、警察関係者の誰も思つていなかったことだろう。

だが、鬼殺隊に非協力的な者はいなかった。

なぜなら、警察関係者にも鬼による被害者の家族や親族がいたからだ。

なかには、鬼殺隊に入隊を希望していたものの、剣術の才能がなくて断念した者もある。

そういった事情をもつ者からすれば、今回の協力要請を断る理由はない。

むしろ、積極的に協力を申し出ていた。

もちろん、警官のなかには鬼の被害にあつたことがない者も多い。

先祖が鬼殺隊にいたとは言え、月野自身は鬼の被害にあつたことがなかった。

隣にいる藤田もそうだろう。

だがその仕事柄、鬼の仕業だと思われる事件をいくつも見てきた。

同時に、被害者の亡骸や遺された遺族の嘆きも相応に見ている。

それを知る者として、鬼殺隊の勝利を願わずにはいられなかった。

「勝てなければ、国民が再び無惨の餌になる。……そんなこと、許せるわけがないでしょ

う

「そうですね……」

犠牲になるのは見知らぬ誰かか、それとも隣人か。

己の家族がそうなる可能性もある。

もしくは、自分自身が襲われたっておかしくない。

月野と藤田は揃って夜空を見上げる。

星の散らばる夜空には、大きな満月が顔を出していた。

月野家に伝わる話では、先祖の一人が鬼となつて無惨を追い続けているという。

子供の頃は眉唾物の言い伝えだと思っていたが、つい最近、それが事実だと知って驚

いたものだ。

(「こちらには上手くいききました。あとはお任せします。……御先祖様)

顔も見たことのない先祖ではある。

だが、月野は鬼殺隊の勝利を願い、瞑目するのだった。

◆◆

襖が開閉を繰り返し、壁が動き、床が乱高下し、天井が押し寄せる。

無限城のすべてが、悪意をもって行く手を阻む。

そんな異常な状態に、無惨は困惑した。

(何故だ。どうしてこうなった……?)

無惨は自問するが、答えは出ない。

支配下においた鬼の気配を探るが、誰の気配も感じなくなっている。

【上弦の壱】である童磨も。

【上弦の弐】である壊拳も。

【上弦の陸】である賽目も。

誰の気配も感じない。

皆、鬼殺隊にやられてしまったらしい。

唯一生きているのがわかつているのは鳴女だが、その彼女との繋がりも感じられなくなっている。

そのうえで、鳴女は鬼殺隊側についていたようだ。

無限城が無惨を襲ってくること自体が、その証拠である。

鳴女を味方につけるなど、どういった手妻を使ったかはわからない。

だが、鳴女にかけた【血の呪い】が解けているのは、珠世の手によるものだろう。

いつもであれば裏切りに対処できたのだらうが、今回は間が悪かった。

無惨は珠世によって打ち込まれた薬を分解することに専念していたために、周りの状況に気を配ることが出来なかつたのである。

(鳴女め。目をかけてやった恩を仇で返すとはっ！)

配下のなかで、最も気に入っていた鬼。

それが鳴女だ。

優秀だった配下の離反に苛立ちを隠せない無惨は、迫ってきていた壁を破壊し、押し潰そうと落ちてきた天井を砕き、さらには動かない柱を触手で破壊した。

だが、妨害行為は止まらない。

それどころか、さらに激しさを増していく。

「鬼舞辻無惨……ここにいたか……」

「黒死牟っ!!」

畳み掛けるかのように現れた黒死牟の姿を見て、無惨は忌々しげに舌打ちした。

「貴様までやってくるとはなっ! 時間稼ぎのつもりか? 小賢しいっ!!」

黒死牟と鳴女——いや、鬼殺隊の狙いはわかつている。

無惨を消耗させながら、朝日が昇る時間を待っているのだ。

それは確かに有効な策だろう。

珠世の薬を分解することに専念した結果、今の無惨はかつてない程に消耗している。

栄養のある餌人前を喰えば補給できるが、今はそれが出来なかった。

何故なら、異なる空間を繋げて移動する血鬼術は鳴女の能力だからである。

彼女との繋がりが切れた以上、無惨は空間を繋げて移動することが出来ないのだ。そのうえで、今の無限城には人間が存在していない。

配下の鬼たちを討ち取ったあと、鬼殺隊の隊士は残らず外に脱出していたのである。こうなると、無惨には消耗した体力を癒やす術がない。

今の無惨は、かなり追い詰められていた。

だが、逃げ出す機会がないわけではない。

無惨が頸を斬っても死なないことは鬼殺隊側も知っている。

頸を斬っても死なないのなら、あとは日光を浴びせるくらいしか手段がないのだ。

そして、無限城には日光が差し込まない以上、必ず無惨を外に出す必要があった。

逃げる機会があるとすれば、その時である。

だが、それは鬼殺隊として想定していることだろう。

おそらくは、太陽の光を遮るものがない場所に包囲網を敷き、その中心に無惨が現れるように仕向けるはずだ。

日の出まで数分とない時間まで無限城の内部で粘ることが予想できるため、その数分間に無惨の命運がかかっている。

そして、包囲網の中心には鬼殺隊のなかでも指折りの異常者——目の前にいる黒死牟が主力になるはずだ。

黒死牟も鬼であるが故に、日光を浴びれば死ぬ。

しかし、黒死牟は以前にも、己の命と引き換えに無惨を殺そうと試みたことがある男だ。

もう一度、同じようなことをしても不思議ではない。

むしろ、しないほうがおかしいという、変な信頼感すらあった。

その黒死牟の攻撃を掻い潜り、柱たちの手を逃れ、一般隊士たちの敷いた包囲網を突破し、太陽が顔を出す前に光の当たらない場所に逃げ込めれば無惨の勝ちだ。

難しいことではない。

そう、難しいことではない。

難しいことではない、はずだ。

(やってやる……やってやるぞ……っ！ 私には生きる！ 絶対に死んでなどやるものか

……っ!!)

無惨は己を鼓舞すると、これ以上の消耗を避けるべく、黒死牟と鳴女の妨害を躲かわしていく。

だが、黒死牟と鳴女の攻撃は執拗だった。

——月の呼吸 漆ノ型 厄鏡・月映え

「くっ！」

有効射程の長い攻撃を躲したかと思えば、横から壁が押し寄せてくる。慌てて壁を避けると、逃げた先には黒死牟が待っていた。

——月の呼吸 捌ノ型 月龍輪尾

「ぬおっ!!」

胴体を斬り裂かれながらも、無惨は反撃する。

だが、その攻撃が当たる前に、黒死牟は襖のなかへと消えた。

——月の呼吸 玖ノ型 降り月・連面

鳴女の出した襖を使って黒死牟が消えた直後、無惨の背後から斬撃の雨が降り注ぐ。

黒死牟が移動した先は、無惨の後ろだったのだ。

逃げるのが遅れた無惨は、それを避けることが出来ない。

「おのれおのれおのれえええ!」

斬られた身体を再生するが、その回復速度は見るからに遅い。

無惨の孤独な戦いは、まだ始まったばかりである。

◆◇◆

それからどれ程の時間が過ぎただろうか。

突然、黒死牟の姿が消え、鳴女の妨害が止む。

無惨は悟った。

ついに、日の出の時間がやってきたのだ。

逃走の機会を窺う無惨は、自分の消耗具合を確認して舌打ちする。

薬の分解に黒死牟と鳴女による消耗戦を経た結果、無惨の身体は痩せ細ったものになつていた。

傷の治りが遅くなつていているうえに、息切れまで起こし、さらには遠い過去に継国縁壱によつて傷つけられた傷跡すら浮かんでしまつている。

だが、そんな状態でも無惨は生き延びていくことを諦めてはいない。

どんな状況であろうとも、絶対に生き延びてみせる。

無惨の眼は、かつてないほどに生を求めて輝いていた。

足下の襖が開かれ、無惨は重力に引かれるままに落下する。

そうして放り出された先は、広々とした平原だった。

遠くには小高い山が見え、その逆方向には背の高い建物の姿が確認できる。

逃げるならば隠れる場所の多い山か？

それとも、食糧人間が豊富な街か？

栄養補給は包囲網を抜ける際に少し喰らつていけば事足りる。

むしろ、人の目がある街に逃げ込んで騒ぎを大きくした結果、国家権力や軍を敵に回すことになるほうが面倒だ。

それよりも日光を避けやすく、姿をくらしやすい山に逃げ込むほうが得策か。地面に着地するまでの僅かな間に、無惨は逃走経路を決定する。

そして、着地と同時に山に向かって駆け出した。

だが、襲いくる鉄球が無惨の行く手を阻む。

無惨は舌打ちすると、腕を鞭のように振るって鉄球を叩き落とした。

だが、続けて手斧が無惨の頸を狙って飛んできたのを見るや否や、鉄球を叩き落とした腕とは逆の腕を振るって軌道を逸らす。

無惨の両腕が振るわれた今、無惨は無防備だ。

一見すると、攻め込む絶好の機会である。

だが、誰も無理に攻め込もうとはしない。

無惨は背中と太ももから触手を伸ばして攻撃できるのだが、それらはすでに黒死牟と鳴女の攻撃をかいぐるために見せてしまっていた。

その情報が、鬼殺隊全体にも周知されているのだろう。

状況は、鬼殺隊に有利である。

だからといって、無惨が諦める理由にはならない。

鬼舞辻無惨は生きること固執する生き物である。

この程度のこと諦めるようなら、無惨は今日という日まで生きてはいないのだ。



逃げようとする無惨を、柱たちが攻撃して足止めする。

そんな光景が繰り返されるなか、それをじっくりと観察している者たちの姿があった。

「炭治郎……無惨の動きは……見えているか……」

「はい、ハッキリと」

神妙な様子で頷く炭治郎の姿に、黒死牟は満足そうに口元を歪める。

「ほかの者は……どうだ……」

「見えてますよ。……見えたくなかったけど」

「あんなもん、目を瞑ってても避けられるぜ」

「心臓や脳が、凄く速さで腕のなかを移動してる……」

善逸は嫌そうに、伊之助は自信満々に頷いた。

カナヲだけが少し違う部分に注目して気持ち悪そうに顔を顰めているが、それは無惨の身体を透けて見た結果である。

訓練の成果が出た結果とも言えるため、黒死牟はあえて素知らぬ振りをした。

「炭治郎……我が弟が完成させた『日の呼吸』は……無惨を足止めすることに……適した型だ……」

「十二の型を繋ぐことで円環を成し、日の入りから日の出まで戦い続けるための型……でしたよね？」

炭治郎の言葉に黒死牟は頷くと、急にすまなそうな顔をする。

「本来であれば……私が矢面に立つべきなのだが……」

「それは駄目」

黒死牟の言葉を、カナヲがピシヤリと遮った。

炭治郎や伊之助だけでなく、善逸すらも同調するように頷いている。

「義父さんが鬼のまま矢面に立てば、日光を浴びることになるからって皆で反対したよね？」

「母ちゃんたちを悲しませるのは駄目だぞ」

義娘と義息子たちに責めるように言われ、黒死牟は押し黙った。

「嫁さんを泣かせたら駄目ですよ。……死ぬのなら、俺と禰豆子ちゃんのことを認めてからにしてもらわないと……」

ついではかりに善逸がたしなめるが、その言葉の後半部分は小声である。

しかし、黒死牟にはバツチリと聞こえていた。

その件について、黒死牟がどう考えているかは謎である。

「例の薬も打ったんだから、安静にしてください」

いつもは論し、導く側であったため、逆の立場になったせいとか、黒死牟はバツが悪そうな顔をした。

ちなみに、昔の黒死牟であれば、まず間違ひなく無惨と共に日の光を浴びて果てる道を選んだだろう。

だが、今の黒死牟は、カナエを初めとした自分^{黒死牟}に好意を抱いている者たちを悲しませなくはないと考えているために、その手段を選択できなくなっていた。

なりふり構わぬカナエの努力が実った結果である。

さらに、黒死牟は自爆特攻や道連れ作戦をしないことを約束していた。

約束事を遵守する黒死牟にとって、これは良い意味で足枷にもなっている。

そのうえで、黒死牟はひとつ、大きな決断をしていた。

「うっし、そろそろ俺たちも加わろうぜ！」

そう言って、伊之助は「猪突猛進」のかけ声と共に戦線へと駆けていく。

炭治郎と善逸が慌ててあとを追ひ、カナヲもそれに加わった。

その後ろ姿を頼もしいような、不安が残るような、なんとも複雑な表情で黒死牟は見送るのだった。



——日の呼吸 火車

炭治郎の振るう日輪刀が無惨の腕を、内部に増設された心臓ごと斬り裂いていく。赫刀化した日輪刀で斬つたためか、はたまた、無惨にそれだけの体力が残っていないのか。

斬られた触手は再生して繋ぎ合わされることはなく、地面へと落下する。

その直後、善逸と伊之助が炭治郎に迫っていた触手を斬り落した。

その隙に、カナヲが無惨の足に一撃を入れて逃走を阻む。

カナヲの一撃は赫刀による傷ではなかったものの、無惨の身体が僅かにぐらついた。

その隙を逃さず、無惨の背中に針のような形状をした日輪刀が突き刺さる。

突き刺さった刀から、身体の内側に何かが入り込む。

そんな感覚を覚えた直後、無惨は吐血した。

「毒、だと……!?!」

身体に起きた異常の正体を察した無惨は、触手の一本で背後を薙ぎ払う。

だが、その攻撃は割って入った無表情の優男にいなされて空振りに終わった。

だが、僅かながら時間を稼ぐことに成功し、無惨は逃走しようと足を動かす。

本当ならば解毒もしておきたいが、日の出までの時間がないために断念するしかなかった。

「逃がさん!」

「行かせねエよオー！」

炎と風の柱が無惨の行く手を阻む。

先程から焼き増しされ続ける光景に、無惨は辟易した。

だが、人数の不利は承知の上である。

それに、すでに打開策は打ってあった。

あとは、鬼殺隊が仕掛けに気付くまでにどれだけ引きつけておけるのか。

そこが勝負の分かれ目だと無惨は考えていた。



無惨の討伐が叶いそうな雰囲気の中、天元は妙な胸騒ぎを感じていた。

(どうも、地味に嫌な予感がしやがる)

確かに追い詰めているはずなのに、天元の感覚は『油断するな』と訴えている。

元・忍である天元は、こういった言葉にできない感覚を大事にしていた。

実際、この感覚のおかげで死地を脱したり、危険を回避できたことが数多くある。

だからこそ、今回の異変にもいち早く気付くことが出来たのだ。

異変が起きたのは、炭治郎や柱たちの攻撃によって斬り落とされた触手である。

それらが急に蠢き出し、無惨の姿へと変わったのだ。

それを見た天元は反射的に叫んでいた。

「賽目だ！ 無惨の野郎！ 賽目の血鬼術を使いやがった!!」

天元の声を聞いた者たちが、ギョツとして振り返る。

そこには、数体の無惨が立っていた。

気付かれたのと同時に、無惨の本体と分裂体が逃走を開始する。

「はあああ!! ちよつ、テメエ、ふざけんな!!」

柱たちは慌てて対処しようとするが、今現在も追い込んでいる無惨も放置は出来ない。

鬼殺隊は大混乱に陥った。

ひとつだけ間違いを訂正するが、この無惨の分裂については賽目の血鬼術ではない。

無惨は自力で脳や心臓を増やせるため、やろうと思えば自分の複製を生み出すことなど何時でも出来たのだ。

ただ、今までやろうと思わなかったただけである。

しかし、今は自分の命がかかった状況だ。

手段を選んでいる場合ではない。

無惨は、自分が生き残るためには妥協をしなかった。

斬られた触手から増えた無惨の数は四体。

本体に残っている数を合わせて、増やした脳の数と同じである。

察しのいい者たちは既に気付いているが、無惨は斬られた触手にあらかじめ脳と心臓を移していたのだ。

すべては、鬼殺隊を混乱に陥れ、本体が分裂体のどれかが生き残るためである。

ただ、ひとつだけ誤算があるとしたならば、本体も分裂体も等しく無惨本人と同じく『自分が助かれればいい』という、どこまでも自分本位な思考をしていることだろうか。

散り散りになって逃げるのはいいが、そこには自分以外の無惨が逃げやすいようにという連携や配慮はない。

もしも、無惨たちが連携して逃走していれば、もつと鬼殺隊を混乱させることができただろう。

いや、それよりも、本体を逃がすために分裂体が血路を開けば、本体の逃走は成功していたかもしれない。

だが、そうはならなかった。

無惨は、どこまでいっても無惨だったのである。

「皆、散れ！」

そう叫んだのは行冥だ。

比較的遠くにいる分裂体は足の速い雷と音の柱に対処してもらい、あとは各々、近い者を足止めするよう指示を出す。

幸いにして、無惨は連携して逃走しているわけではない。

さらに、脳と心臓がひとつずつになつたことで無惨の分裂体は本体に比べて弱体化していた。

その結果、分裂した無惨たちは遠くに逃げることも出来ずに足止めされることになった。

せつかくの技能や能力も、使い手が無惨では宝の持ち腐れに終わった。



「おのれえええー！」

起死回生をかけた策の不発に、無惨は苛立ちの声をあげた。

だが、無惨本体に張りついていた戦力の一部を引き剥がすことには成功している。

これならば、まだ勝ちの目はあるだろう。

そう考えた無惨は、さらなる一手を切ろうとした。

その一手は、かつて縁壺からも逃げ切れた実績を持つ手段である。

しかし、その手段は珠世の打ち込んだ薬の効力によつて防がれた。

(破裂……出来ないと!?)

無惨は愕然とする。

まさか、逃走のための最後の切り札を潰されているとは思わなかったからだ。

だが、それでも無惨は諦めない。

無惨は自ら己の頸を断ち切ると、それを全力で投擲した。

その際に、無惨を足止めしていた者たちを触手で攻撃し、邪魔をさせないようにすることも忘れていない。

「畜生！ あの野郎、包囲網を抜けやがった!!」

伊之助が焦って叫ぶ。

目の前には頸を失った胴体が暴れまわっているために、無惨を追うことができない。天高く放り投げられた無惨の頭は空中で胴体を再生させると、着地と同時に駆け出した。

無惨に残された体力は少ない。

だが、おかげで鬼殺隊の敷いていた包囲網は抜けることができた。

あとは無人の荒野を駆けるだけである。

だが、そんな無惨の前に立ちはだかる者がいた。

無惨が最も警戒し、忌々しく思っていた男である。

「来たか、黒死——？」

無惨の前に立ちはだかったのは、六つ目の鬼ではなかった。

「継国……縁吉……!!? いや、違う……?」

無惨は一瞬だけ体を硬直させると、脳裏を過つた者の姿との違いを認めて冷静さを取り戻す。

そして、ひとつの回答に思い至り、堪えきれずに笑いだした。

「は……はははっ！ 貴様、黒死牟——いや、継国巖勝か！ これはいい！ よもや、貴様まで人間に戻る薬を使うとはな！」

無惨が笑いたくなるのも無理はない。

長年の悩みの種が、自ら弱体化して目の前にいるのだ。

無惨もかなり弱っているが、人間である巖勝が相手なら切り抜けられる自信がある。だから、笑わずにはいられなかった。

しかし、次の瞬間、無惨の自信は木っ端微塵に碎け散ることになる。

「鬼舞辻無惨……今こそ……我らの因縁に決着をつけよう……」

黒死牟——巖勝が、そう言って居合い抜きでもするかのように刀を構える。

その瞬間、ずしりと両肩に重石をのせられたような圧力が、無惨の体を押さえつけた。「なん……だと……う？」

無惨はうろたえる。

その感覚に、覚えがあつたからだ。

かつて、巖勝の弟——縁壱と対峙した時に感じた圧力と同じもの。

それを、人間に戻って弱体化したはずの男から感じていた。
そんな馬鹿な。

あり得ない。

無惨は脳裏に過つた思いを否定する。

あんな化け物と同じものがあるはずがない。

あんな化け物に並ぶものがあるはずがない。

この千年もの間、あんな出鱈目な存在に出会つたことは、たった一度しかなかったではないか。

だが、いくら否定してみても、目の前にある現実が変わることはない。

巖勝は鋭い目付きで無惨を睨みつける。

無惨の背中に、冷たい汗が流れた。

——この一太刀を、我が最愛の弟に捧ぐ。

巖勝の口から、宣誓の言葉が紡がれる。

(来る……っ!!)

無惨は身構えた。

この一撃。

この一撃さえ躲かわせれば、巖勝の手から逃れることが出来るだろう。

だから躲^{かわ}せ。

なにがなんでも躲^{かわ}せ。

そんな思いとは裏腹に、無惨の体は動こうとはしない。

(なぜ動かん……っ!!)

無惨は己を罵倒する。

だが、体は一向に動こうとしない。

巖勝が動く。

その姿に、無惨は縁壺の姿を幻視した。

巖勝の抜き放った刀が、縁壺の幻影と同じ速さで無惨に迫る。

無惨にとって縁壺は恐怖の象徴だ。

過小評価などするはずもない。

つまり、この幻影は過去に出会った縁壺そのものである。

その幻影と同じ速度、同じ力強さを感じさせる巖勝の姿に、無惨の身体は縁壺に感じたものと同じものを感じていた。

(動け動け動け動け動け動け動け動け動——?)

何が何でも避けようと無惨は足掻く。

そんななか、無惨は見た。

迫りくる縁壺の幻影が持つ刀の軌跡。

その幻影よりも、僅かに速く迫ってくる巖勝の刀。

「馬鹿な……」

呆然としたまま、無惨の頸が宙を舞う。

——月の呼吸 拾捌ノ型 昼ノ満月

そんな声が、無惨の耳に届いた。

◆◆

月の呼吸 拾捌ノ型 昼ノ満月。

それは巖勝の、縁壺への思いが詰まった型であり、名前である。

天文学的に、昼間に満月は絶対に見えない。

それと同じように、巖勝が縁壺に並び、ましてや超えることなど出来ないのだろう。

それがわかっていても、弟を守りたいと願った兄であるが故に。

そして、縁壺が人の枠を外れた化け物などではなく、正しく人間であると証明するた
めに。

巖勝は己の持ち得るすべてを、この一撃に込めていた。

余談だが、この型は拾捌ノ型より先に生み出された型である。

だが、あえて拾捌という数字が与えられていた。

これは歌舞伎の十八番おはことかけてあり、巖勝にとって特別な型だということを強く意識し、表現するためである。



無惨は大慌てで地面に転がった頸を繋ごうとした。

だが、頸を拾おうにも、体は小刻みに震えるだけで思うようには動いてくれない。

(なんだ、この震えは?)

無惨の頭を疑問符が埋め尽くす。

その答えは『恐怖』であるが、無惨がそれを認めることはないだろう。

しかし、無惨の肉体はそうではない。

先程も言ったが、縁壺に対してそうだったように、巖勝に対しても恐怖を覚えているのだ。

だから、無惨の体は動けない。

「やあ、鬼舞辻無惨。ご機嫌いかがかな?」

そう言つて近付いてきたのは耀哉である。

自分ではもう動けないため、行冥に抱き上げられる形で近付いてきていた。

「産屋敷いいい……っ!」

無惨が忌々しげに耀哉を見上げる。

耀哉は視力を失っているために無惨の姿を見ることは出来ないが、怨嗟の音がする方向に顔を向けた。

「随分と低い位置から声が聞こえるね。——君が屋敷を訪れた時とは立場が逆になったわけだけど……ねえ、君は今、どんな気持ちなのかな？」

とても良い笑顔をした耀哉が、無惨に問いかける。

無惨の額に青筋が立つが、報復しようにも体は上手く動かない。

「この千年もの間、僕たちは君という存在に泣かされてきたわけだけど、それも今日で終わりにするね」

「ふざけるな!! 私は死なない!! 永遠を、不滅を手に入れるまで絶対に死んでなどやるものか!!」

無惨は喚くが、耀哉は勘で確信しているのだろう。

笑顔と共に、無惨に告げた。

「君の願いは叶わない。そう言っただろう? ……ああ、頬が温かくなってきたね。そろそろ、日が差してきたのかな？」

耀哉の言葉が合図であったかのように、山の陰から太陽が顔を出す。

それを目にした無惨はもがくが、やはり、体が言うことを聞くことはなかった。

「ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな!! 私は認めない!! こんな終わり方など認め

てなるものかあ!!」

叫ぶ無惨の体に太陽の光が当たる。

すると、日の光を浴びた部位が焼け焦げ、煙を吹き上げた。

命の危険に晒された肉体が、ようやく逃げようと動き出す。

だが、その速さは鈍重だ。

それらは直ぐ様、耀哉の守りを固めていた柱たちの手によつて木っ端微塵に斬り裂かれ、塵となつて消えていく。

例え塵にならなかつたとしても、肉片が小さくなれば日の光によつて消え去るのも早くなつていた。

気がつけば、残るは無惨の頭だけである。

最早、無惨に打つ手は残っていない。

「あ、ああ、あああああ!?!」

「さようなら、鬼舞辻無惨」

耀哉が別れの言葉を告げる。

それと同時に、無惨は塵となつて消えていった。



勝った。

倒した。

仇を討った。

無惨の最後を目にし、その場にいた者たちが涙を流して歓声をあげる。

千年にも及ぶ戦いは、鬼殺隊の勝利で幕を降ろすことになったのだ。

喜ばない者はいない。

もちろん、それは耀哉も同じだった。

「良かった……これでもう……私の子供たちが苦しむことはない……」

ホツとする耀哉の瞳から涙が零れる。

これでもう、見ず知らずの誰かが鬼の被害を受けることもない。

輝利哉たちが、短命であるという死の恐怖や、鬼に狙われることに怯えて暮らす必要もなくなる。

これからは、もっと自由に生きていくことが出来るのだ。

そのことが、耀哉はたまらなく嬉しかった。

(もう、思い残すことはないかな……)

遠退きかける意識のなか、耀哉はそう考える。

だが、まだ自分にはやりたいことがあったことを思い出した。

(そうだ。後藤くんに会わないと……)

耀哉は遠退きかけた意識を奮い起たせ、脳裏に過つた思いを改める。まだ、後藤にお礼を伝えられていない。

だからまだ、ここで意識を失うわけにはいかなかった。意識を失えばきつと、もう二度と戻ってこられない気がするのだ。

「——っ!!」

気のせいだろうか？

遠くから、後藤の声がする。

いや、後藤だけでなく、輝利哉たちの声もした。

「耀哉っ!!」

「父上っ!!」

空耳ではない。

目には見えないが、すぐ側で家族と親友の声がする。

「輝利哉……あなた……くいな……後藤くん……?」

「父上! 母上もひなき姉様もにちか姉様もいます!」

「そうか……家族みんな……ここにいいのか……」

耀哉は思った。

家族と親友に看取られて逝くことができる。

こんなになんか幸せなことがあつていいのだろうか？

「お館様っ！」

新たに聞こえてきたのは、実弥の声だ。

「どうやら、柱たちだけでなく、隊士もかくし隠も関係なく集まってきたようだ。

「行冥……柱のみんなも一緒かな……？」

「はい。柱一同、そろつております」

「黒死牟——いや、巖勝殿はいるかな……？」

「はい……お館様のお側に……」

巖勝の声を聞いた耀哉は、笑みを浮かべた。

「君の、君たちのおかげで無惨を倒すことができた。——ありがとう」

「そう言つて、耀哉は柱一人一人を呼んで「ありがとう」と声をかけ始める。

みんな涙しているのは、見なくてもわかった。

「そう言つて、体力の限りに声をかけ続け、最後に後藤へと順番が回ってくる。

「後藤くん。ありがとう。……君のおかげで、僕はこんな穏やかな気持ちで逝くことが

出来る……」

「止せよ、水臭い……俺は、俺の我が儘を通しただけだつて……」

「その我が儘のおかげで、僕は助かつてるんだけどね……」

苦笑する耀哉は一度息をつくど、輝利哉たちに声をかけ、それから あまね に何事かを伝えたあとに、再び後藤に声をかけた。

「ねえ、後藤くん。僕の最後の頼みを聞いてはくれないか？」

「……変なことじゃなければな」

後藤の言葉に耀哉は苦笑する。

前回の話を根に持っているらしい。

「変な意味じゃなくてね。僕の家族のことを頼みたいんだ。これからも、色々と助けてあげて欲しい」

「この通りだ」と、そう言って耀哉は頭を下げた。

後藤は慌てて止めさせる。

「頭なんか下げなくても頼まれてやるって！ 耀哉親友の家族なんだから、これからも気にかけてやるよ！」

後藤がそう言うど、耀哉は心底ホツとしたような顔をした。

「ああ、良かった」

そう言って、耀哉は気持ちよさげに目を閉じる。

それを見ていた誰かが察した。

命の終わりが近いのだと。

「僕は……幸せ者だな」

それが、産屋敷耀哉の最後の言葉だった。



「お館様……お疲れ様でした……」

「巖勝様……」

耀哉を看取った巖勝に、カナエが声をかける。

鬼殺隊の宿願を果たしたにしては、その声はどこか不安げなものだった。

カナエが何を憂いているのか。

それは、巖勝もわかっている。

大方、巖勝の寿命についてのことだろう。

巖勝は『あざもの痣者』である。

その宿命として、二十五歳前後で命が尽きるだろう。

それを承知の上で、巖勝は人間に戻ったのだ。

人として、無惨鬼を斬るために。

人として、縁む弟との約束を果たすために。

人として、愛する人たちと生きていくために。

そして、人として死ぬために。

そのために、彼は鬼黒死牛であることを捨て、人巖勝に戻ったのである。

「カナエ……私は……剣を置こうと……考えている……」

巖勝の言葉にカナエはとても驚いた。

彼にとつて、剣の道——日の本一の侍になる夢は、とても大きなものだったからだ。

「残った時間は……少ないかも知れんが……最後の時まで……共に居させてはくれまいか……」

「巖勝様……っ!!」

カナエが巖勝の胸に飛び込むと、たくましくて太い腕が彼女を包み込む。

彼女が求めて止まなかった平穏な時間が、ようやく訪れるのだ。

「カナエ……待たせて……すまなかった……」

そう言つて、巖勝はカナエの頭を撫でるのだった。



「あ、巖勝様。さつきの言葉、ちゃんと珠世さんにも言つてあげてくださいね?」

「うむ……」

「志津さんにも、琴葉さんにもですよ?」

「うむ……」

「葵枝さんにも、麗さんにも、鯉夏さんにもですよ?」

「うむ……………」

「約束ですからね？」

「わかっている……………」



真つ暗な闇に包まれ、何も見えない空間。

そんな場所に、無惨は立っていた。

(ハハ)は…………ど(ど)だ…………?)

注意深く辺りを見回していると、一箇所だけ明るくなっている場所が見える。

どうやら、川辺にある花畑のようだ。

その花畑に群生している花を見て、無惨の表情が変わる。

それは、無惨が千年間、求めて止まなかった「青い彼岸花」だったのだ。

「見つけた……………！ ついに見つけたぞっ!!」

慌てて駆け出す無惨だが、いくら走ろうとも花畑に近付けない。

それどころか、ますます遠のいているような感覚に陥っていた。

「何故だ！ 何故、近付けない!!」

苛立つ無惨は大声で喚くが、だからといって状況が変わるわけでもない。

だが——、

「そりゃあ、あちら側は天国で、お前が地獄行きの重罪人だから辿り着けないのさ」
無惨の疑問への返答があった。

「誰だ！」

聞こえてきた声に驚いた無惨が慌てて振り向く。

すると、そこには襪褌布で身を包んだ長髪の青年が立っていた。

その青年の姿に、無惨は見覚えはない。

だが、青年の纏う雰囲気は、外見とは裏腹に奇妙な威厳を醸し出していた。

「貴様……私を地獄行きの重罪人だと言ったか？」

「ああ、言ったな」

一切の気配を感じさせなかった青年に、無惨は警戒をあらわにする。

そんな無惨の様子を見た青年は、小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「お前が地獄へ行くのは、ずっと前から決まっていたことだよ。諦めて、さつさと地獄の業火に焼かれてくるといい。——ほら、お前を恨んで死んでいった者たちが、待ちくたびれて迎えに来ているぞ」

青年が視線を向けた暗闇のなかから、大勢の人間が歩いてくる。

この千年、無惨が食い物にしてきた老若男女の亡霊たちだ。

「ふ、ふぎけるな！」

無惨は天国に向かって駆け出した。

だが、先程と同じように、いくら走っても光ある世界に近づくことはない。

それどころか、一人の男が花畑の手前で仁王立ちしているではないか。

行く手を阻む男の姿に、無惨は嫌というほど見覚えがあった。

「継国……縁吉……!?!」

無惨の身体に刻まれた記憶が鮮やかに蘇り、恐怖から足が止まる。

その直後、亡霊たちが肩や背中、足に至るまで縋りつき、無惨を暗闇の更に深い部分へと引きずり込んでいく。

「や、止める貴様ら! 手を離せっ! 止める……止めるっ! 私を連れていくなアアア!」

その叫び声を最後に、無惨は暗闇のなかへと沈んでいった。

最後まで醜く足掻いた男の末路を見届けた青年は、誰もいなくなつた暗闇のなかで嘲笑する。

「——ちつちええな……」



二年後。

この日、善逸は緊張していた。

以前から願っていた瞬間が、訪れようとしていたからである。

「頑張れ俺。俺は今までよくやってきた。俺は出来る奴だ。そして今日も、これからも、今回の件に関して俺が挫けることは絶対にならない……っ！——よしっ!!」

気合いを入れた善逸は、木刀を片手に立ち上がった。

向かう先には、善逸が知るなかでも最強の剣士が待っている。

継国巖勝。

戦国時代から生きる剣士にして、善逸の前に立ちふさがる最大の壁だ。

だが、それも今日までの話だ。

今日、これから、継国巖勝を超えてみせる。

それほど強い覚悟が善逸にはあった。

「来たか……」

巖勝が善逸の視線を受け止める。

その顔には痣がなかった。

二年前、無惨を倒したあとに剣を置いてから、自然と消えていたのである。

あの痣が何だったのかと聞いても、巖勝は黙して語らなかつた。

巖勝が語らないのには、それ相応の事情があるのだろう。

周囲の者たちも、善逸も、そう言つて納得していた。

善逸が構えると、巖勝も木刀を構える。

かつてのように隙がない姿に、善逸は舌を巻いた。

この男、本当に剣を置いていたのかと、疑いたくなる威圧感である。

だが、それでも善逸の心はぶれない。

彼にとって、この戦いは避けては通れないものだからだ。

「善逸、頑張れ！」

「ビビつたら負けるぞー！」

「男なら腹を括れ！ 一歩も引くなー！」

「今日まで付き合つてやつたんだ！ きつちり勝つてこい！」

「二度とはいえ、この俺にも勝つたんだア！ 負けたら承知しねエぞオ！」

いつの間に駆けつけていたのか、善逸と巖勝の周りには観客が湧いていた。

炭治郎が、伊之助が、錆兎が、獺岳が、実弥が、善逸に声援を送る。

彼ら以外にも、鬼殺隊に所属していた者たちが集まっていた。

「善逸！ お前は儂の誇りじゃ！ 自信を持つて戦えい!!」

視界の端に、善逸の修行を手伝つてくれたり者たちの姿が見える。

奥さんお手製の弁当を食べながら「わつしよい！ わつしよい！」言っていたり、鮭大根を食べながら微妙にしかわからない笑顔を浮かべる旦那を幸せそうに眺めていたり、勝負の行方を派手な賭け事にしていたり、新婚夫婦特有の甘つたるい雰囲気を放ちながら大量の重箱を持参していたりと様々だ。

とくに涙を流しながらお経を読むのは止めてほしい。

勝負事の前に涙は禁物だと言われているし、間違いなく気が散る。

そう言つたら、なおさら泣きそうなので絶対に口にはしないが。

「巖勝様、頑張つてえ！」

「お義父さん、頑張つてえ！」

声援が送られるのは善逸だけではない。

巖勝にも送られていた。

その声援を送るのは巖勝の妻たちや子供たち、さらには時透家の者たちに、産屋敷家のご家族と後藤である。

この二年で、巖勝と妻たちの中には家族が増えていた。

それぞれ一人ずつ、カナエや鯉夏にいたっては双子に三つ子である。

どうやら、巖勝は雄としても優秀であつたらしい。

その環境が羨ましく、妬ましかつた。

「善逸さん！ 頑張つて!!」

とある人物の声援が届き、ピクリと善逸の耳が動く。

それは、善逸が最も愛する人の声だつた。

(禰豆子ちゃん……っ！)

気が散っていた善逸の意識が、再び集中力を増していく。

善逸は、彼女のために今日まで修行に打ち込んできたのだ。

負けるわけにはいかない。

善逸の集中力が戻つたのを察したのか、巖勝が薄く笑みを浮かべる。

それを見た善逸は叫んだ。

「お義父さん！ 娘さんを俺にくださいい！」

「お前に『お義父さん』と呼ばれる筋合いはない！」

「そうだそうだ！」

「竹雄……茂……何故……お前たちが返事をしているのか……」

外野から飛んできた野次に、巖勝が呆れたように苦笑する。

だが、すぐに気を取り直して巖勝は告げた。

「義娘が欲しければ……私を倒して……連れていけ……」

善逸は再び木刀を構える。

それに応じるように、巖勝も構えた。

そして――、

――雷の呼吸 漆ノ型 ほのいかづちのかみ 火雷神

――月の呼吸 壺ノ型 闇月・宵の宮

抜けるような青空の下で、大歓声が沸き起こった。

―― 終劇 ――